

かみ のほ ほん ごう い せき  
上 保 本 郷 遺 跡  
(第1分冊)

2 0 2 1

岐阜県文化財保護センター





9・10 地点全景（南から）



17 地点全景（南から）



上保岩坪 1 号古墳出土遺物



出土遺物集合写真



鉄冶関連遺物（1）



鉄冶関連遺物（2）



## 序

本巣市は、山岳地帯から大小の河川の多くが合流して根尾川を形成して南流する市域北部と、平野部で根尾川から供給される清らかな水を用いた肥沃な耕地からなる市域南部からなり、古来より様々な自然・文化・産業の営みのある都市です。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道（糸貫ＩＣ～大野神戸ＩＣ）建設事業に伴い、本巣市上保地内に所在する上保本郷遺跡の発掘調査を実施しました。上保本郷遺跡は古墳時代から中世にかけての長期間にわたって営まれた遺跡で、今回の発掘調査では、上保岩坪1号古墳や同2号古墳が新たに発見されたほか、古代から中世の鉄や銅を加工するための鍛冶工房から坩堝や鞴羽口、鉄滓、砥石といった鍛冶に関わる遺物が出土しました。また、室町時代には溝で区画された居住域が見つかり、多量の土師器皿が出土したことなど、当時の遺跡内での暮らしぶりを伺うことのできる豊富な遺物が出土しています。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました、関係諸機関並びに関係者各位、本巣市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和3年3月

岐阜県文化財保護センター  
所長 森 勝利

## 例言

- 1 本書は、岐阜県本巣市上保地内に所在する上保本郷遺跡（岐阜県遺跡番号 21218-11245）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東海環状自動車道（糸貫 I C ～大野神戸 I C）建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 宇野隆夫帝塚山大学教授の指導のもとに、発掘作業は平成 27～平成 29 年度に、整理作業は平成 29～令和 2 年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆及び編集は、第 1 章・第 2 章は井手大介、第 3 章は佐藤恵太、第 4 章は大本直人、小野木学、近藤正枝、長谷川幸志、古屋寿彦、山本厚美の所見をもとに井手、伊藤雅和、佐藤、澤村雄一郎が行った。また編集は井手、伊藤、佐藤、澤村が行った。
- 6 平成 27 年度～平成 29 年度の発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社ユニオンに委託して行った。平成 29 年度～令和 2 年度の整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は株式会社ユニオンに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 花粉分析とプラントオバール分析、石材同定、ガラス玉の螢光 X 線分析、金属製品・鉱滓等の成分分析、歯骨の成分分析、纖維同定、木製品の樹種同定を株式会社バレオ・ラボに、漆製品の塗膜構造分析を株式会社吉田生物研究所と株式会社バレオ・ラボに委託して行い、第 5 章に掲載した。第 5 章第 1 節は伊藤が執筆した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）

井川祥子、内堀信雄、恩田知美、近藤大典、鋤柄俊夫、田中弘志、藤澤良祐、渡邊博人、岐阜県歴史資料館、本巣市教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用している。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2010『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 目 次

序	
例言	
目次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の環境	12
第1節 地理的環境	12
第2節 歴史的環境	14
第3章 調査の成果	18
第1節 基本層序	18
第2節 遺構・遺物の概要	20
第4章 調査の成果	25
第1節 9・10・19 地点の遺構・遺物	25
第2節 6～8・17・18 地点の遺構・遺物	78
第3節 5・14～16 地点の遺構・遺物	155
第4節 13 地点の遺構・遺物	176
報告書抄録	

### 第2分冊 目次

#### 第4章 調査の成果

- 第5節 1・2・20・21 地点の遺構・遺物
- 第6節 11 地点の遺構・遺物

### 第3分冊 目次

#### 第4章 調査の成果

- 第7節 12 地点の遺構・遺物
- 第8節 3・4 地点の遺構・遺物

#### 第5章 自然科学分析

- 第1節 分析の概要と成果
- 第2節 花粉分析とプラント・オパール分析
- 第3節 石材同定
- 第4節 ガラス玉蛍光X線分析
- 第5節 鉛滓・鍛冶関連遺物の成分分析
- 第6節 獣骨同定分析

- 第7節 織維同定
- 第8節 木製品樹種同定
- 第9節 漆製品の塗膜構造調査

第4分冊 目次

第6章 総括

- 第1節 遺構について
- 第2節 遺物について
- 第3節 土地利用の変遷

参考文献

遺構一覧表

第5分冊 目次

遺物観察表

発掘区全図分割図

- 9・10・19 地点
- 6～8・17・18 地点
- 5・14～16 地点
- 3・4 地点
- 1・2・13・20・21 地点
- 11・12 地点

第6分冊 目次

写真図版

## 挿図目次

図1 遺跡位置図.....	1	図32 SK176・SK228遺構図・出土遺物実測図 .....	53
図2 試掘坑と発掘区の位置.....	3	図33 SK237遺構図・出土遺物実測図 .....	55
図3 発掘区地区割図.....	4	図34 SK238・SK239遺構図・出土遺物実測図 .....	56
図4 発掘区周辺宅地図（昭和40年）と条里型 地割.....	12	図35 SK94・SK101・SK107・SK113遺構図 .....	58
図5 遺跡周辺の地形分類図.....	13	図36 SK94・SK101・SK107・SK113出土遺物 実測図 .....	59
図6 周辺遺跡位置図.....	16	図37 SK158・SK189・SK193・SK197遺構図 .....	61
図7 発掘区周辺の小字名.....	17	図38 SK158・SK189・SK193・SK197出土遺物 実測図 .....	62
図8 上保本郷遺跡土層柱状図.....	19	図39 SD2・SD19・SD21遺構図 .....	64
図9 遺構分類模式図.....	22	図40 SD19・SD21出土遺物実測図 .....	66
図10 9・10・19地点平面図.....	25	図41 SD22～SD25・SD31遺構図 .....	68
図11 SK262遺構図・出土遺物実測図.....	26	図42 SD22～SD25出土遺物実測図 .....	69
図12 SD30・SD32遺構図・出土遺物実測図.....	28	図43 SD31出土遺物実測図 .....	70
図13 SU1遺構図・出土遺物実測図.....	30	図44 SD34～SD36遺構図 .....	71
図14 上保岩坪1号古墳全體図.....	31	図45 SL1・SL2遺構図 .....	72
図15 上保岩坪1号古墳周溝土層断面図.....	32	図46 その他の遺構出土遺物実測図（1） .....	73
図16 上保岩坪1号古墳石室実測図.....	33	図47 その他の遺構出土遺物実測図（2） .....	74
図17 上保岩坪1号古墳遺物出土状況・出土遺物 実測図（1） .....	35	図48 III層出土遺物実測図（1） .....	75
図18 上保岩坪1号古墳出土遺物実測図（2） ..	36	図49 III層出土遺物実測図（2） .....	76
図19 上保岩坪2号古墳全體図.....	37	図50 III層出土遺物実測図（3） .....	77
図20 上保岩坪2号古墳石室実測図.....	38	図51 6～8・17・18地点平面図 .....	78
図21 SK160遺構図・出土遺物実測図.....	40	図52 鍛冶関連遺構全體図 .....	79
図22 SK255・SK336・SK342遺構図・出土遺物 実測図.....	41	図53 SL4・SL5遺構図 .....	80
図23 SK370遺構図・出土遺物実測図.....	42	図54 SL4・SL5出土遺物実測図 .....	81
図24 SD1遺構図.....	43	図55 SL6遺構図・出土遺物実測図 .....	81
図25 SD3・SD4遺構図・出土遺物実測図.....	44	図56 SL7遺構図・出土遺物実測図 .....	82
図26 SB1・SA3遺構図.....	45	図57 SL8遺構図・出土遺物実測図 .....	84
図27 SB2出土遺物実測図.....	46	図58 柱穴群遺構図（1） .....	85
図28 SB2遺構図.....	47	図59 柱穴群遺構図（2）・SP57・SP60・SP62 出土遺物実測図 .....	86
図29 SB3遺構図.....	48	図60 鍛冶炉に近接した土坑遺構図・SK749・ SK750出土遺物実測図 .....	88
図30 SA1・SA2遺構図.....	49	図61 鍛冶炉周辺の土坑遺構図・SK695・ SK779出土遺物実測図 .....	89
図31 SK114・SK170・SK173遺構図・出土遺物 実測図.....	52		

図62 錫治関連遺物が出土したその他の土坑 遺構図（1）	91	図92 SD199・SD200遺構図・SD199出土遺物 実測図	129
図63 錫治関連遺物が出土したその他の土坑出土 遺物実測図（1）	92	図93 SD203遺構図・出土遺物実測図	130
図64 錫治関連遺物が出土したその他の土坑遺構図 (2)・出土遺物実測図（2）	94	図94 SD204・SD214遺構図	131
図65 構状遺構遺構図・SD178・SD183出土遺物 実測図	95	図95 SD204・SD214出土遺物実測図	132
図66 その他の錫治関連遺物実測図	97	図96 SL 3 遺構図	132
図67 SK1097・SK1135・SK1299遺構図・出土遺物 実測図	98	図97 8 地点全体図	134
図68 SK1392遺構図・出土遺物実測図	100	図98 SN 1 遺構図・SD63出土遺物実測図	135
図69 SK1418遺構図・出土遺物実測図	101	図99 SN 2 遺構図・SD89出土遺物実測図	137
図70 SK1475・SK1476・SK1488・SK1490遺構図	103	図100 SN 3 遺構図（1）	138
図71 SK1475・SK1476・SK1488・SK1490出土 遺物実測図	104	図101 SN 3 遺構図（2）	139
図72 SP125・SD125遺構図・出土遺物実測図	105	図102 SN 4 遺構図（1）・SM 1・SM 2 遺構図	140
図73 SI 1 遺構図	106	図103 SN 4 遺構図（2）	141
図74 SB 4 遺構図・出土遺物実測図	107	図104 その他の遺構出土遺物実測図（1）	143
図75 SB 5 遺構図	108	図105 その他の遺構出土遺物実測図（2）	144
図76 SA 4・SK591遺構図	110	図106 その他の遺構出土遺物実測図（3）	145
図77 SK591出土遺物実測図（1）	111	図107 その他の遺構出土遺物実測図（4）	146
図78 SK591出土遺物実測図（2）	112	図108 17地点南西部湿地性堆積除去後測量図	147
図79 SK595・SK605・SK606・SK622遺構図	113	図109 17地点南西部湿地性堆積出土遺物実測図	148
図80 SK595・SK605・SK606・SK622出土遺物 実測図	114	図110 6～8・17・18地点Ⅲ層出土遺物実測図（1）	149
図81 SK792・SK831遺構図・出土遺物実測図	115	図111 6～8・17・18地点Ⅲ層出土遺物実測図（2）	150
図82 SK1029遺構図・出土遺物実測図	116	図112 6～8・17・18地点Ⅲ層出土遺物実測図（3）	151
図83 SK1095・SK1372・SK1450遺構図	118	図113 6～8・17・18地点Ⅲ層出土遺物実測図（4）	152
図84 SK1095・SK1372出土遺物実測図	119	図114 6～8・17・18地点Ⅲ層出土遺物実測図（5）	153
図85 SP49・SP81遺構図・出土遺物実測図	120	図115 6～8・17・18地点Ⅲ層出土遺物実測図（6）	154
図86 SD44遺構図・出土遺物実測図	120	図116 5・14～16地点平面図	155
図87 SD185・SD186遺構図・出土遺物実測図	122	図117 SB 6 遺構図（1）	157
図88 SD193遺構図・出土遺物実測図（1）	123	図118 SB 6 遺構図（2）	158
図89 SD193出土遺物実測図（2）	124	図119 SA 5 遺構図	158
図90 SD195・SD197遺構図・出土遺物実測図	126	図120 SA 6・SA 7 遺構図	159
図91 SD198遺構図・出土遺物実測図	127	図121 SP161遺構図・出土遺物実測図	160
		図122 SK1584遺構図・出土遺物実測図	161
		図123 SK1587・SK1655・SK1658遺構図	162
		図124 SK1644遺構図・出土遺物実測図	163
		図125 SK1659遺構図・出土遺物実測図	163
		図126 SK1663・SK1665・SK1666遺構図	165
		図127 SK1664遺構図・出土遺物実測図	165

図128	SK1760遺構図・出土遺物実測図	166	図165	SA14遺構図・出土遺物実測図	205
図129	SK1765遺構図・出土遺物実測図	167	図166	SA15遺構図・出土遺物実測図	206
図130	SK1768遺構図	168	図167	SP195・SP227・SP245・SP247・SP258 遺構図・出土遺物実測図	209
図131	SD216遺構図・出土遺物実測図	168	図168	SP259・SP261遺構図・出土遺物実測図	210
図132	SD217遺構図	169	図169	SK1785・SK1788・SK1789遺構図・出土遺物 実測図	212
図133	SD217出土遺物実測図	170	図170	SK1791・SK1848遺構図・出土遺物実測図	213
図134	SD223遺構図	172	図171	SK1865遺構図・出土遺物実測図	214
図135	SD224遺構図（1）	172	図172	SK1881遺構図・出土遺物実測図	215
図136	SD224遺構図（2）・出土遺物実測図	173	図173	SK1910遺構図・出土遺物実測図	217
図137	SD226遺構図・出土遺物実測図	173	図174	SK1920・SK1921・SK1931遺構図・出土遺物 実測図	218
図138	SL 9 遺構図	174	図175	SK1941・SK1955・SK1976遺構図・出土遺物 実測図	220
図139	その他の遺構出土遺物実測図	174	図176	SK1954・SK1959・SK1977・SK1978遺構図・ 出土遺物実測図	222
図140	III層等出土遺物実測図	175	図177	SK2002・SK2013・SK2024遺構図・出土遺物 実測図	224
図141	13地点平面	176	図178	SK2057・SK2058・SK2078・SK2093・ SK2096・SK2109・SK2121遺構図・出土遺物 実測図	227
図142	SI 2 遺構図（1）・出土遺物実測図	178	図179	SK2137遺構図・出土遺物実測図（1）	229
図143	SI 2 遺構図（2）	179	図180	SK2137出土遺物実測図（2）	230
図144	SI 2 遺構図（3）	180	図181	SK2137出土遺物実測図（3）	231
図145	SI 3 遺構図	181	図182	SK2166・SK2170・SK2171・SK4569・SK4570 遺構図・出土遺物実測図	233
図146	SI 3 出土遺物実測図	182	図183	SK4571～SK4575遺構図・出土遺物実測図	236
図147	SB 7 遺構図（1）	184	図184	SD234遺構図（1）	239
図148	SB 7 遺構図（2）・出土遺物実測図	185	図185	SD234遺構図（2）	240
図149	SB 8 遺構図（1）	186	図186	SD234遺構図（3）	241
図150	SB 8 遺構図（2）・出土遺物実測図	187	図187	SD234遺構図（4）	242
図151	SB 9 遺構図（1）	188	図188	SD234遺構図（5）	243
図152	SB 9 遺構図（2）・出土遺物実測図	189	図189	SD234遺構図（6）	244
図153	SB10遺構図・出土遺物実測図	190	図190	SD234遺構図（7）	245
図154	SB11遺構図・出土遺物実測図	192	図191	SD234遺構図（8）	246
図155	SB12遺構図・出土遺物実測図	193	図192	SD234出土遺物実測図（1）	247
図156	SB13遺構図・出土遺物実測図	194			
図157	SB14遺構図・出土遺物実測図	195			
図158	SB15遺構図・出土遺物実測図	197			
図159	SA 8 遺構図	198			
図160	SA 9 遺構図	199			
図161	SA10遺構図・出土遺物実測図	201			
図162	SA11遺構図	202			
図163	SA12遺構図・出土遺物実測図	203			
図164	SA13遺構図	204			

図193 SD234出土遺物実測図（2）	248	図207 SD247遺構図	265
図194 SD234出土遺物実測図（3）	249	図208 SD247出土遺物実測図	266
図195 SD234出土遺物実測図（4）	250	図209 SD249遺構図・出土遺物実測図	268
図196 SD234出土遺物実測図（5）	251	図210 SD248・SD250～SD252遺構図・出土遺物実測図	269
図197 SD234出土遺物実測図（6）	252	図211 SD253・SD254遺構図・出土遺物実測図	270
図198 SD234出土遺物実測図（7）	253	図212 SD255遺構図	272
図199 SD234出土遺物実測図（8）	254	図213 SD255出土遺物実測図	273
図200 SD234出土遺物実測図（9）	255	図214 SN 5～SN 9・SM 3～SM 6遺構図・出土遺物実測図	274
図201 SD234出土遺物実測図（10）	256	図215 その他の遺構出土遺物実測図	276
図202 SD234出土遺物実測図（11）	257	図216 III層等出土遺物実測図（1）	276
図203 SD235・SD236遺構図・出土遺物実測図	259	図217 III層等出土遺物実測図（2）	277
図204 SD238遺構図・出土遺物実測図	260		
図205 SD239・SD240遺構図	262		
図206 SD242・SD243遺構図・出土遺物実測図	263		

## 插写真目次

写真1 発掘区周辺空中写真	13
---------------	----

## 表目次

表1 試掘・確認調査結果一覧	2	表3 検出遺構一覧表	21
表2 周辺道路一覧	15	表4 出土遺物点数一覧表	23

## 写真図版目次

### 巻頭図版

鎌治関連遺物（2）

### 巻頭図版1

9・10地点全景（南から）

17地点全景（南から）

### 巻頭図版2

上保岩坪1号古墳出土遺物

出土遺物集合写真

### 巻頭図版3

鎌治関連遺物（1）

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

上保本郷遺跡は、船来山南麓の扇状地上に広がり、本巣市上保地内に所在する（図1）。本巣市教育委員会が平成19年度～平成23年度に実施した遺跡詳細分布調査では、古墳時代から中世の遺物が多数確認されている（本巣市教育委員会2016）。

東海環状自動車道は、東名・名神高速道路、中央自動車道、東海北陸自動車道などを、環状にネットワーク化することを目的として計画された自動車専用道路である。この計画路線上に当遺跡が所住するため、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所（以下、「岐阜国道事務所」という。）が岐阜県教育委員会に当遺跡の試掘・確認調査の依頼をした。平成26年度～平成28年度に実施した試掘・確認調査では、当遺跡の範囲内及びその周辺の事業予定地内に65箇所（TP1～TP65）の試掘・確認調査坑が設定された（図2）。調査の結果、TP10以西からTP44以東において土坑や溝などを検出し、遺物包含層から古代から中世の遺物が出土した（表1）。平成26年度の試掘・確認調査で遺跡の範囲の南西端が広がることが判明したため、本巣市教育委員会教育長（以下、「市教育長」という。）は、岐阜県教育委員会教育長（以下、「県教育長」という。）に岐阜県遺跡地図の変更についての報告（平成27年3月20日付け本社教第1388号）をした。これを受け、県教育長は市教育長に通知（平成27年3月23日付け社文第41号の69）をし、当遺跡の遺跡範囲を変更した。

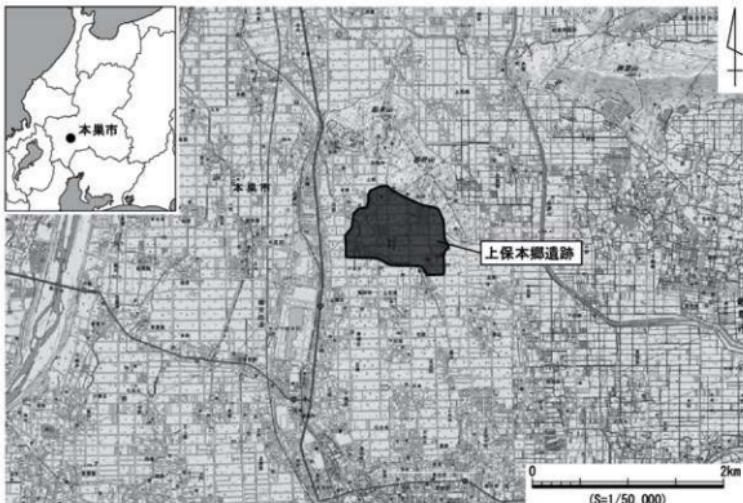


図1 遺跡位置図

（平成28年国土地理院発行電子地形図25,000「北方」に加筆）

試掘・確認調査結果をもとに、岐阜県教育委員会社会教育文化課は、平成26年8月28日及び平成27年11月4日並びに平成29年3月13日に開催した岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、17,168.1 m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要との意見をまとめた。本発掘調査は、平成27年度に8,817.9 m<sup>2</sup>、平成28年度には7,014.5 m<sup>2</sup>、平成29年度には1,335.7 m<sup>2</sup>を対象に、岐阜県文化財保護センター（以下「センター」という。）が岐阜国道事務所から、東海環状自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の依頼により、発掘調査を開始した。

本工事については、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、岐阜国道事務所長から県教育長あて埋蔵文化財発掘通知（平成27年3月31日付け国部整岐調第273号）が提出され、同条第4項の規定に基づき、県教育長から同事務所長あて発掘調査実施勧告（平成27年4月3日付け社文第54号の8、平成28年3月31日付け社文第54号の211、平成29年3月30日付け社文第64号の243）を通知した。同事務所長は発掘調査の実施を県教育長に依頼した。センターは調査着手後、発掘調査の報告（平成27年5月12日付け文財セ第82号、平成28年5月9日付け文財セ第78号、平成29年5月16日付け文財セ第98号）を、県教育長に提出した。

表1 試掘・確認調査結果一覧

調査坑	TP1	TP2	TP3	TP4	TP5	TP6	TP7	TP8	TP9	TP10	TP11	TP12	TP13	TP14	TP15	TP16	TP17
土師器	9	15	0	17	0	4	10	3	4	0	2	1	7	4	7	0	4
漆器類	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	1	0	0	0	0	3	0
灰陶陶器	2	0	0	1	0	5	0	0	16	0	5	0	0	0	0	0	2
山茶碗	0	0	0	0	0	0	20	5	17	1	5	2	10	4	0	9	0
陶器類	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
鉄製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
調査坑	TP18	TP19	TP20	TP21	TP22	TP23	TP24	TP25	TP26	TP27	TP28	TP29	TP30	TP31	TP32	TP33	TP34
土師器	6	5	1	0	2	23	2	6	17	6	21	5	7	26	37	3	4
漆器類	3	0	0	0	0	3	0	3	7	5	2	1	1	1	25	0	0
灰陶陶器	2	0	0	13	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	1
山茶碗	8	0	0	0	6	16	4	6	20	12	19	6	2	4	21	0	5
陶器類	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	5	1
石器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鉄製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土製品	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
調査坑	TP35	TP36	TP37	TP38	TP39	TP40	TP41	TP42	TP43	TP44	TP45	TP46	TP47	TP48	TP49	TP50	TP51
土師器	5	4	0	3	0	3	6	14	67	23	45	63	82	0	0	0	11
漆器類	0	1	3	0	1	0	3	6	5	0	0	2	0	0	0	0	1
灰陶陶器	0	0	5	0	2	0	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0	0
山茶碗	15	1	2	3	6	8	5	18	48	1	9	17	9	0	1	0	13
陶器類	0	1	4	0	1	0	0	7	18	2	15	5	6	0	0	0	2
石器	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0
鉄製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土製品	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
調査坑	TP52	TP53	TP54	TP55	TP56	TP57	TP58	TP59	TP60	TP61	TP62	TP63	TP64	TP65	合計		
土師器	6	6	2	2	1	7	2	4	14	26	14	18	26	3	773		
漆器類	1	0	3	1	2	1	2	1	3	3	1	1	2	4	109		
灰陶陶器	0	0	0	0	0	1	0	2	1	0	5	3	3	6	106		
山茶碗	9	10	4	14	0	10	5	1	2	12	4	5	1	11	471		
陶器類	1	1	2	1	0	4	1	0	1	32	13	29	26	6	190		
石器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
鉄製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
土製品	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8		

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

発掘調査は、事業の進捗状況に応じて、岐阜国道事務所と調査地点を協議し、平成27年度から開始した。発掘調査対象地は、道路建設計画により橋脚、調整池、側道が建設される部分であり、平成27年度に8,817.9 m<sup>2</sup>（1地点から10地点）、平成28年度に7,014.5 m<sup>2</sup>（11地点から19地点）、平成29年度に1,335.7 m<sup>2</sup>（20地点・21地点）の発掘調査を実施した。なお、地点名は、各年度で西から東へ番号を付けた。発掘調査を開始するに当たり、世界測地系座標をもとに発掘区を100m×100mで区切り、北東から南西方向へA～Nまで14の大グリッドを設定した。各大グリッドには5m×5mの小グリッドを設定し、北から南へA～T、西から東へ1～20とした。そのため、発掘区の北東隅のグリッドはAM12、南西隅のグリッドはNE6となる（図3）。

試掘・確認調査では、調査面は1面で、古墳時代から中世にかけての遺構が重複することを確認しており、調査開始時に排水溝を発掘区の形状に応じて壁面沿いに掘削し、土層観察を行った。基本層序は、I層からV層まで設定し、I層を表土、II層を耕地整理前の旧耕作土、III層を遺物包含層、IV・

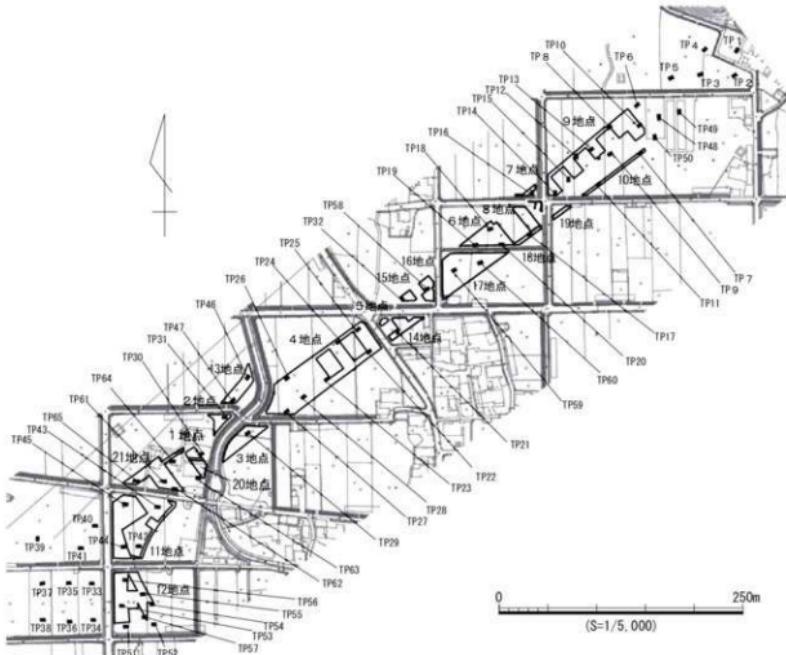


図2 試掘坑と発掘区の位置

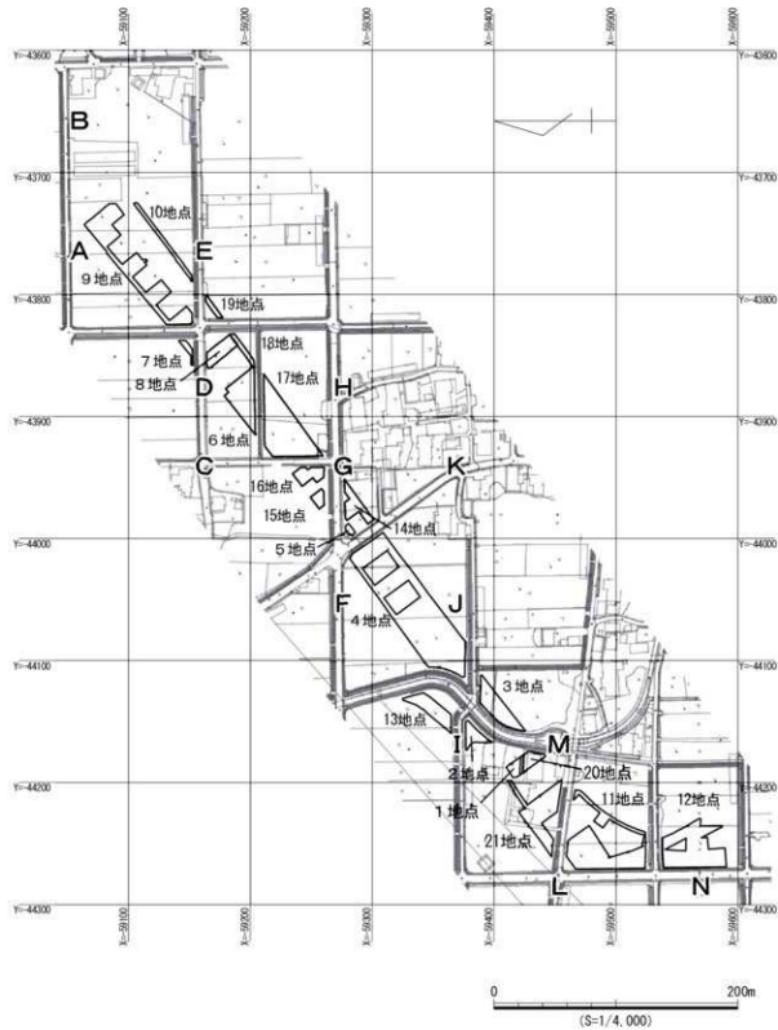


図3 発掘区地区割図

V層を遺構が掘り込まれる基盤層と設定した（第3章第1節参照）。なお、必要に応じてa～bを用いて基本層序を細分した。

発掘区内の表土（I層）と耕地整理前の旧耕作土（II層）は重機で除去し、遺物包含層（III層）から人力で掘削した。IV層上面（若しくはV層上面）で遺構を検出した後、遺構掘削作業を実施した。遺構の調査記録は、写真撮影及び手測り実測、デジタル測量で行った。

遺構は、原則として検出順に通番を付し、整理等作業時に遺構種別で分類し、種別ごとの通番とした。遺物包含層の出土遺物は、原則としてグリッド単位で取り上げた。遺構出土遺物は、土層の実測前後で取り上げ方法を変えた。土層分層前は、検出面から5cm単位の人工層位で取り上げ、aから順に記号を付した。土層分層後は、分層した層位ごとに取り上げた。なお、遺構の時期や性格を表す可能性のある遺物は原位置を測定し、特徴的な出土状況の遺物は出土状況図を作成した。

写真撮影は、35mmフィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、中判カメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。発掘区の景観写真撮影は、高所作業車やラジオコントロールヘリコプターを用いて実施した。

出土遺物の一次整理作業（洗浄及び注記作業、遺物台帳作成）は、当センターにおいて実施した。

## 2 調査の経過

### （1）発掘作業

現地での調査経過は以下のとおりである。

#### 平成27年度 発掘調査面積 8,817.9m<sup>2</sup>

- 第1週（5/11～5/15） 4地点発掘区中央部・7地点・9地点表土掘削実施。
- 第2週（5/18～5/22） 5地点・8地点表土掘削実施。7地点遺物包含層及び遺構掘削実施。
- 第3週（5/25～5/29） 4地点発掘区中央部・5地点遺物包含層及び遺構掘削実施。
- 第4週（6/1～6/5） 7地点景観写真撮影。
- 第5週（6/8～6/12） 7地点埋め戻し作業実施。5地点景観写真撮影。8地点・9地点遺物包含層及び遺構掘削実施。
- 第6週（6/15～6/19） 5地点埋め戻し作業実施。
- 第7週（6/22～6/25） 8地点・9地点遺構検出・遺構掘削作業を継続。
- 第8週（6/29～7/3） 8地点景観写真撮影。
- 第9週（7/6～7/10） 8地点埋め戻し作業実施。6地点表土掘削実施。9地点焼土を伴う遺構検出。9地点遺物集積SU1を検出し、S字甕が出土。4地点発掘区中央部で建物を区画する方形の溝SD394を検出。
- 第10週（7/13～7/17） 一次整理作業開始。
- 第11週（7/20～7/24） 6地点遺物包含層及び遺構掘削実施。9地点で土坑SK262から7世紀前葉の高壙と長頭壺が出土。
- 第12週（7/27～7/31） タイムスリップ探検隊（美濃）実施（参加者17名）。9地点上保岩坪2号古墳石室を検出。
- 第13週（8/3～8/7） 9地点土坑SK160からロクロ成形土師器皿がまとめて出土。

## 6 第1章 調査の経緯

- 第14週（8/11～8/15） 夏期作業休止。
- 第15週（8/17～8/21） 宇野隆夫氏（帝塚山大学教授）現地指導。6地点鍛冶炉SL4、SL5、SL6を検出。
- 第16週・第17週（8/24～8/28） 4地点・5地点・6地点・8地点の各地点で遺跡掘削を継続。
- 第18週（9/7～9/11） 6地点鍛冶炉SL8で平安時代末から鎌倉時代初頭の伊勢型鍋、清郷型鍋出土。9地点で上保岩坪1号古墳石室から長頸瓶出土。
- 第19週（9/14～9/18） 田中弘志氏（閔市教育委員会）による鍛冶炉SL4、SL5、SL6の現地指導。
- 第20週・第21週（9/21～10/2） 4地点発掘区中央部方形土坑SK5424から鉄滓等が炭を伴って出土。SL18-P1から輪羽口が出土。
- 第22週（10/5～10/9） 3地点発掘区北半表土掘削実施。9地点上保岩坪1号古墳石室からガラス玉等出土。4地点発掘区中央部・6地点景観写真撮影。1地点・10地点表土掘削実施。
- 第23週（10/12～10/16） 2地点・4地点発掘区東部表土掘削実施。4地点発掘区中央部・6地点埋め戻し作業実施。1地点・3地点発掘区北半遺物包含層及び遺構掘削実施。
- 第24週（10/19～10/23） 2地点遺物包含層及び遺構掘削実施。3地点発掘区北半景観写真撮影。
- 第25週（10/26～10/30） 3地点発掘区北半埋め戻し作業実施。3地点発掘区南半・4地点発掘区西部表土掘削実施。3地点発掘区南半・10地点遺物包含層及び遺構掘削実施。4地点発掘区東部景観写真撮影。4地点発掘区東部埋め戻し作業実施。宇野氏（帝塚山大学教授）現地指導。
- 第26週（11/2～11/6） 4地点発掘区西部遺物包含層及び遺構掘削開始。1地点及び2地点景観写真撮影。
- 第27週（11/9～11/13） 3地点発掘区南半土坑SK975から長胴甕等がまとまって出土。
- 第28週（11/16～11/20） 4地点発掘区西部景観写真撮影。4地点発掘区西部埋め戻し作業実施。3地点発掘区南半景観写真撮影。
- 第29週（11/23～11/27） 4地点発掘区西部埋め戻し作業実施。9地点・10地点景観写真撮影。2地点埋め戻し作業実施。9地点古墳石室解体。
- 第30週（11/30～12/4） 3地点発掘区南半埋め戻し作業実施。（株）パレオ・ラボによる石室石材分析。9地点・10地点埋め戻し作業実施。
- 第31週（12/7～12/11） 現場事務所撤去。
- 第37週（1/18～1/22） 一次整理作業終了。

平成27年度の発掘調査の結果、周溝を伴う2基の横穴式石室を確認した。その内の1基で古墳時代の須恵器や鉄製品などの副葬品が出土し、古墳であることが判明した。このため本巣市教育委員会教育長は、岐阜県遺跡地図の変更について報告し（平成28年1月21日付け本社教第848号）、これを受けて岐阜県教育委員会教育長は、上保岩坪1号古墳（21218-11702）及び上保岩坪2号古墳（21218-11703）を新たな古墳として遺跡地図に登録し、その旨を本巣市教育委員会教育長に通知した（平成28年1月29日付け社文第51号の44）。

平成28年度 西地区発掘調査面積 3,958.6 m<sup>2</sup>

第1週（5/2～5/6） 11地点表土掘削実施。

- 第2週（5/9～5/13） 13 地点発掘区北半表土掘削実施。13 地点発掘区北半遺物包含層及び遺構掘削実施。
- 第3週（5/16～5/20） 13 地点大溝 SD234 検出。
- 第4週（5/23～5/27） 11 地点遺物包含層及び遺構掘削実施。11 地点大溝 SD316 検出。
- 第5週（5/30～6/3） 11 地点土坑 SK3377 から縁出土。
- 第6週（6/6～6/10） 13 地点大溝 SD234 から完形の古瀬戸片口小瓶出土。
- 第7週（6/13～6/17） 13 地点大溝 SD234 で炭化物集中層を検出し、多数の遺物が出土。11 地点大溝 SD316 から石臼出土。
- 第8週（6/20～6/24） 宇野氏（帝塚山大学教授）現地指導。
- 第9週（6/27～7/1） 11 地点で遺物包含層から2枚重なった錢貨が出土。
- 第10週（7/4～7/8） 13 地点大溝 SD234 完掘。一次整理作業開始。
- 第11週（7/11～7/15） 13 地点発掘区北半景観写真撮影。11 地点で鍛冶炉 SL17 を検出。
- 第12週（7/19～7/22） 13 地点発掘区南半の表土掘削実施。13 地点発掘区南半の遺物包含層及び遺構掘削開始。
- 第13週（7/25～7/29） タイムスリップ探検隊（美濃）実施（参加者22名）。
- 第14週（8/1～8/5） 13 地点土坑 SK2137 から土師器皿5枚が重なって出土。
- 第15週（8/8～8/12） 11 地点大溝 SD316 底面から土師器皿がまとまって出土。夏期作業休止。
- 第16週（8/15～8/19） 夏期作業休止。11 地点土坑 SK3113 から山茶碗6枚が重なって出土。
- 第17週（8/22～8/26） 11 地点大溝 SD316 から獸骨が出土。
- 第18週（8/29～9/2） 13 地点堅穴建物 SI 3 底面から灰釉陶器や石器類が出土。11 地点大溝 SD316 から小柄が出土。
- 第19週（9/5～9/9） 13 地点で堅穴建物 SI 3 底面に炭化物と焼土粒を馬蹄形状に検出。11 地点大溝 SD316 完掘。
- 第20週（9/12～9/16） 13 地点土坑 SK4570 から古瀬戸入子が出土。11 地点土坑 SK3553 で古墳時代後期の遺物がまとまって出土。
- 第21週（9/20～9/23） 13 地点発掘区南半景観写真撮影。
- 第22週（9/26～9/30） 鍛柄俊夫氏（同志社大学教授）現地指導。12 地点表土掘削実施。
- 第23週（10/3～10/7） 宇野氏（帝塚山大学教授）現地指導。11 地点溝 SD327 完掘。
- 第24週（10/11～10/14） 12 地点遺物包含層及び遺構掘削実施。11 地点溝 SD297 から漆器碗出土。13 地点埋め戻し作業実施。
- 第25週（10/17～10/21） 12 地点溝 SD347 から常滑産陶器甕がまとまって出土。
- 第26週（10/24～10/28） 土貴野小学校6年生（39名）見学。現地見学会開催（29日参加者141名）。
- 第27週（10/31～11/4） 11 地点大溝 SD300 から埴塙が出土。
- 第28週（11/7～11/11） 11 地点大溝 SD300 から輪羽口が出土。11 地点 SD307 から下駄が出土。
- 第29週（11/14～11/18） 11 地点大溝 SD300 完掘。12 地点 SK4204 から山茶碗等がまとまって出土。
- 第30週（11/21～11/26） 11 地点・12 地点景観写真撮影。
- 第31週（11/28～12/2） 現場事務所撤収。

## 8 第1章 調査の経緯

- 第32週（12/5～12/9） 11 地点埋め戻し作業実施。  
第33週（12/12～12/16） 12 地点埋め戻し作業実施。  
第40週（1/30～2/4） 一次整理作業終了。

### 平成28年度 東地区発掘調査面積 3,055.9 m<sup>2</sup>

- 第1週（5/2～5/6） 19 地点表土掘削実施。  
第2週（5/9～5/13） 18 地点表土掘削実施。17 地点表土掘削実施。  
第3週（5/16～5/20） 19 地点遺物包含層及び遺構掘削開始。  
第4週（5/23～5/27） 19 地点遺物包含層及び遺構掘削継続。  
第5週（5/30～6/3） 19 地点景観写真撮影。19 地点埋め戻し作業実施。18 地点遺物包含層及び遺構掘削実施。  
第6週（6/6～6/10） 18 地点炉 SL 3 を検出。  
第7週（6/13～6/17） 18 地点景観写真撮影。17 地点遺物包含層及び遺構掘削実施。  
第8週（6/20～6/24） 18 地点埋め戻し作業実施。  
第9週～第11週（6/27～7/15） 17 地点の遺構検出及び遺構掘削継続。  
第12週（7/18～7/22） 17 地点土坑 SK1392 から灰釉陶器、土師器など多量の遺物出土。  
第13週（7/25～7/29） 17 地点方形土坑 SK1418 南東部の床面に炭化物が広がり、灰釉陶器や甕などが出土。  
第14週（8/1～8/5） 17 地点土坑 SK1476 から須恵器の壺身 C が出土。  
第15週（8/8～8/12） 夏期作業休止。  
第16週（8/15～8/19） 14 地点発掘区東半表土掘削実施。14 地点発掘区東半遺物包含層及び遺構掘削実施。  
第17週（8/22～8/26） 宇野氏（帝塚山大学教授）現地指導。  
第18週（8/29～9/2） 14 地点発掘区東半景観写真撮影。17 地点土坑 SK1029 からほぼ完形の土師器皿 4 点、山茶碗 4 点が出土。14 地点発掘区東半埋め戻し作業実施。  
第19週（9/5～9/9） 14 地点発掘区西半表土掘削実施。14 地点発掘区西半包含層掘削及び遺構掘削実施。  
第20週（9/12～9/16） 17 地点堅穴建物 SI 1 検出。  
第21週（9/19～9/23） 17 地点堅穴建物 SI 1 遺構掘削。  
第22週（9/26～9/30） 14 地点土坑 SK1760 から完形の山茶碗 5 点を含む多量の遺物出土。鈴柄氏（同志社大学教授）現地指導。  
第23週（10/3～10/7） 15 地点表土掘削実施。14 地点発掘区西半景観写真撮影。15 地点遺物包含層及び遺構掘削実施。17 地点景観写真撮影。  
第24週（10/10～10/14） 14 地点発掘区西半埋め戻し作業実施。  
第25週（10/17～10/21） 15 地点景観写真撮影。16 地点表土掘削実施。15 地点埋め戻し作業実施。17 地点埋め戻し作業実施。  
第26週（10/24～10/28） 16 地点包含層及び遺構掘削実施。西地区において現地見学会を開催し、バ

ネルを展示（参加者141名）。

第27週（10/31～11/4） 一次整理作業開始。

第28週（11/7～11/11） 16地点遺構検出及び遺構掘削継続。

第29週（11/14～11/18） 16地点溝SD217の底面に高坏、S字甕がまとまって出土。16地点景観写真撮影（11/16）。17地点埋め戻し作業実施。

第30週（11/21～11/25） 宇野氏（帝塚山大学教授）現地指導。

第31週（11/28～12/2） 現場事務所撤収。

第37週（1/9～1/13） 一次整理作業終了。

#### 平成29年度 発掘調査面積 1,335.7m<sup>2</sup>

第1週（5/8～5/12） 反転調査のため、21地点西端から東へ約25mの範囲（21西地点）を表土掘削。終了後、西から順次遺物包含層掘削開始。

第2週（5/15～5/19） 炭化材を含む土坑SK2893検出。溝SD293で土師器皿がまとまって出土（掘削当初は大型の土坑SK2819の一部と認識していた）。SK2819から大窯期の擂鉢が出土し、南側の11地点とは異なる遺構の様相を確認。竪穴状の土坑SK2747南壁沿いに設置された石組を確認。

第3週（5/22～5/26） SK2747底面で大型砥石出土。SF2の断ち割り結果で同遺構が道路状遺構の盛土と判断。LI12・LJ12グリッドで重複する多数の遺構を検出。SK2819の完掘後、その底面で溝SD292を検出。

第4週（5/29～6/2） SK2823が特殊な2段掘りの土坑であることを確認。掘立柱建物の柱穴SB24-P2で埋納された土師器皿出土。恩田知美氏（本巣市教育委員会）来訪。

第5週（6/5～6/9） SF2除去後に、底面で溝SD294・SD295を検出。溝SD292掘削開始。

第6週（6/12～6/16） 景観写真撮影。補足調査でSD292の断ち割りを実施し、その結果11地点の溝SD316とは規模の異なる溝であることを確認。

第7週（6/19～6/23） 21西地点埋め戻し作業実施。21地点の残りの範囲（21東地点）と20地点の表土掘削開始。

第8週（6/26～6/30） 表土掘削と併行し、21東地点東部から人力掘削作業を再開。

第9週（7/3～7/7） 人力掘削作業継続。

第10週（7/10～7/14） LE16・LF16グリッド付近で、搅乱を含む遺構が複雑に切り合う状況を確認。

第11週（7/17～7/21） 大型の土坑SK2492検出。

第12週（7/24～7/28） 竪穴状の土坑SK2390を完掘し、複数の土坑が重複する状況を確認。

第13週（7/31～8/4） SK2492の埋土中から、錢貨7枚が重なって出土。

第14週（8/7～8/11） 台風5号の影響で発掘区全体が水没。検出面でまとまって出土したS字甕の出土状況図を作成。SK2490の埋土中で、多量の礫と共に骨片や鉄釘、完形の土師器皿、常滑産陶器甕の破片等が出土。

第15週（8/14～8/18） 夏期作業中止。

第16週（8/21～8/25） 土坑SK2475で、長胴甕と須恵器がまとまって出土。溝SD284北部を完掘し、SD292に類似する直線的に設置された溝であることを確認。SI9の埋土上面で、宝篋印塔が出土。

- 第17週（8/28～9/1） 堅穴状の土坑 SK2443 で南壁に沿って並べられた石列を確認。炉跡 SL10 上面で古代の長胴甕や須恵器がまとまって出土。溝 SD285 北部から掘削開始。埋土中で、土師器皿や山茶碗出土。
- 第18週（9/4～9/8） SL10 で被熱痕確認。攪乱の間で溝 SD284 の続きを確認し掘削開始。
- 第19週（9/11～9/15） SI 6 で S字甕が出土し、堅穴建物であることを確認。
- 第20週（9/18～9/22） 当センターにおいて一次整理作業開始。溝 SD283 の 2 層上面で、土師器皿や鍋類がまとまって出土。
- 第21週（9/25～9/29） SD283 の粘土層内で度々完形の土師器皿が出土。断面が V 字形に近い形状の溝であることが判明。堅穴建物 SI 9 から石臼出土。
- 第22週（10/2～10/6） 土坑 SK2587 で大窓の耳付水注出土。SK2591 の埋土下層で粘土の堆積を確認し、水溜状の遺構であることを推測。
- 第23週（10/9～10/13） SI 4 が、東壁にカマド（SI 4-カマド）をもつ古墳時代後期の堅穴建物であることを確認。同構造で須恵器の壊身 B 出土。また、カマド内で土師器甕がまとまって出土。鈴柄氏（同志社大学教授）現地指導。
- 第24週（10/16～10/20） 宇野氏（帝塚山大学教授）現地指導。20 地点で遺物包含層掘削開始。
- 第25週（10/23～10/27） 台風 21 号の影響で発掘区水没。21 東地点の柱穴状遺構 SP395 で完形の山茶碗小皿出土。溝 SD277 の 1 層で大窓の皿出土。
- 第26週（10/30～11/3） 20 地点の遺物包含層掘削を継続するが、南部に厚い搅乱土が残っている可能性が高まり、次週から重機でこれを除去することにした。21 東地点の堅穴建物 SI12 でほぼ完形の土師器皿出土。SD283 が SD277 の手前で収束していることを確認。土坑 SK2598 で陶器の角皿 13 枚が積み重なった状態で出土。SI11 等堅穴建物の掘削を継続。
- 第27週（11/6～11/10） 20 地点の表土再掘削を実施（6～8 日）。完了後から本格的に 20 地点の調査を開始。20 地点で、井戸跡 SE 1 を検出。21 東地点で SI11 のカマドで、支脚柱と考えられる礫や遺物が出土。SL12 で被熱面を確認。
- 第28週（11/13～11/17） 個人（4 名）による発掘体験・見学。SE 1 が深さ 1 m 以上あることが判明。21 地点景観写真撮影。雨天により現地見学会による公開を中止し、パネル・遺物展示を実施（18 日、参加者 71 名）。
- 第29週（11/20～11/24） 20 地点の溝 SD269 で、多量の土師器皿出土。
- 第30週（11/27～12/1） 20 地点 SE 1 の堀方掘削を開始。20 地点景観写真撮影。SD269 出土の土師器皿を取り上げて調査終了。現場事務所撤収。21 東地点から埋め戻し作業開始。
- 第31週（12/4～12/8） 両地点の埋め戻し作業終了。
- 第33週（12/18～12/22） 一次整理作業終了。

## （2）整理等作業（平成29～令和2年度）

遺物実測や挿図作成等の整理等作業は、当センターにおいて実施した。整理等作業時には、宇野隆夫氏（帝塚山大学）から遺跡全体の評価や総括に関する指導を受けた他、中世集落のあり方に関する指導を鈴柄俊夫氏（同志社大学）、灰釉陶器・中近世陶磁器類に関する指導を藤澤良祐氏（愛知学院

大学)、須恵器及び古代集落に関する指導を渡邊博人氏、中世土師器類に関する指導を井川祥子氏(岐阜市教育委員会)から受けた。また、花粉分析、プラント・オパール分析、石材同定、ガラス玉蛍光X線分析、鉱滓・鍛冶関連遺物成分分析、歯骨同定、繊維同定は株式会社バレオ・ラボ、漆塗膜構造分析を株式会社吉田生物と株式会社バレオ・ラボ、木製品樹種同定、保存処理は株式会社イビソク、金属製品保存処理は公益財団法人山梨文化財研究所に委託して実施した。

### 3 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	宮田敏光（平成27年度）、羽田能崇（平成28・29年度）、野村幹也（平成30年度）、小林法良（令和元年度）、森勝利（令和2年度）
総務課長	二宮隆（平成27・28年度）、加藤武裕（平成29～令和元年度）、布施三千代（令和2年度）
調査課長	成瀬正勝（平成27年度）、春日井恒（平成28～令和2年度）
調査担当係長	春日井恒（平成27年度）、古屋寿彦（平成28・29年度）、鷺見博史（平成30年度）、長谷川幸志（令和元・2年度）
担当調査職員	古屋寿彦（平成27年度）、近藤正枝（平成27年度）、笠井慎吾（平成27年度）、井手大介（平成27～29年度）、山本厚美（平成28年度）、小野木学（平成28年度）、大本直人（平成28年度）、長谷川幸志（平成29年度）、澤村雄一郎（平成30年度）、佐藤恵太（平成30年度）、伊藤雅和（令和元・2年度）

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

当遺跡が所在する本巣市は、平成16年に本巣町・真正町・糸貫町・根尾村が合併して誕生した市で、濃尾平野の北端に位置する。条里地割が広く展開する地域として著名であり、当遺跡周辺にも、図4の赤線で示すように昭和40年代の圃場整備事業前までは条里地割が残存していた。今回報告する発掘区は水田や果樹園として利用されていた。

当遺跡は、根尾川によって形成された標高23.3~24.4mの扇状地上にあり、船来山丘陵（標高116.5m）の南麓に立地する。発掘区周辺の昭和23年米軍撮影の空中写真を見ると、写真1左側に旧糸貫川の流域が確認できる。本巣市の西を通る根尾川は、越美山地の根尾谷から平野部に出て南に貫流しているが、享禄3（1530）年の大洪水が起こる前の本流は旧糸貫川であった。また、船来山南方の扇状地には、旧河道や後背湿地が残されており、幾度にも及ぶ流路変更があったことが窺える（図5）。旧糸貫川が船来山西麓に沿うように流下した時期もある。遺跡内には、小字「怒河」という地名が残されており、古くから旧糸貫川の氾濫等によって影響を受けてきた地域であると考えられる。

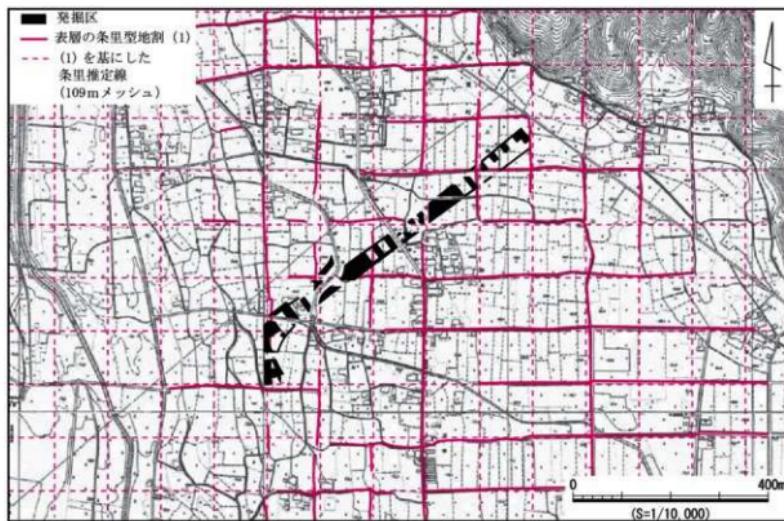
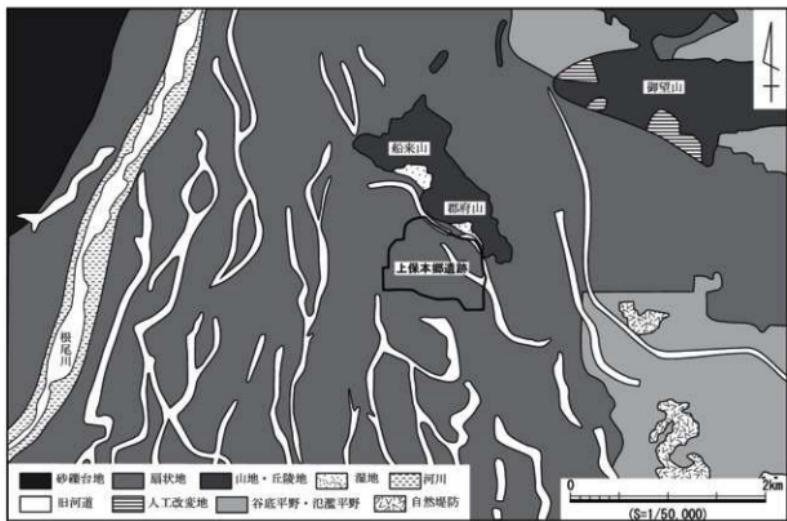


図4 発掘区周辺宅地図（昭和40年）と条里型地割<sup>11</sup>  
(国土地理院発行 1:2,500 國土基本図 7-LC-98-4, 7-LC-99-3, 7-LB-99-1, 7-MC-08-2)



写真1 発掘区周辺空中写真（昭和23年撮影 比例尺約1/10,000 USA-R1607-45 白：発掘区）



（この地図は、国土調査による1/50,000 土地分類基本調査（地形分類図）『岐阜県土地分類基本調査 大垣』（1983）を使用し岐阜県文化財センターが作成したものである。）

## 第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には、縄文時代から近世にかけて遺跡が多数分布する。図6・表2は、『改訂版岐阜県遺跡地図』(岐阜県教育委員会2007)を基に、遺跡の種類・時代等に関する新たな成果を踏まえて作成した。以下に発掘調査の成果を中心に遺跡の概要を述べる<sup>2)</sup>。なお、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図6の番号、表2の番号と一致する。

旧石器時代 船来山古墳群(4)では、ナイフ型石器が1点出土している。遺構は確認されていない。

縄文時代 御望A遺跡(32)では、平成3年～平成5年にかけて岐阜市教育委員会が本発掘調査を実施し、前期後葉の竪穴建物8軒、中期後葉の竪穴建物2軒を検出した。前期後葉では、西日本及び東日本などの影響を受けた土器が竪穴建物に伴って出土している。旧糸貫町教育委員会が実施した船来山富有柿の里地点の発掘調査では、早期の押型文土器や石器が出土している。また、同山麓にある弥勒寺遺跡(34)では、草創期の尖頭器、石鎌等の石器が採集されている。

弥生時代 御望A遺跡では、竪穴建物1軒を検出し、弥生時代後期山中式頃に比定される土器片が出土している。下西郷一本松遺跡(54)では、岐阜市教育文化振興事業団が平成11年度に実施した発掘調査で後期の竪穴建物、土坑等が検出され、甕、壺、高坏、器台などが出土している。船来山古墳群では、船来山の中腹に弥生時代後期・終末期の方形周溝墓1基を検出し、その遺構に伴って廻間I式初頭併行期の時期の器台、鉢等の供獻土器が出土している。

古墳時代 当遺跡の北側の船来山を中心に、大平山などの丘陵地に古墳が築かれている。八幡神社裏山古墳(8)や宝殊古墳(15)といった前期の古墳があり、宇田古墳群(18)のような後期の古墳もある。船来山古墳群では、古墳時代初頭から終末期に至るまで連綿と古墳が築造されており、現在約290基の古墳が確認されている。墳形や石室式には多様性が見られ、後・終末期の群集墳については、ほとんど墳丘が残されていない。出土遺物には、青銅鏡をはじめ、甲冑、刀剣類や鐵鎌などの鉄製武器、手斧や鋤鋸先などの鉄製農工具、ガラス玉や管玉などの玉類及び耳環の装身具、土師器や須恵器などの土器がある。

古代 『続日本紀』中に和銅8(715)年に新羅系の渡来人を入植させ、本巣郡から分かれて建郡されたとある席田郡がある。席田郡府遺跡(50)の中には、『日本三代実録』中に仁和3(887)年に火災で国分寺・国分尼寺が焼失した際に、一時期国分尼寺の機能を移した寺院に比定される席田廢寺跡(51)と、席田郡家推定地(52)がある。席田郡家推定地では、本巣市教育委員会が平成25年度に実施した発掘調査で奈良時代から平安時代の竪穴建物を複数検出し、須恵器や灰釉陶器、土師器が出土している。また、席田郡府遺跡の東側では古代須恵器、灰釉陶器等が多数確認され、集落跡が広がる可能性がある<sup>3)</sup>。元慶元(877)年に陽成天皇即位の大嘗会のための悠紀<sup>4)</sup>として美濃国席田郡がト定され、その推定地とされる春稻神社遺跡(33)では、須恵器・灰釉陶器、山茶碗等の中世陶器が採集されている。なお、昭和40年代の圃場整備事業前までは、当遺跡周辺に条里型地割が広域に残っており、小字「岩坪」、「野畔」、「菰繩手」のように条里制にまつわる地名が現在にも残っている(図7)。

中世 平安時代終わりごろ荘園が形成され、当遺跡周辺において席田荘、春近荘、真桑荘がある。

また国衙領として見延、隋原、春近、三橋、上真桑がある。鎌倉時代から水稻栽培で必要な用水は、根尾川の本流であった糸貫川から分配されていた。『馬場景吉証文』の中に享禄3(1530)年6月の大洪水で根尾谷の本流であった糸貫川が、西の蘇川筋を流れるようになったと記されている。その際、用水不足に悩んだ真桑地域の名主百姓が、席田地域に対し訴訟を起こしている。その後多くの普請をしており、それら証文の中に席田地域の27か村の名があり、当遺跡が所在する地域の「上方村(上保)」、「くく松村(菊松)」も見られ、当時の有力な名主がいたことが推測される。また、席田地域の村名に「いもしや」とあり、この地域に銭物を営む集団が住んでいたことが推測される<sup>5)</sup>。舟木城跡(36)では、船来山の山頂や尾根にも堀切や平場が確認されている。

近世 近世以降の遺跡の調査事例は少ない。正傳寺跡(37)は、安永年間(1772~1781年)に創建された臨濟宗の寺院とされる。平成28年度にセンターが実施した発掘調査で、石組みの基壇と礎石建物を確認した。埋設された江戸時代後期の常滑産陶器甕2個体が出土し、記録に残る正傳寺の創建期と一致する。

表2 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	上保本郷道跡	散布地・集落跡・生產	弥生～近世	35	白山西側古墓	その他の墓	中世
2	上保首坪1号古墳	古墳	古墳	36	舟木城跡	古墳跡	中世
3	上保首坪2号古墳	古墳	古墳	37	正傳寺跡	社寺跡	中世・近世
4	船来山古墳群	古墳・その他の墓・散布地	古墳	38	中西唐A道路	散布地	古代・中世
5	西ノ門1号古墳	古墳	古墳	39	中西唐B道路	散布地	古代
6	文殊院古跡	散布地	古代	40	中西唐C道路	散布地	古代
7	文殊院南門道跡	城郭跡	中世・近世	41	中西唐中道跡	散布地	古代・中世
8	八幡神社裏山古墳	古墳	古墳	42	有里内村内道路	散布地	古墳～近世
9	文殊院通造跡	散布地	古墳～近世	43	神王寺社道路	散布地	弥生～近世
10	文殊古墳	古墳	古墳	44	元正寺道跡	散布地	弥生～近世
11	文殊院西ノ門道跡	散布地	弥生～近世	45	小野寺跡	散布地	古代・中世
12	文殊院南門道跡	散布地	弥生～近世	46	小西街道	散布地	古代・中世
13	宝珠古跡群	散布地・古墳	古墳	47	下西第一A道路	散布地	古代・中世
14	上新村古跡	散布地	古代	48	三種内裏古道跡	散布地	弥生～近世
15	宝珠古墳	古墳	古墳	49	三種内裏古道跡	散布地	古墳～古代
16	下新村道跡	散布地	弥生	50	鹿田町役道跡	散布地	绳文～近世
17	宇田道跡	散布地	古墳・古代	51	鹿田南寺跡	社寺跡	古代
18	宇田古跡群	古墳	古墳	52	鹿田南家性定地	散布地	绳文～近世
19	文殊南ノ門道跡	散布地	弥生～近世	53	小西御祖木道跡	散布地	弥生～近世
20	山西1号古墳	古墳	古墳	54	下西第一・本松道跡	散布地・集落跡	弥生～古代
21	山西2号古墳	古墳	古墳	55	法螺谷道跡	散布地	弥生～近世
22	文殊明音寺道跡	散布地	古墳～近世	56	且内篠新寺道跡	散布地	古代～近世
23	明音寺古墳群	古墳	古墳	57	且内篠木前道跡	散布地	弥生～近世
24	上西郷入道跡	散布地	古代・中世	58	觀心寺道跡	散布地	绳文～近世
25	曾井中島川原道跡	散布地	弥生～近世	59	馬伏道跡	散布地	弥生～近世
26	長尾神社道跡	散布地	古代～近世	60	高保院跡	散布地	古代・中世
27	長尾神社道跡	散布地	弥生～近世	61	弘生寺貴船神社道跡	散布地	弥生～近世
28	上西郷B道跡	散布地	古代	62	弘生寺上光寺道跡	散布地	弥生～近世
29	上西郷C道跡	散布地	古代・中世	63	西牧寺前道跡	散布地	古代・中世
30	犬塚道跡	散布地	绳文・弥生	64	西牧古宮西道跡	散布地	中世
31	犬塚古跡群	古墳	古墳	65	上尻毛高田道跡	集落跡・官衙跡田地	古墳～中世
32	御宿八道跡	集落跡・散布地	绳文～近世	66	又丸道跡	散布地	古代・中世
33	春稻神社道跡	散布地	古墳～近世	67	上尻毛八幡道跡	散布地	古代・中世
34	弥勒寺道跡(弥勒寺跡)	散布地・社寺跡	绳文～近世	68	教德寺跡	社寺跡	近世
				69	若宮古墳	古墳	古墳
				70	東山道跡	その他の道跡	古代

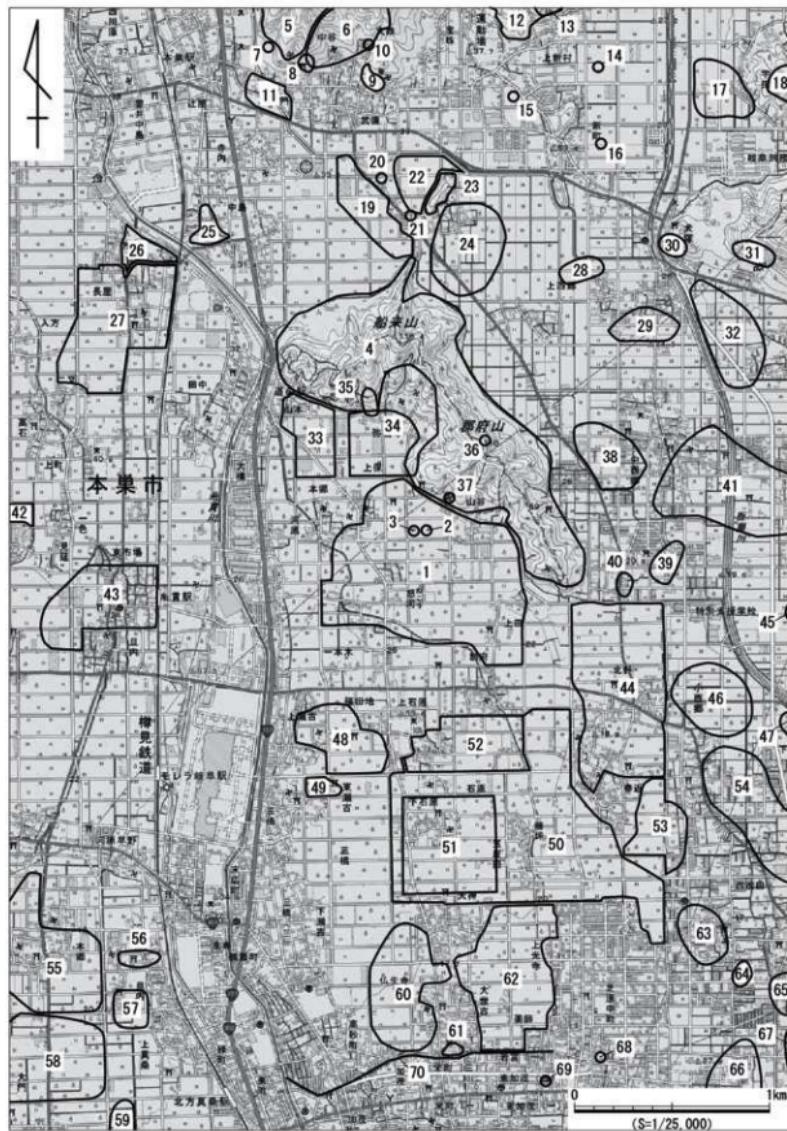


図6 周辺遺跡位置図  
(平成28年国土地理院発行電子地形図25,000「北方」に加筆)

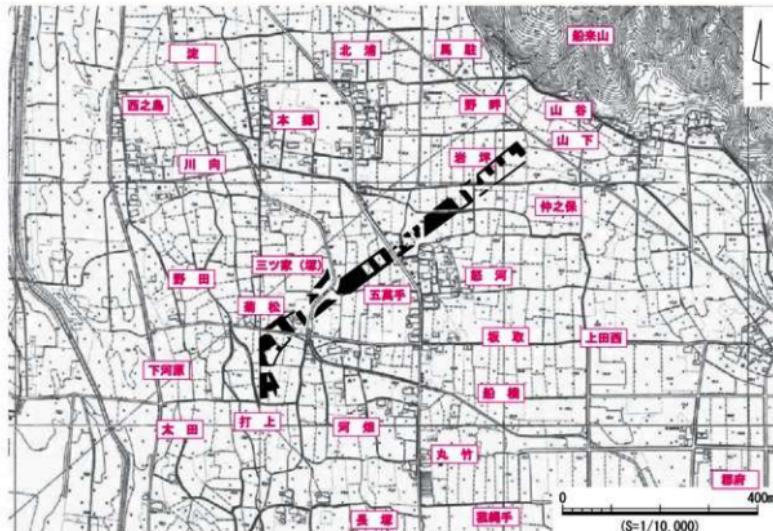


図7 発掘区周辺の小字名

(国土地理院発行 1:2,500 國土地基図 7-LC-98-4, 7-LC-99-3, 7-MC-09-1, 7-MC-08-2)

## 注

- 1) 図4の地図は、表層で確認できる条里型地割を赤線で表記した。その地割を基に109mの条里推定線を破線で表記した。
- 2) 各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。
  - 糸貫町 1981 『糸貫町史 通史編』
  - 本巣市教育委員会 2016 『本巣市詳細遺跡分布調査報告書 改訂』
  - 本巣市教育委員会 2017 『本巣市船来山古墳群総括報告書 本文編』
  - 岐阜市教育委員会 1994 『御望遺跡』
  - (財)岐阜市教育文化振興事業団 2000 『下西郷一本松遺跡』
  - 岐阜市教育委員会 1996 『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』
- 3) 本巣市教育委員会 2016 『本巣市詳細遺跡分布調査報告書 改訂』
- 4) 悠紀は、即位後に天皇が初めて行う大嘗会のとき、神事に用いる新穀・酒料を奉るよう卜定された国都のうち、第一の地を指した。
- 5) 糸貫町 1981 『糸貫町史 通史編』

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

基本層序は、以下のとおりⅠ層からV層に分層した（図8）。

#### I層 表土 10YR4/3にぶい黄褐色土～5Y4/1灰色土

発掘区全域で確認した。層厚は約0.15m～0.6mである。昭和40年代以降の耕地整理後の耕作土及び敷土である。

#### II層 耕地整理前の旧耕作土 10YR5/4にぶい黄褐色土～2.5Y4/2暗灰黄色土

発掘区全域で確認した。層厚は約0.1m～0.7mである。耕地整理前の旧耕作土及び敷土と考えられる。土器片や陶磁器片をわずかに含む。

#### III層 遺物包含層 10YR3/3 暗褐色土～2.5Y6/2灰黃褐色土

4地点西部を除く発掘区全域で確認した。層厚は約0.05m～0.2mである。4地点東部ではⅢ層上層に鉄斑が帶状に認められる。古墳時代から近世までの遺物を含む。4地点西部では後世に削平を受けたと考えられ、Ⅲ層は確認できなかった。

#### IV層 基盤層1

##### IVa層 旧河道埋土 5Y5/1灰色砂質土～2.5Y5/6黄色土、円礫をわずか～20%含む

3地点東部及び20地点東部で確認した。IVb層上面で確認した旧河道の埋土である。この旧河道埋土の上面でIVb層上面と同様に遺構を確認した。3地点北部及び20地点ではIVa層上面を遺構検出面とした。IVa層上面とIVb層上面は同一面と考えられる。須恵器片をわずかに含む。

##### IVb層 10YR3/3 暗褐色土～2.5Y4/2暗灰黄色土

IVa層を確認した3地点北部と20地点東部、V層を確認した11地点南部、12地点北部を除く発掘区全域で確認した。これらの地点ではIVb層上面を遺構検出面とした。無遺物層。

#### V層 基盤層2 河川堆積 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～2.5Y4/1 黄灰色砂質土 亜円礫～円礫を含む

3地点南部、11地点南部、12地点北部において、IVb層下で確認した。11地点南部、12地点北部ではV層が露頭しており、V層上面を遺構検出面とした。無遺物層。

調査前の発掘区の平均標高は、23.6m～24.6mで、後世の耕作土であるⅠ層、Ⅱ層が厚く堆積する2地点が最も高い。発掘区全域の遺構検出面は後世に削平を受けていると考えられる。遺構検出面の平均標高は22.85m～23.75mで、11・13・4・5・14・15・16・6地点が23.5mを超え、12・20・9地点が23mを下回る。発掘区中央部の地点の標高が高く、端部の地点の標高が低い傾向があり、遺構検出面の標高は旧地形を反映している可能性がある。

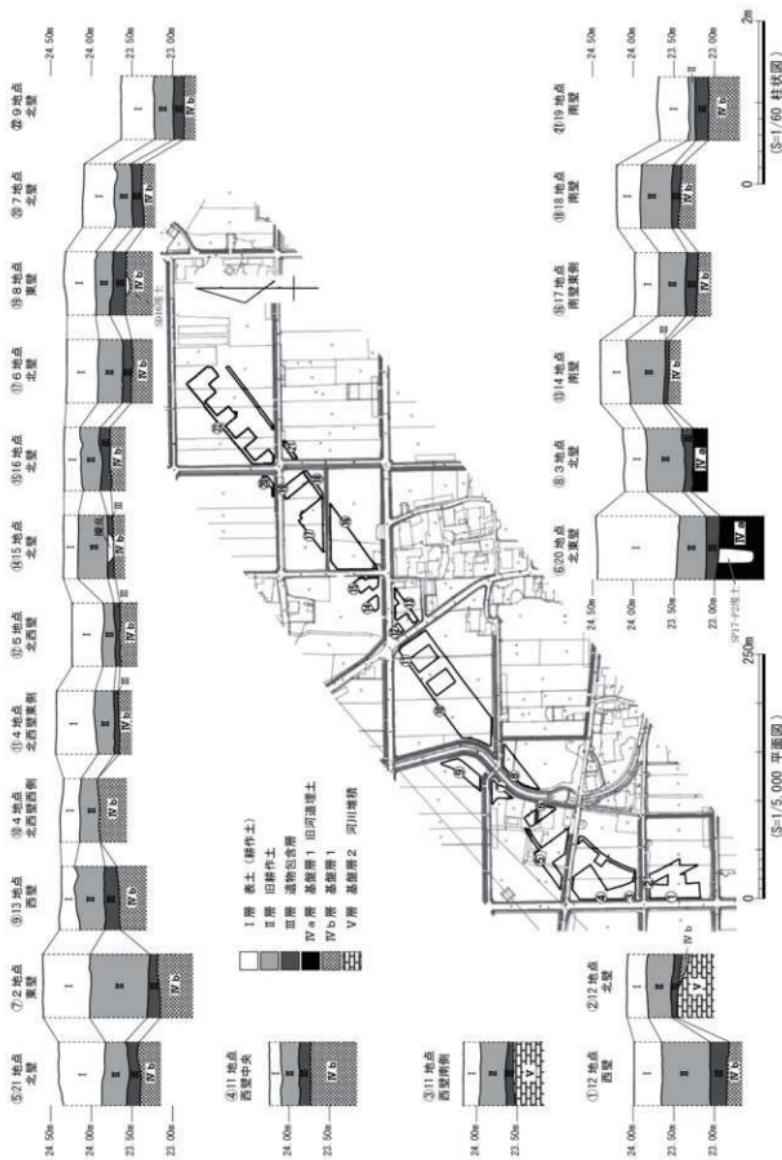


图 8 上保本鄉遺跡土層柱狀圖

## 第2節 遺構・遺物の概要

### 1 遺構概要

#### (1) 概要

今回の調査では、古墳時代前期から近世に及ぶ多数の遺構を検出した。検出した遺構数は表3のとおりであり、古代から中世の遺構が多い。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土の類似性などから判断した。

本報告書では、これらの遺構のうち、遺跡の性格を反映する堅穴建物や掘立柱建物、柵、墓は可能な限りの遺構を報告した。溝状遺構や土坑などは検出数が多いため、区画施設のように遺跡の性格を検討する上で重要な遺構や、一括性の高い遺物が出土した遺構、出土例の少ない遺物が出土した遺構などを抽出して報告した。なお、各遺構の説明文の「遺物出土状況」に記載した出土点数は、接合前の破片数を示す。

#### (2) 分類

今回検出した遺構は、形状と規模、構造から以下の要件に基づき分類、原則として北側の地点から順に、北東から略号とともに番号を付した。

**堅穴建物 (SI)** 地表を掘り下げて床面をつくり、堅穴内外に柱穴が確認でき、上屋構造を有すると推定できる遺構。柱穴、カマド、炉、壁際溝、貯蔵穴など建物を構成する要素のうち、カマドは「カマド」、炉は「炉」、壁際溝は「壁際溝」、貯蔵穴は「貯蔵穴」とし、複数存在する場合は番号を付した。また、建物を構成する柱穴は、「(付属する SI の番号) -P●」と表記した。

**掘立柱建物 (SB)** 向かい合う辺が2辺以上確認できるように、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成され、上屋構造を有すると推定できる遺構。また、建物を構成する柱穴は、「(付属する SB の番号) -P●」と表記した。

**柵 (SA)** 建物を構成せず、土地の境界・区画などを仕切るように、まばらに並んだ複数の柱穴・杭跡によって構成された遺構。また、柵を構成する柱穴は、「(付属する SA の番号) -P●」と表記した。

**井戸 (SE)** 水を得ることができる程度にまで掘り込まれており、曲物などの集水施設や井戸枠を有する遺構。

**柱穴 (SP)** 柱痕跡が確認できたものや根石が出土し柱穴と考えられるものの、規則的な配列が確認できず、建物遺構として認定できなかった遺構。

**墓 (ST)** 周溝及び横穴式石室を確認でき、埋葬施設であることを推定できる遺構。9地点において上保岩坪1号古墳、2号古墳を確認している。なお、石室を構築した石は石材同定を実施し、その結果を第5章に記載した。

**土坑 (SK)** 上記以外の人为的な掘り込まれた遺構。

**溝状遺構 (SD)** 人为的に掘られた、細長い平面形（短軸と長軸比=1:3以上）となる遺構。また短軸と長軸比が1:3未満のものでも連続していると見なせる遺構については含めることとする。

**畦畔・盛土 (SM)** 水田を区画するために盛土した遺構。

**水田遺構・溝状遺構群 (SN)** 鋼溝状の遺構（同形状及び同方向かつ連続して見られる溝）が平行して確認された範囲。または畦畔によって区画されると考えられる範囲。

**焼土遺構・炉・鋳冶炉 (SL)** 被熱した痕跡のある遺構で、堅穴建物に伴わない遺構。

表3 検出遺構一覧表

地点	ST	SI 付属	SB	SB 付属	SA	SA 付属	SP	SL	占墳	周溝	SD	SE	SE 付属	SK	SU	SM	SN	SF	合計
1	0	0	0	0	1	3	19	0	0	0	1	0	0	49	0	0	0	0	73
2	0	0	1	5	0	0	5	0	0	0	6	0	0	27	0	0	0	0	44
3	0	0	2	13	3	18	2	0	0	0	8	0	0	184	0	0	0	0	220
4	1	15	8	47	10	47	44	1	0	0	86	0	0	1474	0	0	0	0	1733
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	17	0	0	0	0	21
6	0	0	0	0	0	0	39	5	0	0	60	0	0	272	0	2	1	0	379
7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	18	0	0	0	0	20
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	56	0	0	111	0	0	3	0	170
9	0	0	3	16	3	10	36	2	2	2	36	0	0	315	1	0	0	0	426
10	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	7	0	0	73	0	0	0	0	85
11	0	0	7	37	8	32	60	4	0	0	32	0	0	822	0	0	0	0	1002
12	0	0	7	46	6	25	79	0	0	0	31	0	0	671	0	2	0	0	867
13	2	22	9	58	8	31	72	0	0	0	22	0	0	399	0	4	5	0	632
14	0	0	0	0	0	0	29	0	0	0	10	0	0	98	0	0	0	0	128
15	0	0	1	10	2	6	9	0	0	0	0	0	0	29	0	0	0	0	57
16	0	0	0	0	1	3	22	1	0	0	4	0	0	142	0	0	0	0	173
17	1	3	2	11	1	4	42	0	0	0	30	0	0	645	0	0	0	0	739
18	0	0	0	0	0	0	6	1	0	0	24	0	0	48	0	0	0	0	79
19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	15
20	0	0	2	11	4	15	30	0	0	0	9	1	4	90	0	0	0	0	166
21	11	46	6	35	15	53	114	3	0	0	25	0	0	557	1	0	0	2	862
合計	15	80	48	289	62	247	604	17	2	2	453	1	4	6056	2	8	9	2	7901

道路状遺構(SF) 人為的に土が踏み固められたり、方向が確認できる遺構。

遺物集積(SU) 遺構外において主に土器が集積あるいは意図的に配置されたような状態で出土したもの。

### (3) 遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

遺跡記号 遺跡番号は調査年度を示す2桁の数字(2015年度は15、2016年度は16、2017年度は17)の後ろに、上保本郷(KaminohonoHongou)遺跡の頭文字を付した。

調査番号・遺構番号 調査番号は現地調査時点で付した番号で、遺構番号は、全地点の遺構について報告順で種別毎に通し番号を付した。

時期 出土遺物や遺構重複等により判断した時期を記した。

地区割り 第1章第2節の1 調査の方法で示した通りである。

検出面 第3章第1節で示した基本層序の層位名を使用し、Ⅲ層掘削後にⅣa層上面、Ⅳb層上面、V層上面で検出した遺構は、それぞれ「IVa」、「IVb」、「V」と表記した。

堆積状況 図9のとおり分類し、a～kのアルファベットで表記した。

断面形状・平面形状・底面形状 図9の通り分類した。断面形状はローマ数字のI～VII、平面形状はアルファベットのa～gで表記した。平面形状は短軸と長軸の長さの比から円形・正方形(1:1.2未満)、橢円形・長方形(1:1.2以上)、長楕円形(1:1.5以上)とし、形状があまり整っていない場合には、不定形とした。発掘区外に続く、あるいは他の遺構に削平され形状が明確でないものについては不明とした。

規模 単位はmであるが、( )で示したものは、全形が確認できなかつたため、残存長の規模を示す。

重複関係 「新>古」の関係を示す。

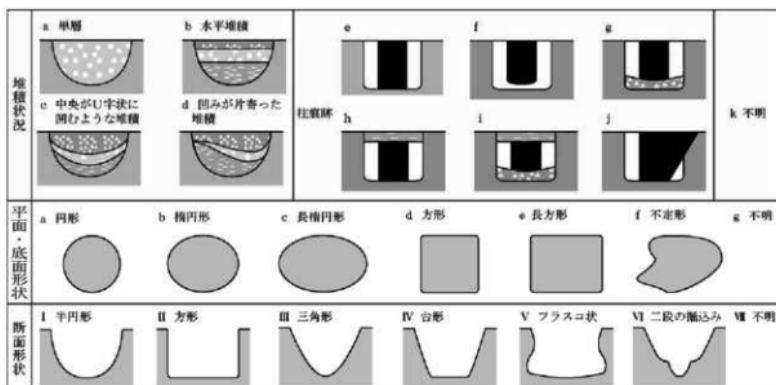


図9 遺構分類模式図

## 2 遺物概要

### (1) 概要

今回の調査では、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器などの土器類と、土製品、石器・石製品、木製品、金属製品等が出土した。それらの出土数は表4のとおりで、土師器、山茶碗の出土数が多い。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。

### (2) 分類

出土遺物の年代観や細分類を含む器種分類や編年観については、原則として既存の研究を参考とした<sup>1)</sup>。また、パレススタイル壺は「パレス壺」、く字状口縁台付甕は「く字甕」、有段口縁台付甕は「有段口縁甕」、S字状口縁台付甕は「S字甕」と略記した。

**縄文土器** 縄文時代晩期に属すると考えられる縄文土器片が若干認められる。

**土師器** 古墳時代から中世にかけて制作された素焼き製品をすべて土師器とした。器種は古墳時代の甕や壺、高坏、古代から中世にかけての土師器皿や甕、鍋がある。このうち、既存の研究を参考とした上で分類を行った清郷型鍋と伊勢型鍋について以下のとおり記述した。清郷型鍋は、北村和弘の分類・編年（北村2001）を基本に、A類～C類に分類した。A類は北村分類F類、G類、H類（いずれも第II段階第1小期）、B類は北村分類I類（第II段階第2小期）、C類は北村分類J類（第II段階第3小期）にあたる。伊勢型鍋は、北村和弘の分類・編年（北村1996b）を基本に、A類～D類に分類した。A類は北村分類A2類（I-1期）、B類は北村分類A3類（I-2期）、C類は北村分類A4a類（I-2期）、A4b類（II-1期）、D類は北村分類A5類（II-2・3期）にあたる。

**須恵器** 須恵器は古墳時代から古代のものが存在する。上保岩坪1号古墳、同2号古墳からは、高坏、長頸瓶、短頸壺などの供獻土器が出土している。遺跡全体としては蓋坏の出土が多いが、高坏、壺、甕、瓶、罐・盤などが出土している。出土数の多い蓋坏については、坏身、坏蓋をそれぞれA類～C類に分類した。坏身A類は無台坏のうち蓋受けを持つもの、坏身B類は無台坏のうち蓋受けのないもの、坏身C類は有台

表4 出土遺物点数一覧表

種別 破片数等	土器類						土器類合計	土製品	石器・石製品	木製品	金属製品	ガラス玉	合計
	縄文土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	中古後世陶磁器							
接合前破片数	25	45,523	9,094	6,109	58,928	13,048	132,727	218	644	105	1,081	19	134,794
接合後破片数	22	40,757	8,688	5,863	56,427	11,493	123,250	192	621	104	1,039	19	125,225

坏のものとした。坏蓋A類は蓋頂部に丸みがあり返りのないもの、坏蓋B類は口縁部内面に返りを持つもの、坏蓋C類は口縁端部に返りを持つものとした。

**灰釉陶器** 碗、皿、鉢、瓶、壺が出土している。猿投窯産のものと東濃窯産に大別でき、猿投窯産は黒釉14号窯式期から百代寺窯式期まで、東濃窯産は光ヶ丘1号窯式期から西坂1号窯式期までが確認できる。

**山茶碗** 碗、小碗、小皿、片口鉢などが出土している。尾張型が大半を占め、東濃型が続く。美濃須衛型と渥美・湖西型は微量である。尾張型は第3型式から第10型式まで確認でき、第5型式のものが多い。東濃型は尾張型第3型式併行から生田2号窯式期までが出土しているが、大畑大洞4号窯式から大洞東1号窯式期のものが多い。

**中近世陶磁器** 古瀬戸系施釉陶器（以下「古瀬戸」という。）、大窯、常滑産陶器、貿易陶磁器、近世陶磁器が出土している。大窯期以降の遺物は断片的にみられる。

**土製品** 土錐、土鈴、風炉、瓦が出土している。また、鍛冶関連遺物の輪羽口が出土している。

**石器・石製品** 火打石、石硯、石鍋、温石、棒状石製品、石臼、叩石、石皿、五輪塔、宝鏡印塔が出土している。また、鍛冶関連遺物の砥石<sup>2)</sup>、金床石、台石、輪羽口が出土している。

**木製品** 下駄、下駄の歯、漆器碗、曲物底板、火付木、箸、柱根、杭がいずれも遺構から出土している。木製品は樹種同定を、漆器碗と漆塗膜は成分分析を実施し、その結果を第5章第8節と第9節に記載した。  
**金属製品** 鉄製品では、上保岩坪1号古墳から鉄刀、刀子、鐵鎌が出土している。この他に鉄刀、刀子、鐵鎌、釘、鑿、鎌、鋸具、火打金の他、器種を特定できない鉄製品が出土している。また、鍛冶関連遺物の鉄滓、鉄塊、板状剥片、粒状滓等が出土している<sup>3)</sup>。銅製品では、權（分銅）、金銅製耳環、燭台、飾り金具、錢貨が出土している。また、鍛冶関連遺物の銅滓、銅滴が出土している。なお、權の紐に付着した繊維と鍛冶関連の金属製品は成分分析を実施し、その結果を第5章第7節に記載した。

**その他** その他の遺物としてガラス小玉、獸骨、鍛冶関連遺物の炉壁粘土塊が出土している。ガラス玉が上保岩坪1号古墳及びSL4・SL5から、獸骨はSD316から、炉壁の粘土塊は炉（SL）及び土坑（SK）で出土している。なお、ガラス玉は蛍光X線分析、獸骨は成分分析を実施し、その結果を第5章第4節と第6節に記載した。

### 3 遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、それぞれ種別ごとに作成した。種別により一覧表の項目は異なるが、主な項目の内容は次のとおりである。

**遺構名・グリッド** 遺構番号を記載した。遺構以外から出土した遺物のうち、出土位置が明らかなものは、グリッド名を記載した。

**層位** I～III層から出土した場合は、基本層序名を表記した。また、遺構出土の場合、土層分層前は埋土を深さ約5cmごとに区切り、上層から順に「a・b・c…」の順に表記し、土層分層後はその土層番号(1・2・3….)を表記した。

**種別・器種・産地** 土器は種別と器種名、産地について順に記載した。不明のものについては「-」とした。石製品は器種と石材を、金属製品は器種と材質を、木製品は種別をそれぞれ記した。

**口径等** 土器の( )で示した値は口径及び底径は復元長を、器高は残存長を示す。

**長さ等** 石製品、金属製品、木製品、玉類の( )で示した値は残存長を示す。

**口縁部残存率** 宇野隆夫氏の論考を参考とし<sup>9</sup>、土器類の口縁部残存率を示した。12分の1未満の破片は12分の1に切り上げ、12分の1以上の破片は小数点以下第1位まで計測した。また、底部残存率の計測は、灰釉陶器と山茶碗に限って実施し、2分の1未満の破片は0、2分の1以上の破片は1として計測した。

**胎土** 含有物は肉眼観察による。混和材の量により、「粗」、「やや粗」、「密」に分けた。

**器面調整・文様** 内面と外面の調整について、内面/外面の順に記載した。

#### 注

- 1) 出土遺物の年代観や器種分類は、以下の文献を参考とした。この他に参考とした文献は第4分冊巻末に一括して記載した。なお、須恵器については渡邊博人氏、中近世陶磁器については藤澤良祐氏の指導を得たが、最終的な判断は執筆担当者が行った。

愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 黑葉2 中世・近世 梶戸系』、愛知県

愛知県史編さん委員会2012『愛知県史 別編 黒葉3 中世・近世 常滑系』、愛知県

愛知県史編さん委員会2015『愛知県史 別編 黒葉1 古代 鹿投系』、愛知県

愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間跡跡』

井川祥子1997「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿」『美濃の考古学』第2号、美濃の考古学刊行会

井川祥子2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』、高志書院

各務原市教育委員会1984『美濃須古窯跡群資料調査報告書』(各務原市資料調査報告書第4号)

岐阜市教育文化振興事業団2000『千葉敷III』

太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡XV』(陶磁器分類編、太宰府市の文化財第49集)

東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会1996『鍋と甕そのデザイン』(第4回東海考古学フォーラム)

日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会2008『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』

- 2) 砥石の分類については、触感により石材の砥粒の大きい方から相対的に分類し、「荒砥」、「中砥」、「仕上砥」とした。

- 3) 鍛治関連遺物の分類のうち「鉄滓」と「鉄塊」は、磁着の有無で分け、板状剝片は薄板状に剥離したものとした。そのため「板状剝片」は鍛練鍛冶の際に生じる「鍛練剝片」と精練鍛冶の際に生じる「鉄滓破片」の両方を含むと思われる。

- 4) 宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館

## 第4章 調査の成果

### 第1節 9・10・19 地点の遺構・遺物

遺跡の北部、郡府山の南西に位置する調査地点で、調査面積は 2,016.3 m<sup>2</sup>である。本線の橋脚及び

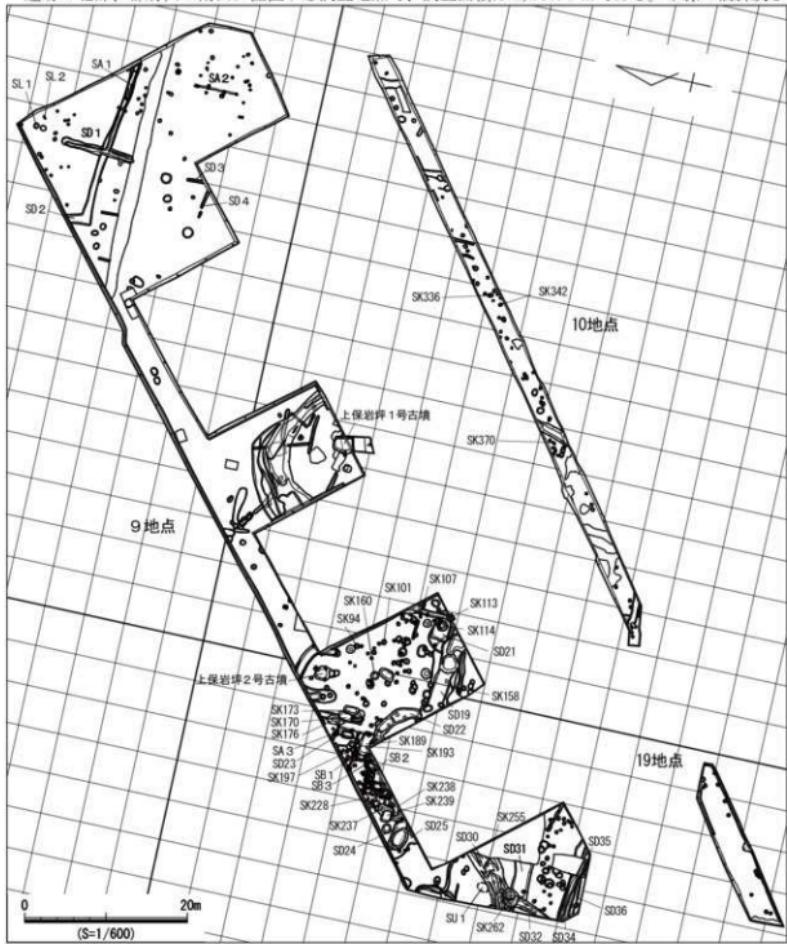


図10 9・10・19 地点平面図

側道、調整池部分を調査した。この地点から郡府山までの間は、試掘・確認調査により遺構が確認できなかつたため、本発掘調査には至らなかつた。

## 1 古墳時代の遺構・遺物

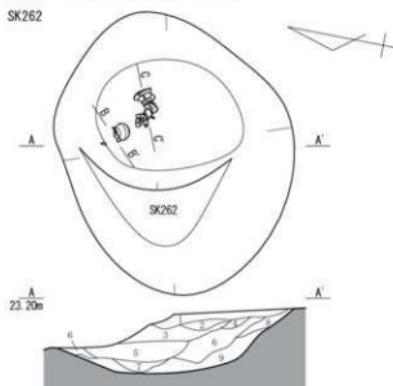
### (1) 土坑

#### SK262 (図11)

**検出状況** 9地点 DI16 グリッド、SD30 の掘削中に壁面で検出した。SK261・SD30・SD31・SD32 と重複し、それら重複する遺構と本遺構の埋土が近似していたため、平面形は不明瞭であった。なお、本遺構は SD30・SD32 より新しく、SK261・SD31 より古い。

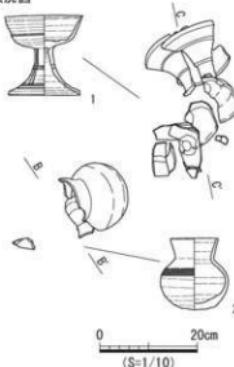
**規模・形状** 平面形は不整楕円形である。底面は平坦で、壁面は西壁面にわずかに平坦面を有し、それより下は急角度で落ち込む。

SK262



- 1 10YR3/3 細褐色土 しまる 粘性なし 細灰黄色土 (2.0/4/2) をブロック状に含む
- 2 10YR3/2 混褐色土 しまる 粘性なし 細褐色土 (10YR3/4) をブロック状に含む
- 3 10YR4/4 黄褐色土 しまりなし 粘性なし 2層と無り合う
- 4 10YR3/3 細褐色土 しまりなし 粘性なし 細色土 (10YR4/4) をブロック状に含む
- 5 10YR5/2 黒褐色土 しまりなし 粘性やあり 細色土 (10YR4/4) を径5cm次のブロック状に含む
- 6 10YR3/2 混褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 7 10YR3/4 黃褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 8 10YR3/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし 細灰黄色土 (2.0/4/2) をブロック状に含む
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性なし 細灰黄色土 (2.0/4/2) をブロック状に含む

遺物出土状況図



0 2m  
(S=1/10)

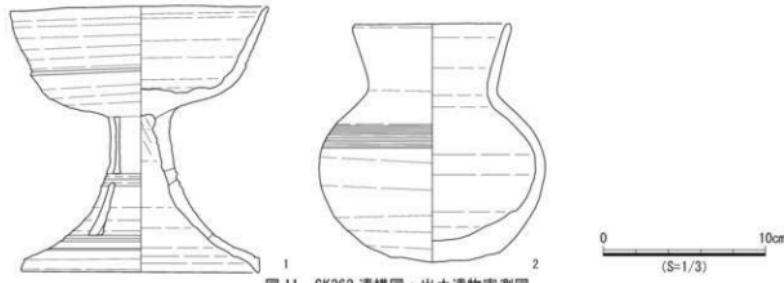


図11 SK262 遺構図・出土遺物実測図

**埋土** 9層に分層した。6層・7層を除くいずれの土層にもブロック土を含むことや、土器の小片が多く出土したことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 須恵器30点、土師器93点、鉄滓1点が出土したが、多くの土器は小片であり、埋土中から散在して出土した。しかし、5層からはほぼ完形の須恵器短頸壺(2)と潰れた状態の高坏(1)が一個体出土した(図11)。出土した位置や向き、短頸壺の底径と高坏の口径がほぼ同一であることから、セットとして使用された壺と高坏が廃棄されたものと考えられ、祭祀に伴う可能性がある。

**出土遺物** 出土遺物のうち、2点を図示した。1は東山44号窯式に比定した無蓋高坏である。坏部の外面に一段の稜を有し、口縁部にかけて直線的に伸びる。脚部は二段三方透しで、明瞭な二本の凹線にて上下段を区分する。下段の透孔の下にも二本の凹線が巡る。上段の透しと下段の透しの長さはほぼ等しく、透孔の形状は上段が長方形で、下段が三角形である。脚部の下方は開き、裾部はやや内湾し、裾端部は下方に折り曲がる。2は美濃須衛窯のII期後半に比定した短頸壺である。口径の基部径は同部径の2分の1を超える。頸部は太い。胴部は全体的に丸みを帯び、胴部外面にカキメ調整を施す。胴部下方には回転ヘラケズリ調整を、底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。

**時期** 出土した須恵器から、7世紀前葉と考えられる。

## (2) 溝状遺構

### SD30(図12)

**検出状況** 9地点DI16～DI17グリッド、IVb層上面で検出した。搅乱の壁面で掘方が確認できたが、平面上ではIVb層と遺構埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。SK262・SD32と重複し、いずれの遺構より本遺構が古い。

**規模・形状** 北東から南西に延び、東西端は発掘区外にある。底面はやや丸みを帯び、凸凹が見られる。南壁面は、幅の広い平坦面を有し、北側に向かって緩やかに下降している。底面標高は東側が高く、西側が低い。

**埋土** 8層に分層した。1層は厚く堆積し、1層・2層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。4層から7層は壁面の崩落土と思われ、8層は砂質土が堆積している。3層より下層にはブロック土が無く、薄い堆積が重なることから自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器524点が散在して出土した。多くは小片で出土した。

**出土遺物** 出土した遺物のうち、8点を図示した。3は柳ヶ坪型壺である。口縁部内外面にクシによる羽状文を施す。外面は摩滅が著しく文様は不明瞭である。口縁端部は内傾面を有する。4はく字甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部は尖る。表面の摩滅が著しいものの、体部外面にハケメ調整が認められる。5・6・7はS字甕である。5・7は端部の折り返しが明瞭であるが、表面の摩滅は著しい。6はC類で口縁部内面の上段と下段の境の稜が明瞭である。小片のため、体部外面の調整は不明である。8・9は土師器の壺である。8は体部に丸みを帯びる。9は底部が突出し、底部外面周縁の設置幅が狭い。10は小型器台である。口縁部はやや内湾し、端部は内傾面を有する。

**時期** 出土した土師器から、3世紀末から4世紀中葉以降と考えられる。

### SD32(図12)

**検出状況** 9地点DI16～DJ16グリッド、IVb層上面で検出した。北端にあたる発掘区西側の壁面においてSD30と異なる立ち上がりが見られ、埋土も明らかに異なることから、別遺構と判断した。SD30

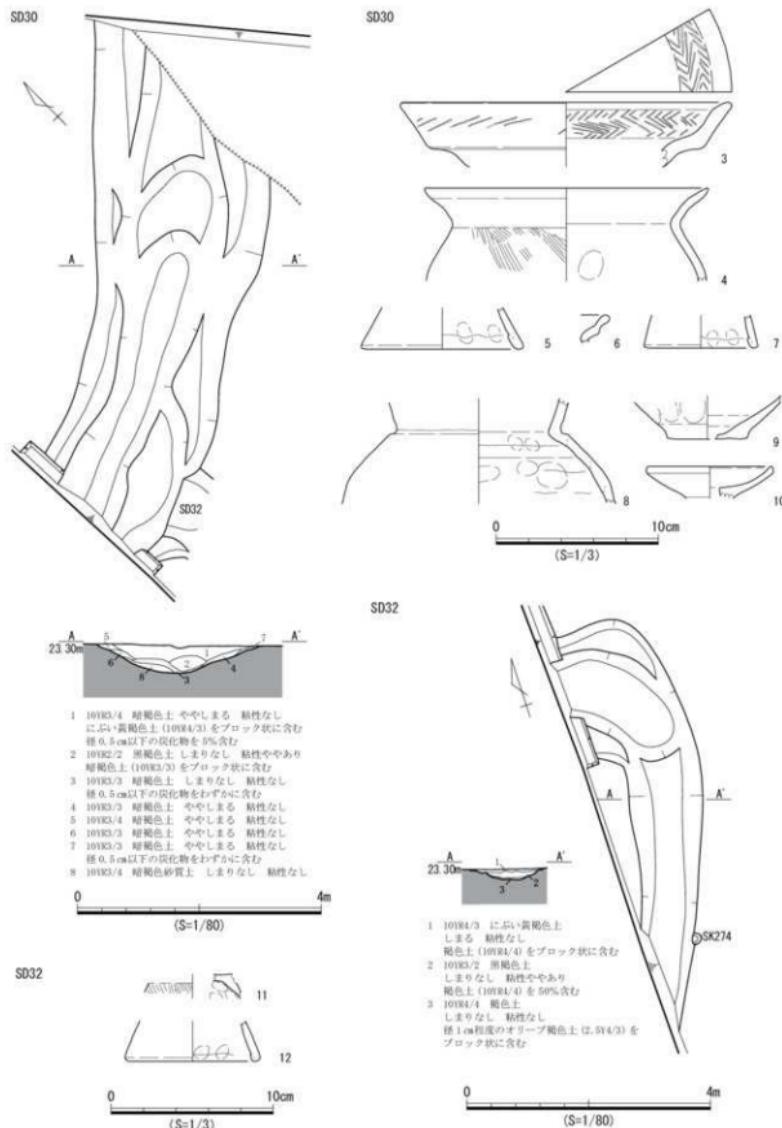


図12 SD30・SD32構造図・出土遺物実測図

より本遺構が新しい。また SK262 と重複し、本遺構が古い。平面形は明瞭に確認できたものの、SD30 と重複する範囲は本遺構と SD30 の埋土が近似していたため不明瞭であった。

**規模・形状** 南北方向に延び、北端が西側に屈曲し、南北端はともに発掘区外にある。底面には凹凸が見られる。底面標高は南側が高く、北側が低い。

**埋土** 3層に分層した。2層は粘性のある土が全体に厚く堆積している。いずれの土層にもブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 土師器 60 点が埋土中から散在して出土した。土器には S 字甕が含まれ、SD30 と類似する古墳時代の遺物が見られた。その他に埋土上層から山茶碗 1 点が出土した。土器はいずれも小片であり、表面の摩滅が著しい。

**出土遺物** 出土遺物のうち、2点を図示した。11・12 は S 字甕である。台部外面に斜位のハケメ調整を施す。

**時期** 出土遺物の時期は多くが古墳時代前期であるが、いずれも小片であり、残存状態も悪い。本遺構の周辺に SD31 など中世の遺構が多くあり、山茶碗は混入の可能性がある。SD30 と重複し、本遺構が新しい遺構であることからも 3 世紀末以降と考えられる。

### (3) 遺物集積遺構

#### SU 1 (図 13)

**検出状況** 9 地点 DH16・DI16 グリッド、IV b 層上面で検出した。III 層を掘り下げている段階で土師器片がまとまって出土した。掘り込みは確認できず、遺物集積と判断した。

**遺物出土状況** SD30 の北側に土器の小片が 3 箇所に固まって見られた。最も東側では S 字甕の胴部や口縁部が散在して見られた。中央では S 字甕の底部など複数の小片が見られ、その南側にやや離れて口縁部も出土した。南西側に体部の小片が複数見られた。

**出土遺物** 出土遺物のうち、4 点を図示した。13~16 は S 字甕である。13・14 は C 類である。13 は口縁部外面の上段と下段の境の棱が明瞭で、煤の付着が見られる。15 は体部下半から台部の資料である。16 は台部外面に斜位に、体部に縦位にハケメ調整を施す。16 は表面の摩滅が著しく、台部には斜位に、体部には縦位にハケメ調整を施す。

**時期** 出土した土師器から、3 世紀末以降と考えられる。

### (4) 墓

#### 上保岩坪 1 号古墳 (図 14~18)

**検出状況** 1 号古墳は 9 地点の発掘区南壁際で、石室及び周溝を確認した。EC 6 グリッドの現代耕作土下の整地層除去後に石室の掘方、側壁及び奥壁の石列を確認した。周溝は EA 4・EB 4・EA 5・EB 5・EB 6・EB 7 グリッドの IV b 層上面で検出した。

**墳丘** 墳丘は削平されており、墳丘盛土は確認できなかった。1 号古墳の大部分が発掘区外で、検出できたのは石室の一部と石室の北側で周溝の 1/4 程度である。詳細な規模・墳形は不明であるが、墳形は残存する周溝が円形であることから円墳と考えられる。また、規模は石室中央部から周溝の内側までの内径約 7~8 m を測ることから、直径約 14~16 m と推定される。

**周溝** 周溝は古墳の北側で全体の約 1/4 程度を確認した。周溝の規模は、石室北西側(図 14 A-A' 断面)で、幅 4.8 m、深さ 0.44 m、断面形は半円形である。石室北側(図 14 B-B' 断面)で幅 3.52

m、深さ 0.62m、断面形は台形である。北東で幅約 0.86m、断面形は逆台形である。古墳の北側から西側にかけては、周溝外側が浅く幅広くなっている、深い部分が平坦面となっている。周溝埋土は石室北西側（図 15A-A' 断面）で 12 層、石室北側（図 15B-B' 断面）で 16 層に分層した。周溝埋土の中層・下層からは主に須恵器が、上層からは山茶碗が出土している。この他に周溝埋土からは灰釉陶器、土師器等が出土している。周溝埋土下層の堆積は墳丘からの流土とみられる。遺物の出土状況や堆積の状況から周溝の埋没過程は、まず、墳丘からの流土が周溝の墳丘側に堆積し、その後徐々

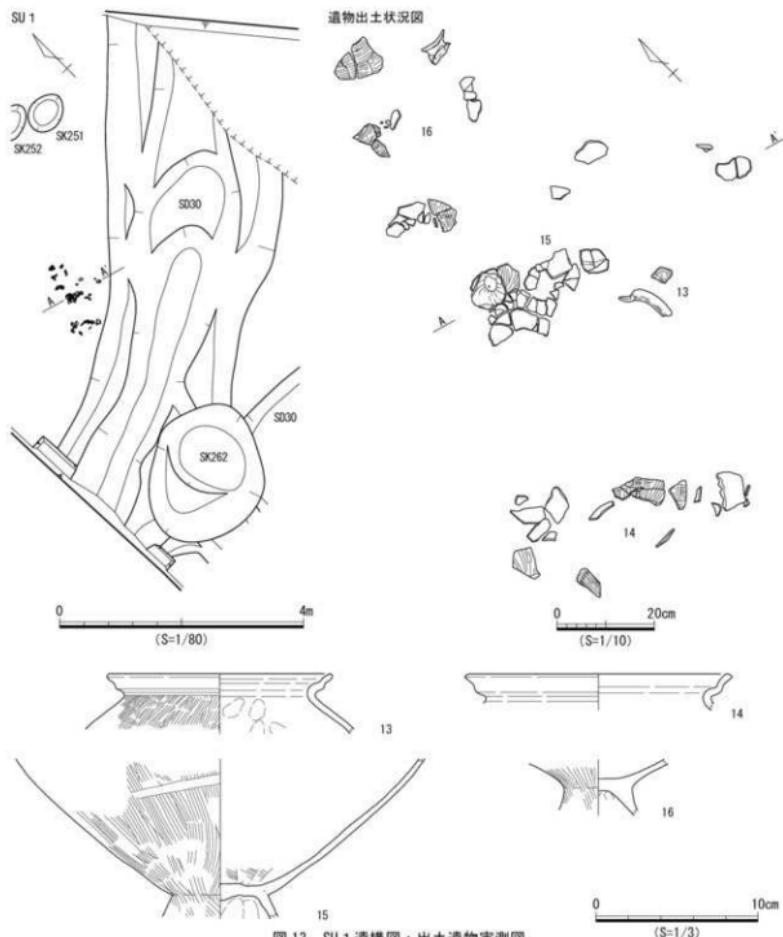


図 13 SU 1 造構図・出土遺物実測図

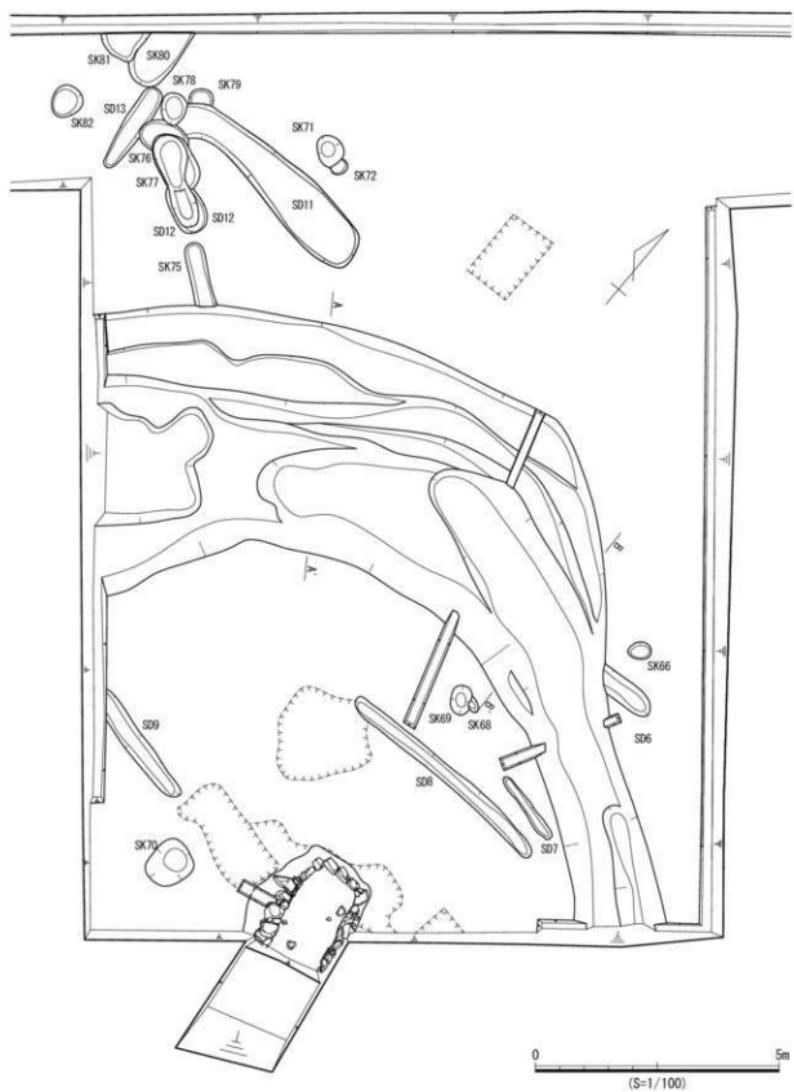


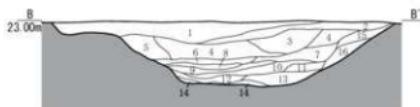
図14 上保岩坪1号古墳全体図

に埋まつていき、最終的には中世に埋没したものと考えられる。

**埋葬施設(図16)** 本古墳の埋葬施設は横穴式石室である。石室の半分程度が発掘区外となるため、詳細な構造や規模等は不明であるが、確認した石室は玄室の一部と考えられる。確認した範囲では、玄門や楣石など玄室と羨道を区別する構造は確認できない。石室の主軸はN-6°-Wで、石室の入口部分は確認できないが、南に開口すると考えられる。石室の平面形状は、左側壁から胴張り形と確認できるが、右側壁は奥壁近くでは左側壁と対応する胴張り形に広がるが、中央部分は内側に膨らみ、乱れた形状となっている。石室の残存長は1.96m、幅は奥壁で0.8m、中央で1.2m、石室の残存高は、奥壁で0.32m、側壁で左右とも最大0.5mである。側壁は長手積みで積み上げられ、左右とも南側ではおおむね3段の石積みが確認できるが、奥壁付近では1段しか確認できない。左側壁の基底石は、底部を水平にそろえて並べられているに対し、右側壁の基底石底部は水平にはそろっていない。奥壁は1段が確認でき、高さ約0.3~0.4mの石材3個を立てる。左側壁の石は奥壁の石にかぶさり、右側壁の石は奥壁の石の側面がかぶさるように積まれている。床面は、暗灰黄色粗砂土をブロック状に含むオリーブ褐色砂質土で整地する。床面の上面は奥壁付近から入口方向へ向かって緩やかに降り、比高差は約5cmを測る。床面に礫は認められず、礫床は形成されなかつたと考えられる。石室掘方は平面形が胴張り形で、残存長2.3m、幅は奥壁部分1.6m、中央付近2.1mを測る。奥壁基



- 1 2.5V3/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし オリーブ褐色土(2.5V4/4)をブロック状に含む マンガン斑をはじり合う
- 2 2.5V3/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 墓壙色土(2.5V3/2)をブロック状に含む
- 3 2.5V3/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 墓壙色土(2.5V3/2)をブロック状に含む マンガン斑をはじりに含む
- 4 2.5V3/3 緑オリーブ褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 墓壙黃色砂質土(2.5V4/2)をブロック状に含む マンガン斑をはじりに含む
- 5 2.5V4/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 黒褐色土(2.5V3/3)をブロック状に含む
- 6 2.5V4/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 黒褐色土(2.5V3/3)をはじりに含む
- 7 2.5V3/2 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 黄褐色砂質土(2.5V4/2)をブロック状に含む
- 8 2.5V3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 黄褐色砂質土(2.5V3/3)をブロック状に含む
- 9 2.5V3/2 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 黄褐色砂質土(2.5V4/2)をブロック状に含む
- 10 2.5V3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 黄褐色砂質土(2.5V4/3)を厚10mmの大ブロック状に含む 重物出上
- 11 2.5V4/3 オリーブ褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 黒褐色砂質土(2.5V4/2)をブロック状でわざかに含む
- 12 2.5V4/3 オリーブ褐色砂質土 ややしまる 粘性なし



- 1 2.5V4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 2.5V4/4 オリーブ褐色土と混じり合う 残5mm以下のマンガン斑 3%含む
- 2 2.5V4/4 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 黄褐色土と混じり合う マンガン斑をはじりに含む
- 3 2.5V5/3 黄褐色土 ややしまる 粘性なし 黄褐色土と混じり合う マンガン斑をはじりに含む
- 4 2.5V4/3 オリーブ褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 黄褐色土(2.5V3/3)をブロック状に含む
- 5 2.5V5/2 黄褐色土 ややしまる 粘性なし
- 6 2.5V4/2 黄褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 肥分を含む
- 7 2.5V4/2 黄褐色砂質土 ややしまる 黄褐色砂質土(2.5V4/2)を含む
- 8 2.5V5/2 黄褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 肥分を含む
- 9 2.5V4/2 黄褐色土 ややしまる 粘性なし 肥分を含む
- 10 2.5V4/3 オリーブ褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 黄褐色砂を含む
- 11 2.5V4/2 黄褐色土 ややしまる 粘性なし 肥分を含む
- 12 2.5V4/2 黄褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 黄褐色砂質土(2.5V5/2)をブロック状に含む
- 13 2.5V4/2 黄褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 残0.5cm~2cmの大礫を多量に含む
- 14 2.5V4/1 黄褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 肥分を含む
- 15 2.5V4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし マンガン斑をはじりに含む
- 16 2.5V4/3 オリーブ褐色砂質土 ややしまる 粘性なし

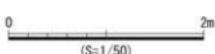


図15 上保岩塚1号古墳周溝土層断面図

底石は掘方底面に直に据え置かれ、奥壁基底石を配置した後、床面を整地しながら側壁基底石を床面に埋め込んでいったと考えられる。掘方の底面は、床面と同様に奥壁側から入口側に緩やかに降り、その比高差は約7cmを測る。左側壁が掘方上端から約0.4mひかえて石を積んでいるのに対し、奥壁及び右側壁のひかえは約0.2mと狭小である。掘方内部の石材との間には、奥壁で2層、左側壁で3

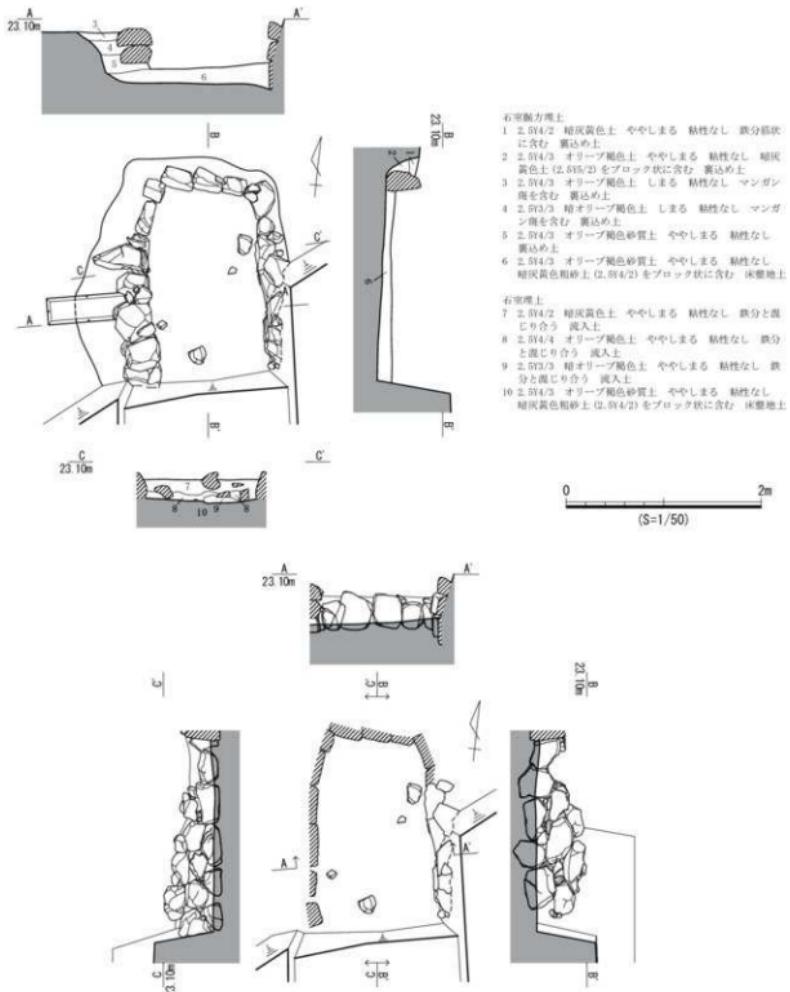


図16 上保岩塚1号古墳石室実測図

層の裏込め土が充填される。側壁部分は石を積みながら裏込め土を充填したと考えられる。

**石室埋土** 石室の埋土はいずれも流入土で、3層に分層した。いずれも層界は不明瞭で、一度に埋められた可能性が高い。流入土中には石室の石材と考えられる多量の礫が混入している。

**遺物出土状況** 石室内からは、副葬品と考えられる須恵器（長頸瓶、短頸壺）、鉄刀、刀子、鐵鎌、ガラス製の小玉が出土した。石室内の遺物はすべて石室床面から浮いた状態で、原位置を保っていないが、いずれも右側壁付近に集中して出土した。出土層位は長頸瓶が石室埋土1層から出土し、他の遺物は1層と2層の層界付近から出土した。また、副葬品以外に土師器、山茶碗、石器が出土した。

**出土遺物** 17～48は石室出土遺物である。17・18は須恵器である。17は長頸瓶で、口縁部は直線的に開き、端部のみやや内側に内湾する。体部は上半に最大径を持つ。内外面ともに回転ナデ調整で成形し、体部下半から底面にかけて回転ヘラケズリ調整を施す。底部外面のみ静止ヘラケズリ調整を施す。頸部外面及び体部上半に2条の横位沈線を施し、体部は沈線の間に櫛状工具による連続刺突を施す。口縁部内面には段が認められる。口縁部の片面は潰れて平坦になっており、口縁部から底部にかけて全面のみ自然釉が付着することから、横倒しの状態で焼成された可能性がある。18は短頸壺である。17に比べつくりが粗く、胎土の色調が白い。口縁部は緩やかに外反して開く。体部は中央に最大径を持つ。内外面ともに回転ナデ調整で成形し、体部下半は回転ヘラケズリ調整を施す。底面は無調整で、成形時と思われる圧痕が残る。体部上半に1条の横位沈線を施すが、3/4周しかしない。口縁端部付近をつまんで面をつくり、端部は尖らせる。口縁部から体部上半及び内部底面に自然釉が付着する。19は叩石である。角柱状のチャート礫を使用している。両端に敲打の痕跡と思われる剥離が認められる。20～37はガラス製の小玉である。色調は20・21が緑色、22～24が青色、25～28が黄色である。いずれも管切法で製作されている（第5章第4節）。29～37は破片である。色調は29～33が緑色、34～37が青色である。38は鉄刀である。切先が残存し、刃部長は37cmを測る。関は両関で直角である。茎尻は欠損する。茎部の腹側と側面に柄の木質が認められ、落とし込み式の柄が装着されていたことが分かる。また、鉄製の鍔が残存する。39は刀子である。切先は欠損し、茎尻が残存する。両関でナデ関の形態をとる。木柄が残存し、部材の合わせ目は確認できることから、柄の小口に孔を穿ち茎尻を差し込む一本式の柄と考えられる。40は短頸三角形鎌である。鎌身関は直角で、頭部関は台形関である。茎尻は欠損する。41は有頭鎌である。鎌身部は三角形で、鎌身関は直角である。頭部は欠損しており、長さは不明である。42・43は、鎌身部の破片である。42は欠損が激しく本来の形状は不明である。43は鎌身関まで残存し、長三角形と分かる。わずかに腸抉が認められる。44は短頸柳葉鎌である。鎌身関はナデ関で、頭部関は棘状関である。茎尻は欠損し45と銹着する。45は長頸鎌の頭部から茎部にかけての破片である。頭部は円形関で茎尻が残存する。茎部には矢柄の木質が残存する。46是有頭鎌である。鎌身部は長三角形で、腸抉を有する。頭部を欠損しており、長さは不明である。47は断面矩形の棒状の鉄製品である。長頸鎌の頭部の可能性がある。48は器種不明の板状の鉄製品である。いずれも断面は矩形である。

49～57は周溝出土遺物で、いずれも須恵器である。49は短頸壺である。口縁部は直線的に開く。体部上半に最大径を持つ。内外面ともに回転ナデ調整で成形し、体部下半から底面まで回転ヘラケズリ調整を施す。断面の胎土の色調はやや赤い。口縁端部は尖る。体部外面の上半のみ自然釉が付着する。50・51は壺類である。胎土や調整から同一個体と考えられるが、焼き歪みの影響からか、反転復

元した形状が若干異なる。丸底で体部に丸みがある器形をとる。50は体部上半の破片で、頭部が剥がれた痕跡が残る。復元した頭部の径は約6cmである。内面には明瞭な回転ナデ調整が残るが、外面は上半に自然釉が付着し、調整不明である。破片の下半は回転ナデ調整に使用したと思われる工具痕が残る。51は内面と外面の体部上半が50とほぼ同様であるが、体部外面中央の最大径の部分に一条の沈線が巡る。それより下は外面の回転ナデ若しくはケズリ調整をナデ消している。52は高環である。

遺物出土状況図

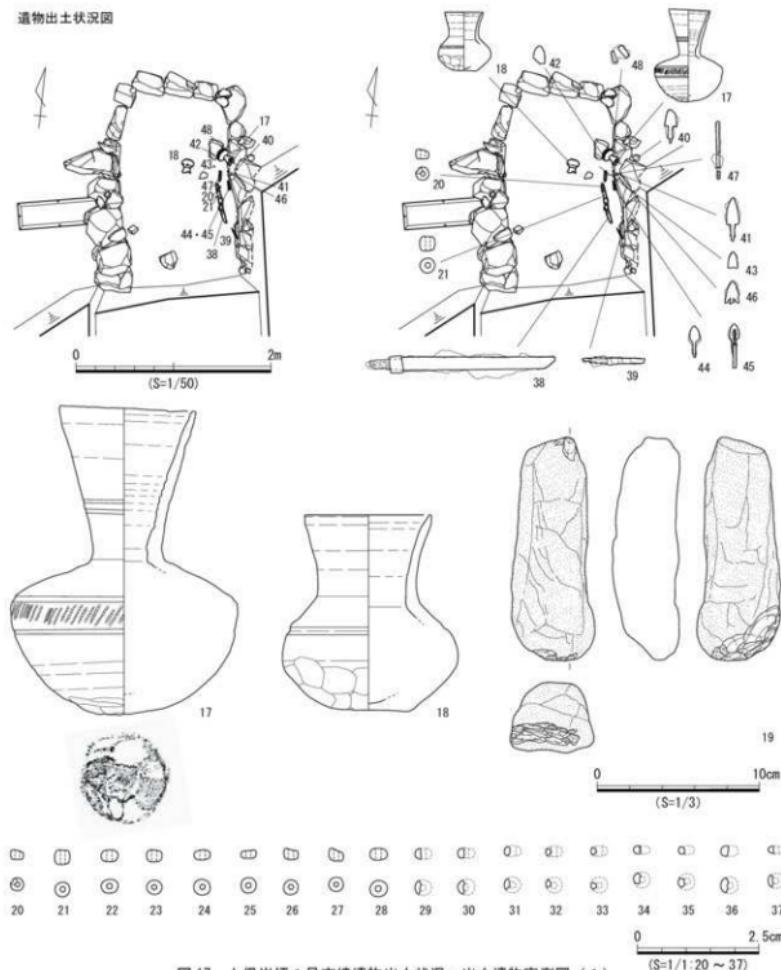


図17 上保岩坪1号古墳遺物出土状況・出土遺物実測図(1)

坏部の内面はナデ調整で成形し、外面は回転ヘラケズリ調整を施すが、坏部の底部外面と脚部周縁に接合のための回転ナデ調整を施す。坏部と脚部との接合部付近に2箇所の透かしの痕跡が対面で認められるため、二方透かしの可能性がある。断面胎土の色調はやや赤い。53・55は坏身B類である。54・56・57は坏蓋C類である。57は外面に自然釉が付着し、全体に歪みが認められる。

**遺構の時期** 古墳の時期については、石室から出土した長頸瓶、短頸壺から7世紀前半に比定した。

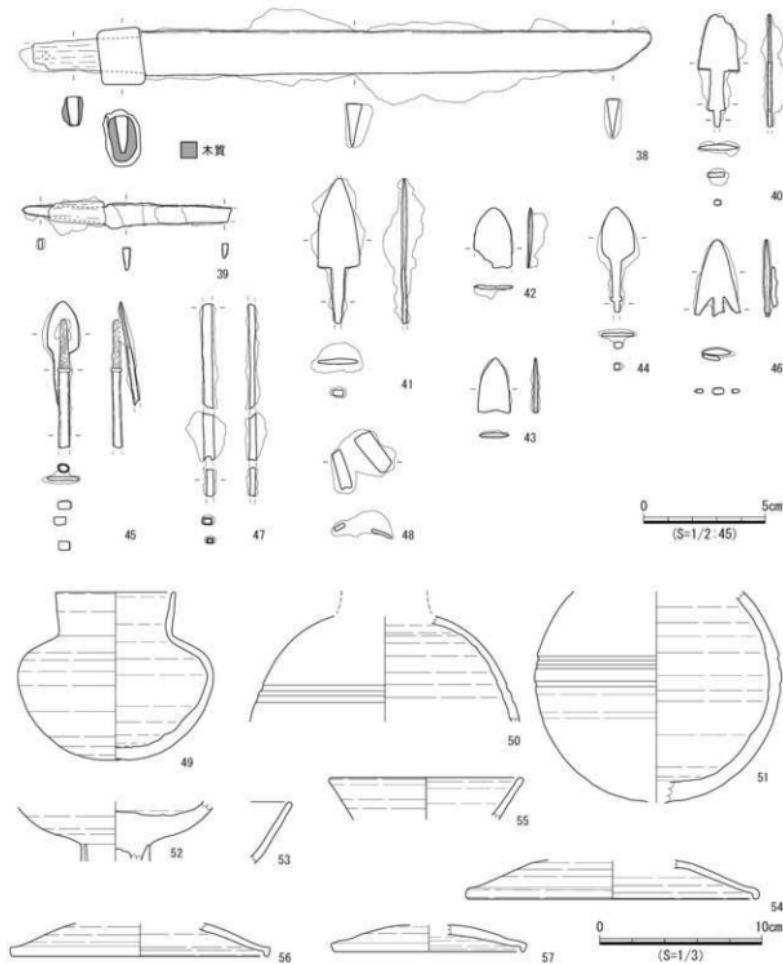


図18 上保岩坪1号古墳出土遺物実測図(2)

## 上保岩坪2号古墳(図19・20)

**検出状況** 2号古墳は、9地点で石室及び周溝を確認した。石室は、DC20・DD20・EC1・ED1グリッドで表土掘削時に人頭大の砂岩角礫を確認し、礫の周辺を精査したところ、石室掘方、側壁及び奥壁の石列を確認した。周溝はDC20・DD20・EC1・ED1グリッドのIVb層上面で検出した。

**墳丘** 墳丘は削平されており、墳丘盛土は確認できなかった。墳形は、残存する周溝の形状が、墳丘側は直線的な部分はあるものの、外側が円形であることから、不定形な円墳と考えられる。また、規模は石室中央部から周溝の内側までの内径約2.5~2.8mを測ることから、直径約5~5.6mである。

**周溝** 周溝は古墳の周囲を馬蹄形に巡り、石室入口側となる南側が途切れている。周溝の規模は石室西側(図19A-A'断面)で、幅1.54m、深さ0.24m、断面形は半円形である。石室北側(図19B-B'断面)で幅1.24m、深さ0.3m、断面形は台形である。周溝埋土は、石室西側(図19A-A'断面)で3層、石室北側(図19B-B'断面)5層に分層される。が、周溝埋土からは土師器、山茶

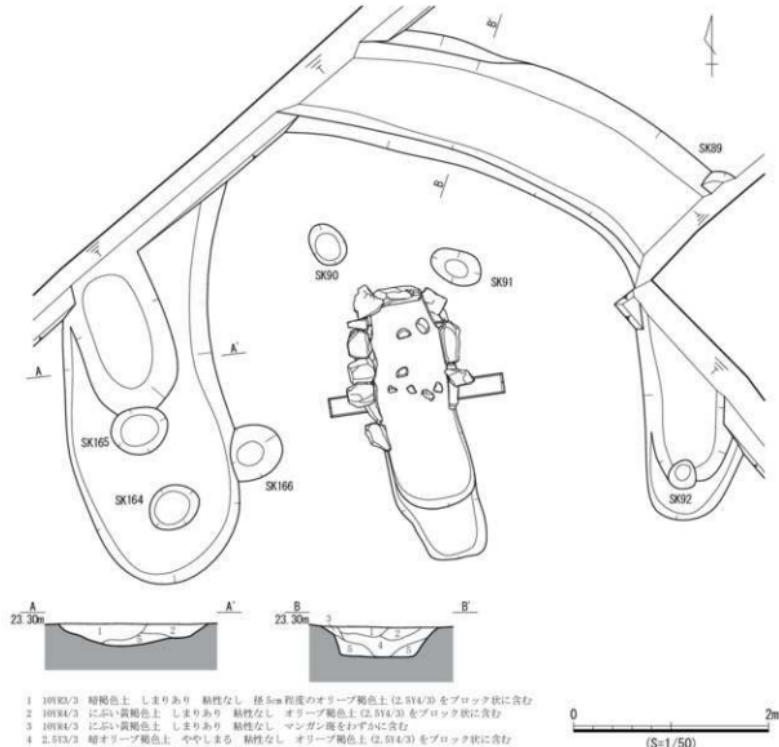
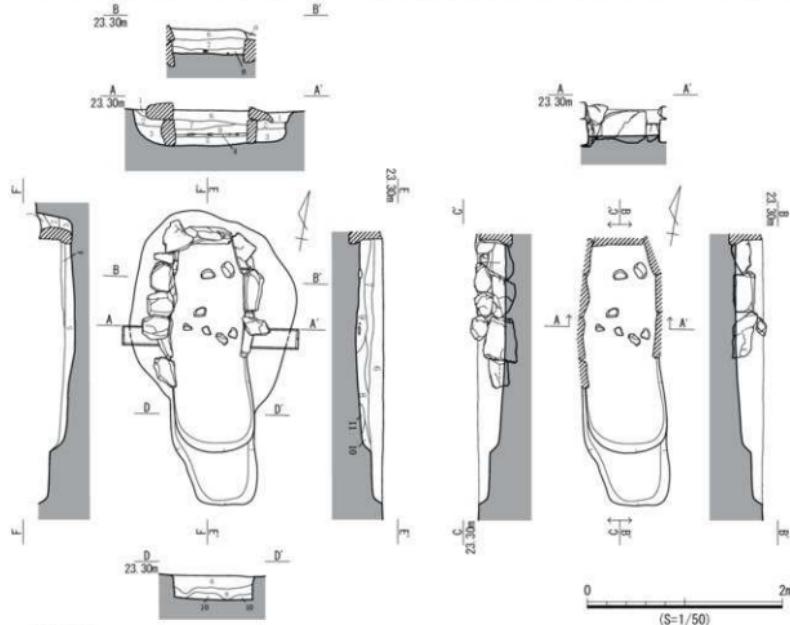


図19 上保岩坪2号古墳全体図

碗、中近世陶器の細片が出土している。周溝の埋土にはブロックが含まれるため、周溝の埋没は、人為的に一時に埋め戻されたと考えられる。

**埋葬施設(図20)** 本古墳の埋葬施設は横穴式石室である。石室入口付近の側壁の石が失われている。確認した範囲では、玄門や櫛石、框石など玄室と羨道を区別する構造は確認できない。しかし、石が失われている右側壁の入口付近の石室掘方の平面形が外側に開いているため、この部分に側壁のくびれが存在していた可能性がある。石室の主軸はN-10°-Wで、南に開口する。石室の平面形状は、胴張り形を呈する。入口付近の石材が失われているため、石室掘方のうち床面が貼られていた部分を石室の範囲とすると、全長は2.14m、幅は奥壁で0.54m、中央で0.68m、石室の残存高は、奥壁で0.28m、左側壁で最大0.38m、右側壁で最大0.32mである。側壁の積み方は、1号古墳とは異なり、基底石は奥壁と同様に石を立てて並べ、立てた石の上に長手積みと同じように石をならべている。基



#### 石室側面埋土

1. 2.5m/4/3 オリーブ褐色土 しまる 粘性なし マンガンと混じり合う 埋込め土
2. 2.5m/4/2 磷灰黄色土 しまりあり 粘性なし マンガン側が沈着 埋込め土
3. 2.5m/4/4 オリーブ褐色砂質土 しまる 粘性なし 埋込め土
4. 2.5m/3/2 磷オリーブ褐色砂質土 ややしまる 粘性なし オリーブ褐色土(2.5m/4/4)と混じり合う 犀井地土
5. 2.5m/4/2 磷灰黄色土 ややしまる 粘性なし 磷灰黄色砂質土(2.5m/5/2)をブロック状に含む 小礫をわずかに含む 床疊地土

#### 石室埋土

6. 2.5m/4/2 磷灰黄色土 しまる 粘性なし オリーブ褐色土(2.5m/4/3)をブロック状に含む マンガン側が沈着 遺物(山茶葉片)出土 流入土
7. 2.5m/3/3 磷オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし オリーブ褐色土(2.5m/4/3)と混じり合う マンган側が沈着 流入土
8. 2.5m/3/3 磷オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし オリーブ褐色土(2.5m/4/3)をブロック状に含む 流入土
9. 2.5m/3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 小礫をわずかに含む 遺物(土師器部)出土 流入土
10. 2.5m/3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり オリーブ褐色土(2.5m/4/4)をブロック状に含む 流入土
11. 2.5m/4/2 磷灰黄色土 しまる 粘性ややあり オリーブ褐色土(2.5m/4/4)と混じり合う 流入土

図20 上保岩坪2号古墳石室実測図

底石が立てられていることから、2段目の長手積みに並べられた石は裏込め土によりその重量が支えられていることから、側壁の段数はあまり多く積まれていなかったと考えられる。側壁は左右とも2段の石積みが確認できるが、右側壁の2段目は1石が残存するのみである。基底石は底部をおおむね水平にそろえて並べられている。奥壁は1段が確認でき、高さ約0.36mの石材1個を立てる。左側壁の2段目最奥の石は、奥壁の石にもまたがって置かれている。左右側壁の石が奥壁の石を挟みこんで積まれている。また、奥壁及び左側壁の奥壁付近が被熱しており、これらの石は側面だけでなく、天端にも被熱が認められる。このことから、3段目の石積みは存在せず、2段目の石の上に直接天井石が載っていた可能性もある。床面は、上層にオリーブ褐色土が混じた暗オリーブ灰色砂質土、下層に暗灰黄色砂質土をブロック状に含む暗灰黄色土の上下2層で床面を整地する。床面の上面は奥壁付近と入口付近から石室中央へ向かって緩やかに降り、石室中央が最も低く比高差は約6cmを測る。床面に礫は認められず、礫床は形成されなかつたと考えられる。石室掘方平面形は不定形な梢円形で、南側に舌状の張り出した掘り込みが確認できる。この舌状の掘り込みは石室の入口の可能性がある。また、石室掘方の中心の石材を並べた範囲と考えられる部分が更に深く長方形に掘り込まれる。また、石室掘方の規模は、全長3.0m、幅1.68m、このうち舌状部分は長さ0.56m、幅0.88mである。また、長方形の掘り込みは長さ2.3m、幅0.8mを測る。奥壁、側壁とともに基底石は掘方底面に直に据え置かれ、基底石を配置した後、床面を整地したと考えられる。掘方の底面は、床面と同様に奥壁付近と入口付近から石室中央へ向かって緩やかに降り、石室中央が最も低く比高差は約8cmを測る。右側壁が掘方上端から約0.5mひかえて石を積んでいるのに対し、奥壁及び左側壁のひかえは約0.4mとやや狭い。掘方内部の石材との間には、奥壁、側壁とも部分で3層の裏込め土が充填される。側壁においては、前述のとおり基底石が立て並べられているため、よく締まった裏込め土を充填し、2段目の石の重量を支えている。床面の直上でこぶし大の平坦な川原石が出土し、棺台の可能性がある。

**石室埋土** 石室の埋土はいずれも流入土で6層に分層される。流入土には山茶碗、土師器など中世の遺物がまばらに含まれる。

**遺物出土状況** 石室内からは、土師器、山茶碗、中近世陶器を確認したが、副葬品と考えられる遺物は確認できなかった。

**遺構の時期** 古墳の時期については、副葬品等からは判断できない。

## 2 古代（平安時代）の遺構・遺物

### (1) 土坑

#### SK160（図21）

**検出状況** 9地点DE20・EE1グリッド、IVb層上面で検出した。検出面に土器の小片が表出していった。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 3層に分層した。下層にブロック土を含むことや、遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。1層には炭化物が認められ、被熱した礫が出土した。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器皿99点が出土した。遺物は主に遺構の北側に集中して出土した。土師器皿の内面を中央に向けて並べ、その外側に逆位の土師器皿がほぼ等間隔で並んでいる。どのような意味を持つのか不明であるが意図的な配置と考えられ、祭祀に伴う可能性が考えられる。その他

にも須恵器1点、灰釉陶器3点が埋土から散在して出土したが、いずれも小片のため図示していない。

**出土遺物** 出土遺物のうち、接合して形の分かる14点を図示した。58~71はロクロ成形の土師器皿である。58~69は小皿である。60は、胴部が直線的に立ち上がる。70・71は柱状高台皿である。70は胴部が直線的に立ち上がり、口縁部端部は面取りされている。70に比べ71は胴部に丸みを帯びる。

**時期** ロクロ成形の土師器皿と共伴して灰釉陶器が出土していることから、11世紀と考えられる。

SK160

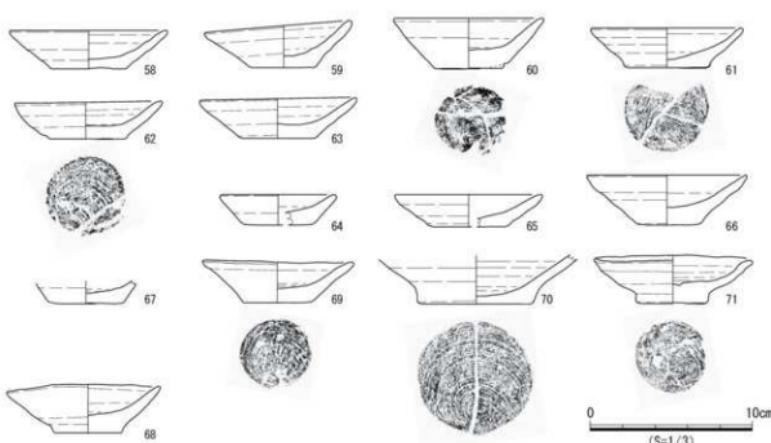
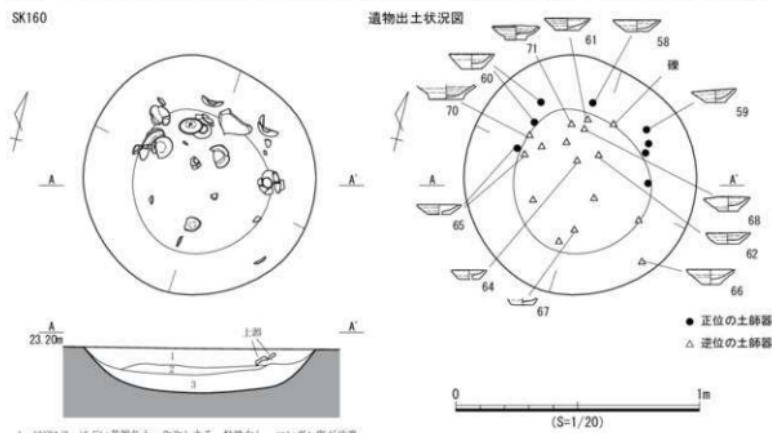


図21 SK160 遺構図・出土遺物実測図

## SK255 (図22)

検出状況 9地点 DH17・DI17 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は梢円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

埋土 単層であり、炭化物を含む。

遺物出土状況 埋土中から灰釉陶器の破片1点と被熱痕のある砂岩質の礫が底面近くで重なるように出土した。その他に灰釉陶器の小片1点が出土した。

出土遺物 出土遺物のうち、2点を図示した。72・73は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器である。72は碗であり、73は段皿である。

時期 出土した灰釉陶器から11世紀中葉と考えられる。

## SK336 (図22)

検出状況 10地点 EF10 グリッド、IV b層上面で検出した。IV b層と遺構埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。遺構の性格は不明である。

埋土 2層に分層した。南側に偏る堆積であるものの、ほぼ水平な堆積である。2層は砂質土が堆積し、1層はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 2層から灰釉陶器1点が出土した。

出土遺物 出土遺物のうち、1点を図示した。74は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の段皿である。

時期 出土した灰釉陶器から11世紀中葉と考えられる。遺構の性格は不明である。

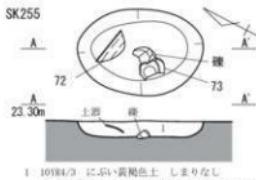
## SK342 (図22)

検出状況 10地点 EF10 グリッド、IV b層上面で検出した。IV b層と遺構埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。SK341と重複し、本遺構が古い。

規模・形状 平面形は梢円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

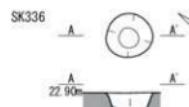
埋土 単層であり、炭化物を少量含む。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

## SK255



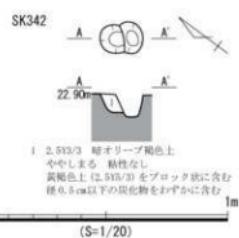
1. 10184/3 にぶい黄褐色土 しまりなし  
粘性ややあり 径0.5cm以下の炭化物を5%含む

## SK336



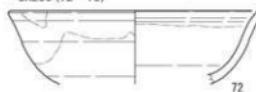
1. 2.5Y3/3 オリーブ褐色土  
ややしまる 粘性なし  
黄褐色土(2.5Y5/3)をブロック状に含む  
径0.5cm以下の炭化物をまばらに含む  
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土  
ややしまる 粘性なし

## SK342



1. 2.5Y3/3 脚オリーブ褐色土  
ややしまる 粘性なし  
黄褐色土(2.5Y5/3)をブロック状に含む  
径0.5cm以下の炭化物をわずかに含む  
0 (S=1/20) 1m

## SK255(72・73)



## SK336(74)



## SK342(75)

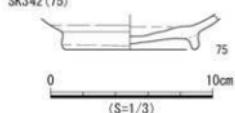


図22 SK255・SK336・SK342 遺構図・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 埋土中から灰釉陶器3点が出土した。そのうち1点は遺構中央の底面近くから碗の底部片が出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。75は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。底部内面中央が窪む。

**時期** 出土した灰釉陶器から11世紀中葉と考えられる。遺構の性格は不明である。

#### SK370（図23）

**検出状況** 10地点EH7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平な堆積である。土器片が縦位で出土したことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から灰釉陶器2点、土師器2点が散在して出土した。1層から清郷型鍋（76・77）及び灰釉陶器（78）が出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、3点を図示した。76・77は清郷型鍋である。76はB類である。口縁端部に胸部と接合させるための指オサエが見られる。78は明和27号窯式に比定した灰釉陶器である。器壁が薄く口縁部がやや外反する。

**時期** 出土した灰釉陶器から11世紀後葉と考えられる。遺構の性格は不明である。

#### （2）溝状遺構

##### SD1（図24）

**検出状況** 9地点AO12・AP12・AP13・AP14グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東西方向に延びる溝はSD2と重複しており、本遺構が古い。

**規模・形状** 東西方向に延び、東端は発掘区外にある。また、西端では屈曲し南北に延び、平面形はT字状となる。東西方向に延びる溝状遺構と南北方向に延びる溝状遺構は同じ埋土であること、幅が近似していることから同一の溝状遺構と判断した。形状から区画溝と考えられる。底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。3層は砂質土が堆積し、ほぼ水平な堆積をしている。2層は炭化物、プロック土を含む人為堆積である。1層は均質な埋土であり自然堆積と考えられ、重複するSD2の埋土である。

**遺物出土状況** 清郷型鍋1点、ロクロ成形の土師器の小皿1点、灰釉陶器1点が埋土上層から散在し

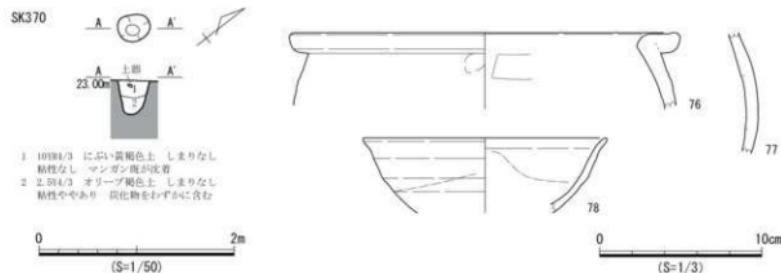


図23 SK370 遺構図・出土遺物実測図

て出土した。土器はいずれも小片のため図示していない。

**時期** 南北方向に延びる溝の延長線上に SD 3 があることから同時期と考えられ、11世紀後葉から12世紀中葉と考えられる。

### SD 3 (図 25)

**検出状況** 9地点 AR11・AR12 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭である。本遺構の北側の延長線上に SD 1 があり、また SD 4 の延長線上と直交する。

**規模・形状** 南北方向に延び、南端は発掘区外にある。底面がやや丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。中央が窪む堆積をしている。埋土は均質であり自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器2点、灰釉陶器4点が散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、2点を図示した。79は清郷型鍋C類である。80は尾張型第3型式併行の東濃型山茶碗である。胎土は均質で、口縁がやや外反する。

**時期** 出土した山茶碗から、11世紀後葉から12世紀中葉と考えられる。

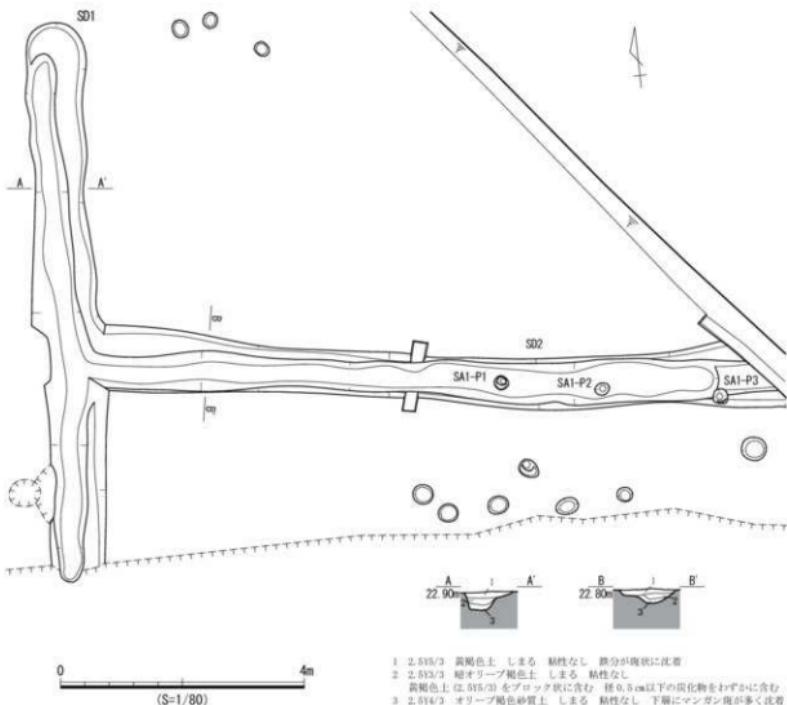


図 24 SD 1 遺構図

## SD 4 (図 25)

**検出状況** 9地点 AR11・AR12 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭である。

**規模・形状** 東西方向に延び、東端は発掘区外にある。底面が平坦で、壁面はほぼ垂直である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平な堆積をしている。埋土は均質であり自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 1層から清郷型鍋1点が出土した。土器は小片のため図示していない。

**時期** 埋土や形状が類似しているため、SD 3と同時期と考えられ、11世紀後葉から12世紀中葉と考えられる。

## 3 中世の遺構・遺物

## (1) 堀立柱建物

## SB 1 (図 26)

**検出状況** 9地点 DD19・DE18・DE19 グリッド、IV b 層上面で検出した。発掘区の北西側に続く可能性がある2間×1間の建物である。各柱穴の検出時の平面形はP1・P2・P3は明瞭に確認でき、P4はやや不明瞭であった。

**規模・形状** 長軸方位はN-88°-Eである。平面形は北西部が発掘区外にあるため全容は不明である。桁行2間(3.8m、柱間1.9m)、梁行1間(2.7m)、面積5.13 m<sup>2</sup>となる。P1・P4が発掘区際にあるため、桁行、梁行ともさらに伸びる可能性がある。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。いずれも柱痕跡と考えられる堆積を確認できなか

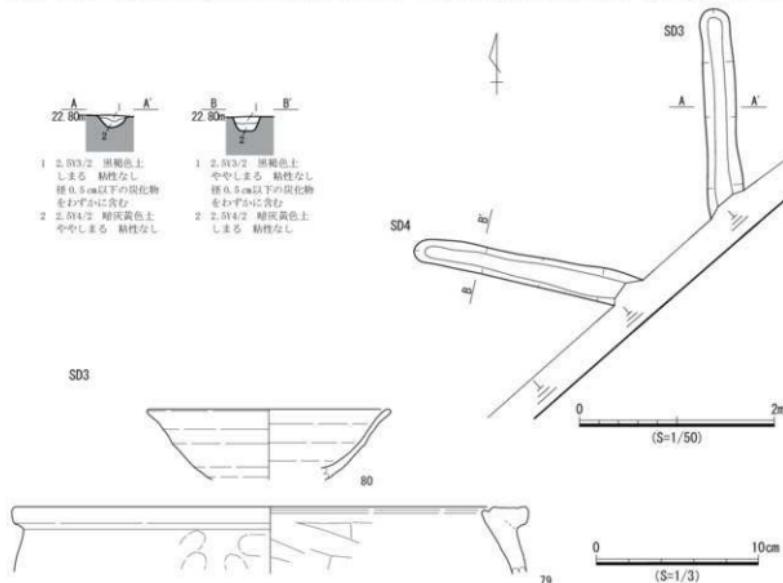


図 25 SD 3・SD 4 遺構図・出土遺物実測図

SB 1・SA 3

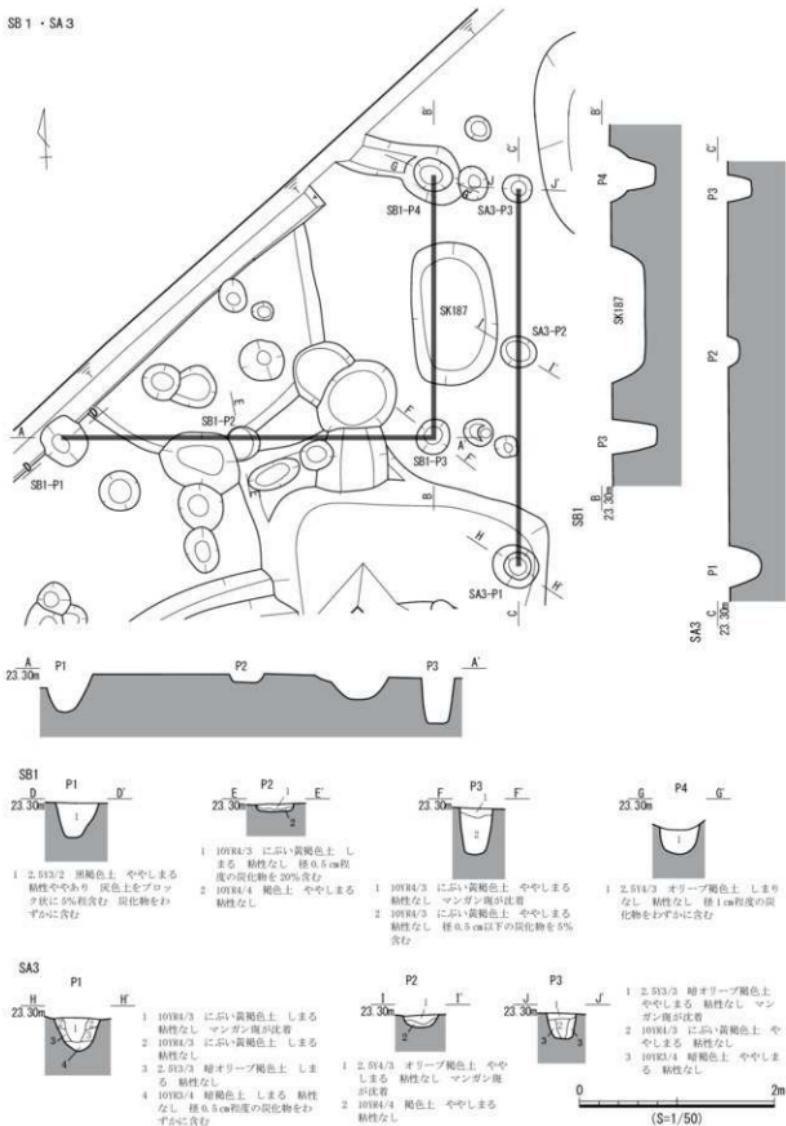


図 26 SB 1・SA 3 遺構図

った。埋土中に炭化物を含み、P3は基盤層であるIV b層のブロック土を含む。

**出土遺物** 柱穴の埋土中から土師器11点、灰釉陶器1点、山茶碗14点、青磁碗1点が出土した。土器はいずれも小片で、P1から尾張型第5型式の山茶碗、P3から尾張型第5型式の片口鉢1点、青磁碗1点が出土した。

**時期** P4はSD23と重複しており、SD23より古い。SD23から東濃型大烟大洞4号窯式に比定した山茶碗が出土しているため、13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

#### SB2(図27・28)

**検出状況** 9地点DE18・DF18グリッド、IV b層上面で検出した。発掘区の南側に続く可能性がある2間×3間の建物と考える。桁の両端にあたるP1-P4・P7-P9の柱間が短くなっている。各柱穴の平面形はP3～P5・P7・P8では明瞭に確認でき、P1・P2・P6・P9ではやや不明瞭であった。

**規模・形状** 長軸方位はN-3°-Wである。P5は柱筋から外れるため側柱建物の可能性もあるが、柱穴の平面形状や検出時の埋土がP4・P6と類似しているため、総柱建物として報告する。平面形はほぼ正方形であり、桁行3間(3.5m、柱間0.9m-1.7m-0.9m)、梁行2間(3.5m、柱間1.75m)、面積10.15m<sup>2</sup>となる。桁行の柱間は不均等である。隅柱間の柱筋からP6ではやや内側、P7ではわずかに外側に位置している。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。柱痕跡と考えられる堆積が残るのはP2・P3・P5・P9である。その他はブロック土または炭化物を含む。

**出土遺物** 柱穴の埋土中から土師器42点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗50点、陶器4点が出土した。土器はいずれも小片で、P1・P9から尾張型第5型式(81)、P7から尾張型第6型式の山茶碗、M3類(82)、M4類の土師器皿(83)、P2からロクロ成形の土師器の皿(84)、青磁碗1点の土器片、M3類の土師器皿(85)が出土した。

**時期** P7から出土した山茶碗から、13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SB3(図29)

**検出状況** 9地点DD18～DE19グリッド、IV b層上面で検出した。発掘区の南側に続く2間×1間以上の建物と考える。各柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。検出時にP1とP2にかけて柱筋が通ることを把握し、その他の柱穴も埋土や規模が類似していることから建物として報告する。

**規模・形状** 長軸方位はN-87°-Wである。南東端が発掘区外にあるため全容は分からぬが、確認した範囲で、桁行1間(3.3m)、梁行1間(2.0m)、面積6.6m<sup>2</sup>を測る。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。P1とP2の間にSK215があるが、平面形及び深さが異なるため柱穴と判断しなかった。同位置に柱穴があった可能性があるが、SK215と重複し消失したと考えられる。P3では柱痕跡を確認したが、P1・P2では明瞭な柱痕跡は確認できなかった。

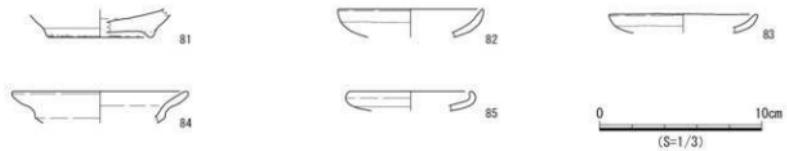


図27 SB2出土遺物実測図

SB 2

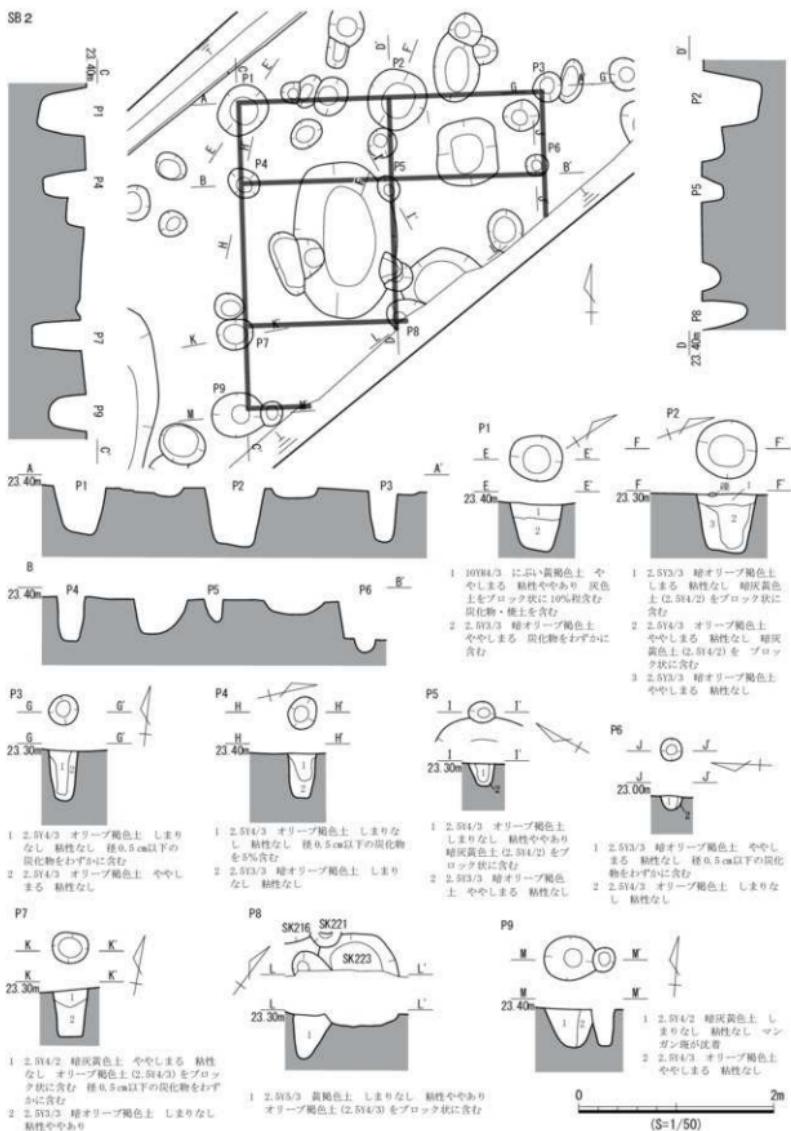


図28 SB 2 遺構図

**出土遺物** 柱穴から土師器2点、山茶碗3点が出土した。土器はいずれも小片のため図示していない。

**時期** 本遺構より古いSD22の埋土上層で尾張型第6型式の山茶碗が出土していることから、13世紀初頭から中葉と考えられる。

## (2) 檻

### SA 1 (図30)

**検出状況** 9地点AP13・AP14グリッド、IV b層上面で検出した。各柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。検出時の埋土や規模が類似しており、区画する溝SD1・SD2と長軸方位は摘要から櫛として報告する。SD2と重複し、本遺構が新しい。

**規模・形状** 3基の柱穴が直線状に並ぶ。P3は発掘区の壁沿いに位置しており、東側に延びている可能性がある。方位はN-80°-Wで、柱間はP1から1.6m-1.9mである。

**柱穴** 3基以上の柱穴から成る。柱穴の平面形は円形若しくは楕円形であり、長軸長0.25m~0.30m、深さ0.47m~0.62mである。

**出土遺物** P1・P3から山茶碗3点が出土した。尾張型第4型式の山茶碗が含まれているが、いずれも小片のため図示していない。

SB 3

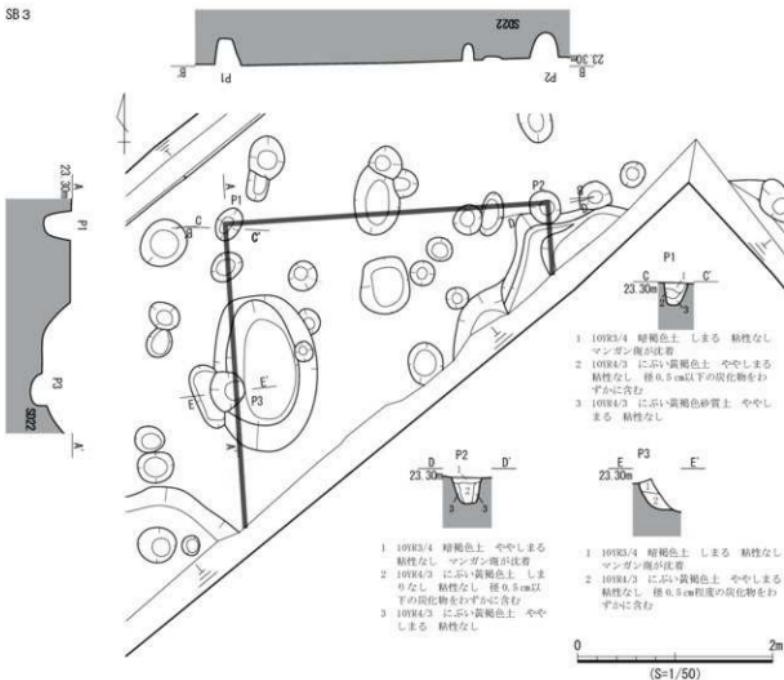
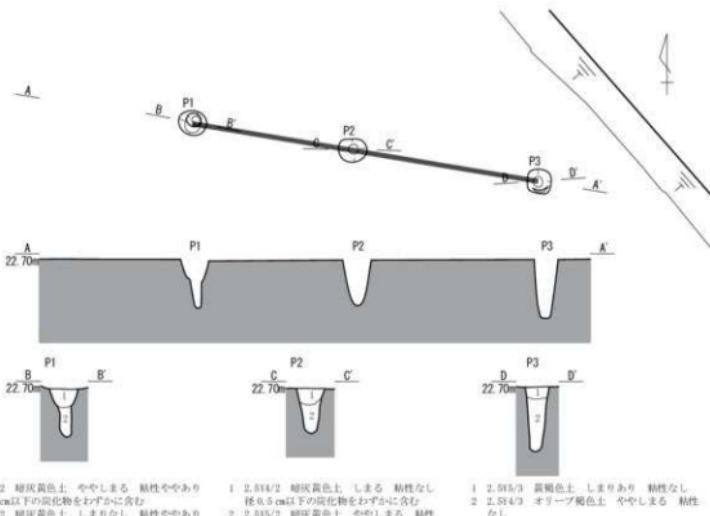


図29 SB 3遺構図

SA1



SA2

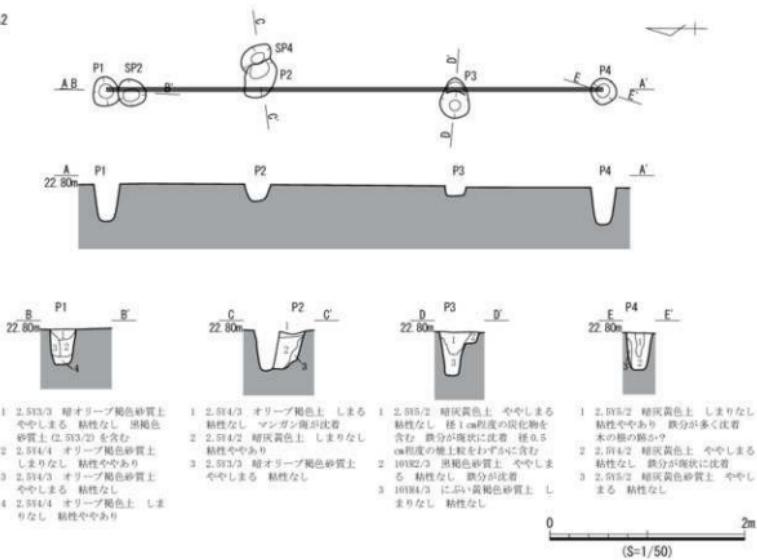


図 30 SA 1・SA 2 造構図

**時期** 尾張型第4型式の山茶碗が出土していることから、12世紀中葉から後葉と考えられる。

#### SA2（図30）

**検出状況** 9地点 AQ14・AR14 グリッド、IV b層上面で検出した。各柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。検出時の理土や規模が類似しており、直線上に並ぶ状況を確認したことから、柵として報告する。

**規模・形状** 柱間はP1から1.6m～2.0m～1.5mで、方位はN-0°～EWである。

**柱穴** 4基の柱穴から成る。柱穴の平面形はP2が不整円形で、その他は円形である。長軸長0.26m～0.41m、深さ0.33m～0.47mである。P4で柱痕跡を確認したが、その他は明瞭な柱痕跡は確認できなかった。

**出土遺物** P1とP3から灰釉陶器1点と山茶碗の小片が1点出土した。いずれも小片のため図示していない。

**時期** 出土遺物はいずれも小片であり、残存状態も悪い。山茶碗の小片が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

#### SA3（図26）

**検出状況** 9地点 DD19・DE19 グリッド、IV b層上面で検出した。各柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。方位はほぼSB1と一致するため、SA3がSB1に付随する可能性がある。

**規模・形状** 柱間はP1から2.2m～1.7mで、方位はN-3°～Eである。

**柱穴** 3基の柱穴から成る。柱穴の平面形はすべて円形である。長軸長0.30m～0.46m、深さ0.12m～0.35mである。P1・P3の土層断面で柱痕跡を確認したが、P2は、土層断面で柱痕跡は見られなかつた。

**出土遺物** P2から土師器2点、P3から土師器4点、灰釉陶器1点、山茶碗1点が出土した。いずれも小片のため図示していない。

**時期** SB1と方向がほぼ一致することから、13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

### （3）土坑

#### ①大型土坑

1節で述べた調査地点で検出した土坑の内、多くの土坑は長軸が概ね南北方向で、長軸長が1m以上の大型の土坑が重複して検出された。埋土はブロック土及び複数の遺物を含む人為堆積で、多くの土坑で炭化物、焼土、被熱痕のある礫が含まれる。SK228のように遺物出土状況が意図的なものがあり、副葬品と考えられる遺物を伴うものも見られる。石仏や五輪塔などの上部構造及び人骨は確認していないが、これらの土坑を土坑墓の可能性のあるものとして個別に説明をする。

#### SK114（図31）

**検出状況** 9地点 EF2 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD21と重複し、本遺構が新しい。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。北壁面にわずかな平坦面を有し、それより下は急角度で落ち込む。北側以外の壁面中程にも平坦面を有し、それ以前の傾斜はほぼ垂直であるが、それより下の傾斜はやや急である。

**埋土** 6層に分層した。1層・6層に炭化物が認められる。2層・4層にブロック土を含むことや、

土器の小片が多く出土したことから人為堆積と考えられる。1層のみ北側に掘方が広がることから本遺構と別の掘り込みの可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器43点、灰釉陶器1点、山茶碗74点、鉄滓1点が散在して出土した。土器の多くは小片である。1層から尾張型第6型式の山茶碗(87)や脇之島1号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土した。2・3層からは尾張型第5型式の山茶碗(86)を含む山茶碗の小片が散在して出土した。3層から碗形滓(89)が出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、4点を図示した。86は尾張型第5型式の山茶碗である。86は口縁部がやや外反する。87は尾張型第6型式の山茶碗である。88は脇之島1号窯式に比定した東濃型山茶碗の小皿である。89は鉄滓である。表面は凹凸が激しく、裏表に黒色の溶融物が付着し、灰色のシルト土を含む。

**時期** 埋土下部から尾張型第5型式の山茶碗が出土したことから、12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。しかしながら上層から出土した山茶碗から時期が下る可能性もある。

#### SK170（図31）

**検出状況** 9地点DD19・DD20グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK173・SK176・SD14など複数の遺構と重複し、重複するいすれの遺構より本遺構が新しい。

**規模・形状** 平面形は不整長方形である。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は比較的急で、断面形が丁度逆台形となる。

**埋土** 3層に分層した。いすれもしまりがあり、ほぼ水平な堆積である。2層は炭化物が認められる。埋土中に多数の遺物が含まれることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器297点、灰釉陶器4点、山茶碗124点、青磁碗1点、鉄滓2点が散在して出土した。土器の多くは小片である。

**出土遺物** 出土遺物のうち、8点を図示した。90は尾張型第4型式の山茶碗である。91・92は東濃型の大烟大洞4号窯式に比定した山茶碗である。91は胸部が内湾して丸みを帯びる。92は底部の破片で低い高台をもつ。93～96はM3類の土師器皿である。いすれも胸部内面に横ナデが見られ、口縁端部はやや丸みをもつ。97は羽釜である。

**時期** 出土した山茶碗から、13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

#### SK173（図31）

**検出状況** 9地点DD19・DE19・DD20・DE20グリッド、IV b層上面で検出した。本遺構とSK170の埋土が近似しており、重複関係は不明瞭であった。SK170より本遺構が古い。

**規模・形状** 平面形は不整橢円形である。底面はやや丸みを帯び、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 3層に分層し、中央が緩やかに凹む堆積である。IV b層ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。縁の一部には明瞭な被熱痕が認められるが、掘方や埋土に被熱痕は観察されなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から須恵器1点、灰釉陶器4点、土師器140点、山茶碗99点、白磁碗1点が散在して出土した。土器の多くは小片である。

**出土遺物** 出土遺物のうち、9点を図示した。98は尾張型第5型式、99は第6型式の山茶碗である。100は白磁碗である。101～106は土師器皿である。106はM4類で、端部が尖る。その他はM3類であり、胸部に横ナデが見られ、端部にやや丸みをもつ。

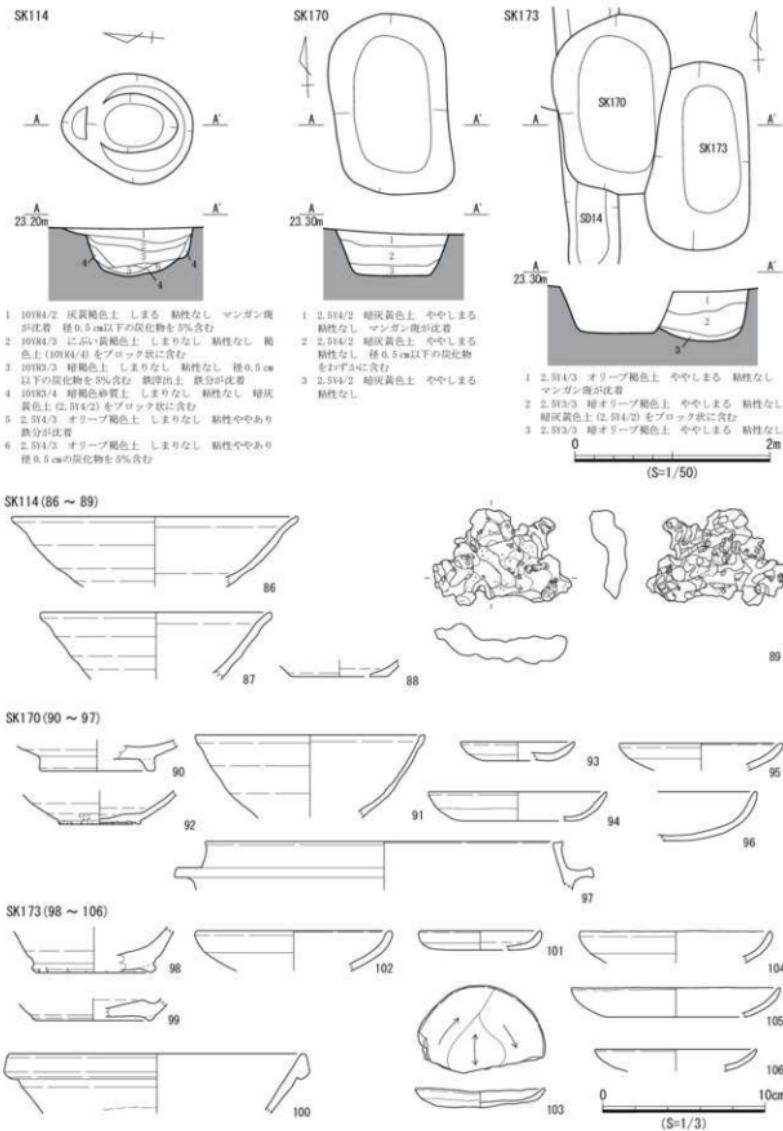


図31 SK114・SK170・SK173 造構図・出土遺物実測図

**時期** SK170と規模・形状が類似することから同時期の13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

### SK176（図32）

**検出状況** 9地点DD19グリッド、IV b層上面で検出した。SK170の掘削時に壁面に炭化物・焼土を多く含む層が見え、掘り込みを確認したため別遺構と判断した。暗オリーブ褐色土でマンガンを強く含む範囲を遺構の平面として検出した。南側がSK170と、東側がSD14と重複する。本遺構は重複するいずれの遺構より古い。

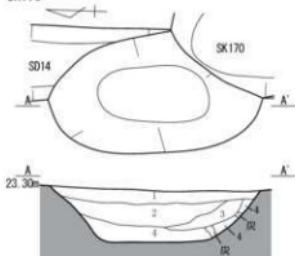
**規模・形状** 平面形は梢円形である。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。2層と4層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。2層から4層で炭化物が認められ、特に3層では炭化物が多く混じり、4層では太い筋状に炭化物が混じる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器55点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗54点が散在して出土した。多くは小片で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、7点を図示した。107～111は尾張型山茶碗である。107は第3型式の小

SK176

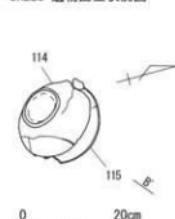


- 1 2.5V3/3 暗オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし
- 2 2.5V4/2 硫酸黄色土 しまりなし 粘性なし オリーブ褐色土 (2.5V4/3) をブロック状に含む 残0.5cm以下の炭化物を5%含む
- 3 2.5V4/2 硫酸黄色土 しまりなし 粘性なし 全体に炭化物を含む
- 4 2.5V4/2 硫酸黄色土 (2.5V4/3) をブロック状に含む

SK228



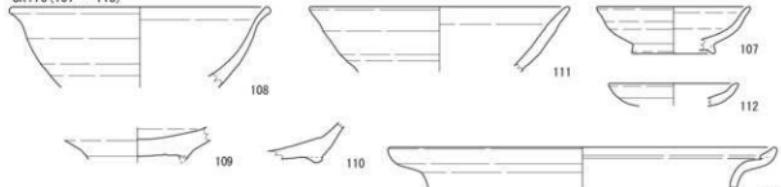
SK228 遺物出土状況図



- 1 10YE3/4 硫酸褐色土 しまる 粘性なし 炭を含む 地上をわずかに含む マンガンが斑状に分布
- 2 10YE3/2 にらべ黄褐色砂質土 ややしまる 粘性なし
- 3 10YE3/4 硫酸褐色土 しまりなし 粘性なし 残0.5cm以下の炭化物をわずかに含む

0 2m  
(S=1/50)

SK176(107～113)



SK228(114・115)



図32 SK176・SK228 遺構図・出土遺物実測図

0 10cm  
(S=1/3)

碗で、その他は第5型式の碗である。112はM2類の土師器皿である。表面は摩滅が著しく、調整は不明である。113は伊勢型鍋のD類である。

**時期** SK170と規模・形状が類似することから同時期の13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

#### SK228（図32）

**検出状況** 9地点DE17・DE18グリッド、IVb層上面で検出した。検出面に焼土・礫が表出していた。平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 北側が排水溝に掘り込まれたため、全形は不明である。底面はほぼ平坦で南側の一部で小穴状の掘り込みが見られる。南側壁面の傾斜はやや急である。

**埋土** 3層に分層した。1層・2層は、いずれもしまりがあり、層界にやや凹凸が認められるものの、ほぼ水平な堆積である。検出面に表出していた礫は、2層まで到達し、その下層から完形の山茶碗が2点出土した。3層が一段深く掘り込まれる形となっている。1層は焼土を含み、2層は周辺にない砂質土が堆積していることから人為堆積と考える。

**遺物出土状況** 土師器8点、山茶碗24点が出土した。礫の直下から出土した山茶碗2点はいずれも完形で、口を合わせ、斜位の状態で出土した。このことから人為的に埋納された可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 出土遺物のうち、2点を図示した。114は渥美・湖西型1b期の山茶碗である。灰釉が漬け掛けされ、口縁部の4か所に指頭圧痕が認められ輪花を呈す。115は尾張型第5型式の山茶碗であり、114より口径が広い。山茶碗編年では渥美・湖西型1b期は12世紀中葉で、尾張型第5型式は12世紀後葉から13世紀初頭であり、114・115には型式差がみられるが、出土状況からは一括して埋納されたと考えられる。

**時期** 出土した山茶碗から12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SK237（図33）

**検出状況** 9地点DF17・DF18グリッド、IVb層上面で検出した。SK239の完掘後に、壁面に掘方を確認したときは明瞭であったが、平面形は不明瞭であった。SK238・SK239と重複し、本遺構はSK238より新しく、SK239より古い。

**規模・形状** 平面形は隅丸方形である。底面はほぼ平坦で、南壁面の傾斜は急であり、北壁面はやや急である。

**埋土** 4層に分層した。1層・2層・4層は、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器51点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗116点、白磁碗1点が散在して出土した。土器の多くは小片である。2層の北側から完形の小碗（116）が正位で出土し、南隣に底部から口縁部まで残る山茶碗（117）が出土した。副葬品の可能性がある。

**出土遺物** 出土遺物のうち、5点を図示した。116～118は尾張型山茶碗である。116は第4型式の小碗である。117は第4型式の碗で、118は第5型式の碗である。118は底部内面の摩耗が著しい。119はM2類の土師器皿である。120は伊勢型鍋のB類からC類である。

**時期** SK238との重複関係から13世紀初頭から中葉以降と考えられる。

#### SK238（図34）

**検出状況** 9地点DF17・DF18グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK237など

の複数の遺構と重複し、本遺構はSK247より新しいが、それ以外の重複する遺構よりは古い。

**規模・形状** 複数の遺構と重複するため、全形は不明である。南側に一部、テラス状の平坦部をもち、北側には一段下がって楕円形の平坦部がある。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 5層に分層した。下層に基盤層のIV b層ブロック土を含み、埋土中に多数の遺物が含まれることや、層界に凹凸が認められることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器39点、灰釉陶器2点、山茶碗144点、青磁碗1点、白磁碗2点、砥石1点が散在して出土した。多くは小片で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、8点を図示した。121～123は尾張型山茶碗である。121・122は第6型式の碗である。122の内面は煤が付着する。123は第5型式の小皿である。124は尾張型第6型式の片口鉢である。高台の断面は逆三角形である。125は白磁碗である。126は伊勢型鍋のA類からB類である。口縁端部は折り返され肥厚する。127は砥石である。

**時期** 出土した山茶碗から13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SK239（図34）

**検出状況** 9地点DF17グリッド、IV b層上面で検出した。重複する遺構と本遺構の埋土が近似していたため、平面形は不明瞭であった。SK237・SK238と重複し、本遺構はいずれの遺構よりも新しい。

**規模・形状** 平面形は隅丸方形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。A-A'断面から2層は北から流入し、3層は南から流入したと考えられる。埋土中に多数の中世陶器が含まれることや、1層と2層にブロック土を含むことから人為堆積と考え

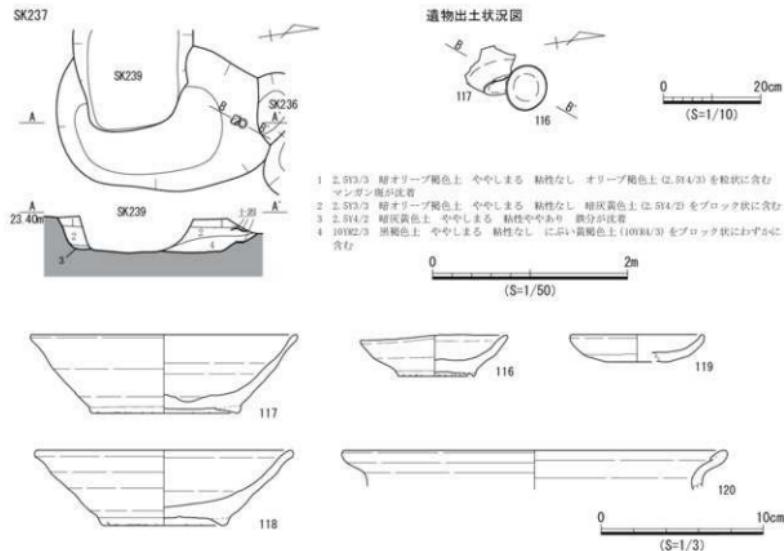


図33 SK237 遺構図・出土遺物実測図

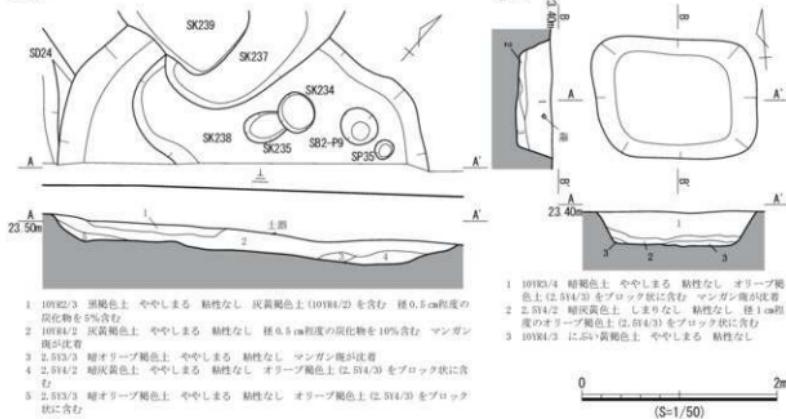
られる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 83 点、須恵器 1 点、灰釉陶器 4 点、山茶碗 110 点、青磁碗 1 点、常滑の壺 5 点が散在して出土した。多くは小片で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、5 点を図示した。128 は灰釉陶器で、虎渓山 1 号窯式から丸石 2 号窯式に比定した壺である。129 は尾張型第 5 型式の山茶碗である。130 は浅間窯下 1 号窯式に比定した東濃型山茶碗である。131 は M3 類の土師器皿で、胸部内面に横ナデがみられる。132 は M4 類の土師器で、端部が尖る。

**時期** SK238 との重複関係から 13 世紀初頭から中葉以降と考えられる。

SK238



SK238 (121 ~ 127)

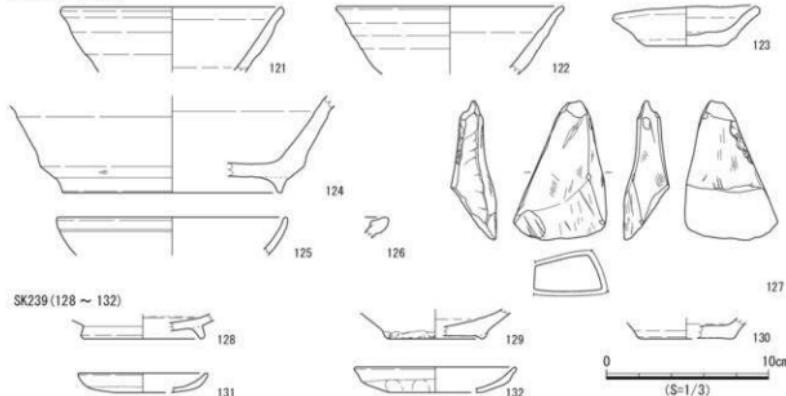


図 34 SK238・SK239 造構図・出土遺物実測図

## ②その他の土坑

9地点・10地点・19地点で検出したその他の土坑は、全体として規模が小さく浅い穴が多い。また規模が小さく、円形若しくは楕円形である程度深さのある土坑には掘立柱建物の柱穴に類似するものがある。廃棄土坑及び性格は不明であるものの遺物の出土状況等で特徴的な土坑については個別に説明をする。その他の性格不明な土坑については一覧表に掲載するのに留めた。

### SK94（図35・36）

**検出状況** 9地点 ED1 グリッド、IV b層上面で検出した。IV b層と遺構埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 単層である。IV b層のブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から山茶碗4点、土師器14点、砥石1点が散在して出土し、いずれも小片であった。北壁面沿いに正位の土師器皿の上に複数個体の土師器皿片が重なって出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、2点を図示した。133はM2類の土師器皿である。胴部と底部の境は一部横ナデが見られる。口縁端部が丁寧に成形されている。134はM3類の土師器皿である。

**時期** M3類の土師器皿が出土していることから、尾張型第6型式の山茶碗と併行する13世紀前葉以降と考えられる。遺構の性格は不明である。

### SK101（図35・36）

**検出状況** 9地点 EE1 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。いずれの土層にも炭化物が認められた。1層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 灰釉陶器1点、土師器18点、山茶碗6点が出土した。2層から逆位の山茶碗が出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、4点を図示した。135はロクロ成形の土師器の小皿である。胴部は内湾し、やや丸みを帯びる。口縁部と底部外面に煤が付着する。136は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。137は尾張型第3型式の小碗である。138は美濃須衛窯VII期に比定した山茶碗である。底部内面に墨痕が見られ、摩耗が著しい。

**時期** 美濃須衛窯VII期に比定した山茶碗が出土していることから、12世紀後葉以降と考えられる。遺構の性格は不明である。

### SK107（図35・36）

**検出状況** 9地点 EE2・EF2 グリッド、IV b層上面で検出した。本遺構上面のIII層から完形の山茶碗が出土した。なお、平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 4層に分層した。いずれもやや粘性があり、1層と4層に炭化物が認められた。1層の埋土には焼土塊を含むが、掘方に被熱痕は観察されなかった。土師器皿(144)、砥石など多くの遺物が含まれることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器72点が出土し、1層から煤のついた土師器皿が正位で出土した。そ

の他に須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗45点が埋土中から散在して出土した。小土坑であるものの、他遺構と比較して出土遺物が多いことから廃棄土坑の可能性がある。

**出土遺物** 出土遺物のうち、8点を図示した。139・140はロクロ成形の土師器の柱状高台皿である。いずれも底部が突出し、底部外面周縁の設置幅が広い。表面の摩滅が著しく、調整等は不明である。141は土師器の甕である。口縁部は外反し、端部は上方へ摘み上げられる。口縁部から頸部内面にハケメ調整を施す。142は尾張型第4型式の山茶碗である。143は尾張型第5型式の山茶碗である。144はM2類の土師器皿である。内外面には指ナデ調整を行い、端部は丸みを帯びる。145・146は磁石である。

**時期** 出土した山茶碗から、12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SK113 (図35・36)

**検出状況** 9地点EF2グリッド、SD17の掘方底面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は緩やかであり、底面は丸みを帯びる。

**埋土** 2層に分層し、中央が窪む堆積である。1層は焼土塊・炭化物を含むことや遺物の出土状況よ

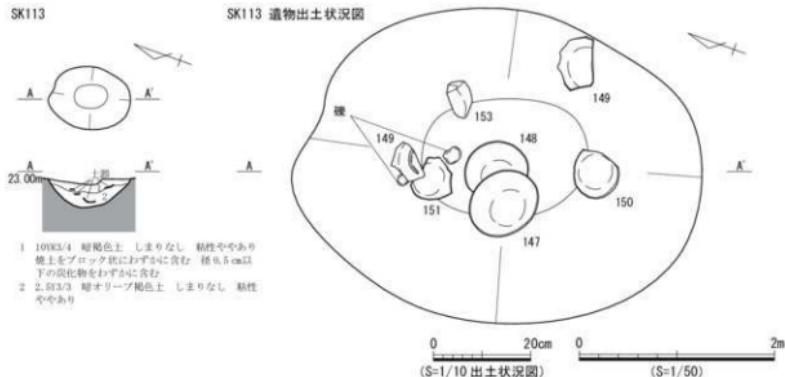
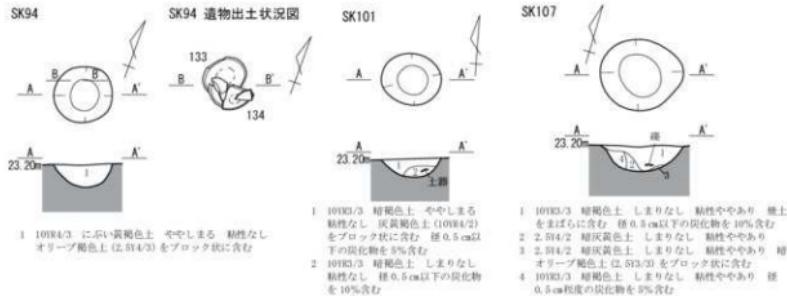


図35 SK94・SK101・SK107・SK113遺構図

り、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から山茶碗21点が出土し、底面中央で正位の完形の山茶碗が2枚重なるように出土した。意図的な配置が認められ、祭祀に伴う可能性がある。その他に山茶碗が3点、土師器などの土器の小片及び砥石2点が埋土中から散在して出土した。

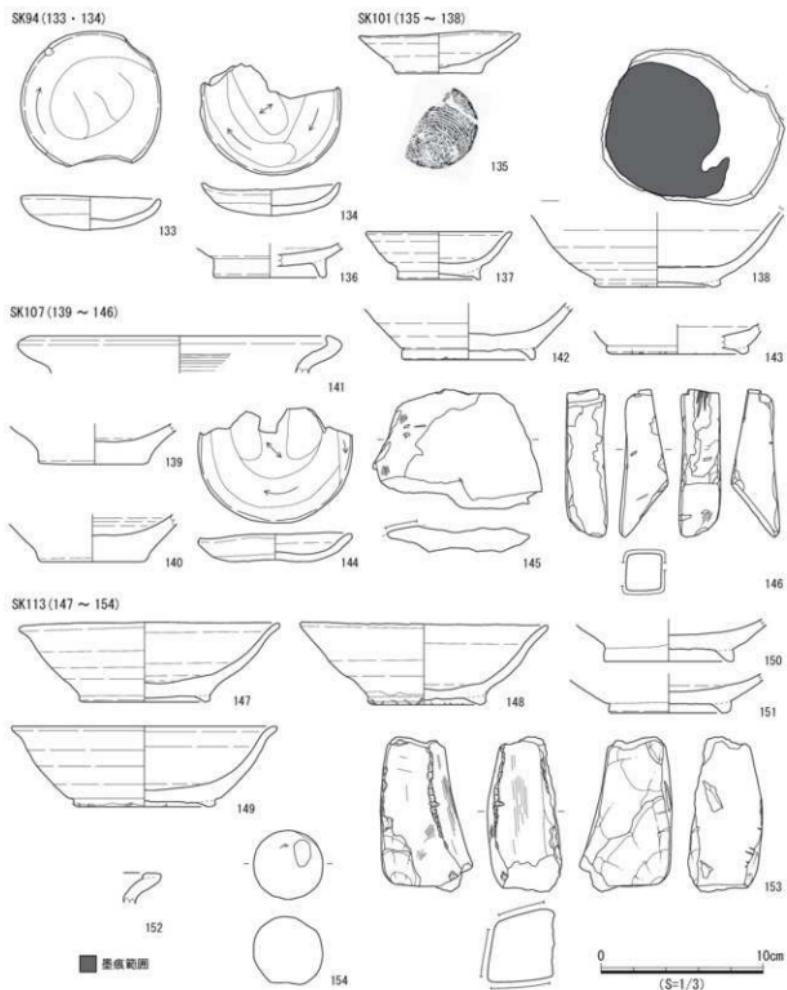


図36 SK94・SK101・SK107・SK113出土遺物実測図

**出土遺物** 出土遺物のうち、7点を図示した。147～149は尾張型第5型式の山茶碗である。147は胴部に丸みをもち、口縁部はやや外反する。口縁部の一部に煤が付着する。148は147より広い範囲で口縁部の一部に煤が付着する。いずれも内面の摩耗が著しい。150・151は美濃須衛窯Ⅶ期に比定した山茶碗である。胎土が均質で、チャートが顕著に見られる。150は底部の内外面に墨痕が見られる。152はA類からB類の伊勢型鍋である。153・154は砥石である。

**時期** 出土した山茶碗から12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SK158（図37・38）

**検出状況** 9地点EE1グリッド、IVb層上面で検出した。検出時には、埋土に多量の炭化物が混じり、遺物の小片が複数確認できた。平面形は明瞭であった。SK155と重複しており、本遺構が新しい。

**規模・形状** 平面形は不整規円形である。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 5層に分層した。いずれもしまりがあり、ほぼ水平な堆積である。2層のみ、3層を掘り込むように半円形に堆積している。2層から4層に炭化物が認められたが、特に2層に多く含まれていた。なお、検出時に確認された炭化物は1層では確認できなかった。埋土中に被熱した礫が見られ、ブロック土を含むことから人為堆積であると考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器361点、灰釉陶器6点、山茶碗26点、白磁碗3点、中世陶器1点、鉄滓2点が散在して出土した。土坑の南東部の5層から内面に炭化物が付着した山茶碗と伊勢型鍋の口縁部が出土した。廐棄土坑と考えられる。

**出土遺物** 出土遺物のうち10点を図示した。155～160はロクロ成形の土師器の柱状高台皿である。156は底部外面に明瞭な回転糸切痕が見られる。その他は表面の摩滅が著しく、調整等は不明である。161はロクロ成形の土師器の脚高高台皿の脚部である。脚部外面にナデ調整が見られ、下方はやや開く。裾端部は平坦面を有する。162は東濃型の谷迫間2号窯式に比定した山茶碗である。内面に炭化物の付着が著しい。163は白磁碗である。164は伊勢型鍋B類である。

**時期** 出土した山茶碗から、12世紀中葉から後葉と考えられる。

#### SK189（図37・38）

**検出状況** 9地点DE19グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SA4-P3・SB1-P2・SK191・SK206などの複数の遺構と重複している。本遺構は報告する遺構の中でSK193・SD22より新しく、SB1-P2・SA3-P3・SK206より古い。

**規模・形状** 南側は発掘区外に広がり、複数の遺構と重複するため全形は不明である。北西側はテラス状になり、北側にせり出した箇所は別遺構の掘り込みの可能性がある。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。1層・2層はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。1層西側で炭化物・焼土を多く含み、3層でも炭化物が認められた。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器62点、須恵器1点、灰釉陶器14点、山茶碗184点が散在して出土した。土器の多くは小片であり、西側に集中して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、9点を図示した。165は明和27号窯式に比定した灰釉陶器の皿である。166は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の皿である。167～170は尾張型山茶碗である。167は第4型式で168は第5型式の小皿である。169・170は第6型式の山茶碗で、胴部が直線的に立ち上がる。外

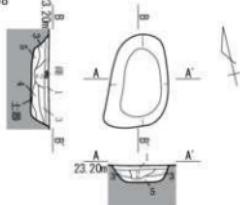
面に煤が付着する。171はM3類の土器器皿である。172・173は伊勢型鍋である。172はA類からB類、173はD類で、口縁端部は薄く、幅広である。

**時期** 主軸が揃うことからSB1の付属施設の可能性がある。出土遺物の多さから廃棄土坑の可能性がある。遺構との重複関係や出土遺物から13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

### SK193(図37・38)

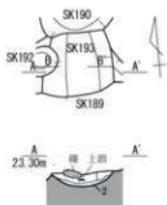
**検出状況** 9地点DE19グリッド、SK185の底面で検出した。平面形は明瞭であった。検出時は、山茶碗の底

SK158

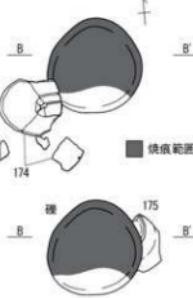


- 1 10Y4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし マンガシ鏡が沈着
- 2 10Y4/3 姫焼色土 ややしまる 粘性なし 徑 0.5cm 程度の礎化物を 10%含む
- 3 10Y4/3 にぶい黄褐色土 ややしまる 粘性なし オーリーブ褐色土 (2.514/3) をブロック状に含む 徑 0.5cm 程度の礎化物を 5%含む
- 4 10Y4/3 姫焼色土 ややしまる 粘性なし 径 0.5cm 以下の礎化物を 5%含む
- 5 10Y4/3 にぶい黄褐色土 ややしまる 粘性なし

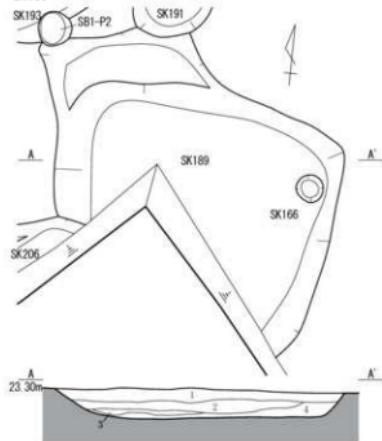
SK193



SK193 遺物出土状況図

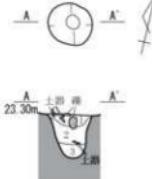


SK189



- 1 2.513/3 姫オーリーブ褐色土 しまる 粘性なし オーリーブ褐色土 (2.514/3) をブロック状に含む マンガン斑が沈着
- 2 2.513/3 姫オーリーブ褐色土 しまる 粘性なし オーリーブ褐色土 (2.514/3) をブロック状に含む マンガン斑が沈着
- 3 10Y4/3 姫焼色土 しまりなし 粘性ややあり 徑 0.5cm以下の礎化物を 5%含む
- 4 2.514/3 オーリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし

SK197



SK197 遺物出土状況図

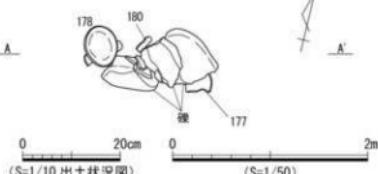


図37 SK158・SK189・SK193・SK197 遺構図

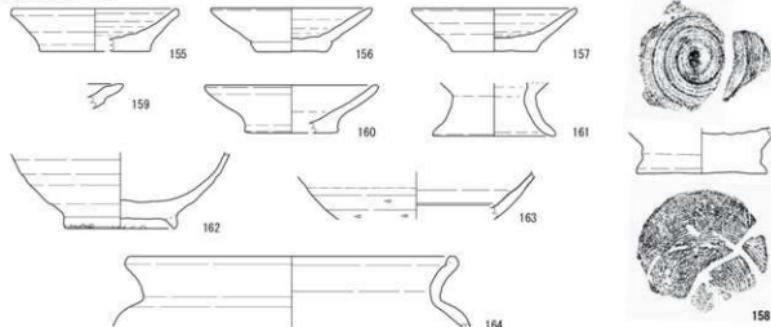
部及び被熱痕の見られる繩が表示していた。複数の遺構と重複し、それらの遺構より本遺構が古い。

**規模・形状** SK191などの複数の遺構と重複しているため全形は不明である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

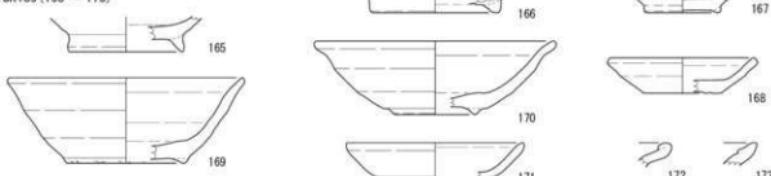
**埋土** 2層に分層した。やや中央が壅む堆積をしており、1層はブロック土を含む人為堆積である。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器4点、灰釉陶器1点、山茶碗22点が散在して出土した。被熱した繩の上に正位の山茶碗が出土し、繩の下に逆位の山茶碗が出土した。土器や繩は、出土状況から廃棄さ

SK158(155～164)



SK189(165～173)



SK193(174～176)



SK197(177～181)



図38 SK158・SK189・SK193・SK197 出土遺物実測図

れた可能性がある。

**出土遺物** 出土遺物のうち、3点を図示した。174～176は尾張型第6型式の山茶碗である。174・175は碗である。175は口縁部がやや外反する。内面に墨痕がみられる。176は小皿である。口縁外面に煤が付着する。

**時期** 出土した山茶碗から、13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SK197（図37・38）

**検出状況** 9地点 DD19・DE19グリッド、SK191の底面で検出した。検出時に完形の小皿や礫が表出しておらず、平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 3層に分層した。2層にブロック土を含み、複数の遺物や礫を含むことから人為堆積と考えられる。一部の礫の表面に被熱痕が見られたが、掘方や埋土に被熱痕は観察されなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器39点、灰釉陶器1点、山茶碗13点が散在して出土した。礫と遺物が混在しており、廃棄された可能性が高い。

**出土遺物** 出土遺物のうち、5点を図示した。177～179は尾張型第5型式の山茶碗である。177は碗で、178・179は小皿である。180・181は伊勢型鍋である。180はA類からB類で、外面に煤が付着する。181はD類である。

**時期** 出土した山茶碗から、12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### （4）溝状遺構

##### SD2（図39）

**検出状況** 9地点 A010・AP10・A011・AP11・A012・AP12・AP13・AP14グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SA1と重複し、本遺構が古い。

**規模・形状** 東西方向の溝状遺構が西端で北に屈曲している。北端と東端は発掘区外にある。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。西端で北に屈曲し、団うような形状をしていることから区画溝と考えられる。区画溝と考えられるSD1と東側が完全に重複していることから、SD1を拡張したものと考えられる。

**埋土** 単層である。1層は均質な埋土であることから自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器1点、山茶碗1点が散在して出土した。土器はいずれも小片のため図示していない。

**時期** SA1と重複していることから、12世紀中葉から12世紀後葉以前に埋没したと考えられる。

##### SD19（図39・40）

**検出状況** 9地点 DF20・DG20・EF1・EG1・EF2・EG2グリッド、IVb層上面で検出した。IVb層と遺構埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 東西方向に伸び、東端は南側へ湾曲し、発掘区外にある。底面は平坦で、北側に向かって下降している。南壁面は、幅の広い平坦面を有し、それより下は急角度で落ち込む。底面標高は東側が低く、西側が高い。

**埋土** 8層に分層した。8層は黄褐色土砂質土で北側からの流入堆積である。6層は半円状の産みに堆積し、4層・5層は北側から流入したと考えられる。2層はブロック土を含み、いずれの土層にも

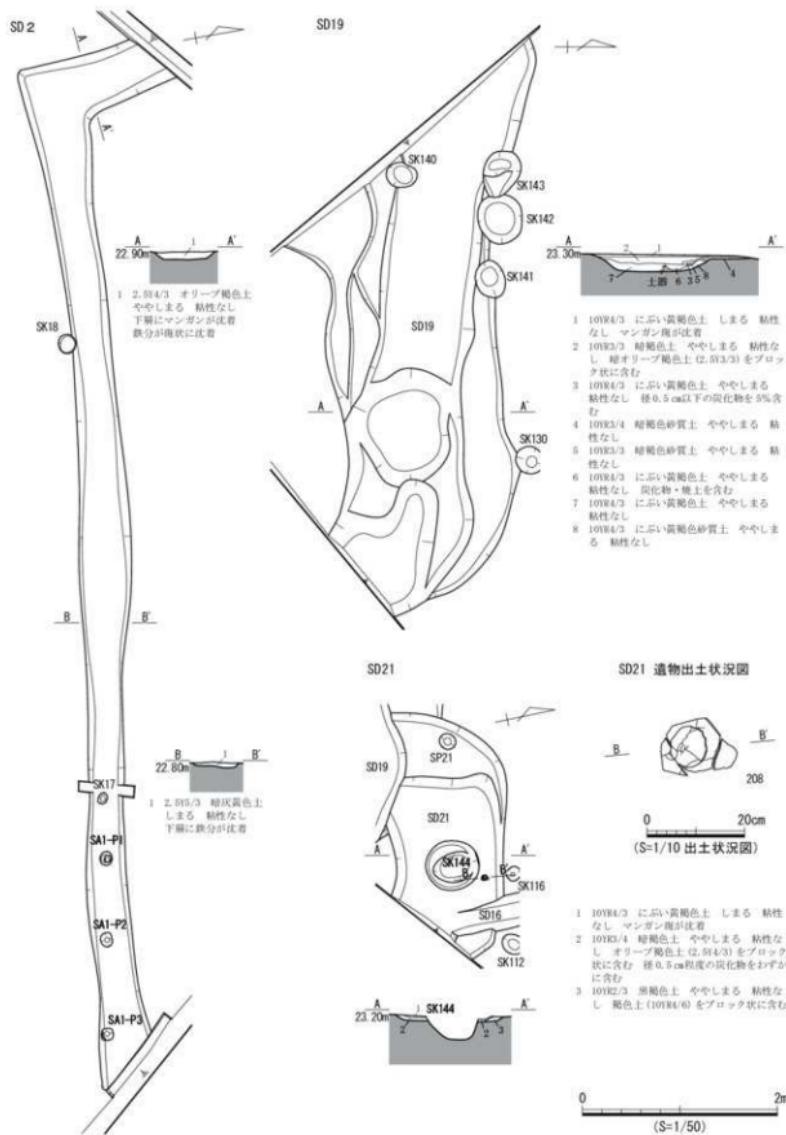


図 39 SD 2・SD19・SD21 遺構図

複数の遺物が出土していることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 93 点、須恵器 2 点、灰釉陶器 16 点、山茶碗 283 点、白磁 2 点、古漸戸 2 点、刀子 1 点が散在して出土した。最も出土点数の多い山茶碗は、6 層・7 層で完形に近い皿が出土したが、土器の多くは小片である。

**出土遺物** 出土遺物のうち、26 点を図示した。182 は土師器の壺の底部である。183 は美濃須衛窯の IV 期第 3 小期に比定した須恵器の壺蓋である。184~188 は灰釉陶器である。184 は丸石 2 号窯式に、185 は百代寺窯式に比定した碗である。186 は明和 27 号窯式に、187 は丸石 2 号窯式に比定した皿である。188 は水瓶である。産地等は不明である。189 は渥美・湖西型 2 b 期の山茶碗である。190~198 は尾張型山茶碗である。190~195 は碗である。190 は第 3 型式で、191~194 は第 6 型式の碗である。196~198 は第 5 型式の小皿である。199 は尾張型第 3 型式に比定した東濃型山茶碗である。200 は美濃須衛窯Ⅷ 期に比定した山茶碗である。201 は白磁碗である。202・203 は M 2 類の土師器皿である。202 は胴部に横ナデが見られ、口縁端部が丁寧に成形されている。204・205 は伊勢型鍋の A 類から B 類である。206 は形状から刀子と思われる。刃部端部は欠損している。

**時期** 出土した山茶碗から 13 世紀初頭から中葉以降に埋没したと考えられる。

#### SD21 (図 39・40)

**検出状況** 9 地点 EF2・EF3 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は、西側は明瞭に確認できたものの、東側はやや不明瞭であった。なお、東西端が発掘区外に延びる可能性が高いことから溝状遺構と判断した。

**規模・形状** 東西方向に延び、南方向に大きく湾曲する。底面は平坦である。壁面の傾斜は緩やかである。底面標高は東側が低く、西側が低い。

**埋土** 3 層に分層した。いずれの土層にもブロック土を多く含んでおり、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 134 点、須恵器 2 点、灰釉陶器 5 点、山茶碗 77 点が散在して出土した。中央北寄りで土師器の壺(208)の底部が正位で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、7 点を図示した。207 は S 字甕である。208 は土師器の壺である。調整は不明である。209~213 は尾張型山茶碗である。209~212 は碗である。209 は第 3 型式から第 4 型式、210 は第 4 型式、211・212 は第 5 型式である。211~212 は底部内面の摩耗が著しい。213 は第 3 型式の小碗である。

**時期** 出土した山茶碗から 12 世紀後葉から 13 世紀初頭以降に埋没したと考えられる。

#### SD22 (図 41・42)

**検出状況** 9 地点 DE19・DF19・DE20・DF20・DE18・DF18 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は、東側が明瞭に確認できたものの、西側は遺構の重複が激しく不明瞭であった。

**規模・形状** 南北方向に延び、西側に弧を描くように湾曲している。南北端は発掘区外にある。底面は平坦である。壁面の傾斜は急であり、底面標高はやや北側が低い。

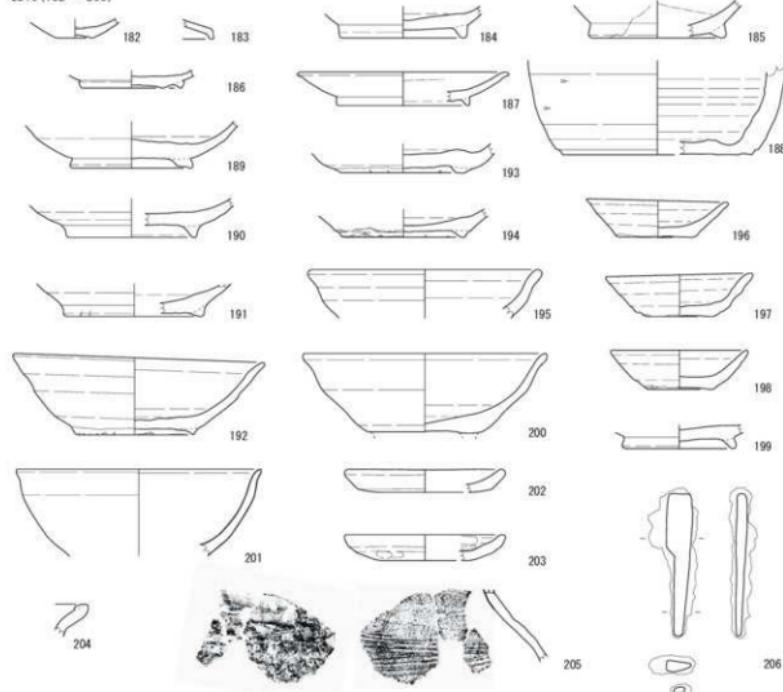
**埋土** 6 層に分層した。3 層・4 層は西側及び東側から流入したと考えられ、壁面の崩落土と思われる。1 層は暗褐色土でブロック土を多く含んでいることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 70 点、須恵器 3 点、灰釉陶器 3 点、山茶碗 178 点、青磁 1 点、白磁 4 点、鉄鎌 1 点、釘 1 点、器種の不明な金属製品 1 点、鉄滓 1 点が散在して出土した。最も多く出土

した山茶碗は小片が多く、北西側から多く出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、13点を図示した。214はS字甕の口縁部である。215はロクロ成形の土師器の柱状高台皿である。器壁は厚い。216は百代寺窯式に比定した灰釉陶器である。胴部上半まで漬け掛けされる。217～220は尾張型山茶碗である。217～219は碗である。217が第4型式、218は第5型式、219は第6型式である。220は第5型式の小皿である。221は青磁碗、222は白磁碗である。223は伊勢型鍋のA類かB類である。224は鉄鏃である。茎部のみ残存している。225・226は釘か。

SD19(182～206)



SD21(207～213)

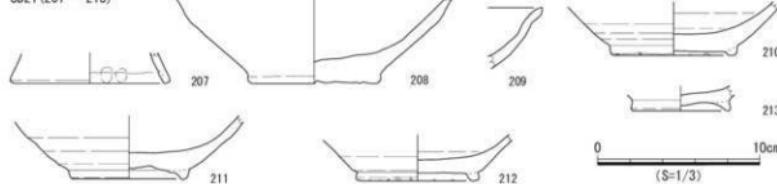


図40 SD19・SD21出土遺物実測図

断面は方形である。

**時期** 本遺構より新しいSK185は13世紀中葉と考えられるため、出土遺物の時期からも、13世紀初頭から中葉以前に埋没したと考えられる。

#### SD23（図41・42）

**検出状況** 9地点DD19グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 南東から北西方向に延びる。断面形は半円形で、底面は平坦である。底面標高はやや東側が低い。

**埋土** 2層に分層した。層界に凹凸は認められるものの、水平な堆積をしている。1層から多くの遺物が出土していることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器24点、灰釉陶器1点、山茶碗11点、古瀬戸1点が散在して出土した。西端でまとまって土師器皿等の遺物が出土した。土師器皿（232）と完形の山茶碗（230）が正位で出土し、その西隣に山茶碗（229）が逆位で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、7点を図示した。227は虎渓山1号窯式に比定した灰釉陶器である。228～230は東濃型山茶碗である。228は尾張型第3型式併行、229・230は大畑大洞4号窯式に比定した。228は小碗で、229は碗で、230は小皿である。229は底部内面に静止指ナデが見られる。230は底部外面に墨痕が見られる。231・232は土師器皿である。231はM3類で、胴部と底部の境に一部横ナデが見られ、端部に丸みをもつ。232はM4類である。233は古瀬戸中II期の底卸目皿である。口縁部が外反し、口縁部と胴部の境に回線が巡る。内外面に施釉する。

**時期** 埋土上層から大畑大洞4号窯式に比定した東濃型山茶碗が複数出土していることから、13世紀末から14世紀後葉以降に埋没したと考えられる。

#### SD24（図41・42）

**検出状況** 9地点DF16・DF17グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD25と重複しており、本遺構が新しい。平面形が長細く、南北端が発掘区外に延びる可能性が高いことから溝状遺構と判断した。

**規模・形状** 南北方向に延び、南北端は発掘区外にある。底面は平坦である。壁面の傾斜は緩やかで、底面の標高は南側が高く、北側が低い。

**埋土** 2層に分層した。2層が遺構の中央に堆積し、1層がその上に厚く堆積している。自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器49点、須恵器3点、灰釉陶器1点、山茶碗105点、青磁1点が1層から散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、7点を図示した。234・235は須恵器の横瓶である。236は尾張型第6型式の山茶碗である。237は美濃須衛窯Ⅷ期に比定した山茶碗である。238はM3類の土師器皿で、内面の胴部と底部の境に、一部横ナデが見られる。239はM4類の土師器皿である。240は砥石である。

**時期** SD25と重複していることや出土遺物の時期から、13世紀初頭から中葉以降と考えられる。

#### SD25（図41・42）

**検出状況** 9地点DF16・DF17・DG17グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は東側がSD24と重複しているため、やや不明瞭であった。本遺構がSD24より古い。平面形が長細く、南北端が発掘区外に

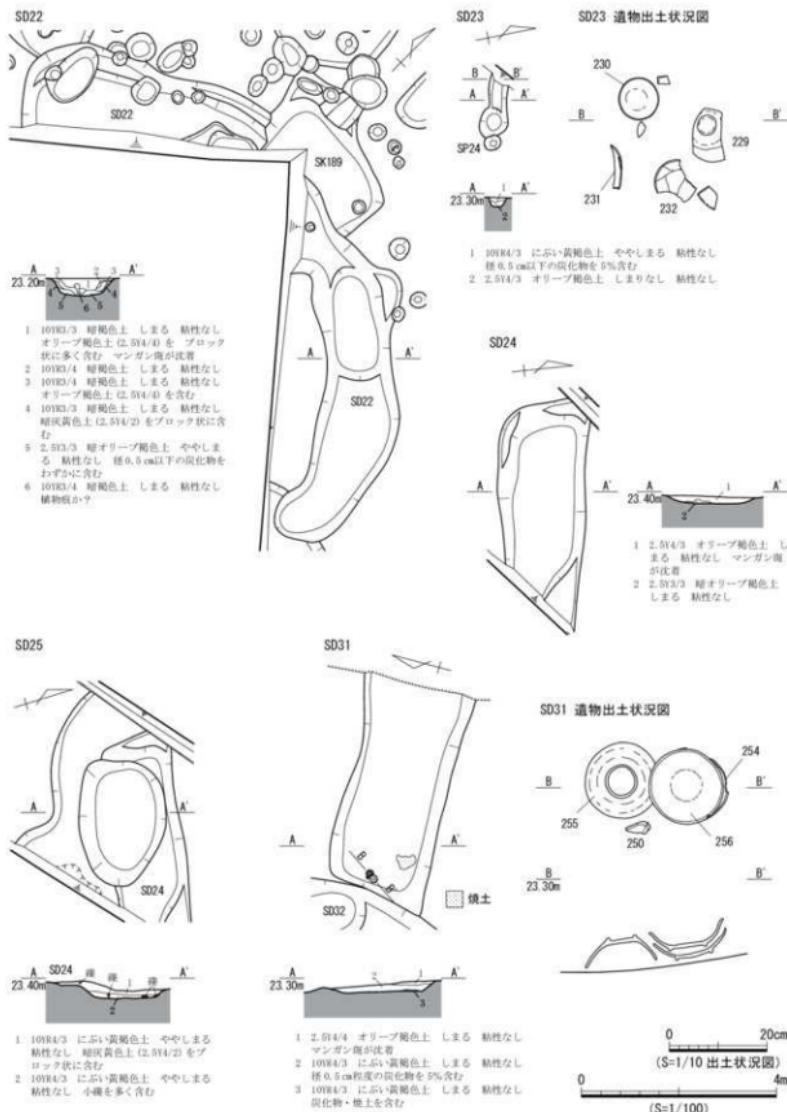
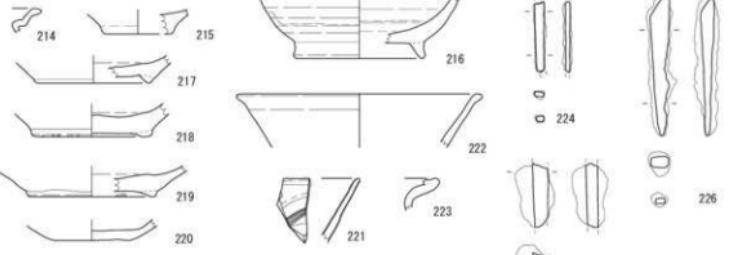


図 41 SD22～SD25・SD31 遺構図

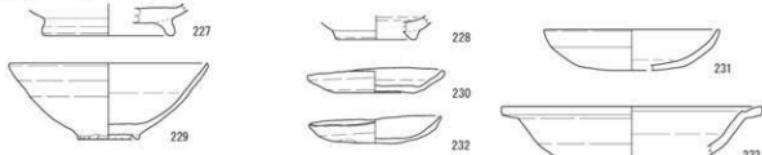
延びる可能性が高いことから溝状遺構と判断した。

**規模・形状** 南北方向に伸び、南北端は発掘区外にある。底面は平坦で、一部凹凸が認められる。西壁面はやや幅の広い平坦面を有し、それより下は急角度で落ち込む。東壁面にも幅の狭い平坦面が認められるが、それより下の壁面の傾斜は急である。中央より東側には長楕円形の掘り込みが見られる。

SD22(214～226)



SD23(227～233)



SD24(234～240)



SD25(241～249)

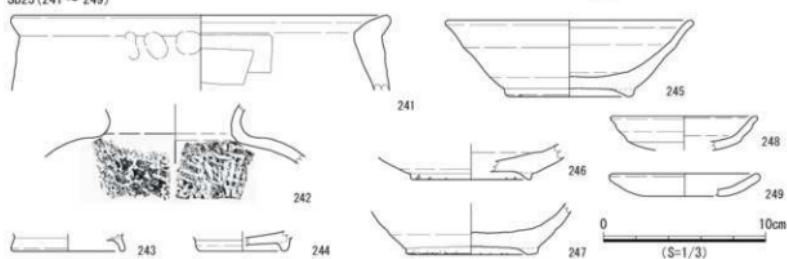


図42 SD22～SD25 出土遺物実測図

**埋土** 2層に分層した。1層と2層は水平な堆積である。ブロック土や礫が多く含まれることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器30点、須恵器2点、灰釉陶器2点、山茶碗63点が散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、9点を図示した。241は清郷型鍋C類である。242は須恵器横瓶である。243・244は灰釉陶器の皿である。243は虎渓山1号窯式から丸石2号窯式に、244は丸石2号窯式に比定した。245・246は尾張型山茶碗である。245は尾張型第5型式、246は第6型式である。247は谷迫間1号窯式に比定した東濃型山茶碗である。248・249はM2類の土師器皿である。いずれも表面の摩滅が著しく調整は不明である。

**時期** 出土した山茶碗から、13世紀初頭から中葉以降に埋没したと考えられる。

#### SD31(図41・43)

**検出状況** 9地点DI16・DJ16・DI17・DJ17グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は、埋土が基盤層と酷似し、西側の掘方がSD32と重複しているため不明瞭であった。トレンチで断面を確認し、炭化物を含み、硬くしまっている範囲を平面とした。

**規模・形状** 東西方向に延び、東端は攪乱と重複している。底面は平坦である。底面標高は東側が高く、西側が低い。

**埋土** 3層に分層した。2層は全体的に炭化物を含むにぶい黄褐色土であり、自然堆積と考えられる。3層は、南西端で炭化物及び焼土が確認されており、それに伴う堆積である。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器21点、灰釉陶器9点、山茶碗30点が2層より散在して出土した。SD32との境にあたる西端において2層を10cmほど下げたところで、完形の山茶碗が3点出土した。2個体(256・254)が正位で重なり、その横に1点(255)が逆位で出土した。意図的な配置が認められ、祭祀に伴う可能性が考えられる。

**出土遺物** 出土遺物のうち、7点を図示した。250～252は灰釉陶器の碗である。250・251は明和27号窯式に比定した碗である。ハの字状に高台が付く。253は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の皿である。254～256は山茶碗である。254は尾張型第5型式で胴部は丸みを帯び、底部内面は摩耗が著しい。口縁端部に一部煤が付着する。255・256は東濃型山茶碗である。255の尾張型第3型式併行で、内面は使用による摩減が著しく、口縁部には半月状の暗色部が見られる。256は谷迫間1号窯式に比

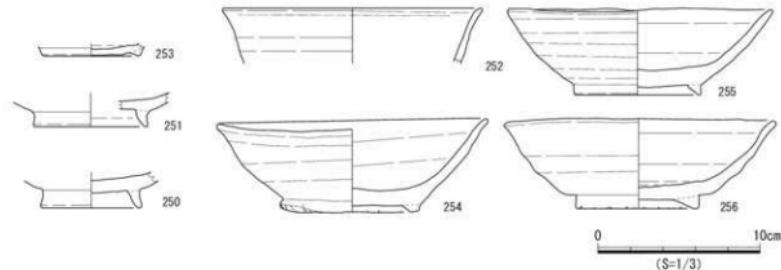


図43 SD31出土遺物実測図

定し、口縁部・胴部の一部に煤が付着する。

**時期** 出土した山茶碗から、12世紀中葉から後葉に埋没したと考えられる。

#### SD34～SD36（図44）

**検出状況** 9地点DJ16・DK16・DK17・DK18グリッド、IV b層上面で検出した。3条の溝が重複しており、SD35が最も古い。SD34・SD35・SD36はほぼ平行していたが、埋土が明らかに異なり、試掘坑の壁面において埋土が重複していることを確認したため、別構造と判断した。また、SD35は3条の溝の中では最も深く、SD34・SD36の底面でその平面形を確認できた。なお、いずれも平面形は明瞭であり、東西端は発掘区外にある。

**規模・形状** いずれも西から東方向に延びているが、直線的ではなく、緩やかに湾曲している。SD34・SD36は底面が平坦で凹凸が見られ、壁面の傾斜は急であるが、SD35は底面がほぼ丸みを帯び、壁面は緩やかである。また、底面標高値はいずれも西端が高く、東端が低い。

**埋土** SD34・SD36は単層で、SD35は2層に分層した。SD34・SD36は底面に凹凸が認められる。SD35はほぼ水平堆積であり、いずれの溝も埋土が均質であることから自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** SD34の埋土中から土師器1点、灰釉陶器1点、山茶碗1点、SD35の埋土中から土師器4点、山茶碗4点、SD36の埋土中から土師器6点、灰釉陶器3点、尾張型第6型式の小皿を含む山茶碗4点が出土した。いずれの遺構も遺物は散在して出土した。土器はいずれも小片のため図示していない。

**時期** 出土した山茶碗から、13世紀初頭から中葉以降に埋没したと考えられる。

#### （5）焼土遺構

##### SL1（図45）

**検出状況** 9地点AN12グリッド、IV b層上面で検出した。検出時は、黒暗色の硬化した面が認められ、被熱した面及び炭化物を含む範囲を平面として検出した。埋土の中央部にはやや白っぽい埋土が堆積している。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。中央部に橢円形状に窪む火床が見られる。

**埋土** 9層に分層した。1・2層は炉内の埋土であり、3層から6層は、被熱による硬化が激しく、炉壁と判断した。7層は掘方埋土と判断した。

**遺物出土状況** 1層から土師器2点が出土し、1点は伊勢型鍋である。いずれも小片のため、図示しない。

SD34・SD35・SD36

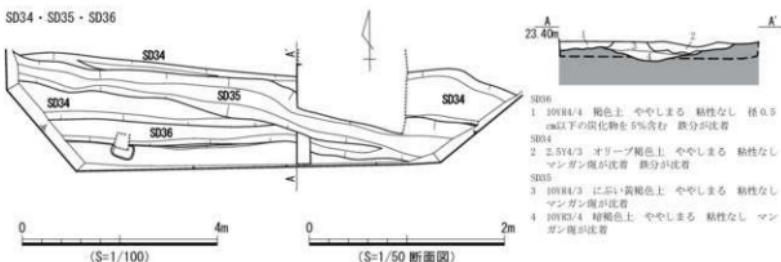


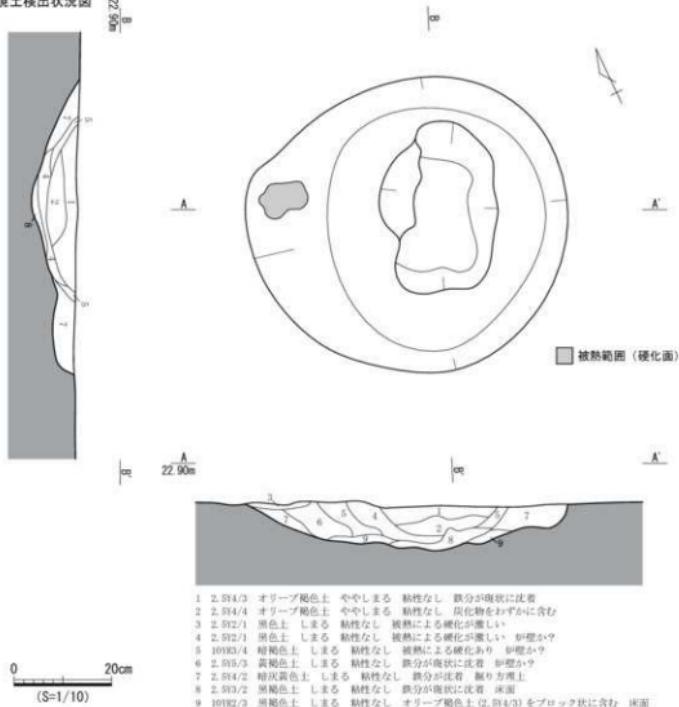
図44 SD34～SD36 遺構図

ていない。

**出土遺物** 埋土を水洗選別したところ径1cm以下の鉄滓を確認した。板状剥片や粒状滓等の鍛造鍛冶に伴うものは出土しなかった。炉として利用されたと推測されるが、何に用いられたかは不明である。

**時期** 出土遺物から中世と考えられる。SD2の溝内にあることから付属する可能性があり、12世紀中

SL 1 烧土検出状況図



SL 2 烧土検出状況図

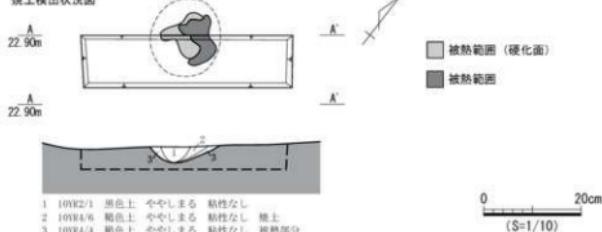


図 45 SL 1・SL 2 造構図

葉から後葉以降と考えられる。

#### SL 2 (図 45)

**検出状況** 9地点 AN12 グリッド、IV b 層上面で検出した。被熱範囲は円形であるが、掘方は見られなかった。

**規模・形状** 長軸長 0.52m、短軸長 0.36m、深さ 0.12m であり、楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。1層が炉内の埋土であり、2層は焼土である。3層は被熱した範囲である。

**出土遺物** 埋土を回収し水洗したところ径 1cm 以下の鉄滓を確認した。板状剥片や粒状滓等の鍛造鍛治に伴うものは出土しなかった。炉として利用されたと推測されるが、何に用いられたか不明である。

**時期** 出土遺物がないため時期の詳細は不明であるが、北西側に SL 1 があることから、同時期の 12世紀中葉から後葉と考えられる。

#### 4 その他の遺構の出土遺物 (図 46・47)

257 は S 字甌の台部である。外面に斜め方向のハケメ調整を施す。258～260 はロクロ成形の土師器である。258 は小皿である。底部内面に指頭圧痕が、その外面には回転糸切痕が見られる。259・260 は柱状高台皿である。259 は表面の摩滅が著しい。261～265 は灰釉陶器である。261～264 は碗である。261 は明和 27 号窯式に比定し、高台がハの字状に付く。265 は丸石 2 号窯式に比定した皿である。266

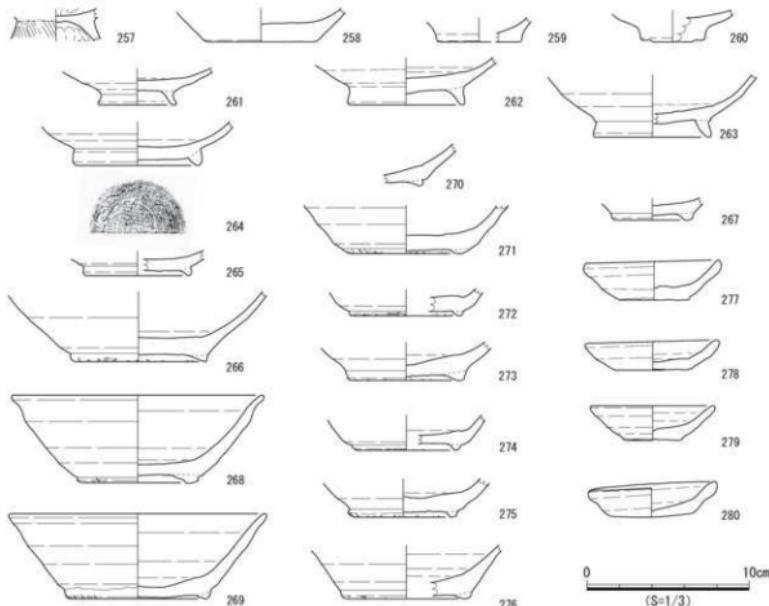


図 46 その他の遺構出土遺物実測図 (1)

～281は尾張型山茶碗である。266は第4型式の碗、267は第4型式の小碗で、内面に墨痕が見られる。268～276は碗で、268・269は第5型式、270～276は第6型式である。277～280は小皿である。280は第6型式で、その他は第5型式である。277は口縁部から底部外面にかけて墨痕が見られる。280は底部内面が窪み、底部外面に墨痕が見られる。いずれも訛読不能である。281は第7型式の片口鉢である。282は大畠大洞4号窯式に比定した東濃型山茶碗である。283は美濃須衛窯Ⅶ期に比定した山茶碗である。284・285は青磁で、いずれも碗である。286～291は土師器である。286～288は土師器皿である。286・287はM3類である。286は器壁が厚く、胴部と底部の境に横ナデが見られる。287は胴部と底部の境に一部横ナデが見られる。288はB1類である。289～291は伊勢型鍋である。289は伊勢型鍋A類である。口縁部は胴部から外反し、頭部は見られない。口縁端部は折り返され肥厚し、290・291は伊勢型鍋D類である。横ナデのため内溝している。胴部は丸みをもち、内面に板ナデ調整を施し、外面に指頭圧痕が見られる。292は土錘である。293は砥石、294はチャートの石で敲打痕が見られることから火打石と思われる。295は鉄滓である。

### 5 III層出土遺物（図48～50）

III層からは、9地点・10地点・19地点から9,378点の遺物が出土した。III層出土遺物よりも遺構出土が多いものは土師器・鉄滓等の鍛冶関連遺物を含む金属製品・ガラス玉で、構造出土遺物よりもIII層出土の方が多いものは須恵器・灰釉陶器・中近世陶磁器・中近世土師器である。

296～307は土師器である。296～298はS字甕である。296は古墳時代前期の山陰系口縁を有するS字甕と思われる。297はC類で、口縁部外面の上段と下段の境の稜が明瞭である。299～303は清郷型

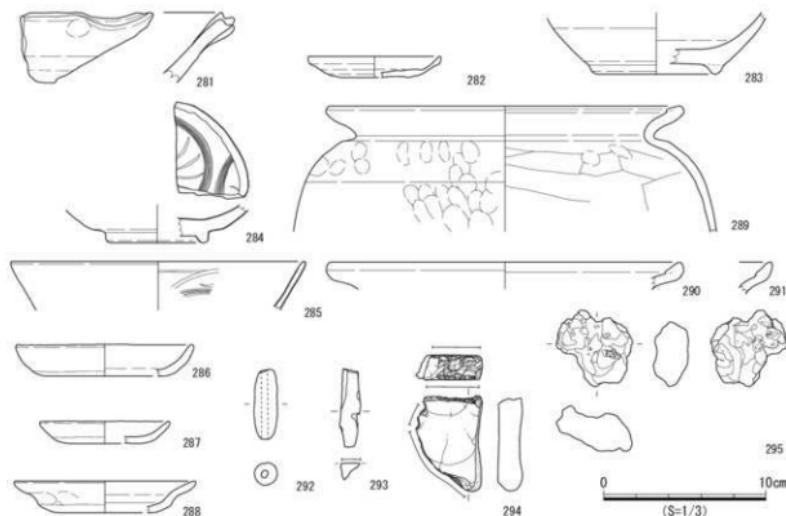


図47 その他の遺構出土遺物実測図（2）

鍋である。299はB類で、その他はC類である。304～307はロクロ成形の土師器である。304は胴部が丸みを持つ。307は柱状高台皿である。308～315は灰釉陶器である。308～311は碗である。312は虎渓山1号窯式に比定した灰釉陶器の広口壺で口縁端部が摘み上げられている。314は明和27号窯式に比定した鉢、315は口縁部の形状から耳皿と思われる。316～322は尾張型山茶碗である。316～318は碗である。316は第4型式で、底部外面の中央部分に墨痕が見られる。319は第3型式の小碗、320は第5型式、321は第6型式の小皿である。322は第6型式の片口鉢である。323～331は東濃型山茶碗である。323～326は碗で、325は窯洞1号窯式に比定し、326は脇之島3号窯式に比定した。327～329は小碗である。327は尾張型第3型式併行に、328・329は谷迫間2号窯式に比定した。328は底部外面に朱墨が付着したように赤い。330・331は小皿で、330は大洞東1号窯式に比定し、底部と胴部の境に窪みが顕著に見られる。331は脇之島3号窯式に比定した。332は青磁、333は白磁、いずれも碗である。334～343は土師器である。334～337は土師器皿である。337はM4類で、口縁端部は尖る。その他はM3類である。338～341は伊勢型鍋である。338・339はA類、340はB類、341はC類である。342・343は羽釜である。344～348は古瀬戸で、344は古瀬戸前III期から中II期の入子、345は古瀬戸中II期の卸皿、346は古瀬戸後I期の縁軸小皿、347は古瀬戸後I期の平碗である。348は古瀬戸後I期の天目茶碗である。349は大窯の徳利である。350～357は近世陶磁器で、350は鉢である。長

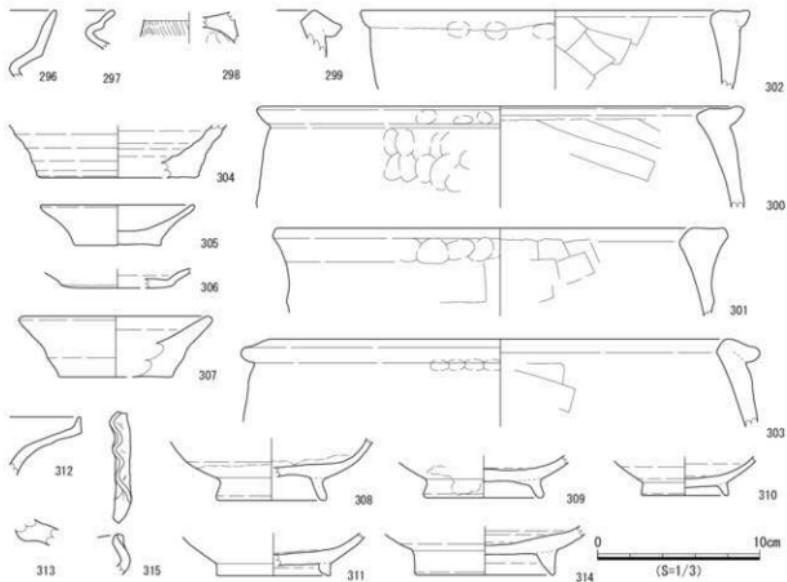


図48 Ⅲ層出土遺物実測図(1)

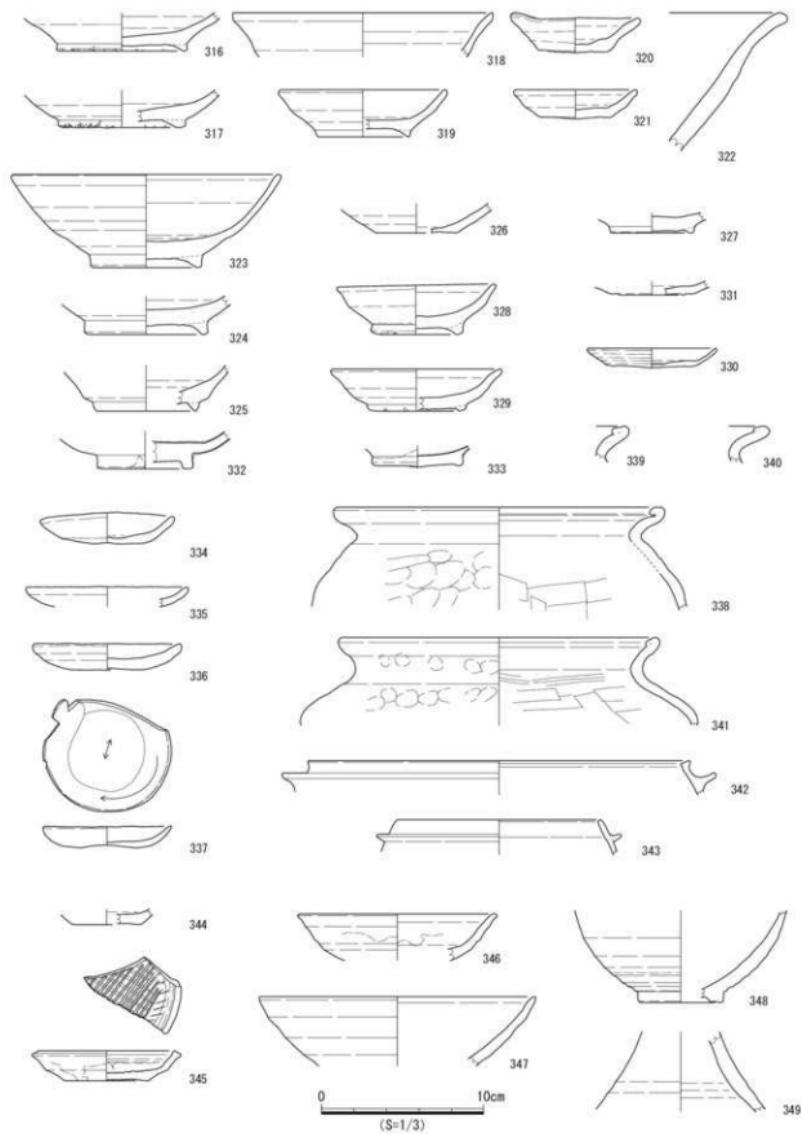


図49 Ⅲ層出土遺物実測図（2）

石袖を前面に施釉し、口縁部から胴部内面に緑釉を垂らし掛ける。351は18世紀中葉の青磁染付の湯飲み碗、352～354は擂鉢、355は練鉢、356は灯明皿、357は鍋である。358～363は砥石である。364は器種不明の金属製品である。形状から金属製品に付随する把手の部分か。365は開元通寶である。

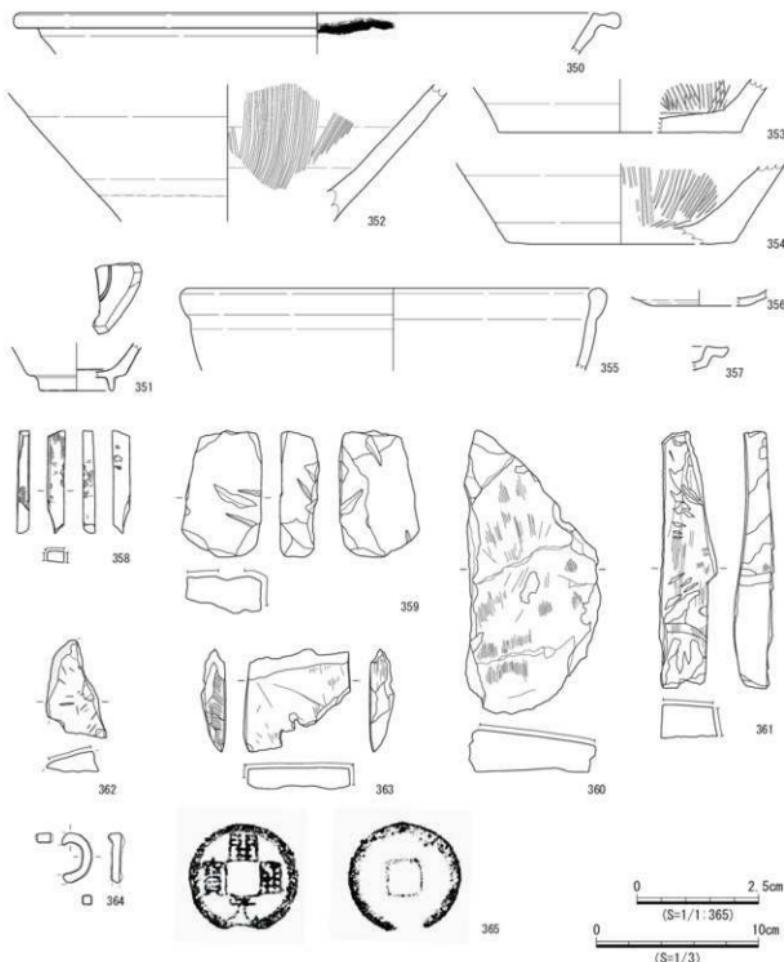


図50 Ⅲ層出土遺物実測図(3)

## 第2節 6～8・17・18地点の遺構・遺物

遺跡の中央部から北部に位置する調査地点であるが、市道を挟んで9地点や19地点の南西側となる。調査面積は3,459.2 m<sup>2</sup>で、本線橋脚や側道、調整池部分を調査した。6地点と17地点の間には水路があり、

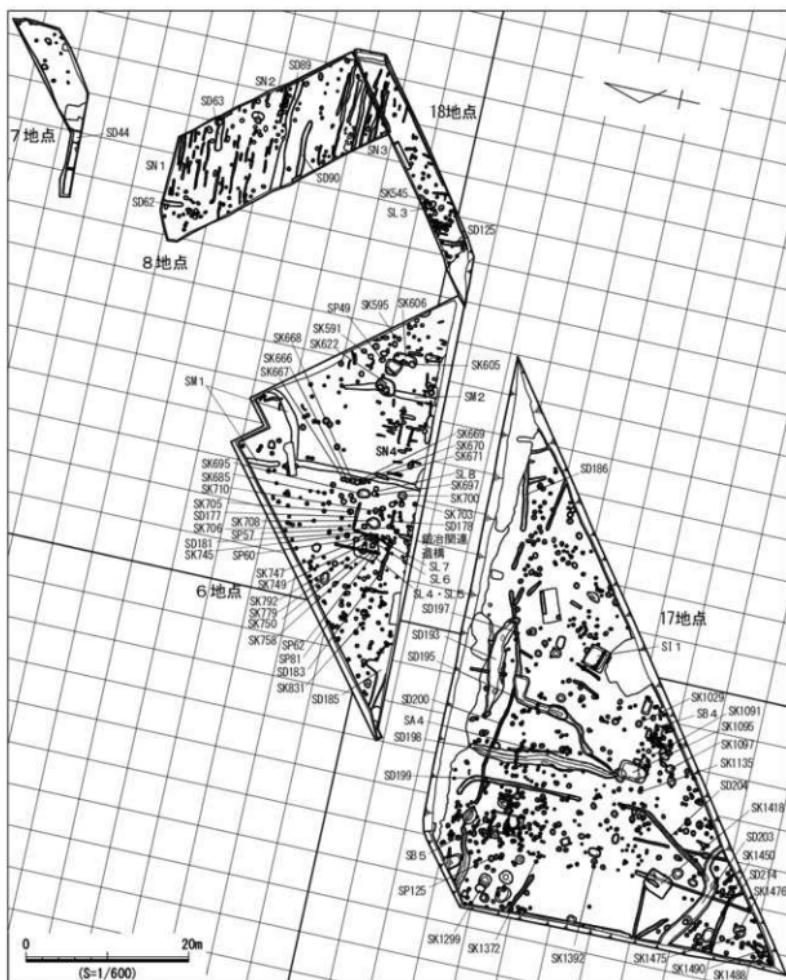


図 51 6～8・17・18地点平面図

発掘区が分断される。また、17地点西側の市道を北進すると、船来山に通じ、その南麓には弥勒寺跡が所在する。

### 1 錫冶関連遺構（図52）

6地点の中央部で錫冶炉5基（SL4～SL8）を確認し、その周辺の遺構から錫冶関連遺物が出土した。ここで示す錫冶炉は、埋土を水洗選別した際に錫冶作業に伴う錫冶剝片・粒状滓等の微細遺物を確認した焼土遺構を指す。錫冶炉の操業・廃絶の時期については、SL8を除く錫冶炉では土器が出土しなかつたため明確に言及することができない。しかしながら、それぞれ炉の形状や構築の仕方が異なることから時期差があると考えられる。また錫冶炉の周辺に位置する遺構では、錫冶関連遺物と共に丸石2号窓式・明和27号窓式に比定した灰釉陶器が出土していることから11世紀前葉から後葉と考えられる。ここでは錫冶炉とそれらに付属するとと思われる土坑・溝をまとめて錫冶関連遺構とし、それぞれ個別に説明をする。なお、錫冶炉の周辺では複数の柱穴や土坑を検出したものの、建物を想定できる規則的な柱穴の配置を確認することができなかつた。そのため規模・形状・深さから、上屋を支える柱穴と想定できる遺構については柱穴群として説明する。

#### （1）錫冶炉

##### SL4（図53・54）

DT2グリッド、IV b層上面で検出した。調査を進める中で北側の焼土（18層～20層）が碗状に掘り込まれること、その焼土が北側に広がりをもつことから二つの炉が重複していると判断した。重複する炉の北

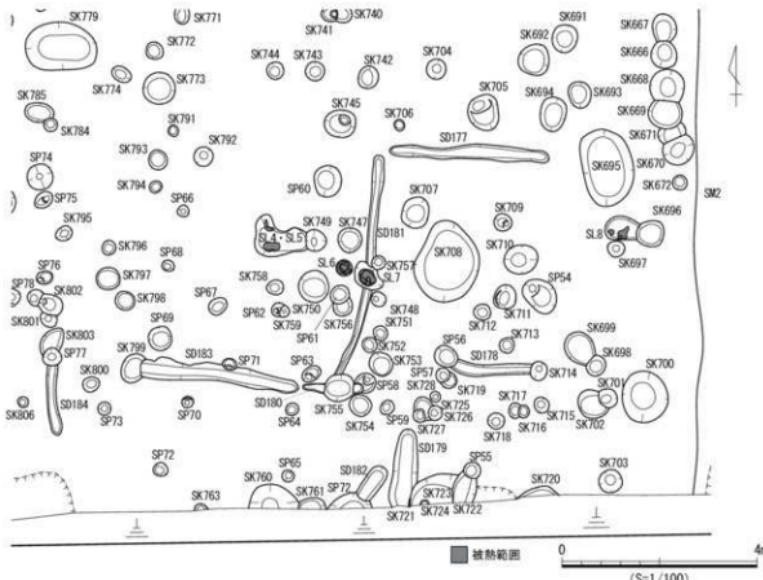


図52 錫冶関連遺構全体図

側をSL4とし、SL5より古い。検出面では焼土部分が一部残存しているのみであった。そのため火窓の全容は不明である。

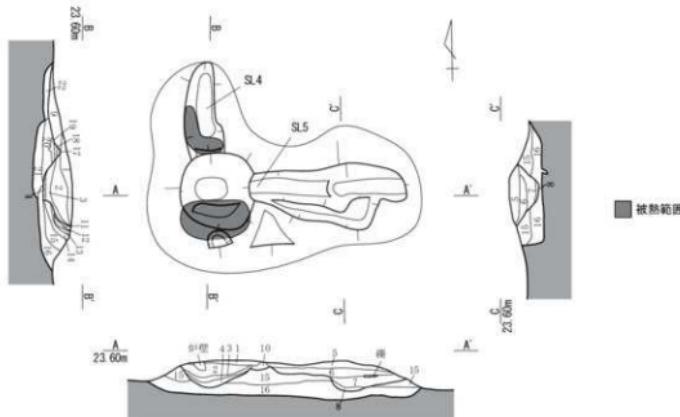
埋土は5層（図53 18層～22層）に分層した。18層から20層は焼土である。21層・22層は水平に堆積し、焼土ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。土坑状の窓みの充填土が被熱していることから、平坦面を直に火床として機能させたと考えられる。

21層・22層にも微細な鉄滓が確認された。

#### SL5（図53・54）

DT2グリッド、IVb層上面で検出した。遺構検出の段階でしまりのある暗色の盛土を確認し、一部が白色化した焼土が露出していた。平面形は不整形である。西側の平面形は円形で、碗状に大きく窓む。東側の平面形は細長く延び、床面は凹凸が顕著に見られる。

SL4・SL5 焼土検出状況図



##### SL5

- 1 10YR6/2 深黄褐色土 ややしまる 粘性なし 程1cmの鉄滓・円錐地を含む 程1cmの明黄褐色土(10YR6/6)をブロック状に含む
- 2 10YR2/3 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 程1cmの深黄褐色土(10YR6/2)をブロック状に含む 程1cmの明黄褐色土(10YR6/6)をブロック状に20%含む
- 3 2.5YR3/2 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし 地化物を含む 程0.5cmの赤褐色土をわずかに含む
- 4 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 地化物を多く含む 程2cmの黒褐色土(2.5YR2/2)をブロック状に含む
- 5 2.5YR3/2 黑褐色土 しまりなし 粘性なし 程2cmの鉄滓を含む 程0.5cmの赤褐色土をわずかに含む 地上ブロックを含む
- 6 7.5YR2/3 棕褐色土 固くしまる 粘性なし 程0.5cmの赤褐色土を含む 程2cmの鉄滓をわずかに含む 地上ブロックを含む
- 7 10YR2/2 黑褐色土 しまりなし 粘性なし 程3cmのオリーブ褐色土(2.5YR4/2)をブロック状に含む
- 8 2.5YR3/2 黑褐色土 しまりなし 粘性なし 程0.5cmの赤褐色土を含む
- 9 2.5YR4/2 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし 地化物を10%含む
- 10 2.5YR3/3 黑褐色土 しまりなし 粘性なし 程0.5cmの鉄滓を含む
- 11 2.5Y7/1 灰白色土 固く焼きしまる 粘性なし
- 12 2.5Y7/3 深黄褐色土 固くしまる 粘性なし 程0.2cmのぶい褐色土(2.5YR5/4)をブロック状にわずかに含む
- 13 7.5YR4/2 黑褐色土 しまる 粘性なし 地化物(2.5YR6/6)をわずかに含む
- 14 5YR4/4 にぶい赤褐色土 しまる 粘性なし 程0.2cmの深褐色土(7.5YR3/4)をブロック状に含む
- 15 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし 地化物をわずかに含む
- 16 10YR4/2 黄褐色土 しまる 粘性なし

##### SL4

- 17 5YR3/1 オリーブ褐色土 固く焼きしまる 粘性なし
- 18 7.5YR4/3 黑褐色土 しまる 粘性なし
- 19 5YR3/4 棕褐色土 しまる 粘性なし
- 20 10YR4/4 黑褐色土 しまる 粘性なし 程1cmの棕褐色土地土(3.5YR3/4)ブロック状に含む
- 21 10YR4/2 黄褐色土 しまる 粘性なし 程2cmの棕褐色土地土(3.5YR3/4)ブロック状に含む
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし

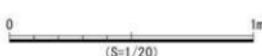


図53 SL4・SL5遺構図

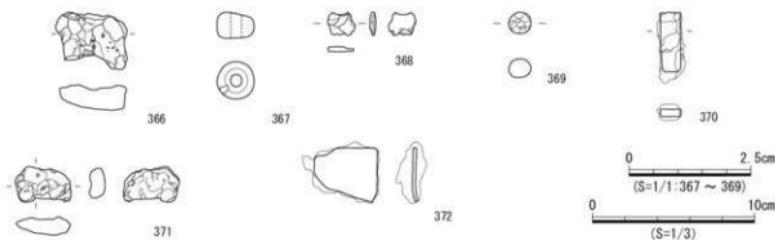
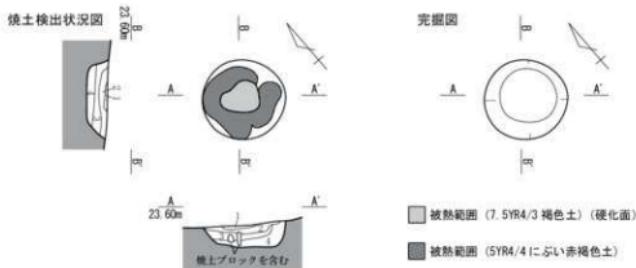


図54 SL 4・SL 5出土遺物実測図

埋土は17層(SL 4の埋土を除く)に分層した。1層から10層・23層は埋没過程の埋土で、水平に堆積する。11層から14層は焼土、15層・16層はしまりをもつ埋土で、検出面より高まりをもつ。他の鍛冶炉と異なり、火床等を構築した盛土部分が残存したと考えられる。西側の窓状に窪む部分は焼土を確認したことから、火床と考えられ、その南壁面の窪みは羽口設置痕跡と推測される。また東側のC断面付近ではやや幅広に窪んでおり、その窪みに堆積した埋土を水洗選別したところ鍛造片・粒状滓等の微細な鉄滓が多く確認した。このことから、この窪み部分に鉄床石が設置されていたと推測される。

17層から灰釉陶器1点、埋土中から總重量約2,200gの板状剥片・粒状滓を含む鐵滓が出土した。366は10層から出土した炉壁と思われる粘土塊である。367は1層～4層の焼土上層から出土したガラス玉で時期は不明である。368は8層から出土した板状剥片で、分析の結果鍛造剥片と判明した(第5章第5節)。369は粒状滓である。370は2層、371は5層から出土した鐵滓で、炉壁と思われる粘土塊を多く含む。372は5層から出土した鍋の胴部か。出土遺物及び遺構の形状から、鍛造鍛冶を行っていたと考えられる。



- 1 7.5YR4/3 黄色土 しまる 粘性なし
- 2 5YR4/4 にぶい赤褐色土 しまる 粘性なし  
にぶい黄褐色土 (10YR4/3) をブロック状に20%含む
- 3 10YR4/4 黄色土 しまる 粘性なし  
にぶい黄褐色土 (10YR4/3) をブロック状に10%含む 鐵滓をわずかに含む
- 4 10YR3/3 赤褐色土 しまる 粘性なし  
明褐色土 (7.5YR5/6) をブロック状に40%含む 程0.5cmの炭化物を10%含む

- - - 373

図55 SL 6造構図・出土遺物実測図

## SL 6 (図55)

DT 2 グリッド、IV b 層上面で検出した。円形に広がる焼土範囲の中央に黒暗色で硬化した面が認められたため、炉と判断した。平面形は円形で、断面形は逆台形である。

埋土は4層に分層した。1層・2層は焼土である。特に1層は硬化しており、2層はぶい赤褐色でしまりがある。3層と4層は焼土ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。土坑状の窪みの充填土が被熱していることから、火床として機能させたと考えられる。SL 4・SL 5 の盛土のような上部構造は確認できなかった。

埋土を水洗選別したところ、いずれの土層からも鍛造剥片等の微細な鉄滓が見られた。373は2層から出土した板状剥片である。出土遺物及び造構の形状から鍛造鍛冶を行っていたと考えられる。

## SL 7 (図56)

SL 6 の東隣に位置し、IV b 層上面で検出した。SD181 と重複し、本造構が新しい。埋土中に粘土塊及び白色化した焼土面を確認した。炉掘方の平面形は不定形であり、炉本体の平面形は概ね円形である。

埋土は7層に分層した。1層の埋土は均質であることから自然堆積と考えられる。2層から4層は焼土で、特に2層は白色で堅く焼きてしまっている。5層から7層はしまりがあり、中央が産むように堆積している。また6層は立ち上がりが見られることから炉壁の残存部分にあたる可能性がある。なお、炉掘方の壁面は、被熱した痕跡は見られなかった。土坑状に掘り窪めた後に、その底面に盛土をし、その上部を火床としたと考えられる。炉本体の南東側に窪みが見られ、炉の中心部にかけて筒状に窪むことから羽口設置痕跡の可能性がある。

1層から須恵器1点が出土した。埋土を水洗選別したところ3層から5層で板状剥片や粒状滓等の微細

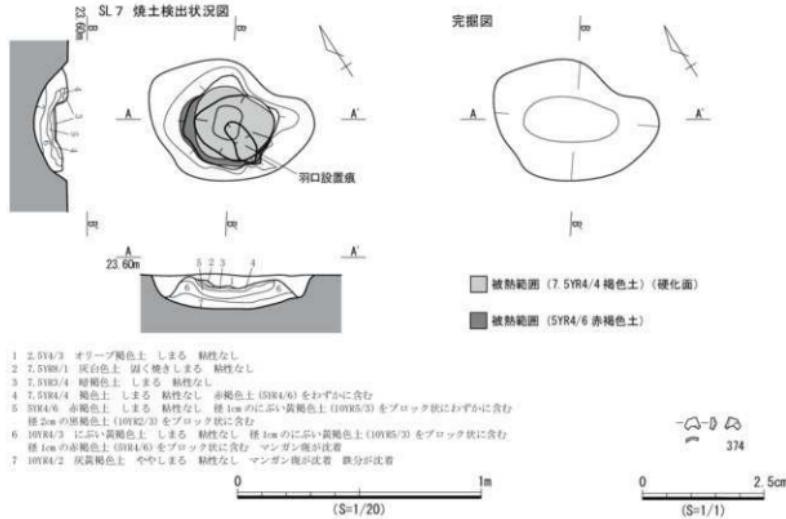


図56 SL 7造構図・出土遺物実測図

な鉄滓が確認された。4層から出土した374は板状剥片で、分析の結果、鍛造剥片か鍛治滓か判断できなかった。出土遺物から、鍛冶に伴う炉とも考えられる。しかしながら本遺構では炉壁が見られることや、周辺の土坑で鋼錠の付着した土器片が出土していることから铸造に伴う炉の可能性も考えられる。

#### SL 8 (図 57)

DT 3 グリッド、IV b 層上面で検出した。SK696 と重複し、本遺構が古い。検出段階で土師器(376)が表出しており、掘り下げるに伊勢型鍋の脇に硬化した面を持つ焼土を確認した。炉掘方の壁面には被熱した痕跡が見られなかつた。炉掘方の平面形は楕円形で、焼土部分の平面形は不定形である。

A-A' 断面は焼土上面の土層断面、B-B' 断面から D-D' 断面は焼土面及び下層の土層断面を観察した。本遺構の掘方の埋土は4層に分層した。1層・3層はブロック土を含む人為堆積層である。B-B' 断面から土坑状の窪みが重複しており、2時期の炉があつたと推測される。いずれの炉も窪みの充填土が被熱していることから、炉掘方の底面を火床としたと考えられる。新しい時期の火床が5層から8層、古い時期の火床が9層から13層と考えられる。焼土の北側で伊勢型鍋(376)が据えられた状態で出土した。口縁部から胴部上半は消失していることから、埋没後に鍛冶炉の上部構造は削られてしまったと考えられる。また伊勢型鍋の底部は欠損しており、その底部中央ではこぶし大の櫻(378)が出土した。これは炉の廃棄を行な際の儀礼に伴うものと考えられる。1層から灰釉陶器1点、鉄滓が出土した。埋土を水洗選別したところいずれの土層からも微細な鉄滓が出土した。焼土内から板状剥片が確認されたことから鍛造鍛冶を行っていた可能性がある。しかしながら底部の欠損した伊勢型鍋が据えられていたことからも、本遺構では伊勢型鍋などを利用した铸造に伴う炉である可能性が考えられる。

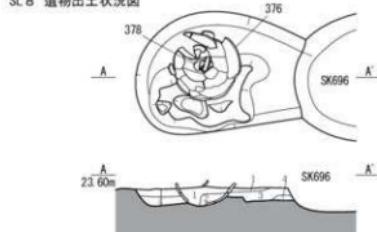
375 は丸石 2 号窯式に比定した灰釉陶器の皿である。376・377 は伊勢型鍋である。376 は外面の成形時にによる指オサエが残るもの、指によるナデ調整が施される。胴部下半にはヘラケズリが施され、一部に煤が付着する。内面は横方向に板ナデ、胴部下半は指ナデが施される。底部から胴部下半にかけて強い被熱を受ける。377 は A類の口縁部である。これらは同一個体の可能性が高い。378 は叩石で端部に敲打痕が顕著に見られる。379 は6層から出土した板状剥片で、分析の結果、鍛造剥片か鍛治滓か判断できなかつた(第5章第5節)。380・381 は鉄滓である。381 は表面に青みがかった黒色の溶融物が付着する。382 は鉄製品である。刀身を持つことから刀子の一部と考えられる。出土した伊勢型鍋は尾張型山茶碗第5型式に併行することから12世紀後葉から13世紀初頭以降に廃絶したと考えられる。

#### (2) 柱穴群 (図 58・59)

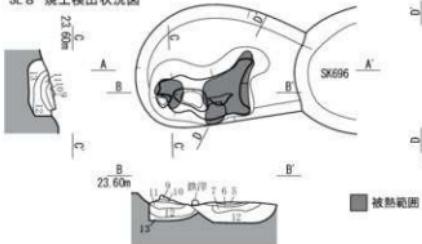
DT 1 グリッドで5基(SP73～SP78)、DT 2～HA 2 グリッドで15基(SP58～SP72)、DT 3～HA 3 グリッドで4基(SP54～SP57)を検出した。平面形は円形や楕円形である。SP54・SP60 は径が大きく、長軸長は SP54 が 0.78m、SP60 が 0.64m である。その他は長軸長 0.24m～0.5m である。柱痕跡が確認できた遺構は SP55・SP56・SP59～SP61・SP67・SP68・SP70・SP74・SP78 である。その他は柱痕跡を確認できなかつた。

SP61・SP62・SP67 は約 1.3m の間隔で、SP66・SP68・SP69 は約 1.4m の間隔で検出した。SL 4・SL 5 を囲うような配置がみられるものの、規則的な柱穴の配置は確認できなかつた。また東西方向に SP59・SP64・SP70・SP73 が約 2m の間隔で、南北方向に SP75～SP77 が約 1.5m 間隔で検出した。SD181・SD183 の周囲に柱穴列が巡るような配置がみられるが、それらに平行する柱配置を確認できなかつた。SP65・SP72 とやや離れて位置する SP55 は直線的に並ぶが、それに平行する柱配置を確認できなかつた。SP54・SP56・SP57・SP58・SP76・SP78 は単独で、規則的な配置を確認できなかつた。

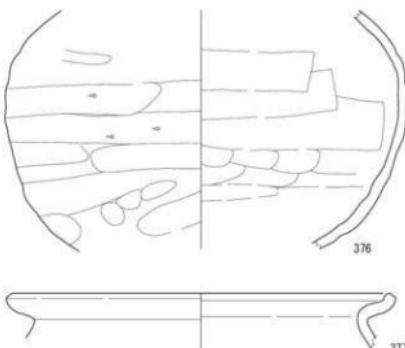
SL 8 遺物出土状況図



SL 8 焼土検出状況図

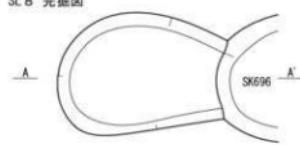


375



0 2.5cm  
(S=1/1:379)

SL 8 完掘図



1. 2. SY4/3 オーリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし  
3. 10YR4/3 黄褐色土 (391断面2) をブロック状に含む  
4. 10YR4/3 黄褐色土 (391断面3) をブロック状に含む  
5. 2. SY3/3 堆積褐色土 しまる 粘性なし  
6. 10YR4/2 黑褐色土 固く焼きしまる 粘性なし  
7. 7. SY4/3 黄褐色土 しまる 粘性なし  
8. 10YR4/3 黄褐色土 しまる 粘性なし  
9. 2. SY7/1 灰白色土 固く焼きしまる 粘性なし  
10. 7. SY6/4 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし  
11. 7. SY6/4 陶褐色土 しまる 粘性なし  
12. 2. SY5/2 黄褐色土 しまる 粘性なし  
堆積褐色土 (7. SY6/4) をわざわざむけ  
13. 2. SY4/2 オーリーブ褐色土 しまる 粘性なし  
14. 2. SY4/2 黄褐色土をわざわざむけ



0 1m  
(S=1/20)



378



0 10cm  
(S=1/3)

図 57 SL 8構造図・出土遺物実測図



図 58 柱穴群遺構図 (1)

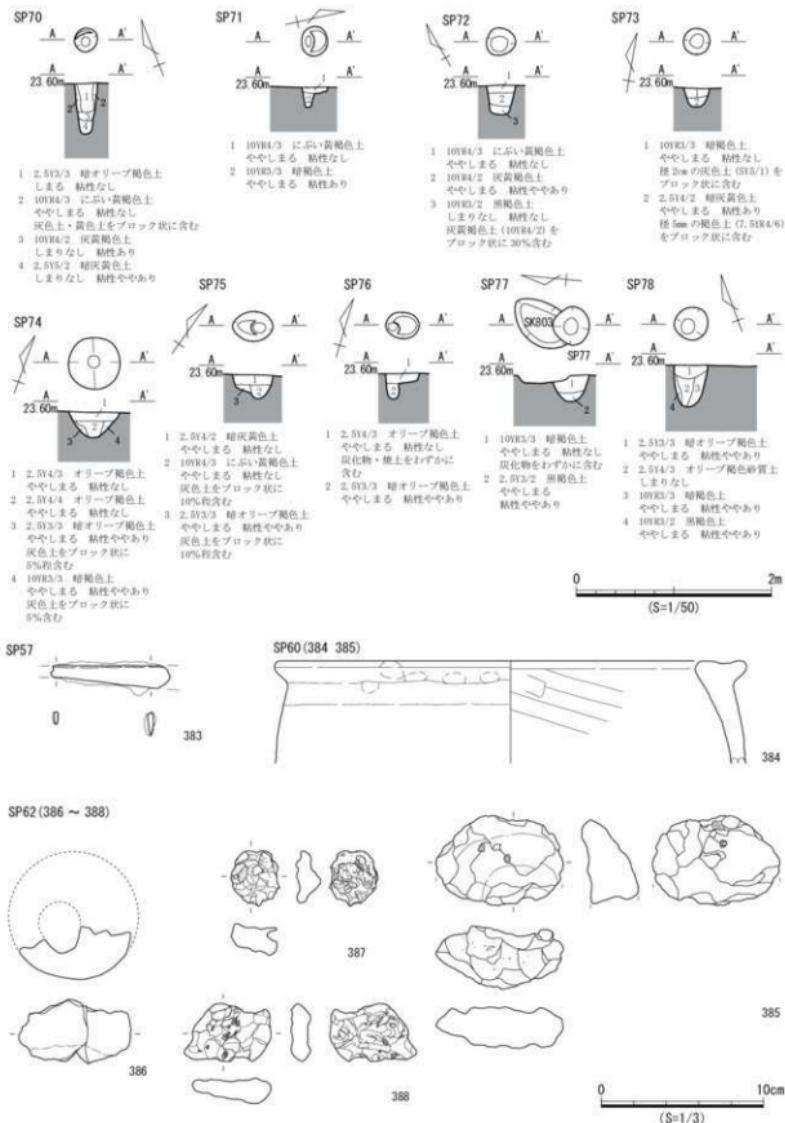


図59 柱穴群造構図(2)・SP57・SP60・SP62出土遺物実測図

SP63・SP65～SP69・SP77・SP78 を除いて土器や鉄滓等の遺物が出土したもの、特徴的な出土状況は見られなかった。柱穴群の埋土中から土師器5点、須恵器1点、灰釉陶器9点、粘土塊8点、鉄滓18点、金属製品2点が出土した。383はSP57から出土した刀子である。384・385はSP60から出土した。384は清郷型鍋のC類である。口縁部は短く「く」の字に屈折し、外部は成形時の指オサエが残る。385は椀形滓である。半分に割れたもので、磁着は強い。386～388はSP62から出土した。386は輪羽口である。387・388は鉄滓である。SP56と重複するSD178とSP60から出土した清郷型鍋から、これら遺構の時期は11世紀後葉以降と考えられる。

### (3) 土坑(図60～64)

鍛冶炉(SL4～SL8)の周辺には柱穴群の他に複数の土坑を検出した。それら土坑の内、鍛冶炉から1m範囲内で浅い小穴若しくは長軸長0.4m～0.8m、深さが0.2m以上の土坑が検出された。また鍛冶炉からやや離れた場所で長軸長が0.8m以上、深さが0.2m以上の大型土坑も検出された。鍛冶炉のすぐ脇には鍛造に伴う工人の作業スペースが想定されるが、前者のような土坑は、その規模から鍛造鍛冶に伴う金床石の設置穴若しくは工人の足入れ穴の可能性が考えられる。また後者のような土坑の多くで埋土中から鍛冶関連遺物が出土していることから鍛冶に伴うことが推測される。その他に埋土中から鍛冶関連遺物が出土した土坑と合わせて、個々に説明をする。

#### ①鍛冶炉に近接した土坑

##### SK697(図60)

SL8の南側に位置し、平面形は円形である。埋土は3層に分層した。水平に堆積する。遺物は出土しなかった。規模・形状、位置関係からSL8に伴う可能性がある。

##### SK747(図60)

SL6の北側に位置し、平面形は円形である。埋土は2層に分層した。2層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。ロクロ成形の柱状高台皿を含む土師器4点、灰釉陶器1点、鉄滓2点が出土した。いずれも小片のため図示していない。位置関係からSL6に伴う可能性がある。

##### SK748(図60)

SL7の東側に位置し、平面形は円形である。埋土は2層に分層した。いずれの土層もブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。埋土中から土師器1点が出土した。位置関係からSL7に伴う可能性がある。

##### SK749(図60)

SL4の東側に位置し、平面形は円形である。SL5と重複し、本遺構が古い。埋土は3層に分層した。いずれの土層もブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。2層から鍛冶の道具と思われる棒状の鉄塊、刀子が出土した。位置関係からSL4に付属すると考えられる。389は輪羽口である。390は鉄塊である。表面に鉱滓が付着している。391は板状の鉄塊である。鉄艇と思われる。392は細長い形状から釘と思われる。393は刀子と思われ、一部に木質が付着する。

##### SK750(図60)

SL6の南西側に位置し、平面形は楕円形である。埋土は4層に分層した。4層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。規模・形状、位置関係からSL5に伴う鍛冶工人の足入れ穴と推測される。須恵器1点が出土した。394は美濃須衛窯V期第1小期に比定した須恵器の坏蓋である。本遺構の時期は付属

すると思われるSL5と同時期と考えられる。

#### SK758(図60)

SL5の南側に位置し、平面形は円形である。埋土は2層に分層した。中央が窪む堆積である。

1層から土師器2点、灰釉陶器1点が散在して出土した。土器はいずれも小片であり、図示していない。位置関係からSL5に伴う可能性がある。

#### ②銀冶炉周辺の大型土坑

##### SK685(図61)

DS3グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は円形である。底面は凹凸があり、壁面は急である。埋土は単層である。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。埋土中から土師器3点、灰釉陶器1

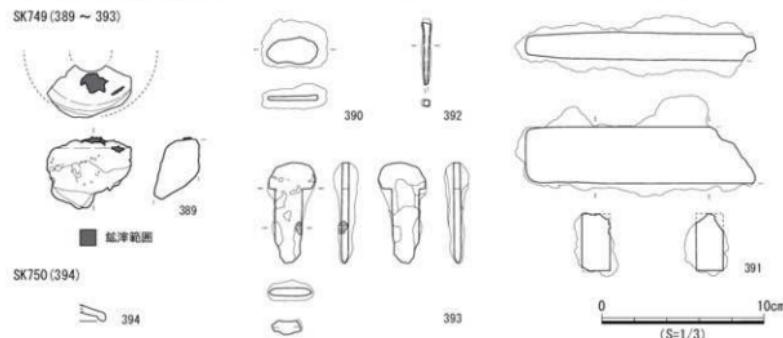


図60 銀冶炉に近接した土坑遺構図・SK749・SK750出土遺物実測図

点、山茶碗1点、鐵滓1点、炉壁と思われる粘土塊が散在して出土した。出土遺物の時期は12世紀後葉と思われるが、いずれも小片であり、残存状態も悪い。本遺構の時期は12世紀後葉以降とする。

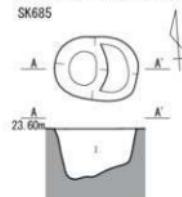
#### SK695(図61)

DT 3グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は橢円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。埋土は2層に分層した。ほぼ水平に堆積している。1層から土師器13点、灰釉陶器1点、山茶碗16点が散在して出土した。395は尾張型第5型式の山茶碗である。本遺構の時期は出土した山茶碗から12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SK700(図61)

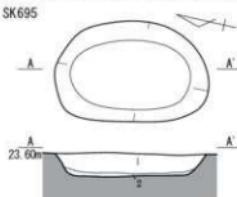
HA 1グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は円形である。底面は平坦であり、壁面は急である。埋土は3層に分層した。いずれの土層もほぼ水平に堆積しているものの、3層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。1層から輪羽口の小片2点が出土した。本遺構の時期は不明である。

SK685



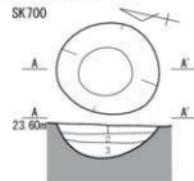
1. 395/4 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性なし  
緑色土(10YR 4/6)をブロック状に5%含む  
緑3cmの褐色土(10YR 3/3)をブロック状に20%含む  
緑1cmの黄褐色土(10YR 6/6)をブロック状にわずかに含む

SK695



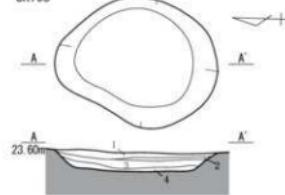
1. 2. BY4/1 黄褐色土 しまりなし 粘性なし  
2. BY4/2 緑灰黄色土 しまりなし 粘性なし  
3. BY4/2 緑灰黄色土 しまりなし 粘性なし  
緑分が化着

SK700



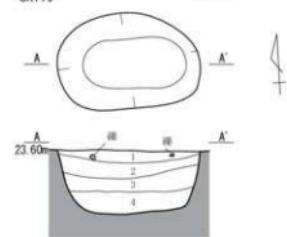
1. 10YR 4/2 黄褐色土 しまりなし 粘性なし  
マンガン斑が化着  
2. BY4/2 緑灰黄色土 しまりなし 粘性なし  
緑分が化着  
3. 10YR 3/2 黄褐色土 しまりなし 粘性なし  
緑1cmの黄褐色土(10YR 5/2)をブロック状に10%含む

SK708



1. 2. BY4/2 緑灰黄色土 ややしまる 粘性なし  
緑1cmの緑色土(2.5Y5/2)をブロック状に20%含む  
2. BY4/4 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし  
緑分が化着  
3. BY4/3 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし  
マンガン斑が化着  
4. 2. 5Y3/3 緑オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし  
オリーブ褐色土(2.5Y4/3)をブロック状に20%含む

SK779



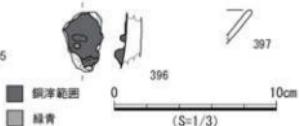
1. 2. BY4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし  
2. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ややしまる 粘性なし  
3. 10YR 3/3 にぶい黄褐色土 ややしまる 粘性なし  
4. 10YR 4/4 褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
緑3cm以下の赤褐色をわずかに含む  
灰色土をブロック状に5%程含む  
黒褐色土をブロック状に20%程含む

0 2m  
(S=1/50)

SK695(395)



SK779(396~399)



■ 鉄滓範囲  
■ 緑青



図61 銀冶炉周辺の土坑遺構図・SK695・SK779出土遺物実測図

**SK708（図61）**

DT 3 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不整円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。埋土は 4 層に分層した。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。埋土中から土師器 1 点、灰釉陶器 3 点が 1 層から散在して出土した。出土遺物の時期は 11 世紀後葉であるが、いずれも小片であり、残存状態も悪い。本遺構の時期は 11 世紀後葉以降と考えられる。

**SK779（図61）**

DS 1 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は椭円形である。底面は平坦であり、壁面は急である。埋土は 4 層に分層した。いずれの土層もほぼ水平に堆積しているものの、1 層は径 3cm の礫を含み、2 層・3 層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。埋土中から土師器 12 点、灰釉陶器 24 点、金属製品 4 点が散在して出土した。多くの土器が小片であり、散在して出土した。396 は清郷型鍋である。胴部の小片に銅が付着している。緑青が見られる。周辺で清郷型鍋を使用した銅の鋳造が行われていたと推測される。397・398 は明和 27 号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。399 は細い形状から釘と思われる。清郷型鍋や明和 27 号窯式に比定した灰釉陶器の碗が出土していることから、本遺構の時期は 11 世紀後葉以降と考えられる。

**③鍛冶関連遺物が出土したその他の土坑****SK545（図62・63）**

18 地点 DS11～DT11 グリッド、IV b 層上面で検出した。西側が SP43 と重複し、本遺構が古い。北側が発掘区外にあるため平面形の全容は不明である。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。埋土は 2 層に分層した。1 层は東側に偏る堆積である。2 層は厚く堆積し、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。また、焼土塊や炭化物を多く含む。埋土中から土師器 5 点、皿や壺・甕を含む灰釉陶器 4 点、炉壁と思われる粘土塊が散在して出土した。鍛冶に伴う廃棄土坑と考えられる。埋土を水洗選別したところ板状剥片、径 5mm 以下の鉄滓を確認した。400 は炉壁と思われる粘土塊である。表面に金属が付着する。401 は鉄滓である。出土遺物の時期は 11 世紀後葉であるが、いずれも小片であり、残存状態も悪い。本遺構の時期は 11 世紀後葉以降とする。

**SK703（図62・63）**

6 地点 HA 3 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜はやや急である。埋土は 2 層に分層した。ほぼ水平に堆積しているものの、2 層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。2 層から清郷型鍋の口縁部が縦位で出土した。402・403 は清郷型鍋である。402 は C 類である。403 は内面に銅が付着し、緑青が見られる。周辺で清郷型鍋をもつて転用して銅の鋳造が行われていたと推測される。遺構の性格は不明である。出土した清郷型鍋から、本遺構の時期は 11 世紀後葉と考えられる。

**SK705（図62・63）**

6 地点 DS 3～DT 3 グリッド、IV b 層上面で検出した。検出面に鉄滓が表出していた。平面形は円形である。底面は丸みを帯び、北側で一段深く掘り込まれる形となっている。北壁面の傾斜は急であるが、南壁面は緩やかである。埋土は 3 層に分層した。1・2 層は、ほぼ水平に堆積している。いずれの土層もブロック土を含むことから人為堆積と考える。埋土中から土師器 68 点、灰釉陶器 2 点、台石 1 点、鉄滓 6 点が散在して出土した。土器はいずれも小片である。1 层・2 層から土坑の北側に清郷型鍋、ロクロ土師器皿

片がまとめて出土し、砂岩質の大きい礫が上に重なって出土した。その直下の3層からやや小さい礫とともに灰釉陶器、土師器片が複数出土している。出土状況から鍛冶に関わる道具等の廃棄土坑と考えられる。404は清郷型鍋のC類である。口縁部を「く」の字に屈折させ、外面は成形時の指オサエが残る。405はIII層で出土した破片と接合し、その胴部内面に緑青が浮く。口縁部には黒色の金属が融着している。5章にて詳細を報告する。周辺で清郷型鍋を坩堝に転用して銅の鋳造が行われていたと推測される。406・407はクロコ土師器の柱状高台皿である。406は回転糸切痕が見られる。407は表面の摩減が著しいため調整は不明である。408・409はクロコ土師器の小皿である。409は底部外面から胴部にかけて被熱痕跡が見られる。410は明和27号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。口縁部はやや外反する。411は台石である。表SK545

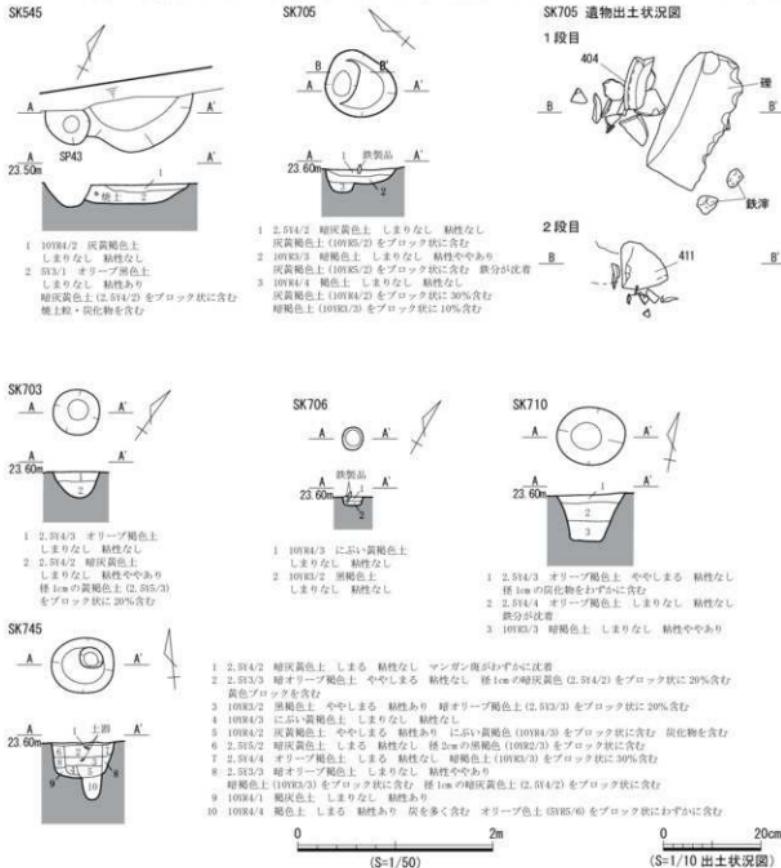


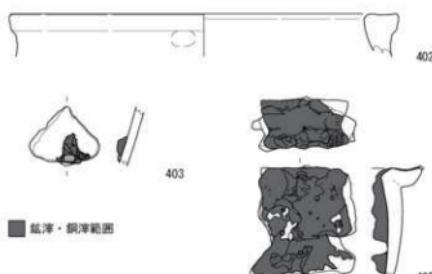
図62 鍛冶関連遺物が出土したその他の土坑遺構図(1)

面に敲打痕が見られる。1/4以下に欠損する。清郷型鍋や明和27号窯式に比定した灰釉陶器の碗が出土していることから、本遺構の時期は11世紀後葉以降と考えられる。

SK545(400・401)

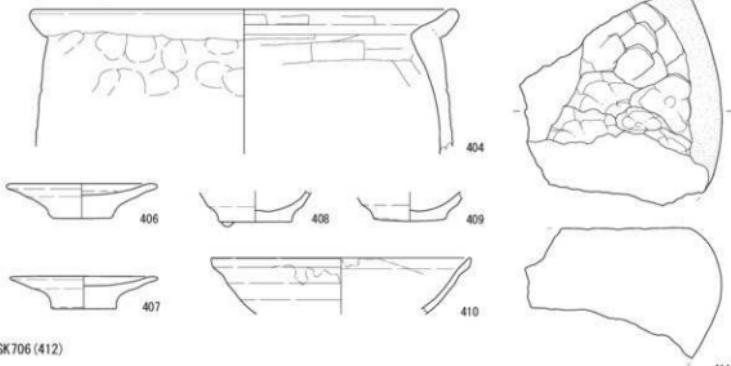


SK703(402・403)

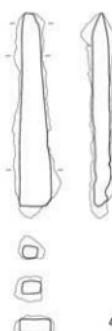


■ 錫滓・銅滓範囲

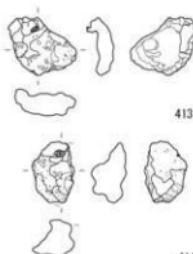
SK705(404～411)



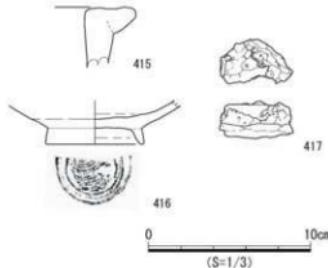
SK706(412)



SK710(413・414)



SK745(415～417)



0  
(S=1/3)  
10cm

図63 銀冶関連遺物が出土したその他の土坑出土遺物実測図（1）

**SK706（図62・63）**

6地点 DT2グリッド、IV b層上面で検出した。土坑の中心よりやや南側で検出面に棒状の金属製品(412)が表していた。平面形は円形である。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直である。埋土は2層に分層し、ほぼ水平に堆積している。412は鑿である。鑿が出土した西隣に細い棒状の金属製品が出土した。器種は小片のため不明である。出土遺物は鍛冶に関連するものの、時期決定のできる遺物が出土していないため本遺構の時期は不明である。

**SK710（図62・63）**

6地点 DT2グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は円形である。底面は平坦で、壁面は急である。埋土は3層に分層した。いずれの土層もほぼ水平に堆積している。遺物を多く含むことから人為堆積と考えられる。埋土中から土師器8点、灰釉陶器3点、輪羽口の小片(粘土塊)1点、銅滓2点、鉄滓2点が出土した。土器はいずれも小片であり、1層の北側にまとまって出土した。413・414は銅滓である。413の表面には黒色の溶融物が付着する。414は一部に緑青が見られた。表面に黒色の溶融物が付着している。遺構の性格は不明である。出土遺物の時期は11世紀後葉であるが、いずれも小片であり、残存状態も悪い。本遺構の時期は11世紀後葉以降とする。

**SK745（図62・63）**

6地点 DS2～DT2グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。平面形は円形である。床面は平坦で、北東部分に一部掘り込みが見られる。埋土は10層に分層した。いずれの土層もブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。埋土中から清郷型鍋を含む土師器10点、2層・8層から灰釉陶器5点が出土し、その他に鉄滓3点、炉壁と思われる粘土塊4点が出土した。415は清郷型鍋のC類である。口縁部を垂直方向に屈折させ、端部は横ナデによってやや内湾する。416は虎渓山1号窯式から丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。417は粘土塊である。遺構の性格は不明である。虎渓山1号窯式から丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗が出土していることから、本遺構の時期は10世紀中葉から11世紀中葉と考えられる。

**SK666～SK671（図64）**

6地点 DT3グリッド、IV b層上面で検出した。検出時にはほぼ同規模の6基の土坑を南北に連なって確認した。いずれの遺構の性格は不明であるものの、規模・形状等が近似した土坑が連続して検出されたため、これらを土坑群としてまとめて報告する。いずれの平面形も明瞭に確認できたが、重複部分は不明瞭である。平面形はSK667が梢円形であり、その他は円形である。重複関係は、SK667がSK666より古く、SK669はSK668より古く、SK671はSK669・SK670より古く。SK671は単層であるものの、その他の遺構は水平に堆積する。SK666・SK669はブロック土を含み、SK668・SK670は遺物を含むことから人為堆積と考えられる。

SK666では、土師器1点、灰釉陶器2点が散在して出土した。土器はいずれも小片であり、図示していない。SK667では、遺物が出土しなかった。SK668では、清郷型鍋の小片2点(418)、鉄滓4点が1層からまとまって出土した。SK669では、灰釉陶器2点が1層から出土した。土器は小片であり、図示していない。SK670では、灰釉陶器3点(419)、清郷型鍋1点が1層から出土した。その他に刀子と見られる金属製品1点、鉄滓2点、銅滓1点(420)が出土した。SK671では、炉壁と思われる粘土塊が1点出土した。418は清郷型鍋のC類である。口縁部から胴部内面かけて被熱した痕跡が見られるが、口縁部の一部は被熱していない部分が見られた。また胴部内面に黒色の溶融物が付着する。419は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の

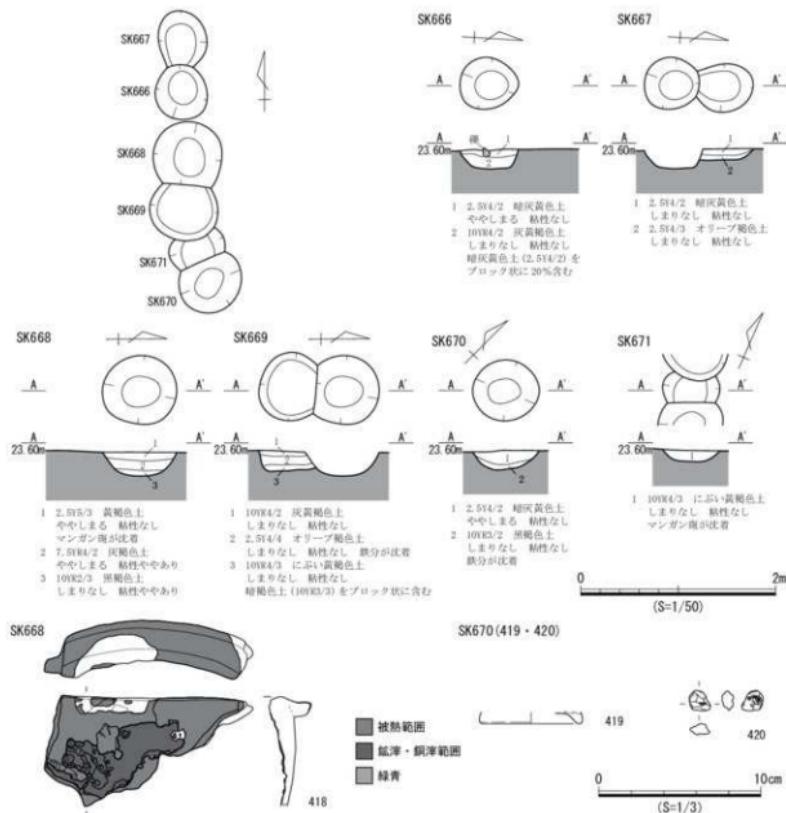


図64 鋼冶鍛造跡が出土したその他の土坑遺構図(2)・出土遺物実測図(2)

皿である。420は銅津である。表面に錆青が付いており、清郷型鍋に付着している。周辺で清郷型鍋をろつぼに転用して銅の鋳造が行われていたと推測される。SK670の時期は、丸石2号窯式に比定した灰釉陶器が出土していることから11世紀中葉以降と考えられ、いずれの遺構も重複関係はあるものの時期は同時期と考えられる。

#### (4) 溝状遺構

##### SD177(図65)

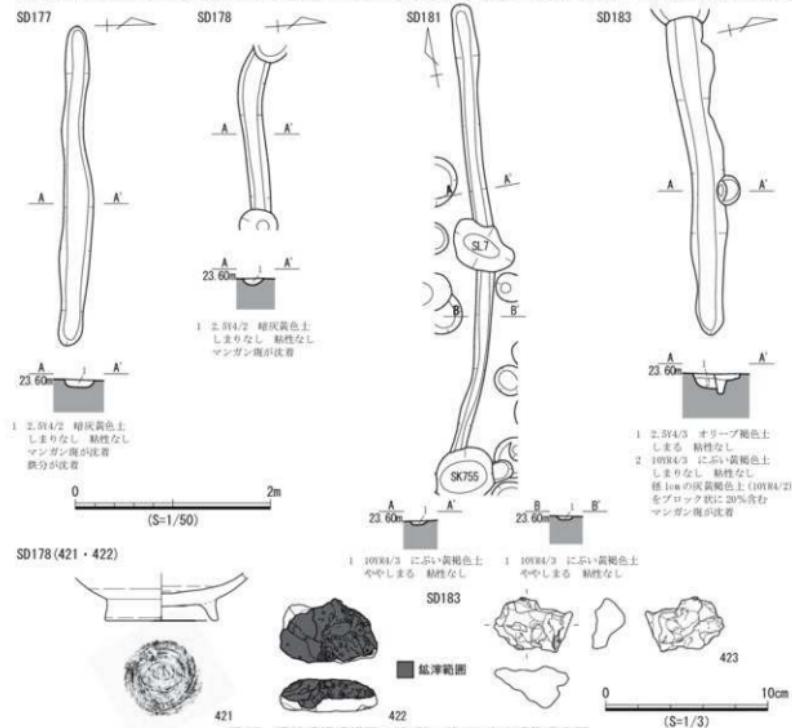
6地点DT2～DT3グリッド、IVb層上面で検出した。東西方向に延び、西側がやや南に湾曲する。SD178と平行する。埋土は単層である。堆積状況は不明である。埋土中から土師器3点が散在して出土した。SD178と長軸が揃うため、同時期と考えられ、11世紀後葉と考えられる。SD178と平行し、SL7との位置関係から鋳冶の作業場の区画溝若しくは排水溝の可能性がある。

## SD178（図65）

6地点 DT 3 グリッド、IV b 層上面で検出した。東西端は SK714・SP56 と重複しており、いずれの遺構よりも古い。東西方向に延び、西側がやや北側に湾曲する。底面は平坦で壁面の傾斜は急である。埋土は単層である。堆積状況は不明である。灰釉陶器 2 点、炉壁と思われる粘土塊が出土した。421 は明和 27 号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。底部外面には回転ナデが施される。灰釉が胴部下半まで施釉される。422 は炉壁と思われる粘土塊である。図示した 421 から 11世紀後葉と考えられる。SD177 と平行し、SL 7 との位置関係から鋳冶の作業場の区画溝若しくは排水溝の可能性がある。

## SD181（図65）

6地点 DT 1～DT 2 グリッド、IV b 層上面で検出した。SL 7 と重複し、本遺構が古い。南北方向に延びる。南端が SK755 と重複しているため全容は不明であるが、SD183 の延長線上とほぼ直交する。いずれも底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。埋土は単層である。堆積状況は不明である。埋土中から灰釉陶器の小片 2 点が散在して出土した。出土遺物は、いずれも小片であるため時期は不明である。しかしながら鋳冶炉の南側と東側に検出した本遺構と SD183 の位置関係、規模・形状から SL 4・SL 5 に伴う区画溝も



しくは排水溝の可能性があり、同時期に存在していたと思われる。

#### SD183（図65）

6地点 DT 2グリッド、IV b層上面で検出した。東西方向に延びる。埋土は2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。2層はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。埋土中から鉄滓8点、炉壁と考える粘土塊3点が散在して出土した。その他に1層から灰釉陶器7点、土師器5点が散在して出土している。423は鉄滓である。粘土塊や礫を多く含む。表面に小孔が多く見られる。出土遺物は、いずれも小片であるため時期は不明である。しかしながら鋳造炉の南側と東側に検出した本遺構と SD181 の位置関係、規模・形状から SL 4・SL 5に伴う区画溝もしくは排水溝の可能性があり、同時期に存在していたと思われる。

#### （5）その他出土鋳造関連遺物（図66）

424～432は清郷型鍋である。いずれも銅滓が付着している。424・425・426は口縁部から胴部内面にかけて被熱し、内面に黒色の金属が付着している。426は緑青が吹いた銅を明瞭に確認できる。427は口縁部内面が被熱し、その部分に微量ながら緑青を吹いている。428～432はいずれも小片であるが、その内面に緑青が吹いた銅を明瞭に確認できる。429は緑青を吹いた銅の内面に小孔の多くみられる赤錆を吹いた酸化物が付着する。430は、内面に1.5cm程の厚みでガラス質の発泡層が見られ、内部に粒状の赤錆を吹いた酸化物粒子が含まれる。431は破面方向から見ると、ガラス質の発泡層は1cm程の厚さで、緑青を吹いた銅の塊の他に黒色の金属が融着している。溶解した銅がいずれも清郷型鍋の内面のみに銅滓が付着していることが特徴である。433～436は銅滴である。

437～444は鉄滓である。437はSK759から出土した椀形滓である。半分で割れており、直径は15cmと推定する。表面は凹凸が著しく、赤錆を吹いた酸化物の他に白色滓や黒色の融着物が含まれている。438は白色滓及び被熱してガラス状になった礫が融着している。439は、木炭および砂利を多く含む。

445は炉壁と思われる被熱した粘土塊である。表面に小孔が多くみられ、一部ガラス質になっている。446～451は輪羽口片と思われる。小片のため口径等は不明であるが、他の輪羽口と材質が近似していることから輪羽口と判断した。447の断面は大きく半円状に窪み、裏面に赤色の土器片と思われるものが付着している。また平面形は中央が窪む。この形状から輪羽口設置部分の可能性がある

## 2 古代（奈良時代から平安時代）の遺構・遺物

#### （1）土坑

##### SK1097（図67）

**検出状況** 17地点 GI18～GH18 グリッド、IV b層上面で検出した。検出面に炭化物や焼土粒が表出し、平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 単層である。径の大きいブロック土を多く含むことから人為堆積と考えられる。焼土粒や炭化物を含む。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器4点、灰釉陶器8点、金属製品1点が散在して出土した。底部が残存する灰釉陶器2点(453・454)が遺構の東側で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、4点を図示した。452～454は明和27号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。452は胴部下半に丸みを帯びる。455は釦孔。断面は方形で、端部は欠損している。

**時期** 出土した灰釉陶器から、本遺構は11世紀後葉以降と考えられる。

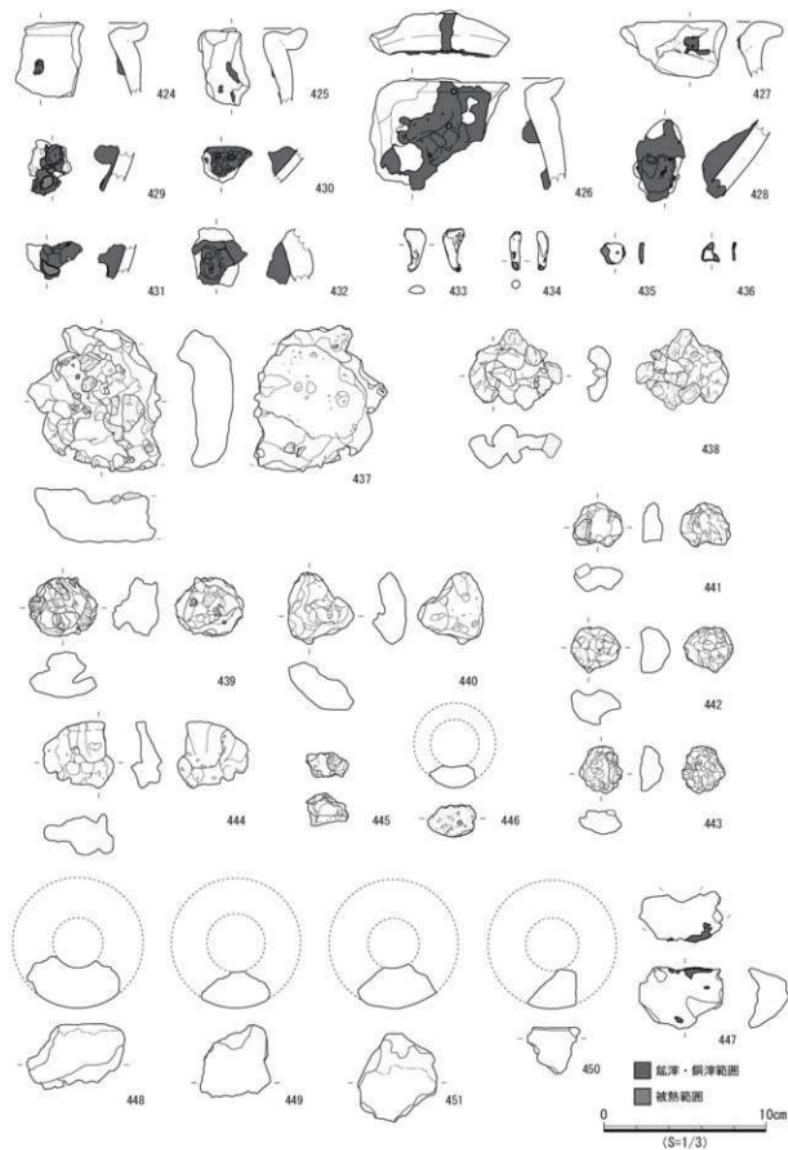
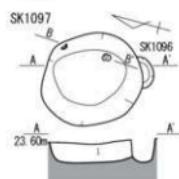


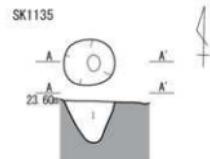
図66 その他鋳造関連遺物実測図

## SK1135(図67)

検出状況 17地点GH18グリッド、IVb層上面で検出した。検出面に炭化物を多く含み、平面形は明瞭であった。



1 10YR4/4 塗褐色土 しまりなし 黏性やあり  
灰褐色土(10YR4/2)にぶら・黄褐色土(10YR4/3)・  
にぶら・黄褐色土(10YR5/3)をブロック状に含む  
炭化物・燒土を含む



1 10YR4/2 灰褐色土 しまりなし 黏性なし  
にぶら・黄褐色土(10YR5/3)をブロック状に含む  
様 1cmの炭化物・燒土塊を多く含む

## SK1091(453～455)

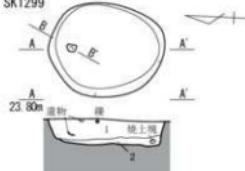


## SK1097 遺物出土状況図



0 (S=1/20 出土状況図) 1m

## SK1299



1 10YR4/3 塗褐色土 しまりなし 黏性なし  
炭化物・燒土を含む  
2 10YR2/3 黑褐色土 しまりなし 黏性やあり  
炭化物・燒土を多く含む 燃土塊を含む

## SK1299 遺物出土状況図



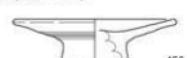
0 (S=1/50) 2m

## SK1135(456～458)

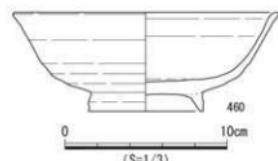


453 455

## SK1299(459～461)



461



0 (S=1/3) 10cm

0 (S=1/4.461) 10cm

図67 SK1097・SK1135・SK1299 造構図・出土遺物実測図

**規模・形状** 平面形は楕円形である。擂鉢状で壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。埋土に炭化物や焼土塊を多く含み、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器3点、灰釉陶器12点が出土した。いずれも小片で、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、3点を図示した。456～458は灰釉陶器である。456は丸石2号窯式から明和27号窯式に比定した碗で、口縁部に指頭圧痕が認められ、輪花を呈す。457は明和27号窯式に比定した碗である。458は丸石2号窯式から明和27号窯式に比定した段皿で、内面に明瞭な稜が認められる。

**時期** 出土した灰釉陶器から、本遺構は11世紀後葉以降と考えられる。

#### SK1299（図67）

**検出状況** 17地点GE14～GE15グリッド、IV b層上面で検出した。検出面に径10cmの礫や遺物の小片が表出しているものの、IV b層と本遺構の埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。底面は凹凸があり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。水平に堆積する。いずれの土層も焼土粒や炭化物を含み、遺物を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器11点、灰釉陶器1点、叩石3点、鉄滓2点が出土した。1層から灰釉陶器(460)が正位で出土したが、その他の遺物は小片で散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、3点を図示した。459はロクロ成形の柱状高台皿である。460は明和27号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。461は叩石・磨石である。

**時期** 出土した灰釉陶器から、本遺構は11世紀後葉以降と考えられる。

#### SK1392（図68）

**検出状況** 17地点GG16グリッド、IV b層上面で検出した。検出面に複数の遺物が表出していたものの、IV b層と本遺構の埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。底面は凹凸があり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。2層に亜円錐や炭化物を含み、1層に焼土粒・炭化物の他、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器222点、灰釉陶器3点が出土した。土師器皿は主に1層の北側で出土した。土師器皿は朱色のもの他に白色のものが見られる。配置に規則性が見られないことから、廃棄されたと考えられる。埋土上層で山茶碗の小片が1点出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、13点を図示した。462・463は清郷型鍋のB類である。いずれも器壁は薄く、口縁部は短く「く」の字に屈折する。464～472はロクロ成形の土師器皿である。464・465の胴部は内湾で丸みを帯び、465の口縁部は外反する。466～469の胴部は直線的に立ち上がる。470は扁平である。471・472は柱状高台皿である。472は胴部内面の一部に2.5Y7/4の薄赤橙色に彩色された部分が残る。473は、土師器質の皿で、色調は白色である。表面の摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、底部外面には回転糸切痕は認められず、ナデ消した可能性がある。その形状から丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の皿を模倣したと考えられる。474は口縁部が大きく捻れており、その形状から耳皿の可能性がある。

**時期** ロクロ成形の土師器皿が出土していることから、本遺構は11世紀以降と考えられる。

#### SK1418（図69）

**検出状況** 17地点GI15～GI16グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。規模・形状は堅

穴状の遺構であるが、底面からは柱穴などの付属遺構が検出されなかった。

**規模・形状** 平面形は長方形である。底面は凹凸があり、壁面の傾斜は急である。掘方は東西の標高差はないが、南側が高く、北側が低い。

**埋土** 2層に分層した。いずれの土層もブロック土や焼土粒を含むことから人為堆積と考えられる。2層上面では、南東側に焼土・炭化物を含む面が広がり、遺物が集中して出土した。その付近に円形に広がる

SK1392

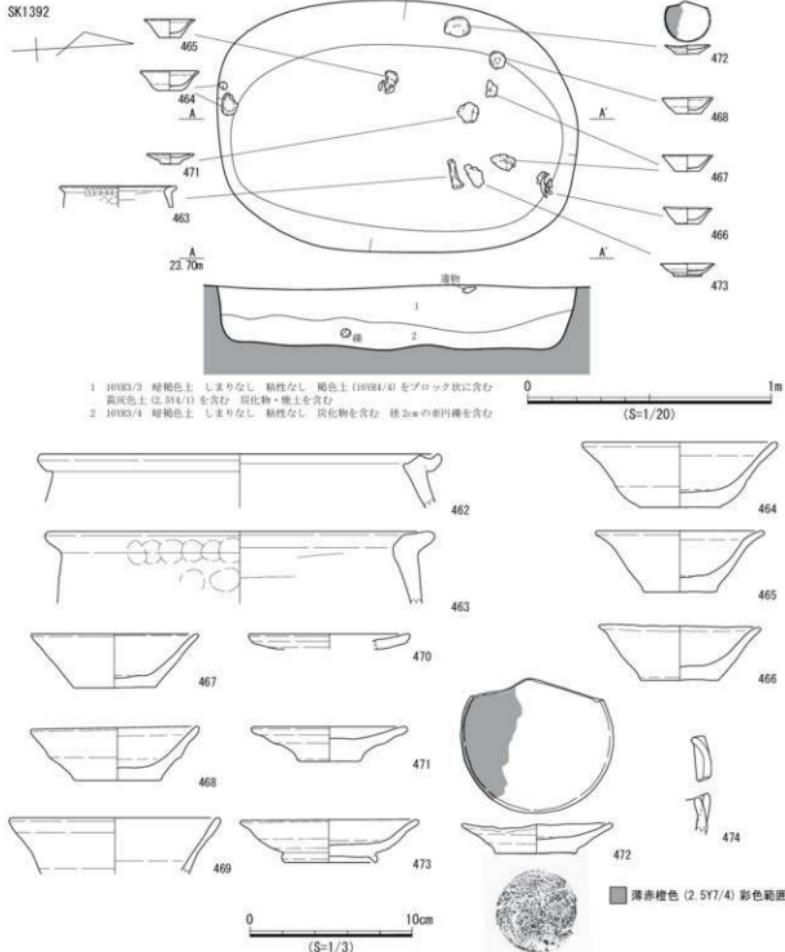


図68 SK1392遺構図・出土遺物実測図

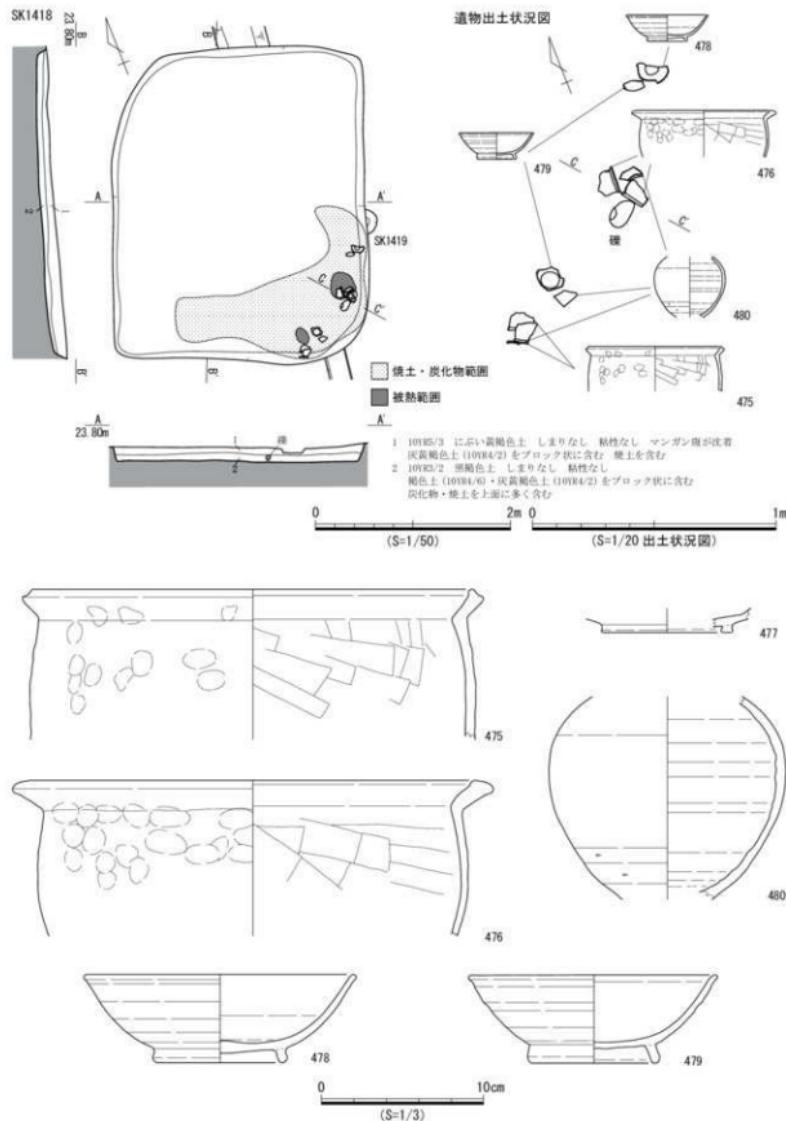


図 69 SK1418 遺構図・出土遺物実測図

焼土の範囲を2か所確認した。その付近には一部に明瞭な被熱痕跡が認められる繊が出土した。本遺構は何らかの作業場であった可能性があり、2層上面がその床面と考えられる。

**遺物出土状況** 2層上面から土師器2点、灰釉陶器の碗5点、灰釉陶器の蓋1点が出土した。清郷型鍋の破片2点が重なって出土した。その他の遺物はいずれも小片であり、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、6点を図示した。475・476は清郷型鍋のA類である。口縁部は「く」の字に屈折し、口縁部端部は面取りされ、平坦面を有する。475・476は同一個体と考えられる。477は美濃須衛窯のV期第1小期に比定した須恵器の坏身である。幅の狭い高台が、底部外面端部の内に付される。478・479は虎渓山1号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。479は胴部下面まで施釉する。480は灰釉陶器の長頸瓶である。胴部全面に施釉される。

**時期** 出土した灰釉陶器から、本遺構は10世紀中葉から11世紀初頭以降と考えられる。

#### SK1475（図70・71）

**検出状況** 17地点GK15グリッド、IV b層上面で検出した。IV b層と本遺構の埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。東側がSK1474と重複し、本遺構が古い。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は丸みを帯び、西壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。1層がやや南東に偏る堆積である。いずれの土層も焼土粒や炭化物を多く含み、1層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器が23点、須恵器8点が出土した。土器はいずれも小片であり、1層から散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、5点を図示した。481・482は口縁部の形状・胎土から平底甕と思われる。いずれも口縁部外面から胴部にかけて斜位にハケメ調整を施す。482は口縁部内面にも横位にハケメ調整を施す。483・484は美濃須衛窯のV期第1小期に比定した須恵器の坏蓋である。484は口縁部端部にわずかに返しが認められる。内面が摩滅し、墨痕が認められることから転用窯の可能性がある。485は美濃須衛窯のV期第1小期に比定した須恵器の盤である。口縁部の形状から有台盤であると考えられる。口縁部が直線的に開き、その端部に内傾面を有する。

**時期** 出土した須恵器から、本遺構は9世紀初頭から後葉以降と考えられる。

#### SK1476（図70・71）

**検出状況** 17地点GK15グリッド、IV b層上面で検出した。埋土にブロック土を含み、平面形は明瞭であった。東側をSK1474と重複し、本遺構が古い。

**規模・形状** 平面形は長梢円形である。底面は概ね平坦で、北壁面の傾斜は急であるが、南壁面は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積している。2層に炭化物を含む。1層はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器が23点、須恵器8点が出土した。土器はいずれも小片で、散在して出土した。その他に埋土上層から山茶碗の細片3点が出土したが、重複する遺構からの混ざり込みの可能性がある。

**出土遺物** 出土遺物のうち、6点を図示した。486・487はS字甕である。486はB類で、487はC類である。

487は口縁部外面の上段と下段の境の稜が明瞭である。488～490は美濃須衛窯のV期第1小期に比定した

須恵器である。488は有台盤である。489は壊身B類である。器壁は薄く、胴部は丸みを帯びる。底部外面に墨痕が見られる。490は壊身C類で、高台の幅が広く、内湾している。底部外面に墨書が認められる。表面の摩耗が著しく判読が難しいが、「天」「干」の2文字であろうか。491は8世紀前葉の畿内系の壊身C類で高台の幅が狭く、ハの字状に開く。

**時期** 出土した須恵器から、本遺構は9世紀初頭から後葉以降と考えられる。

#### SK1488 (図70・71)

**検出状況** 17地点 GL14グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK1487・SK1490と重複し、いずれの遺構より本遺構が古い。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積している。いずれの土層もブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器が16点、須恵器1点が出土した。1層の中央部から、丸底甕の口縁部から胴部にかけての破片が縦位で出土した。その直下から別個体の丸底甕の胴部が出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、4点を図示した。492～494は土師器の甕である。492の口縁部は外反し、口縁部端部は面取りされている。胴部外面には、斜め方向にやや粗いハケ調整を施す。493・494は甕の胴部である。493・494は細かいハケ調整を施す。493は縦位にハケ調整を施し、494は縦位のハケ調整後

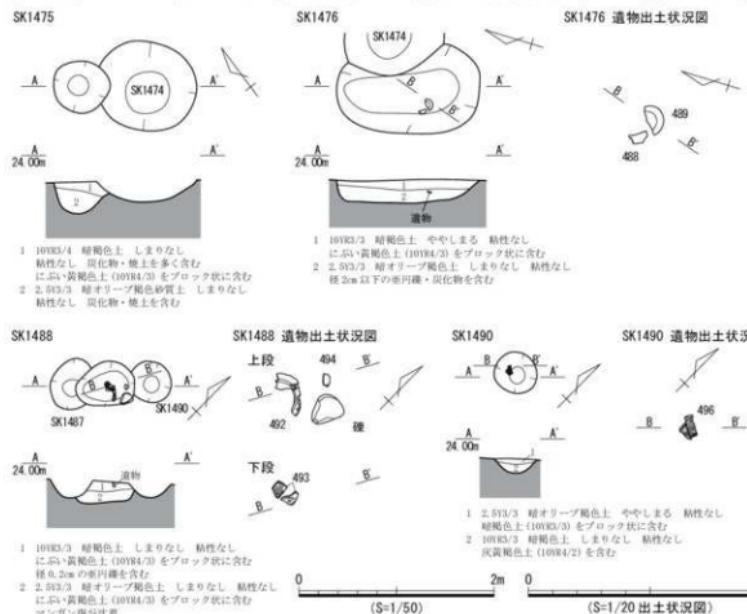


図70 SK1475・SK1476・SK1488・SK1490 遺構図

に斜位のハケ調整を施す。495は美濃須衛窯のIV期第3小期に比定した須恵器の坏蓋である。

**時期** 出土した須恵器から、本遺構は8世紀後葉から末と考えられる。

#### SK1490（図70・71）

**検出状況** 17地点GL14グリッド、IVb層上面で検出した。IVb層と本遺構の埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。西側がSK1488と重複し、本遺構が新しい。

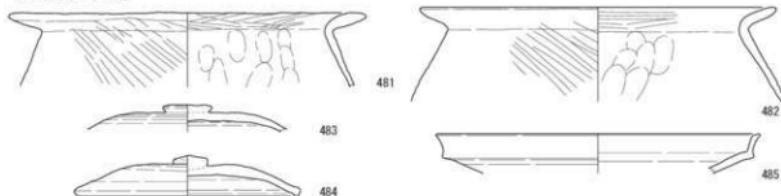
**規模・形状** 平面形は円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。水平に堆積し、いずれの土層もブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

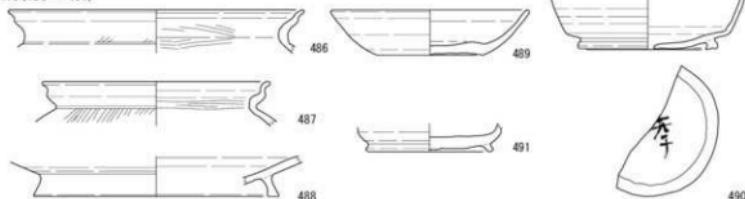
**遺物出土状況** 遺構の西側の1層で土師器の破片が出土した。

**出土遺物** 496は492～494に類似する丸底甕と思われる。斜位に細かいハケ調整を施す。

**時期** 本遺構より古いSK1488は8世紀後葉から末以降であるため、重複関係から本遺構は8世紀後葉からSK1475(481～485)



#### SK1476(486～491)



#### SK1488(492～495)

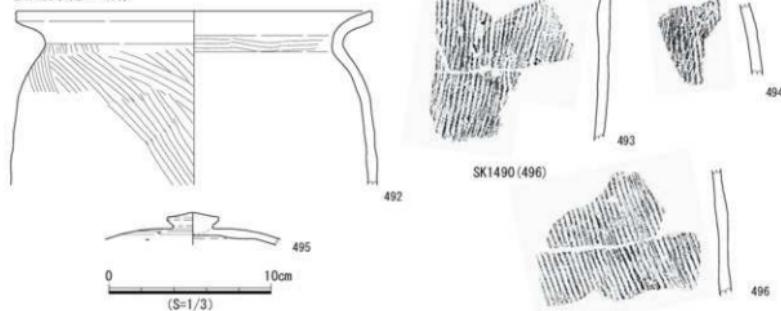


図71 SK1475・SK1476・SK1488・SK1490出土遺物実測図

末以降と考えられる。

### (2) 柱穴

#### SP125 (図72)

**検出状況** 17地点GE15グリッド、IVb層上面で検出した。埋土内に焼土や炭化物を含み、平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。底面は丸みを帯び、断面形は插鉢状である。

**埋土** 4層に分層した。2層が柱痕跡である。2層と4層との層界で炭化物の堆積と柱当たりを確認した。

3層が柱掘方埋土であり、ブロック土を含む。4層にはぶい黄褐色の砂質土であり、ブロック土を含む。

**遺物出土状況** 須恵器1点、灰釉陶器2点が出土した。いずれも小片であり、1層から散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、3点を図示した。497は須恵器の甕である。498は虎渓山1号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。499は土鍤である。

**時期** 出土した灰釉陶器から、本遺構は10世紀中葉～11世紀初頭以降と考えられる。

### (3) 溝状遺構

#### SD125 (図72)

**検出状況** 18地点DT10～HA10グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 南北方向に延び、南側はやや東側へ屈曲する。南北端は発堀区外に延びる。底面は概ね平坦である。壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。1層が西側に向かって大きく堆積する。いずれの土層も均質であることから自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 1層から土師器1点、灰釉陶器2点が散在して出土した。

**出土遺物** 500は虎渓山1号窯式から丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の皿である。

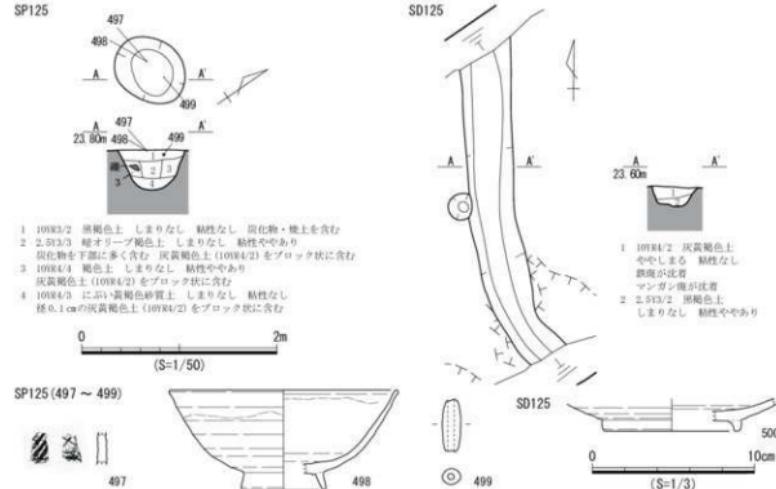


図72 SP125・SD125 遺構図・出土遺物実測図

時期 出土した灰釉陶器から、本遺構は10世紀中葉から11世紀中葉以降と考えられる。

### 3 中世の遺構・遺物

#### (1) 積穴建物

##### SI 1 (図73)

検出状況 17地点GF20～HF1グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SP95・SP97・SK958と重複し、本遺構が古い。

規模・形状 平面形は四辺がほぼ直線状の隅丸方形である。長軸方位はN-76°-Wである。底面は平坦であり、東壁面の傾斜はほぼ垂直に立ち上がるが、その他はやや開く。壁の残存高は最大で0.15mである。規模は小規模で、カマドや壁際構等の付属施設は見られず、何らかの作業場若しくは道具置き場のような一時的な施設であったと推測される。

埋土 3層に分層した。いずれの土層もほぼ水平に堆積する。埋土中にブロック土を含むことから人為堆

SI 1

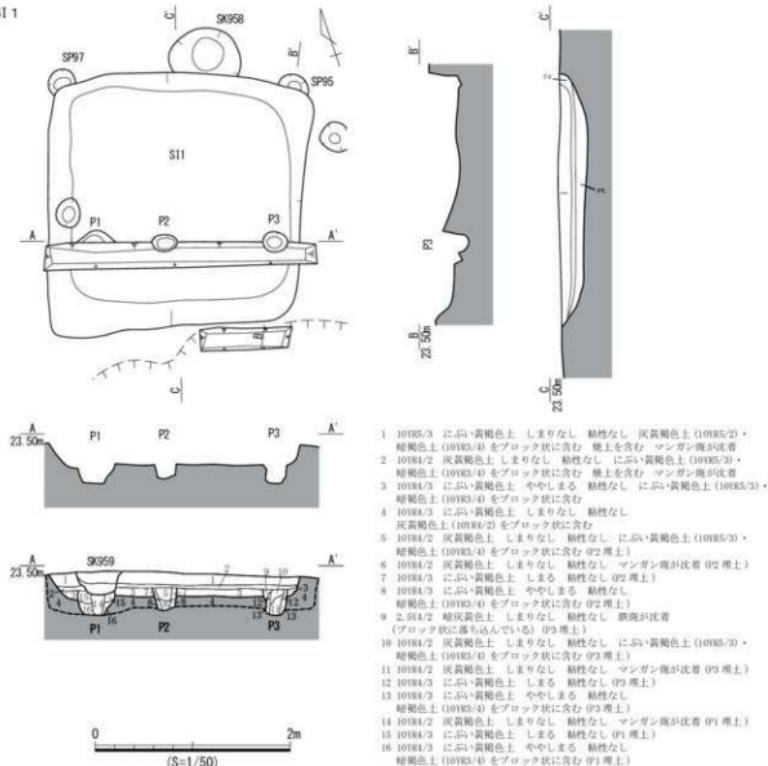


図73 SI 1 遺構図

積と考えられる。1層・2層で焼土、炭化物を含む。

**床面** 床面はほぼ平坦である。貼床（3層）が建物の残存する部分全体にわたって明瞭に残る。貼床は暗褐色土のブロックを含み、明瞭なしまりは認められない。貼床上面で検出した遺構は柱穴3基で、平面形は円形若しくは梢円形である。いずれも柱痕跡が認められた。掘方底面で遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 1層から土師器4点、須恵器1点、灰釉陶器3点、山茶碗1点が出土した。いずれも小片であり、散在して出土した。

**出土遺物** 図示はできなかった。

**時期** 出土遺物の時期は12世紀後葉のものと思われるが、いずれも小片で残存状態も悪いため、時期を特定することはできない。よって本遺構の時期は12世紀後葉以降とする。

## (2) 掘立柱建物

SB4（図74）

**検出状況** 17地点GH19グリッド、IVb層上面で検出した。2間×1間以上の建物である。いずれの柱穴も平面形は明瞭であった。

SB4

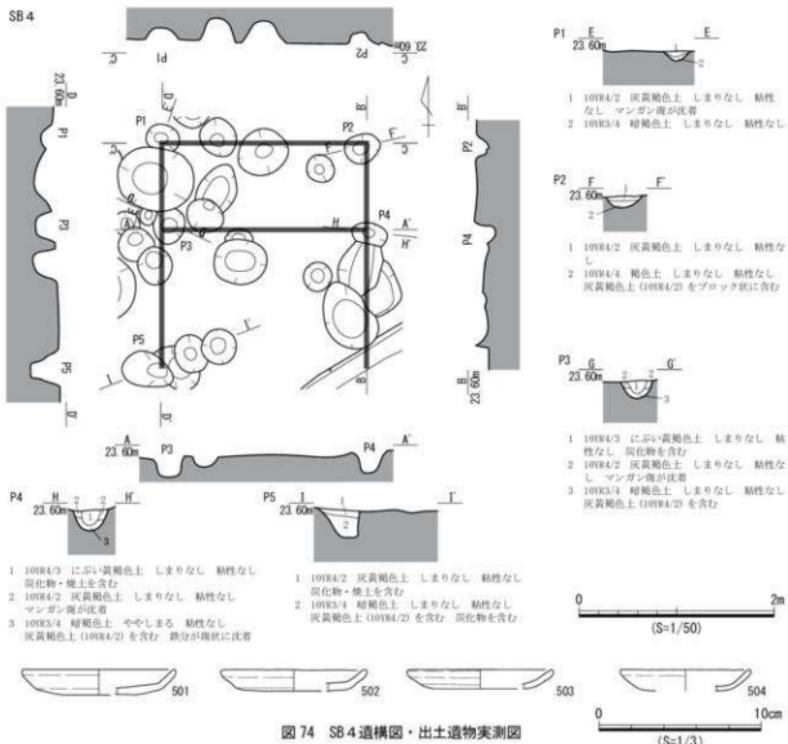


図74 SB4造構図・出土遺物実測図

**規模・形状** 長軸方位はN-0° - EWである。平面形はやや南北に長い長方形であり、桁行2間(2.5m)、柱間1.0m-1.5m)、梁行1間(2.0m)、面積5m<sup>2</sup>を測る。P5に対応する柱穴は発掘外、もしくは排水溝の掘削により消失したと推測される。

**柱穴** 6基の柱穴から成る。柱穴の平面形は円形若しくは楕円形である。埋土はP3・P4で柱痕跡を確認し、P2・P5は炭化物若しくはブロック土を含むことから堆積と考えられる。

**出土遺物** P1から土師器9点、須恵器1点、山茶碗1点が出土した。土師器皿のM2類(501)、M3類(502・503)が出土した。P3から灰釉陶器1点、土師器皿M3類(504)が出土した。P5から灰釉陶器1点が出土した。

**時期** 出土した土師器皿は尾張型山茶碗の第5型式・第6型式と共に伴して出土していることから、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉の時期と考えられる。

SB5

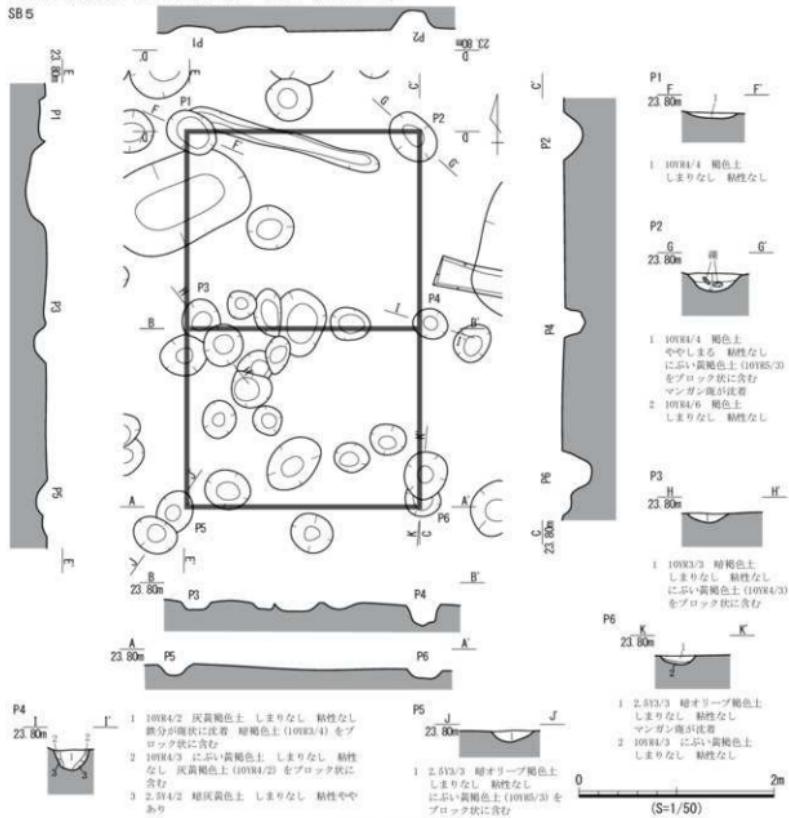


図75 SB5遺構図

**SB 5(図75)**

**検出状況** 17地点GD16～GE16グリッド、IVb層上面で検出した。2間×1間の建物である。いずれの柱穴も平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 長軸方位がN-0°～EWである。平面形は南北に長い長方形であり、桁行2間(3.8m、柱間2.0m-1.8m)、梁行1間(2.5m)、面積10m<sup>2</sup>を測る。P3・P4は隅柱間の柱筋からやや東側にずれている。

**柱穴** 6基の柱穴から成る。柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。埋土はP4で柱痕跡を確認し、P2・P3・P5はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**出土遺物** P2から折戸53号窯式に比定した灰釉陶器の碗1点が出土した。その他に土師器1点が出土した。P6から須恵器の坏身1点が出土した。

**時期** SB4やSD199などの本遺構の周辺にある中世の遺構と長軸が揃うことから、本遺構は13世紀初頭から中葉以降と考えられる。

**(3) 檻****SA 4(図76)**

**検出状況** 17地点GE18～GF18グリッド、IVb層上面で検出した。各柱穴の検出時の平面形は、いずれも明瞭であった。検出時の埋土や規模が類似した柱穴がほぼ等間隔に並ぶことから檻として報告する。

**規模・形状** 柱間はP1から1.3m-1.4m-2.1m-2.8mで、方位はN-9°～Wである。SD198と方向が揃うことから付属するものと考えられる。

**柱穴** 4基の柱穴から成る。柱穴の平面形は円形若しくは梢円形であり、長軸長0.24m～0.31m、深さは、約0.1mである。埋土はP1・P2・P4で柱痕跡を確認した。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** SD198と方向が揃うことから、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭と考えられる。

**(4) 土坑****SK591(図76～78)**

**検出状況** 6地点DT6～DT7グリッド、IVb層上面で検出した。IVb層と本遺構の埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。規模・形状は竪穴状の遺構であるが、底面から溝や柱穴等の付属遺構は確認できなかった。

**規模・形状** 平面形は方形である。底面は平坦で、西側に平坦面を有し、東側へ緩やかに下降している。東壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。水平に堆積している。1層に炭化物と土器片が多く含んでいることから人為堆積と考えられる。1層から出土した礫の一部には明瞭な被熱痕跡が認められるが、掘方や埋土には被熱痕跡は観察されなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器47点、灰釉陶器4点、山茶碗189点、陶器1点、金属製品2点、鉄滓4点が出土した。主に1層から散在して出土した。遺構の北側から山茶碗2点が正位で、東側から山茶碗1点が逆位で出土した。またその周辺から台石や被熱痕のある礫が複数出土した。何らかの作業場と考えられる。

**出土遺物** 出土遺物のうち、25点を図示した。505はロクロ成形の土師器柱状高台皿である。506は美濃須

衛窓IV期第3小期からV期第1小期に比定した須恵器の壺蓋C類である。507・508は灰釉陶器の碗である。507は丸石2号窓式に比定した。509～516は尾張型山茶碗である。509～514は碗である。509は第4型式で、底部内面は摩減が著しい。514は第6型式、その他は第5型式である。515・516は小碗である。515は第3型式、516は第4型式である。517は温美・湖西型第5型式の山茶碗である。口縁部に指頭圧痕が認められ、輪花を呈す。518はM2類の土師器皿である。519～521は伊勢型鍋である。519・520はA類、520の胴部外面は成形段階の指オサエが残り、内面は指ナデが見られる。521はA類からB類で口縁部端部は挿み上げられる。522・523は台石である。いずれも表面は被熱しており、表面は敲打痕が顕著に見られる。524は叩石、525は叩石・磨石である。いずれも一方の側面に敲打痕が見られる。526は砥石である。527

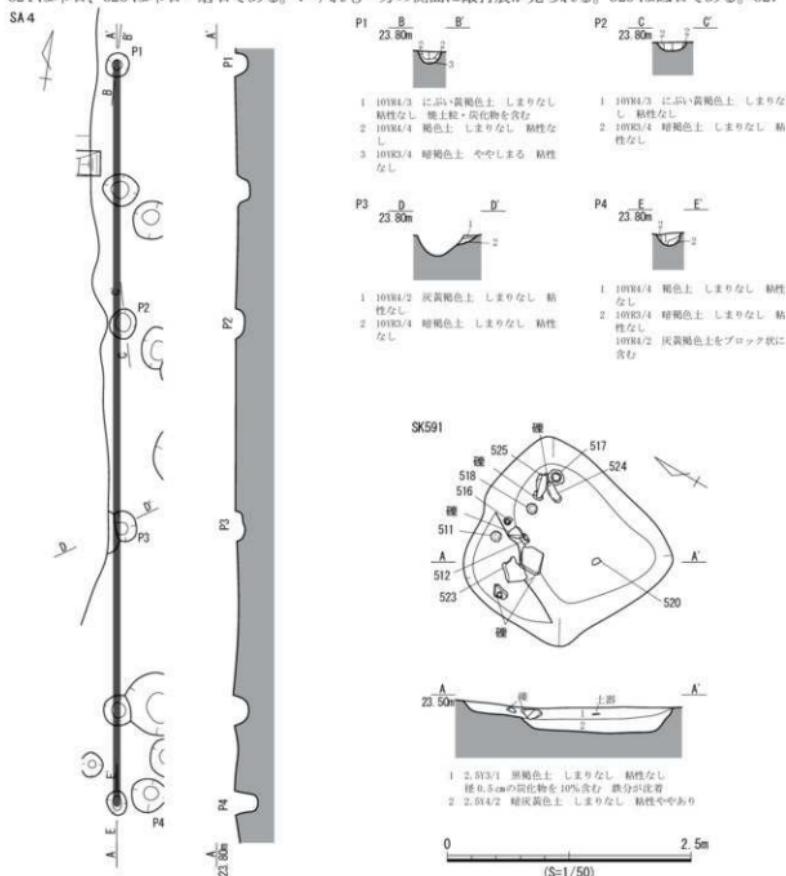


図 76 SA 4・SK591 造構図

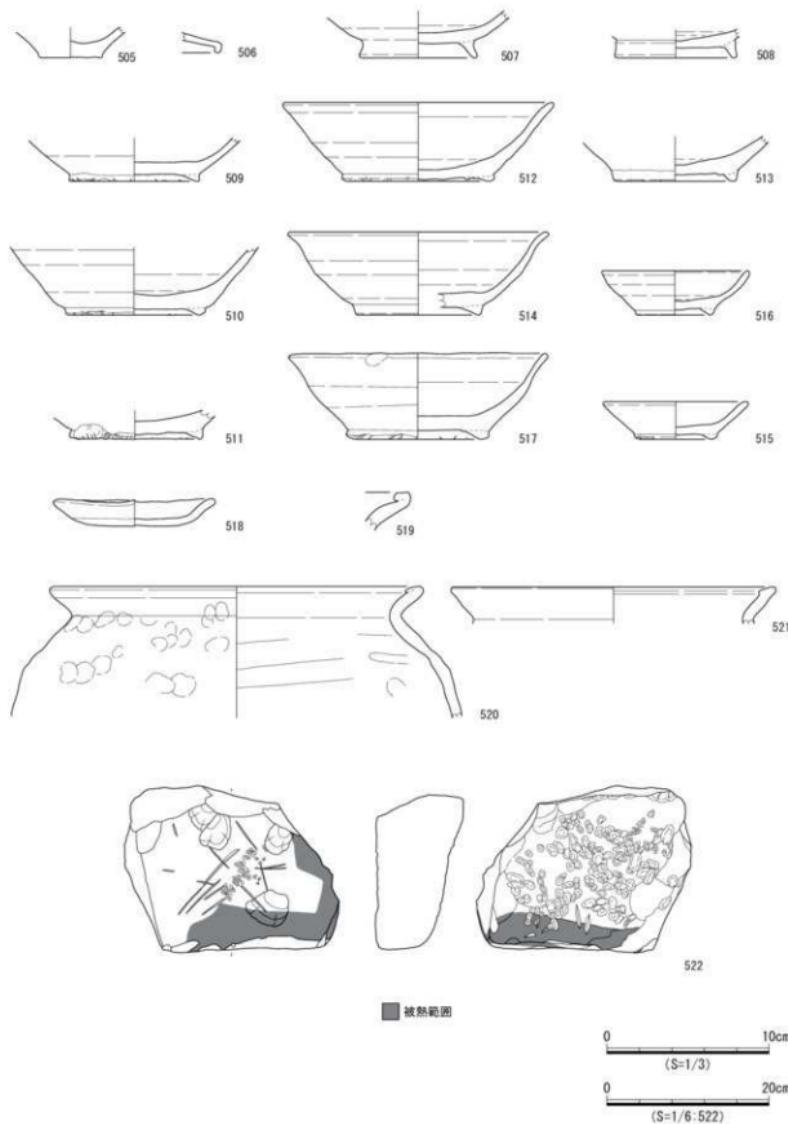


図 77 SK591 出土遺物実測図 (1)

は鉄滓である。1／3程度に欠損している。碗状に窪んでおり、楕円形と思われる。528は板状の鉄塊である。木炭痕を含む。529は金属製品である。丸く折れ曲がっている。器種等は不明である。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SK595 (図79・80)

**検出状況** 6地点 DS 7グリッド、IV b層上面で検出した。IV b層と本遺構の埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は長楕円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 4層に分層した。4層は厚く堆積し、3層はレンズ状に堆積をしている。埋土内に径の大きい礫が複数含まれ、遺物も多く含まれることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器6点、山茶碗5点、砥石1点が出土した。4層の中央部から山茶碗の底部が正位で出土した。

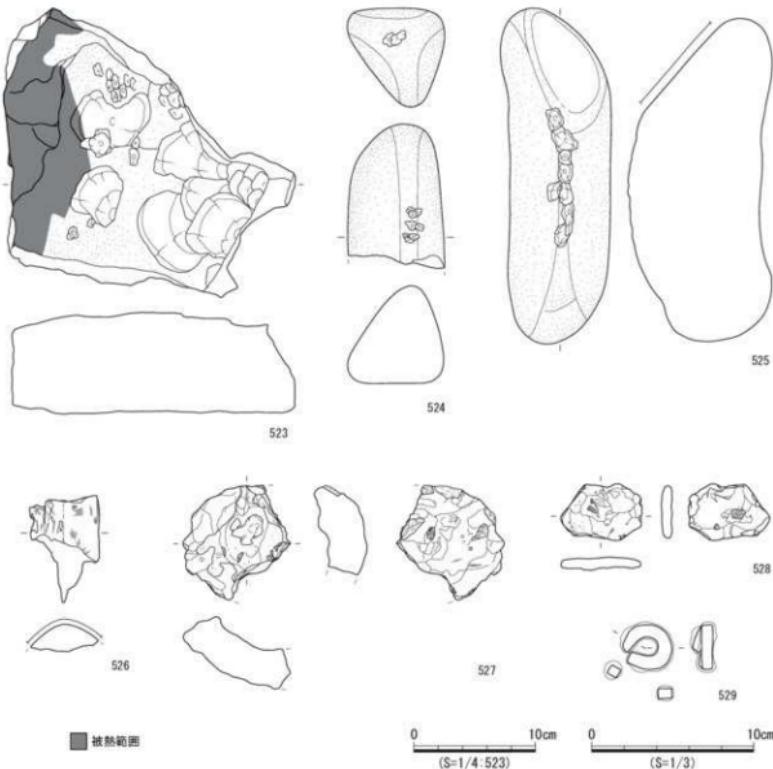


図78 SK591出土遺物実測図(2)

**出土遺物** 出土遺物のうち、5点を図示した。530はロクロ成形の土師器の柱状高台皿である。胴部は直線的に立ち上がる。531は尾張型第2型式の片口鉢である。532は尾張型第4型式の山茶碗である。533は東濃型谷迫間2号窯式に比定した山茶碗である。534は砥石である。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は12世紀中葉から後葉と考えられる。

#### SK605 (図79・80)

**検出状況** 6地点 DT7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK606と重複し本遺構が新しい。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

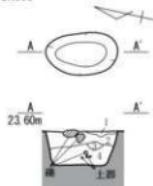
**埋土** 3層に分層した。いずれの土層もやや北側に偏る堆積である。2層にブロック土を含み、輪羽口と思われる破片を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器1点、須恵器1点、山茶碗2点、石製の輪羽口1点が出土した。1層で山茶碗(536)が正位で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、2点を図示した。535はロクロ成形の土師器柱状高台皿である。536は東濃型谷迫間2号窯式に比定した山茶碗である。胴部から底部外面にかけて煤が付着する。

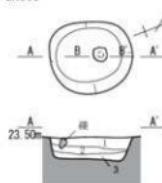
**時期** SK606との重複関係から、本遺構は13世紀初頭から中葉以降と考えられる。

#### SK595



1. 10YR4/2 黒褐色土 やしめる 粘性なし
2. 10YR4/2 黑褐色土 しまりなし 粘性なし
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし
4. 2.5Y5/2 黑褐色土 しまりなし 粘性ややあり 残3cmの細川繩をわずかに含む

#### SK605



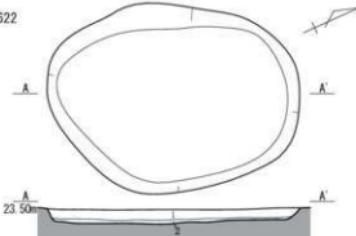
1. 2.5Y3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし
2. 10Y4/2 黑褐色土 しまりなし 粘性なし 残1cmの  
黄灰褐色土 (2.5Y4/2) をブロック状に含む 鉄分が沈着
3. 2.5Y4/1 黄褐色土 しまりなし 粘性なし

#### SK605 遺物出土状況図



1. 10Y4/1 黑褐色土 しまる 粘性なし 細粒土 (2.5 Y3/4) を40%含む 鉄分が沈着
2. 2.5Y4/1 黄褐色土 しまりなし 粘性なし 残0.5cmの  
黄褐色土 (2.5Y3/6) をブロック状にわずかに含む  
細粒土 (2.5Y3/4) を10%含む

#### SK622



1. 10Y4/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性なし 残10cmの褐色土 (2.5Y3/7)  
をブロック状に30%含む 明褐色土 (2.5Y6/6) をブロック状に含む 塩化物含  
む 鉄分が沈着
2. 10Y3/3 姫褐色土 しまりなし 粘性ややあり

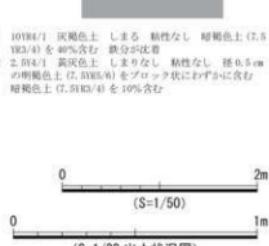


図79 SK595・SK605・SK606・SK622 遺構図

## SK606 (図 79・80)

**検出状況** 6地点 DT 7 グリッド、IV b 層上面で検出した。南西端が SK605 と重複し、本遺構が古い。

**規模・形状** 平面形は南北に長い長楕円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。水平に堆積している。いずれの土層もブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 17点、灰釉陶器 4点、山茶碗 32点が出土した。いずれも小片であり、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、4点を図示した。537は明和 27号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。538・539は尾張型第5型式の山茶碗である。540は尾張型第6型式の山茶碗である。胴部と底部の境に明瞭な稜が認められた。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は13世紀初頭から中葉以降と考えられる。

## SK595 (530～534)

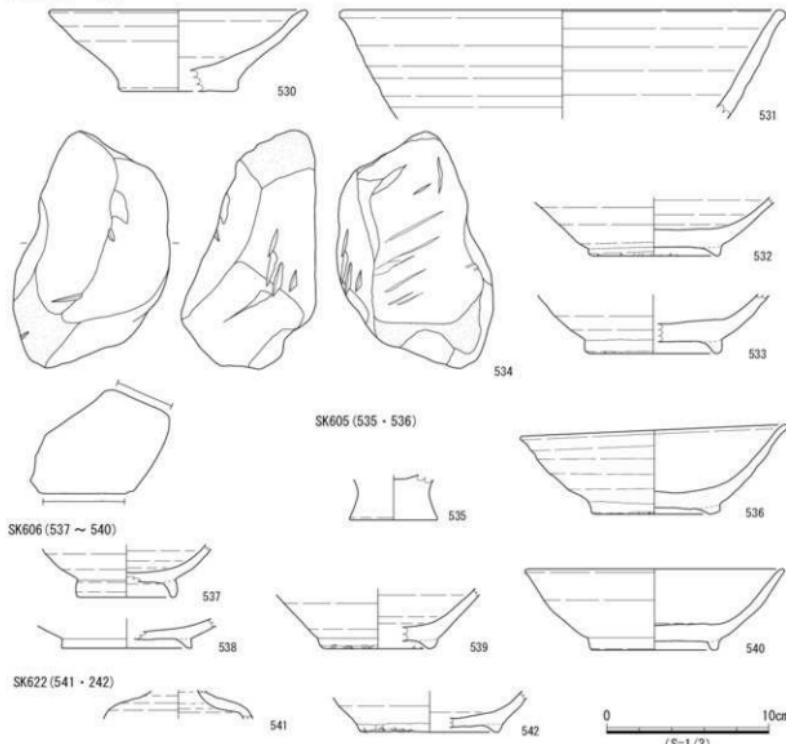


図 80 SK595・SK605・SK606・SK622 出土遺物実測図

## SK622 (図79・80)

**検出状況** 6地点 DS6・DS7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 南北に長い長楕円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積している。1層にブロック土、焼土粒や炭化物を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から須恵器1点、灰釉陶器2点、山茶碗3点が出土した。いずれも小片で、1層の東側で散在して出土した。出土した遺物の中に小型壺が含まれており、本遺構若しくは周辺に祭祀場のような施設があった可能性がある。

**出土遺物** 出土遺物のうち、2点を図示した。541は美濃須衛窯V期第1小期に比定した須恵器の小型壺である。542は尾張型第4型式の山茶碗である。内面は使用による摩滅が著しい。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は12世紀中葉から後葉以降と考えられる。

## SK792 (図81)

**検出状況** 6地点 DT1・DT2グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

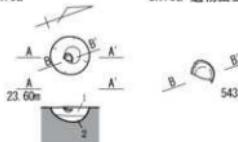
**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積している。1層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 1層の西側からほぼ完形の山茶碗(543)が正位で出土した。その他1層からいずれも小片の土師器4点、灰釉陶器2点、山茶碗7点が出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。543は尾張型山茶碗の第3型式併行の東濃型山茶碗の小碗である。底部中央に穿孔が見られる。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は11世紀後葉から12世紀中葉と考えられる。

## SK792



SK792 遺物出土状況図

1. 2.515/3 黄褐色土、ややしまる 粘性ややあり  
1cmの砂質粘土(10R3/3)をブロック状に20%含む  
2. 2.513/3 暗オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし

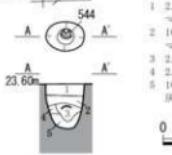
0 50cm  
(S=1/20 出土状況図)

## SK792



543

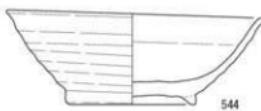
## SK831



1. 2.014/3 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし  
マンガン斑が沈着  
2. 10W4/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性あり  
マンガン斑が沈着  
3. 2.015/3 砂灰褐色土 しまりなし 粘性あり  
4. 2.014/3 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性あり  
5. 10W2/3 黒褐色土 しまりなし 粘性あり  
炭質褐色土(10R5/2)をブロック状に含む

0 2m  
(S=1/50)

## SK831



544

0 10cm  
(S=1/3)

図81 SK792・SK831 遺構図・出土遺物実測図

## SK831 (図81)

**検出状況** 6地点 CT20 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は橢円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 5層に分層した。3層は4層・5層を掘り込むように堆積し、遺物を含む。1層を除くいずれの層も粘性が強い埋土であり、5層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。1層は水平に堆積しており、自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 3層からほぼ完形の山茶碗(544)が逆位で出土した。その他に山茶碗の小片3点が出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。544は尾張型山茶碗の第3型式併行の東濃型山茶碗である。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は11世紀後葉から12世紀中葉と考えられる。

## SK1029 (図82)

**検出状況** 17地点 GG19・GH19 グリッド、IV b 層上面で検出した。検出面に礫や山茶碗等の遺物が表出していた。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。北側に堆積が偏るもの、ほぼ水平に堆積している。2層にブロック土を含み、埋土内に多くの遺物が含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器47点、灰釉陶器4点、山茶碗16点が出土した。北西側の壁面近くで完形の山茶碗の小皿2点、土坑中央で1点が出土した。遺構の南西側で径0.3mの円礫と重なるように正位の山茶碗と底部部分の破片が出土し、礫の直下に完形の小皿が正位で出土した。いずれの山茶碗が出土した近くで土師器皿片が出土した。遺物の出土状況から儀礼に伴う可能性が考えられる。出土遺物のうち、11点を図示した。

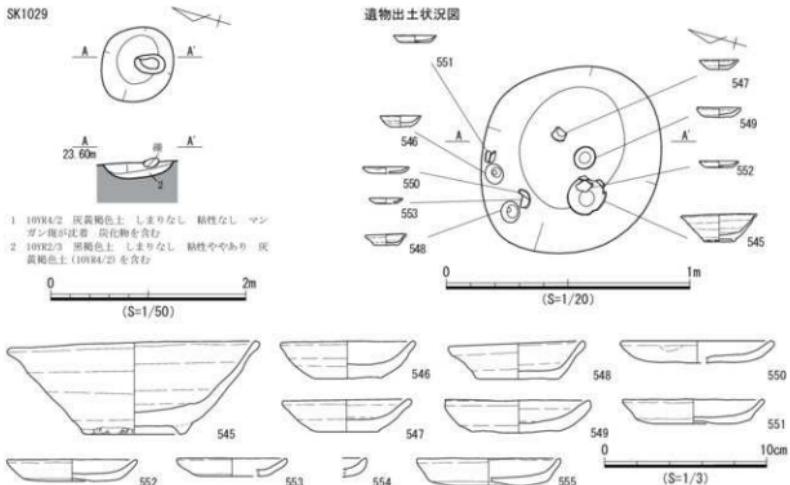


図82 SK1029 遺構図・出土遺物実測図

**出土遺物** 545～549は尾張型第6型式の山茶碗である。545は碗、その他は小皿である。550～555は土師器皿である。550・551はM2類で端部が厚い。その他はM3類である。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SK1095（図83・84）

**検出状況** 17地点 GG18・GH18グリッド、IVb層上面で検出した。SK1086・SK1094と重複し、本遺構が古い。SK1094の完掘後北西側の掘方が明瞭に確認できた。SD198と重複し、本遺構は出土遺物、堆積する埋土の状況からSD198と同時期と考えられる。

**規模・形状** 平面形は長方形である。底面はV層である礫層が見られ、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 3層に分層した。東側に堆積が偏るもの水平に堆積している。いずれの土層もブロック土や径2cm以下の亜円礫を含むことから人為堆積と考えられる。3層は砂質土や亜円礫を含む。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器が58点、須恵器2点、灰釉陶器20点、山茶碗133点、陶器10点が出土した。いずれも小片で、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、18点を図示した。556～562は尾張型の山茶碗である。556～558は碗である。556は第3型式、557は第5型式、558は第6型式である。559・560は小碗である。559は第4型式、560は第3型式である。561・562は片口鉢である。561は第4型式、562は10型式である。563～566は東濃型山茶碗である。563・564は大畑大洞4号窯式に比定した碗・小皿である。565・566は大洞東1号窯式に比定した碗・小皿である。567はII類からIII類の白磁碗である。568～570は土師器皿である。568はM3類、569はM4類、570はC1類である。571は伊勢型鍋のD類である。572は古瀬戸後I期の折縁深皿である。573は常滑産の三筋壺である。

**時期** 出土した山茶碗から14世紀後葉から15世紀初頭以降に埋没したと考えられる。

#### SK1372（図83・84）

**検出状況** 17地点 GF16グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。底面は平坦で、壁面の傾斜はやや急である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積している。1層から出土した礫の一部には明瞭な被熱痕跡が認められる。しかし掘方や埋土には被熱痕跡は観察されなかった。1層に礫及び遺物を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 半月状に残存する山茶碗が斜位で出土した。この山茶碗を図示した。

**出土遺物** 574は大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗である。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭と考えられる。

#### SK1450（図83）

**検出状況** 17地点 GE14グリッド、IVb層上面で検出した。検出面に礫が表出しており、平面形は明瞭であった。SD214と重複し、本遺構が新しい。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。中央が窪む堆積であり、1層に焼土やブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。2層は砂質土で、径5mmの亜円礫を含む。

**遺物出土状況** 土師器5点、山茶碗1点が出土した。全て1層から出土し、土器はいずれも小片である。遺構北側で1層から漆片のみが残存し、成分分析を実施した（第5章第9節）。

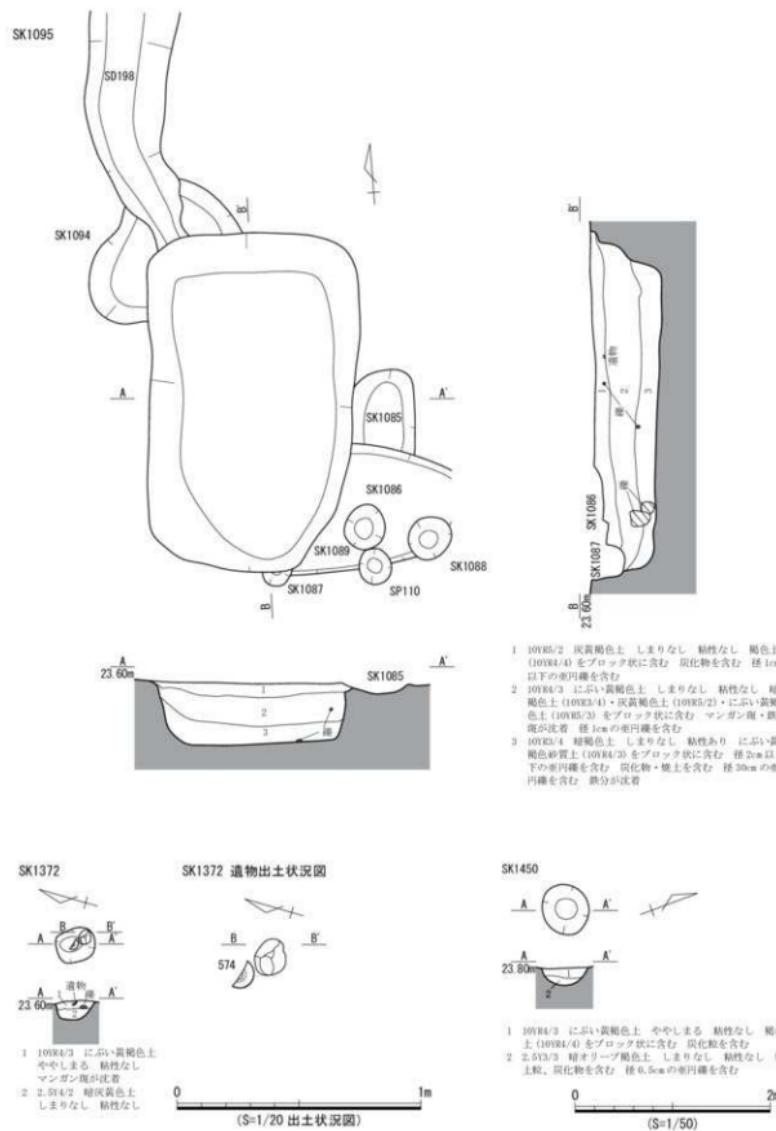


図 83 SK1095・SK1372・SK1450 造構図

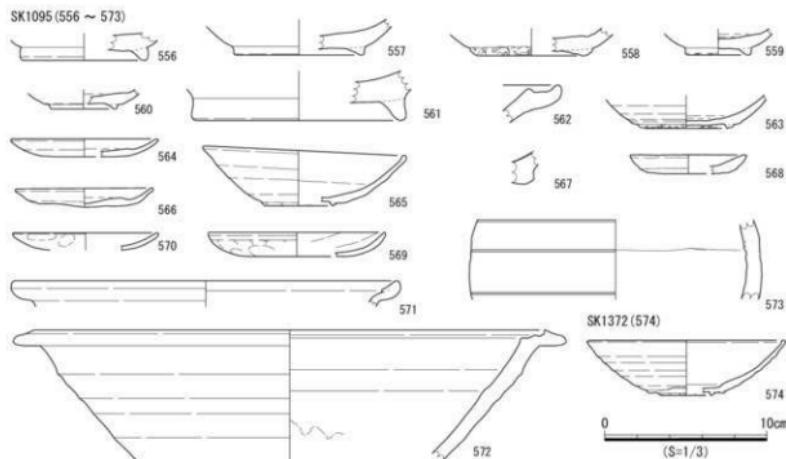


図84 SK1095・SK1372出土遺物実測図

**出土遺物** 図示できる遺物はなかった。

**時期** 本遺構と重複するSD214は13世紀初頭から中葉の遺構であり、それより新しいことから、本遺構は13世紀中葉以降と考えられる。

#### (5) 柱穴

##### SP49(図85)

**検出状況** 6地点DS7・DT7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形で、断面は深い掘鉢状である。

**埋土** 6層に分層した。6層が掘方埋土で、1層から5層が柱痕跡である。3層は炭化物を多量に含む。1層・3層・5層は炭化物を多量に含み、2層にはブロック土を含むことから人為堆積と考える。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器6点、山茶碗3点が出土した。土器はいずれも小片であり、多くは5層から散在して出土した。山茶碗(575)は2層から出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。575は尾張型第5型式の山茶碗である。胸部から底部内面は煤の付着が著しい。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

##### SP81(図85)

**検出状況** 6地点CT20グリッド、IVb層上面で検出した。埋土中に炭化物を多く含み、平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。底面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直である。

**埋土** 2層に分層した。1層は、柱痕跡で多くの炭化物や焼土塊を含む。2層が柱掘方埋土であり、径の大きいブロック土を含む。

**遺物出土状況** 1層から清郷型鍋が出土した。その他山茶碗の小片が1点出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。576は清郷型鍋のC類である。口縁部外面に被熱した痕跡が

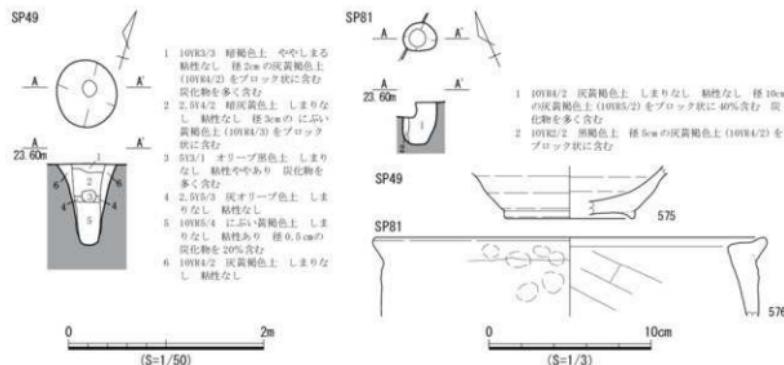


図 85 SP49・SP81 造構図・出土遺物実測図

見られる。断面にも被熱痕跡が見られることから、破損後に被熱したと考えられる。

**時期** 1層から山茶碗の小片が出土したことから、本造構は中世と考えられる。

#### (6) 溝状造構

**SD44 (図 86)**

**検出状況** 7地点 DK10・DK11 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭である。

**規模・形状** 南北方向に延び、南北端が発掘区外にあるため全容は不明である。底面は平坦であり、壁面の傾斜はやや急である。

**埋土** 2層に分層した。東側の窪みに1層が堆積している。埋土が均質であり自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から山茶碗4点が出土した。そのうち1点(577)は、1層から逆位で出土した。そのほかに須恵器の小片が1点出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。577は尾張型山茶碗の第3型式併行の東濃型山茶碗の小碗である。口縁部に指頭圧痕が認められ、輪花を呈す。

**時期** 出土した山茶碗から、本造構は11世紀後葉から12世紀中葉と考えられる。

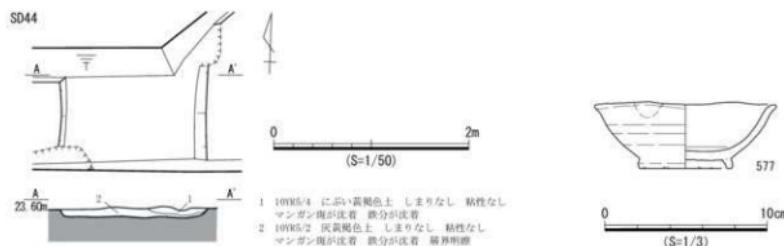


図 86 SD44 造構図・出土遺物実測図

## SD185（図87）

**検出状況** 6地点 GA18～GA20 グリッド、IV b層上面で検出した。複数の土坑と重複し、いずれの遺構より本遺構が古い。IV b層と本遺構の埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は南側の一部が北側にせり出し、東端は西端より幅が広くなる。東西端が発掘区外にあることから全容は不明である。底面は平坦であり、壁面の傾斜は急である。B断面の壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。いずれの土層もブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器6点、山茶碗3点が出土した。土器はいずれも小片であり、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。578はS字型である。胴部から台部に連続した斜位のハケメ調整を施すが、表面の摩滅が著しいため、胴部の一部でしか確認できない。

**時期** 埋土中から山茶碗が出土していることから、本遺構は中世と考えられる。

## SD186（図87）

**検出状況** 17地点 HD3～HD5 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 東西方向に延びる。東端は搅乱坑と重複しており、全容は不明である。底面は平坦である。

**埋土** 単層である。炭化物を含むものの、埋土は均質であることから自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器2点、山茶碗3点が出土した。土器はいずれも小片で、散在して出土した。

**出土遺物** 図示できる遺物はなかった。

**時期** 本遺構の西側延長線上にあるSD197と一連の遺構の可能性があり、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

## SD193（図88・89）

**検出状況** 17地点 GD19・GD20・HD 1 グリッド、IV b層上面で検出した。埋土は砂質土を含み、遺物も表出していた。GD19・GD20 グリッドの遺構の中央の平面形は明瞭であったものの、東西端の周縁はIV b層に近似しており不明瞭であった。北側には本遺構に添うように搅乱があり、一部重複している。

**規模・形状** 東西に延び、東端がやや南に湾曲する。中央部分の幅は広く、底面は概ね平坦であるものの、一部凸凹が見られ、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。A-A'断面では、2層から4層はいずれも砂質土であり、砂質の層が折り重なって堆積している。3層は疊を多く含み、レンズ状に堆積している。1層はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器127点、須恵器134点、灰釉陶器123点、山茶碗594点、常滑産の甕4点、白磁碗2点、不明な陶器5点、砥石1点が出土した。本遺構の西側の2層から灰釉陶器、山茶碗がまとまって出土した。壁面からも小片が多く見られ、土師器の高壺の脚部が横位で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、46点を図示した。579は高壺の脚部である。580～584は清郷型鍋である。580はB類、その他はC類である。584は口縁部に被熱した痕跡が見られ、一部煤が付着する。585～590は須恵器である。585・586は甕である。586は猿投甕で、内外面に黄土を塗布する。587は壺身である。幅の狭い高台が、外面底部端部の内側に付される。588は美濃須衛窯V期第1小期に比定した有台盤である。

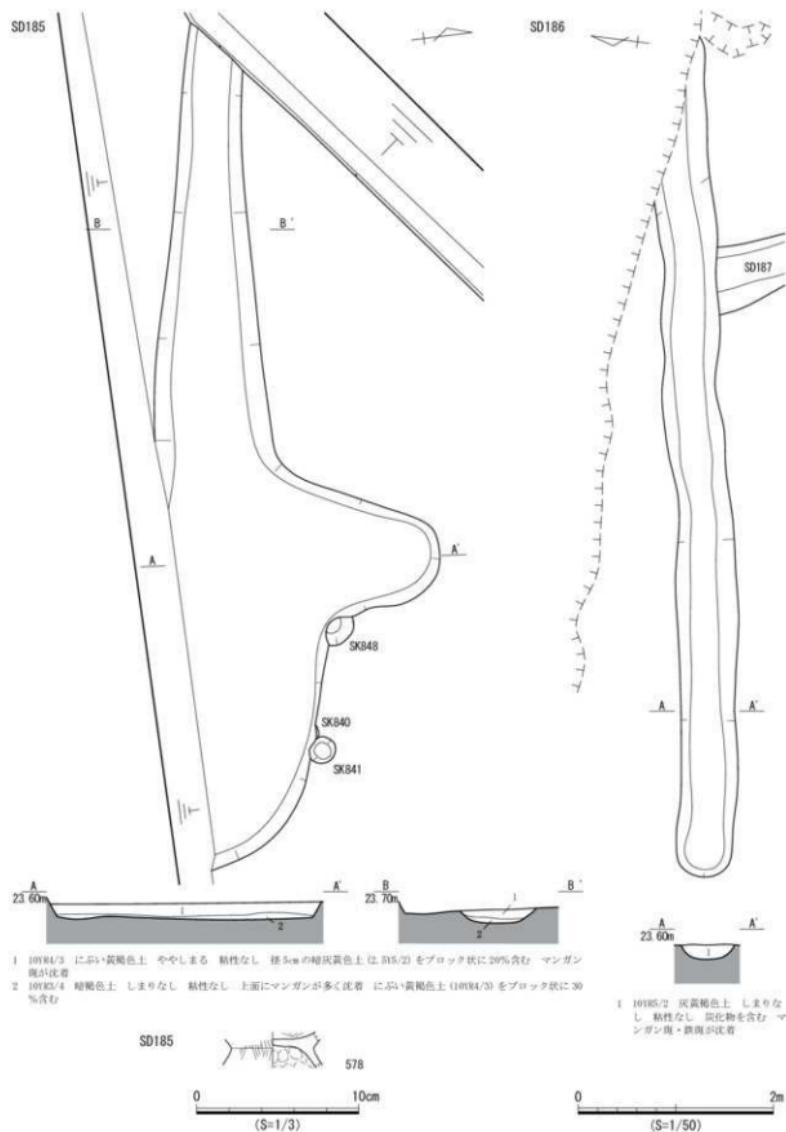


図87 SD185・SD186 造構図・出土遺物実測図

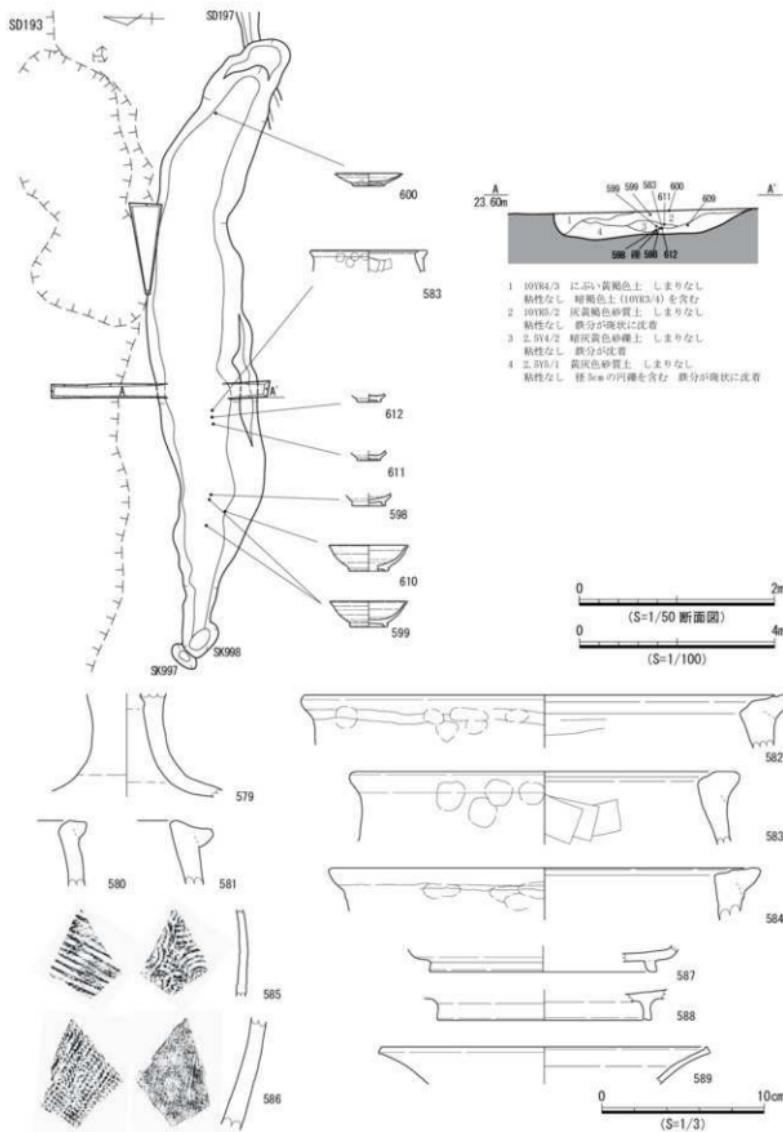


図88 SD193 遺構図・出土遺物実測図（1）

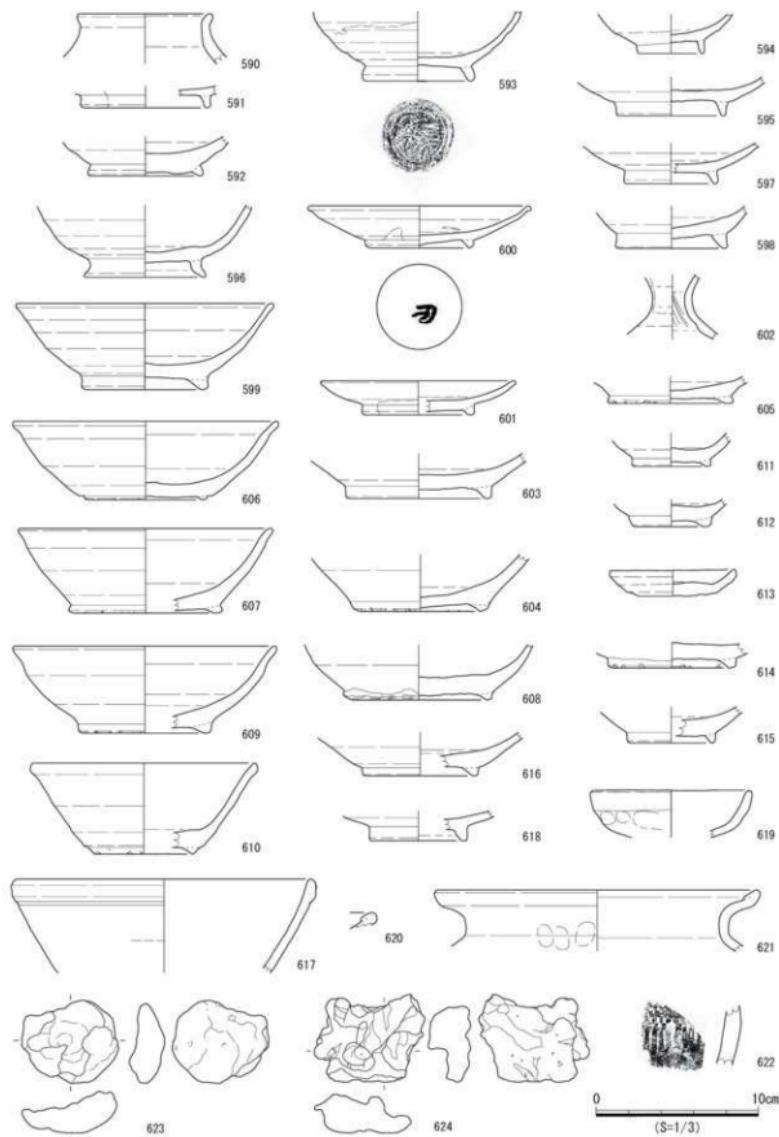


図 89 SD193 出土遺物実測図 (2)

589・590は鉢の口縁部である。591～602は灰釉陶器である。591～599は碗である。591は虎渓山1号窯式から丸石2号窯式に比定した。592は丸石2号窯式に、598は百代寺窯式に、599は百代寺窯式併行に比定した。その他は明和27号窯式に比定した。600・601は皿である。600は折戸53号窯式に比定し、底部外面に墨書が認められる。摩耗が著しく釈読不能である。601は丸石2号窯式に比定した。602は小瓶である。603～613は尾張型山茶碗である。603～610は碗である。603は第3型式、604は第4型式、610は第6型式、その他は第5型式である。608は底部内面及び断面に煤が付着し、割られた後に灯明皿等に転用された可能性がある。610の内面は胴部と底部の境に明瞭な稜が認められ、外面は直線的に立ち上がる。611・612は第3型式の小皿である。613は第6型式の小皿である。614は渥美・湖西型2b期の山茶碗である。615・616は東濃型山茶碗で、尾張型第3型式併行の小碗と碗である。617・618は白磁碗である。617はII類～III類で、618はVII類～IX類である。619はM2類の土師器皿である。620は伊勢型鍋のA類からB類である。621は伊勢型鍋のC類で、口縁部は胴部から直立したのち外反する。622は常滑産の壺である。623・624は鉄滓である。623は中央が窪むことから椀形滓と思われる。624は表面の凹凸が激しく、小孔が見られる。

**時期** 埋土上層から尾張型第6型式の山茶碗が出土していることから、本遺構は13世紀初頭から中葉以降に埋没したと考えられる。

#### SD195（図90）

**検出状況** 17地点GD19・GD20・GE19・GF18・GF19・GG18グリッド、IVb層上面で検出した。埋土は基盤層より白色であり、平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 北東から南西に延び、北側は東に屈曲する。南側は幅が狭まり、やや西側に湾曲して収束する。底面はやや丸みを帯び、壁面傾斜は急である。

**埋土** A-A'断面では3層に分層した。いずれの土層も砂質土で、折り重なりながら堆積している。B-B'断面は単層である。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 土師器14点、灰釉陶器3点、山茶碗18点が出土した。2層の底面付近に、ほぼ完形の小皿3点(656・657・658)が逆位で出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、6点を図示した。625～628は尾張型山茶碗である。625は第5型式の碗である。626～628は小皿である。626は第5型式、その他は第6型式である。626は底部外面に墨書が認められた。表面の摩減が著しく、判読は難しいが「大」と考えられる。その下の墨書は判読不能である。627は口縁部が片口状に窪む。629・630はM3類の土師器皿である。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SD197（図90）

**検出状況** 17地点GD20～HD2グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 東西方向に延び、西端はSD195と重複し、本遺構が古い。底面は平坦である。

**埋土** 2層に分層した。中央が窪む堆積で、A-A'断面はやや北に偏る堆積になっている。埋土は均質であることから自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器6点、灰釉陶器1点、須恵器4点、山茶碗11点が出土した。土器はいずれも小片であり、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、2点を図示した。631は美濃須衛窯のV期第1小期に比定した須恵器坏身のC類である。断面が方形で幅の広い高台が底部外面端部のやや内側に付される。632は尾張型第5型式の山茶

碗の碗である。

**時期** 出土した山茶碗から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭に埋没したと考えられる。

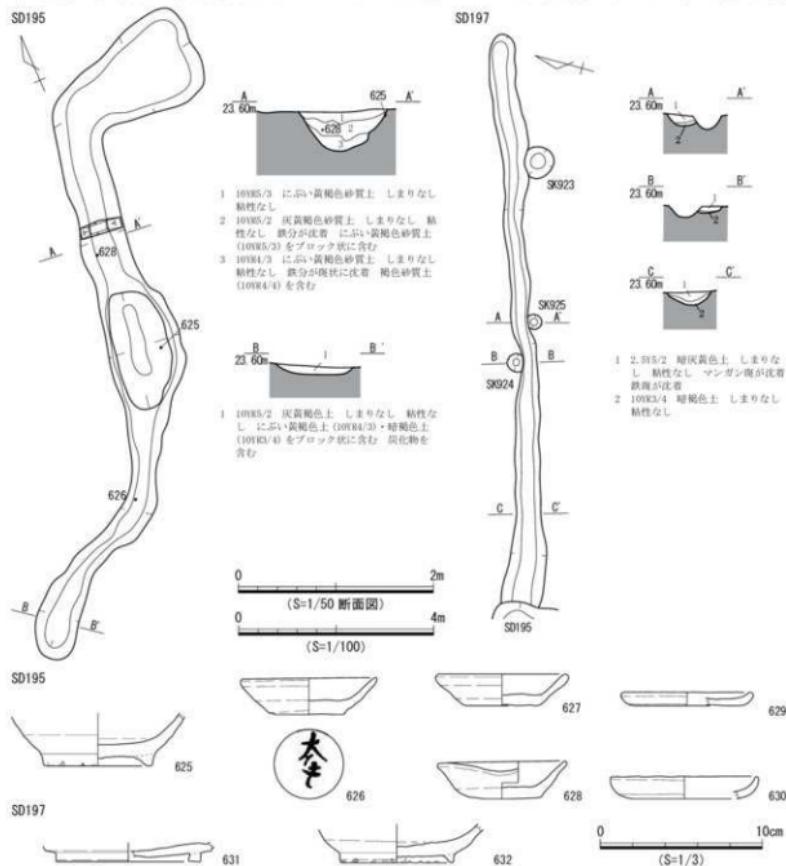
#### SD198(図91)

**検出状況** 17地点GD18～GH18グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 南北に延び、南端はSK1095と結合する。南側は幅が0.88mと北側に比べ狭くなっている。底面は平坦であり、東壁面は、一部幅の狭い平坦面を有し、西側に向かって急に下降している。

**埋土** 3層に分層した。1層・2層はいずれもブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。1層は厚く堆積し、暗褐色土、灰黃褐色土などのブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。3層は砂質

SD195



土が帶状に堆積している。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器62点、須恵器3点、灰釉陶器19点、山茶碗147点、陶器11点が出土した。遺構北側の3層から山茶碗の皿が正位のものと逆位のものとが並んで出土した。尾張型第5型式の山茶碗の小片が多数出土した。その他の土器はいずれも小片であり、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、9点を図示した。633は美濃須衛窯の須恵器甕である。内面に當て具痕が認め

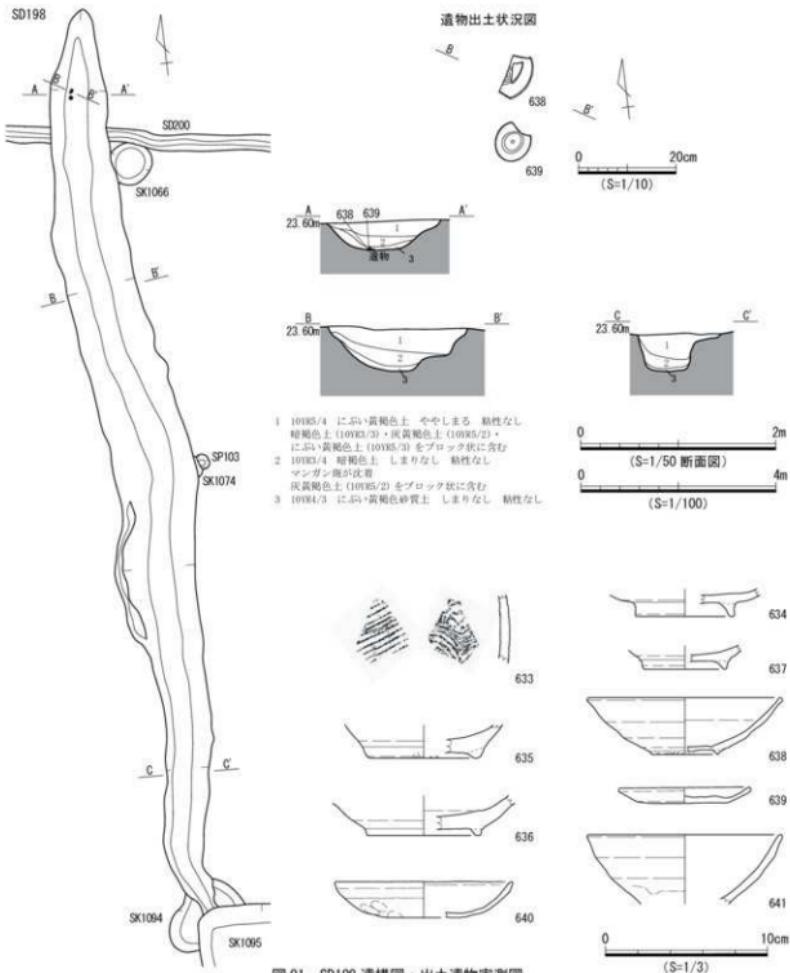


図 91 SD198 遺構図・出土遺物実測図

られる。634は明和27号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。635・636は尾張型山茶碗の第5型式の碗である。637～639は東濃型山茶碗である。637は尾張型第3型式併行の小皿である。638・639は東濃型大洞東1号窯式に比定した碗・小皿である。器壁が薄く、胴部と底部の境に明瞭な稜が認められる。640はM4類の土師器皿である。内面の胴部と底部の境に、一部横ナデが見られる。641は古瀬戸の中Ⅲ期に比定した平底末広碗である。

**時期** 出土した山茶碗から14世紀後葉から15世紀初頭以降と考えられる。

#### SD199（図92）

**検出状況** 17地点GD17～GF17グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は、北側の周縁が漸移的で不明瞭であったものの、その南側は明瞭に確認できた。SD200と重複し、本遺構が新しい。

**規模・形状** 南北方向に延び、北端が西に屈曲する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。B-B'断面では、やや東側に偏る堆積をしているものの、A-A'断面・C-C'断面ではほぼ水平に堆積している。2層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。1層は均質な埋土であることから自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器21点、須恵器1点、灰釉陶器2点、山茶碗16点、常滑産の甕2点が出土した。土器はいずれも小片で、1層では山茶碗が多く、2層では土師器のみが散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、3点を図示した。642は尾張型第6型式の山茶碗の小皿である。643・644は土師器皿である。643はM3類、644はM4類である。

**時期** 埋土上層から尾張型第6型式の山茶碗が出土していることから、本遺構は13世紀初頭から中葉以降に埋没したと考えられる。

#### SD200（図92）

**検出状況** 17地点GD16～GD19グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 東西方向に延び、東端はSD195と重複し、GD17グリッドでSD199と重複している。本遺構はいずれの重複する遺構より古い。底面は平坦である。

**埋土** A-A'断面・B-B'断面いずれも単層である。いずれの断面も埋土はにぶい黄褐色土であるが、B-B'断面ではブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 本遺構の西側延長線上にあるSD197と一連の遺構の可能性があり、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SD203（図93）

**検出状況** 17地点GI14・GJ15～GJ17グリッド、IV b層上面で検出した。埋土内に径5cm以下の亜円礫を含み、平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 東西方向に延び、DI16グリッド付近で大きく蛇行する。東西端ともに発掘区外にある。西側の幅1.40mで、東に行くにつれ狭くなる。底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。1層はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。3層は径の大きな礫が層界に多く含まれる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器49点、須恵器14点、灰釉陶器16点、山茶碗113点、常滑産の甕3点、鉄滓2点が出土した。土器はいずれも小片であり、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、10点を図示した。645～648は清郷型鍋である。648はC類、その他はB類である。645は口縁部内面に被熱した痕跡が認められる。649は須恵器の高坏である。脚部のみ残存している。650は須恵器杯蓋のC類である。651は9世紀前葉の須恵器の横瓶である。652は百代寺窯式に比定した灰釉陶器の碗である。灰釉は胴部上半外面より垂れたものと考えられる。653は尾張型第5型式の山茶碗である。654は底面が丸みを帯び、表面が碗状に窪むことから椀形鉢と思われる。1/3に欠損している。

**時期** 埋土上層から尾張型第5型式の山茶碗が出土していることから、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

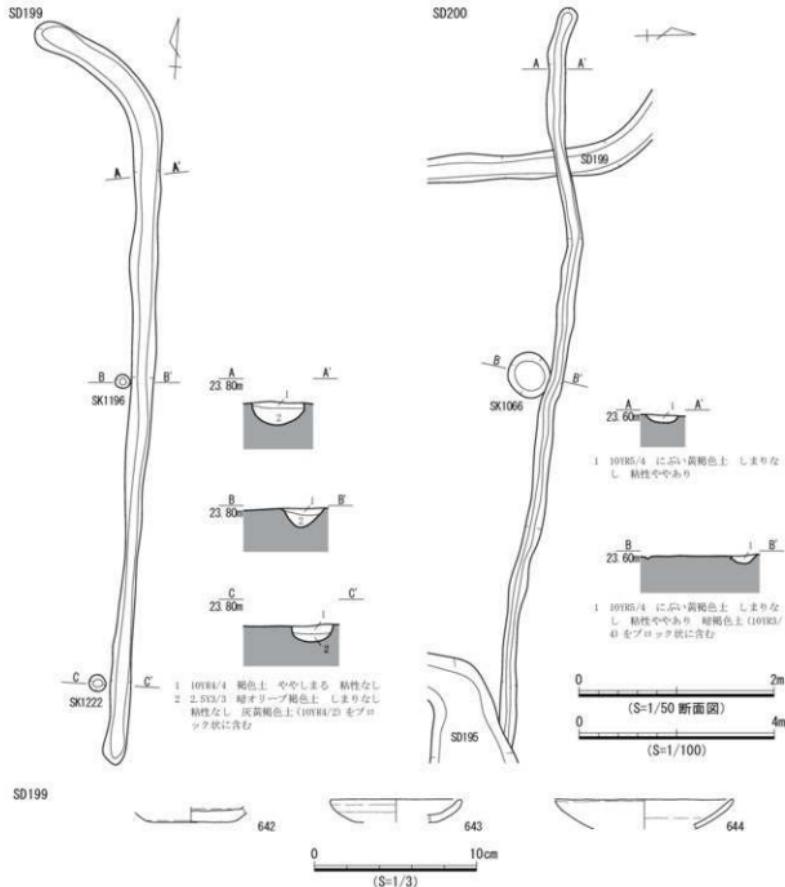


図92 SD199・SD200 遺構図・SD199 出土遺物実測図

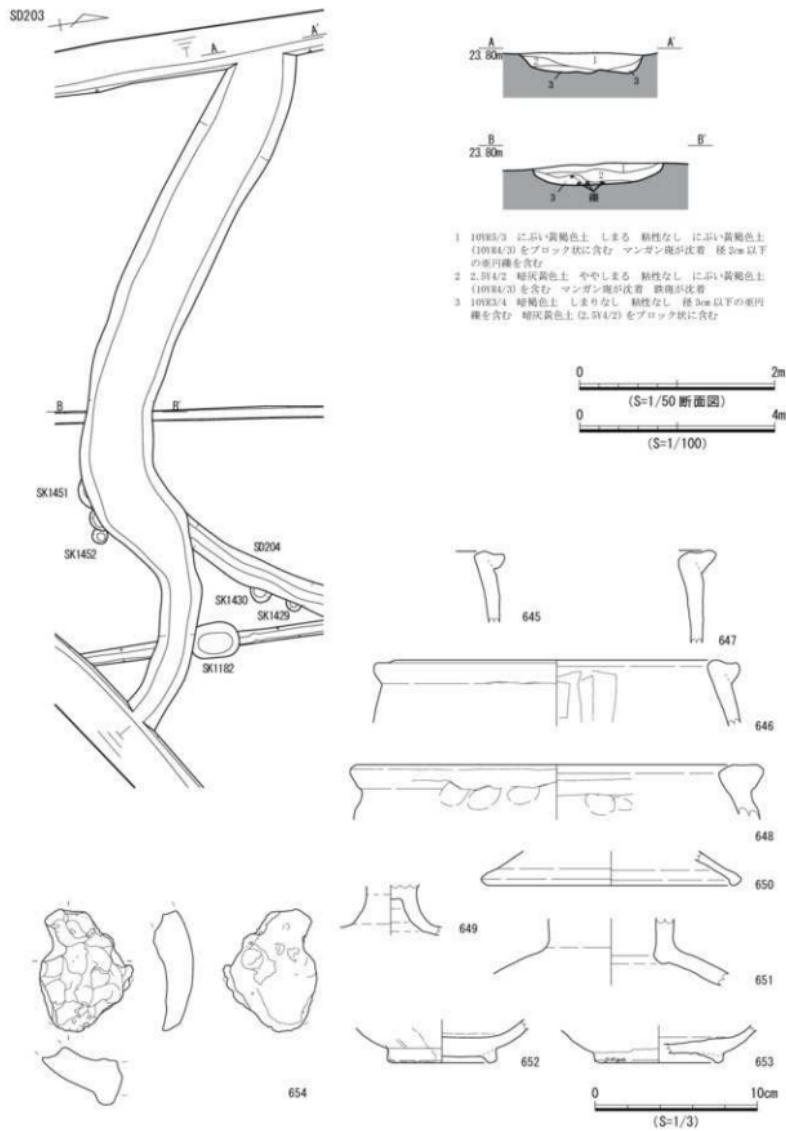


図 93 SD203 造構図・出土遺物実測図

## SD204（図94・95）

**検出状況** 17地点 GI16・GJ16・GH17・GI17グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は、南端がSD203と重複し、本遺構が新しい。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 南北方向に延び、GI17より南側で西に屈曲する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** A-A'断面・B-B'断面では、2層に分層した。いずれも同様の堆積であり、ほぼ水平に堆積している。2層はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。C-C'断面は単層で、A-A'断面の1層に対応する。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器22点、須恵器10点、灰釉陶器2点、山茶碗24点、鉄滓1点が出土した。土器はいずれも小片で、散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、6点を図示した。655は清郷型鍋のB類である。656は須恵器壺蓋のC類である。657は縁釉陶器の香炉である。欠損しているものの穿孔が認められる。658～660は尾張型第5型式の山茶碗である。660は小皿で、その他は碗である。

**時期** SD203との重複関係より、本遺構は13世紀初頭以降と考えられる。

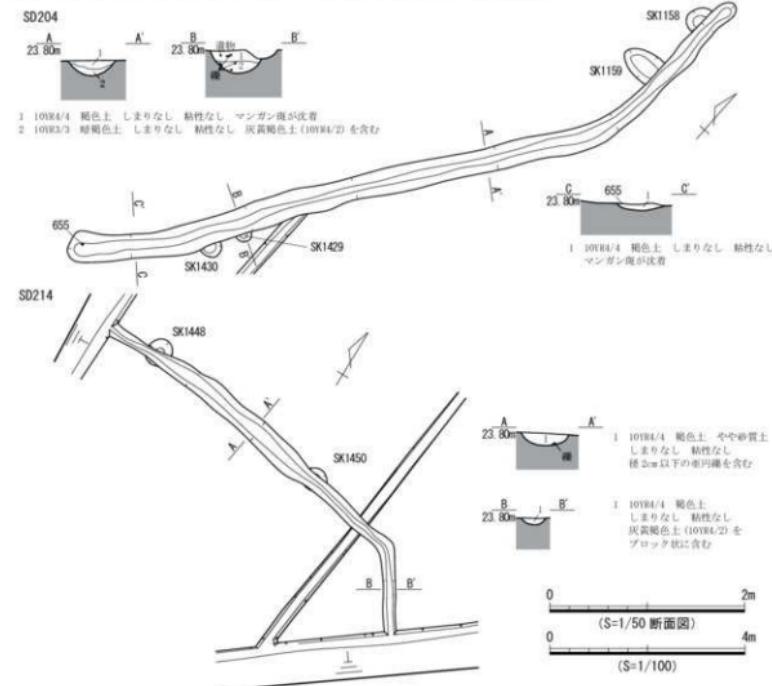


図94 SD204・SD214遺構図

## SD214(図94・95)

**検出状況** 17地点GK14～GK16グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 長軸はGK14・GK15のグリッドではほぼ東西方向であるものの、GK16グリッドでは南に屈曲する。東西端は発掘区外にある。なお、西側に隣接する16地点のGD12グリッドでは本遺構が続かないため、途中で屈曲し、本遺構以南を区画する溝の可能性がある。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。A-A'断面・B-B'断面とともに砂質土が混じる堆積であり、径2cmの亜円礫を含む。C-C'断面はA-A'断面・B-B'断面と同じ埋土の褐色土であるがブロック土を含む。東側は人為的に堆積し、西側の堆積状況と異なる可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器19点、山茶碗30点、常滑産の甕1点、金属製品1点、鉄滓1点が散在して出土した。

**出土遺物** 出土遺物のうち、4点を図示した。661～663は尾張型山茶碗である。661は第4型式の小碗、662は第5型式の碗、663は第6型式の小皿である。664は鉄鏹か。頭部に有機質が残存している。二枚合わせ式把で、側面より落とし込み式となっている。その上から繊維が横方向に巻き付けられている。

**時期** 埋土上層から尾張型第6型式の山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

## (7) 烧土遺構

## SL3(図96)

**検出状況** 18地点DT10～HA10グリッド、IVb層上面で検出した。SK548と重複しており本遺構が新しい。

SD204(655～660)

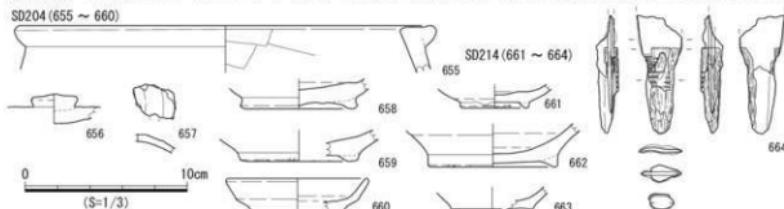


図95 SD204・SD214出土遺物実測図

## SL3 烧土検出状況図

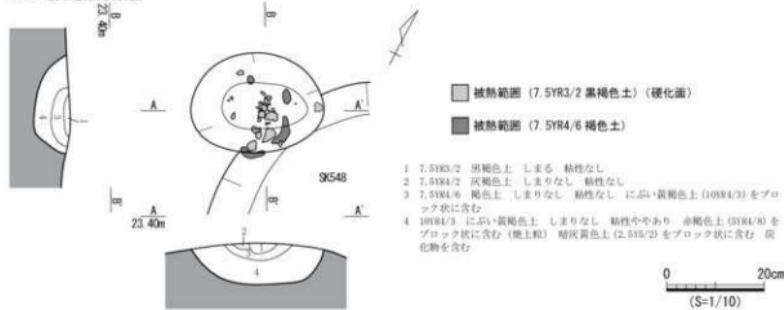


図96 SL3遺構図

円形状に赤く焼土が見え、中央に黒褐色でしまりのある硬化した面が認められた。平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形で、底面は平坦である。

**埋土** 4層に分層した。1層・2層は焼土である。1層は硬く焼きしまっており、2層は灰褐色でしまりはなかった。3層と4層はブロック土を含み、また4層は赤褐色の焼土粒、炭化物をブロック状に含む。土坑状の窪みの充填土が被熱していることから、平坦面を直に火床として機能させたと考える。

**出土遺物** 埋土を水洗選別したが、鉄滓等の微細な遺物やその他の遺物も出土しなかった。

**時期** 本遺構より古いSK548は尾張型第5型式の山茶碗が出土していることから、本遺構は13世紀前葉以降と考えられる。

#### (8) 溝状遺構群・畦畔（図97）

6地点・8地点・18地点でほぼ等間隔に並列する複数の溝状遺構を複数面検出した。個々の溝状遺構の平面形は細長く、やや不規則な形状をしている。底面は全体的に凹凸が多く、一定でないことから、耕作の痕跡という性格を反映していると考えられる。規模・形状、並列する配置状況から一連のものと判断し、これらを溝状遺構群として説明をする。なお今回の調査では植物珪酸体分析およびフローテーション等は実施していない。

8地点・18地点の調査区全体では南から北にかけて傾斜しており、それに伴うように東西方向の溝4条を検出した。それらは区画する溝と考えられる。そこで8地点のSD63より北側に位置するSN1、同地点の中央部に位置するものをSN2、同地点の南側に位置するものをSN3とした。また6地点で検出し、SM1・SM2に囲まれた範囲をSN4とした。その他溝状遺構群の区画に伴うと思われる溝状遺構、畦畔と合わせて、個別に報告する。

#### SN1（図98）

**検出状況** 8地点 DM9～DM11・DN9～DN11グリッド、SD62東側、SD63の北側のIVb層上面で検出した。いずれの遺構も平面形は明瞭であった。北端は発掘区外に広がると考えられる。

**規模・形状** 8条の溝が縦状に並ぶ。いずれも長軸方向はN-88°～Eである。削平を受けていることから、長軸長の短い溝状遺構が連続するものがあるが、本来的には1条の溝で東西に長く延びていたと推測される。個々の溝状遺構の平面形は広狭や長短に差がみられ、1条の溝状遺構の平面形でも広狭の差がみられる。溝状遺構の長軸長は0.42m～4.4m、幅は0.13m～0.29m、深さは0.02m～0.1mである。隣接する溝の距離は、SD52とSD56の1m、SD56とSD59は0.6mである。その他は約0.3m～0.45mの間に属し、均等と言える。底面は全体的に凹凸がみられ、断面はかまぼこ形である。

**埋土** III層に類似した埋土に、IVb層のブロックが混入する。全体的にマンガン斑が沈着している。

**出土遺物** 溝状遺構の埋土中から灰釉陶器1点、山茶碗5点、いずれも小片が出土した。

#### SD62（図98）

**検出状況** 8地点 DM9・DN9グリッドでSN1の西側に位置し、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 東西方向に延び、東端は発掘区外にある。底面は平坦である。

**埋土** 単層である。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 溝状遺構の埋土中から土師器3点、山茶碗19点、青磁1点が散在して出土した。土器はい

ずれも小片である。

**出土遺物** 図示できる遺物がなかった。

SD63 (図 98)

**検出状況** 8地点 DN11・DN12 グリッドで SN1 の南側に位置し、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であつた。

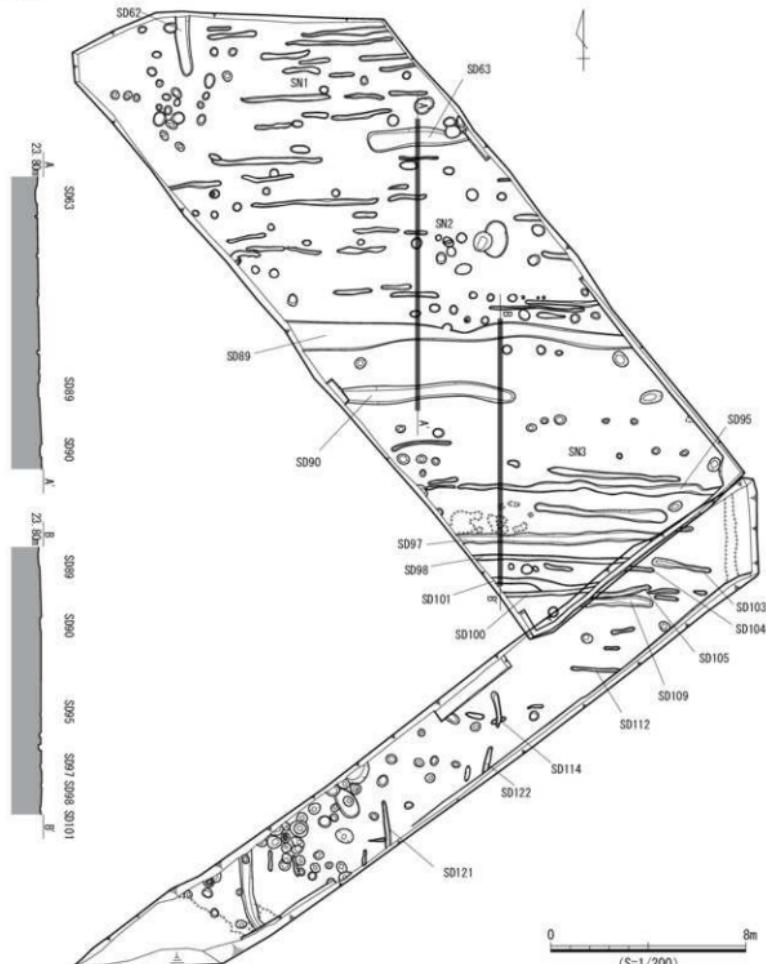


図 97 8 地点全体図

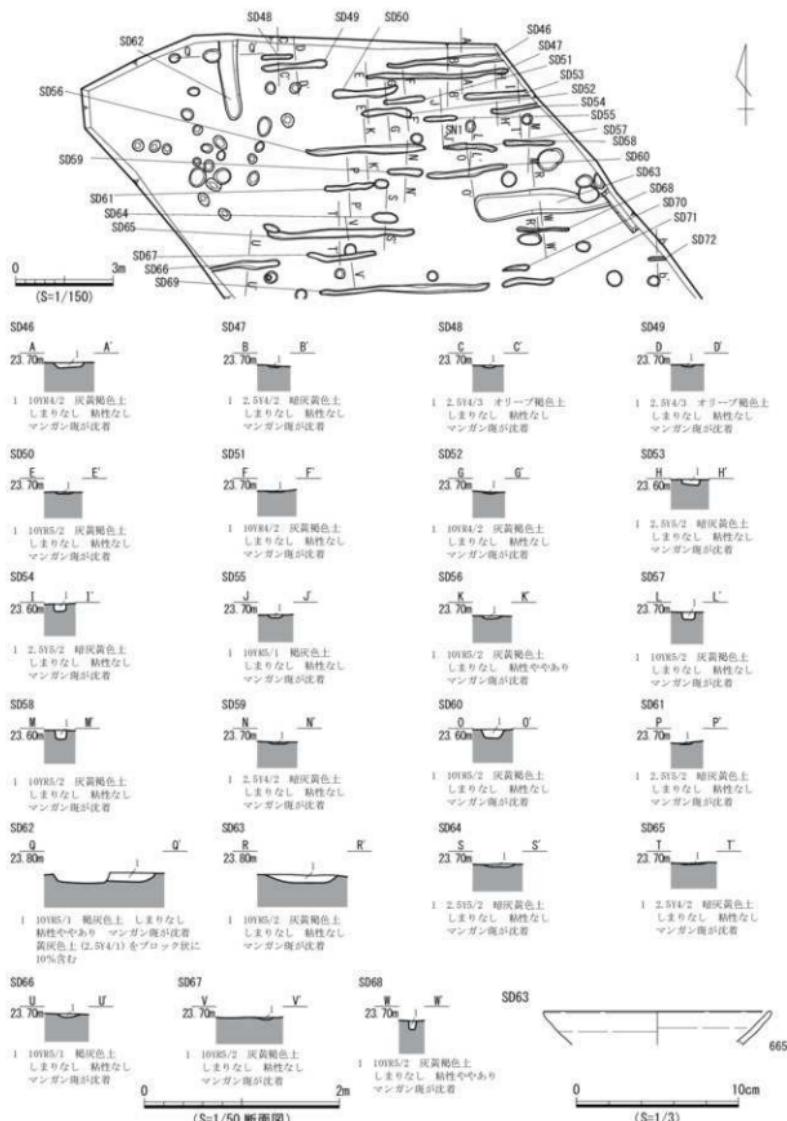


図98 SN 1構造図・SD63出土遺物実測図

**規模・形状** 南北方向に延び、北端は発掘外にある。底面は平坦である。

**埋土** 単層である。堆積状況は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器2点、山茶碗7点が散在して出土した。土器はいずれも小片である。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。665は脇之島3号窯式に比定した東濃型山茶碗である。

**SN 2（図99）**

**検出状況** 8地点 D09～D012・DP10～DP13 グリッド、IV b層上面で検出した。北側に SD63 と南側に SD89 の間に位置する。いずれの遺構も平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 10条の溝が縦状に並ぶ。いずれも長軸方向はN-88° - Eである。SN 1 と同様に長軸長の短い遺構が連続するものがあり、本来は1条の溝で東西に長く延びていたと推測される。溝状遺構の長軸長は0.84m～2.2m、幅は0.13m～0.28m、深さは0.02m～0.09mである。隣接する溝の距離は、SD81とSD83の2.0mである他は約0.6m～0.7mの間に属し、均等と言える。SN 1よりやや隣接する溝の距離が広い。底面は全体的に凹凸がみられ、断面はかまぼこ形である。SN 1・SN 3に比べ、規模が小さく非常に浅い土坑が溝状遺構の間で多く確認されている。上面が削平されて底面の窪みのみが残った結果、小穴として検出されたと推測される。

**埋土** III層に類似した埋土に、IV b層のブロックが混入する。全体的にマンガン斑が沈着している。

**出土遺物** 溝状遺構の埋土中から灰釉陶器2点、山茶碗6点が出土した。いずれも小片である。

**SD89（図99）**

**検出状況** 8地点 DP10～DP13 グリッドで SN 2 の南側に位置し、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 東西方向に延び、両端ともに発掘外にある。底面は平坦である。

**埋土** 単層である。堆積状況は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器3点、山茶碗3点が散在して出土した。土器はいずれも小片である。

**出土遺物** 出土遺物のうち、1点を図示した。666は尾張型第6型式の山茶碗の小皿である。

**SN 3（図100・101）**

**検出状況** 8・18地点 DQ11～DQ14・DR12・DR13 グリッド、SD90 南側のIV b層上面で検出した。いずれの遺構も平面形は明瞭である。SD90より北側は標高が約0.1m低くなるため、SD90がSN 3の区画溝と考えられる。南端は発掘区外に広がると考えられる。

**規模・形状** 15条の溝が縦状に並ぶ。いずれも長軸方向はN-88° - Eである。平面形は東西方向に延び、幅の広狭が見られ、SD101のように蛇行する形状のものもみられた。溝状遺構の長軸長は0.62m～6.5m、幅は0.15m～0.32m、深さは0.03m～0.05mである。隣接する溝の距離は約0.2m～0.7mの間に属し、やや不均等と言える。

**埋土** III層に類似した埋土に、IV b層のブロックが混入する。全体的にマンガン斑が沈着するが、鉄斑が沈着しない特徴が認められた。

**出土遺物** 溝状遺構の埋土中から土師器5点、山茶碗2点が出土した。いずれも小片である。

**SD90（図99）**

**検出状況** 8地点 DP10～DP13 グリッドで SN 3 の北側に位置し、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

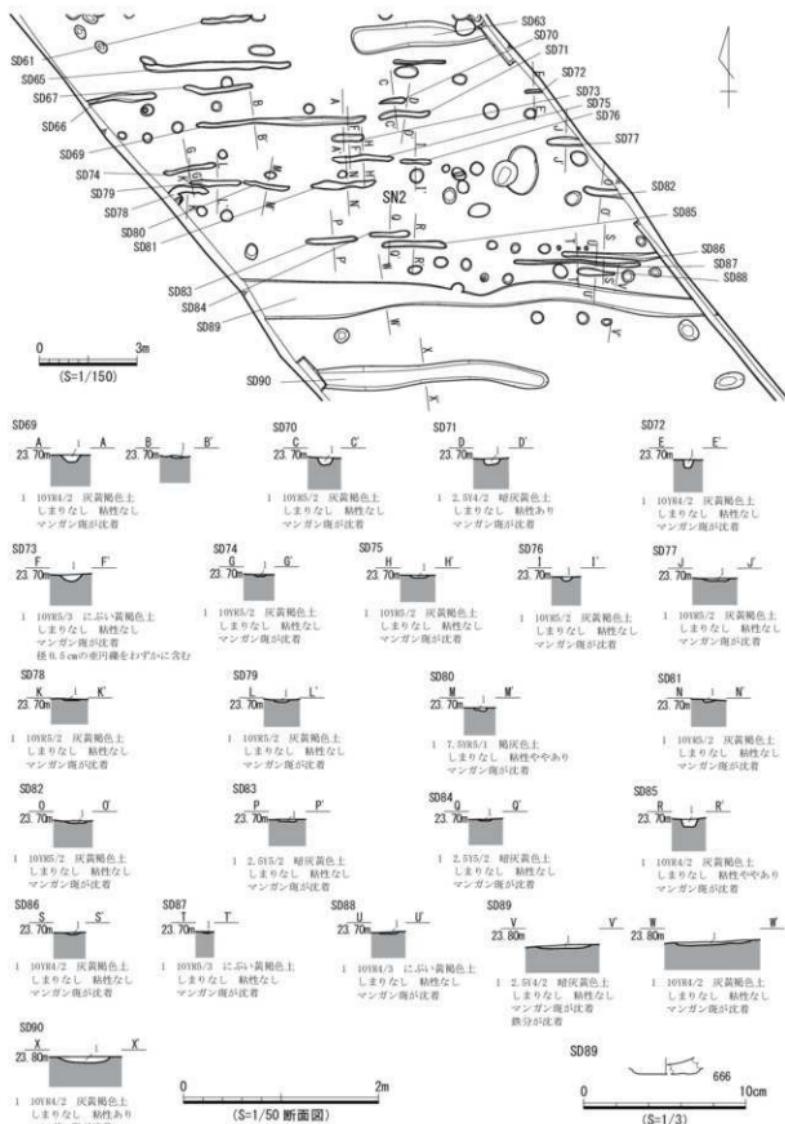


図99 SN2造構造図・SD89出土遺物実測図

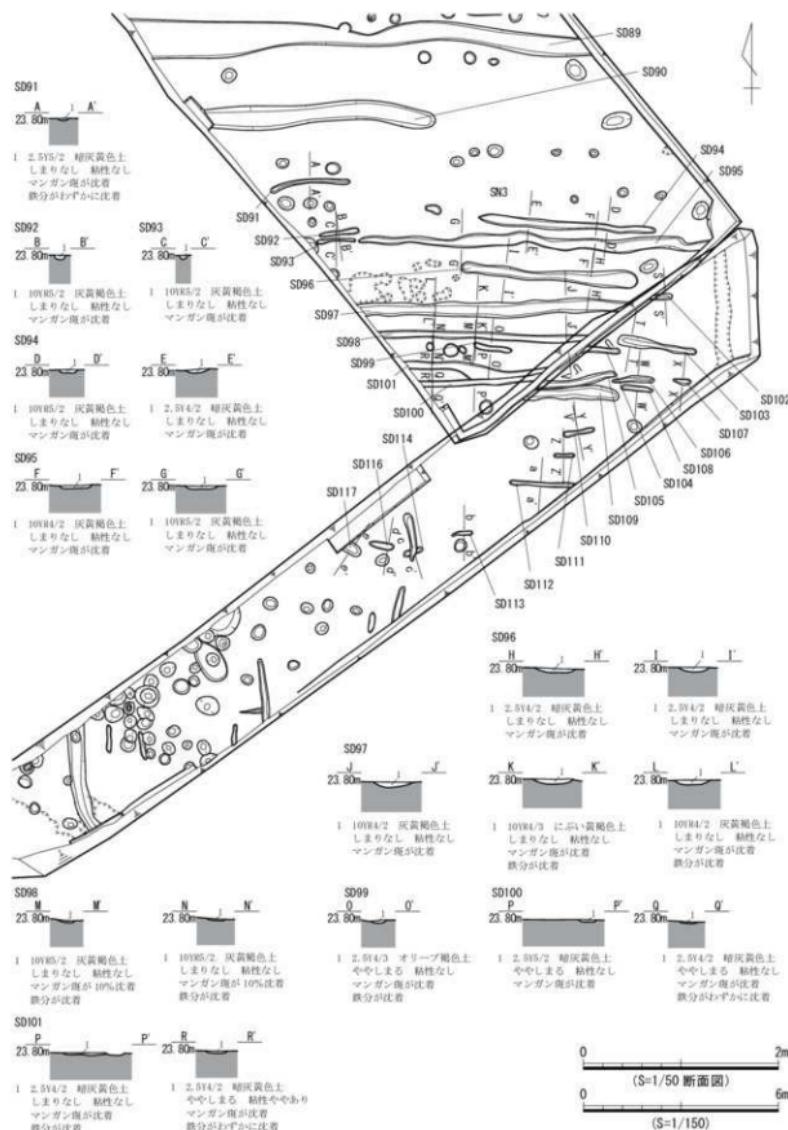


図 100 SN3 造構図 (1)

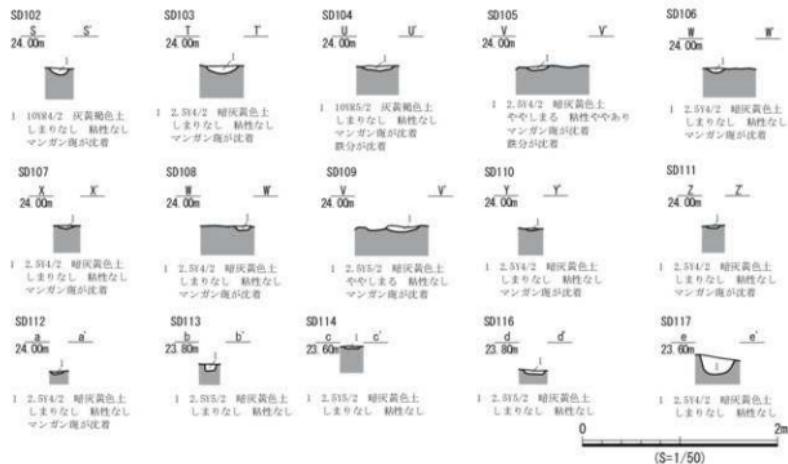


図 101 SN3 遺構図(2)

**規模・形状** 東西方向に延び、西端は発掘外にある。底面は平坦である。

**埋土** 単層である。堆積状況は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器7点、山茶碗1点が散在して出土した。土器はいずれも小片である。

**出土遺物** 図示できる遺物がなかった。

#### SN 4 (図 102・103)

**検出状況** 6地点 DT4～DT6・HA4～HA6グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SM1とSM2の間に位置する。削平が著しいこと、両末端が確実に把握できた溝状遺構は確認できなかつたことから、全体の正確な形状については不明である。

**規模・形状** 17条の溝状遺構が平行して配置される。概ね南北方向を向いているものが多いが、直交する東西方向のものも見られた。重複関係から東西方向の遺構より南北方向の遺構が古い。著しく削平をうけていることから、本来はさらに数条存在し、現状よりも長軸長は長かった可能性が推定される。個々の溝状遺構には広狭や長短の差がみられる。溝状遺構の長軸長は0.73m～1.9m、幅は0.11m～0.47m、深さは0.02m～0.09mである。隣接する溝の距離は、SD160からSD163の近接するもので約0.3mである他は0.7m以上である。底面は全体的に凹凸がみられ、断面はかまぼこ形である。

**埋土** III層に類似した土壤である。全体的にマンガニ斑が沈着するが、鉄斑が沈着しない特徴が認められた。

**出土遺物** 土師器8点、灰釉陶器4点、尾張型第6型式の山茶碗を含む山茶碗16点、鉄滓2点が出土した。いずれも小片で、散在して出土した。図示できる遺物はなかった。

#### SM 1 (図 102)

**検出状況** 6地点 DQ4～HA4グリッド、IVb層上面で検出した。盛土の存在は調査区北壁面で確認したが、表土掘削時及びIII層掘削時にはその存在に気付かず、IVb層上面まで掘削を進めたため、基底部のみ確

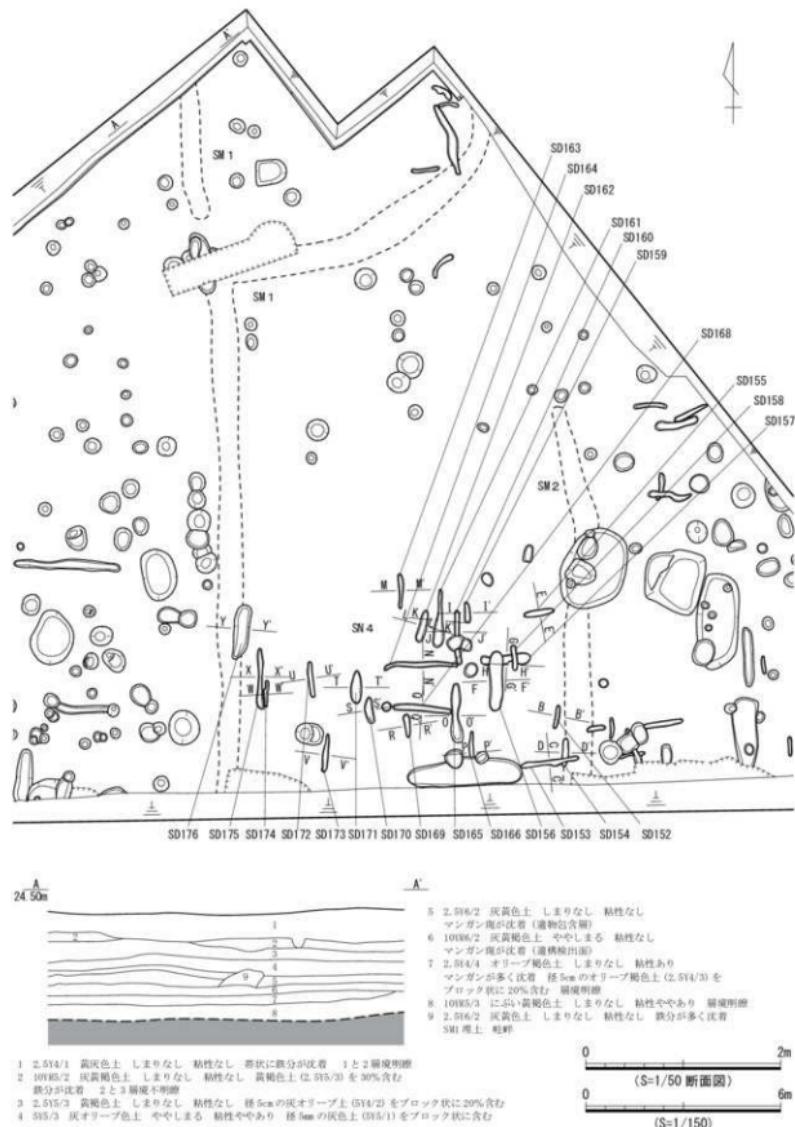


図102 SN 4 造構図 (1)・SM 1・SM 2 造構図

認した。平面形が不明瞭で途切れるが、南側に同様の基底部を確認したため一連のものと判断した。

**規模・形状** 平面形は南北方向に延び DR 4 グリッドで北東方向にも延びる。南北端ともに発掘区外に延びるため残存長軸 19.8m、幅 0.8m、高さ 0.15m であり、長軸方位は、N-3°-E を測る。

**出土遺物** 遺物の出土はなかった。SM 1 の西側より東側の高さが低くなっていることや土地利用の仕方が異なることから、從来から土地の境界とされていたと思われる。

### SM 2 (図 102)

**検出状況** 6 地点 DS 6～HA 6 グリッド、IV b 層上面で検出した。盛土は確認できなかったが、SM 1 と同様

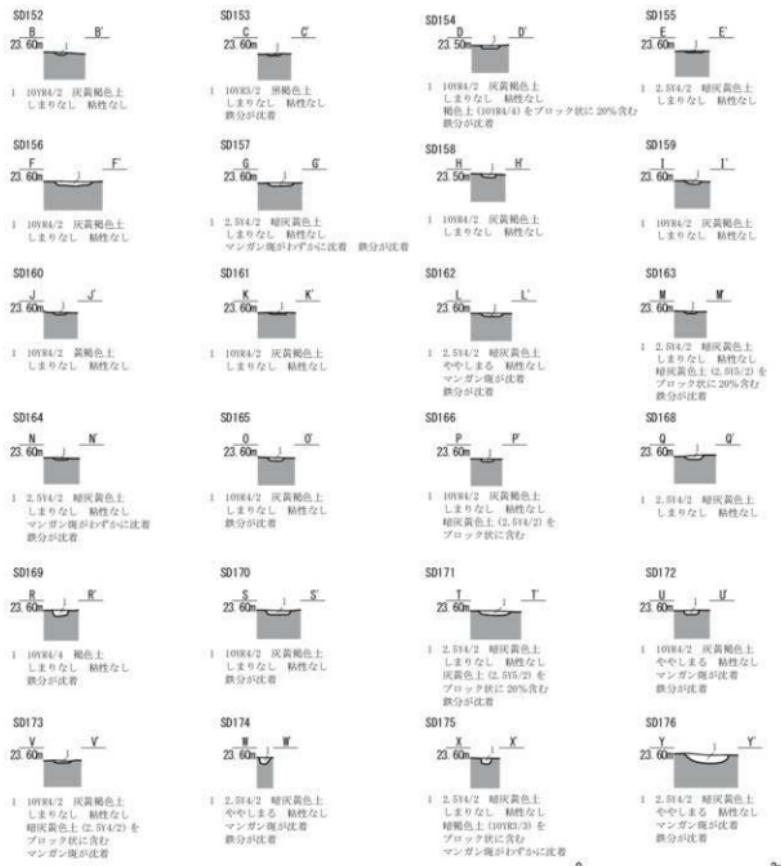


図 103 SN 4 遺構図 (2)



に南北に延びる基底部を確認したため畔と判断した。検出した状況からSM1と同時期に存在していたと考える。平面形が不明瞭であり、途切れるため全容は不明である。

**規模・形状** 平面形は南北方向に延びる。南端は発掘区外に延びるため長軸長11.7m、幅0.83m、高さは不明である。長軸方位は、N-3°-Eを測る。DS6グリッドに入ったあたりでやや西に曲がり幅が狭くなっているDR6グリッド手前で止まる。

**出土遺物** 基底部より土師器皿1点が出土した。いずれも小片である。図示できる遺物はなかった。

## 小結

SN1からSN3は、溝状造構の長軸方位が揃うことから同時期であると考えられる。出土遺物は尾張型山茶碗の第5型式・第6型式の遺物を含む山茶碗が主に出土しており、12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。しかしながら、全体的に正方位からやや傾くこと、脇之島3号窯式に比定した山茶碗の小片が出土していることから15世紀初頭から後葉まで下る可能性もある。SN4は尾張型第6型式の山茶碗が主に出土していることから13世紀初頭から中葉以降と考えられる。東西方向の溝状造構と重複して南北方向の溝状造構が見られることと、隣接する溝状造構との距離もSN1～SN3よりやや広いことから時期差があると考えられる。しかしながら、SN1からSN3との位置関係から、同時に機能していた可能性は十分に考えられると思われる。

### (9) その他の遺構の出土遺物（図104～107）

667～676は土師器である。667は高杯の脚部で、時期は不明である。668～672は清郷型鍋である。672はC類で、その他はB類である。673～676はロクロ成形の土師器皿である。676は柱状高台皿である。677～682は須恵器である。677・678は环身Cである。677は8世紀後葉である。678は9世紀である。679は8世紀後葉以降の有台盤、680は9世紀の長頸瓶である。681は美濃須衛窯のIV期第3小期後半に比定した須恵器の鉄鉢である。口縁部が内傾し、胴部は直線的である。682は猿投産の甕である。内外面に黄土を塗布してある。683～698は灰釉陶器である。683～694は碗である。686は虎渓山1号窯式から丸石2号窯式に比定した。高台の形状が三日月状である。また687・688は丸石2号窯式に、その他は明和27号窯式に比定した。695～697は皿である。697は明和27号窯式に、その他は丸石2号窯式に比定した。698は短頸壺である。699～722は尾張型山茶碗である。699～718は碗である。699は第4型式、700～713は第5型式、714～718は第6型式である。719・720は小碗である。719は第3型式、720は第4型式である。721は第6型式の小皿である。722は第5型式の片口鉢である。723～730は東濃型山茶碗である。723～725は碗である。723は大畠大洞4号窯式に、その他は大洞東1号窯式に比定した。724は器壁が薄く、内面の底部と胴部の境に明瞭な稜が認められる。726は尾張型第3型式併行の小碗である。口縁部はやや外反し、胴部は丸みを帯びる。727～729は小皿である。729は大洞東1号窯式に、その他は大畠大洞4号窯式に比定した。730は尾張型第3型式併行の片口鉢である。731～750は土師器皿である。731～739はM2類、740～749はM3類、750はM4類の土師器皿である。731・732はいずれも口縁部端部が厚い。731は胴部がほぼ垂直に立ち上がり、751～754は伊勢型鍋である。751・752はA類からB類で、753はB類で、754はB類からC類である。755・756はSK589から出土した土鍤である。755は外面に被熱した痕跡が見られる。757は常滑産の1段階の甕である。頸部が直立し、口縁部は外反する。口縁端部は面取りがされ、丸みを帯びる。口縁部は内外面指によるナデ調整を施し、内面に1本の凹線が巡る。758は常滑産の第1段階4型式の広口甕である。頸部は直立し、口縁部は外反する。口縁端部は上方に立ち上がり、端部との境に明瞭な稜が認め

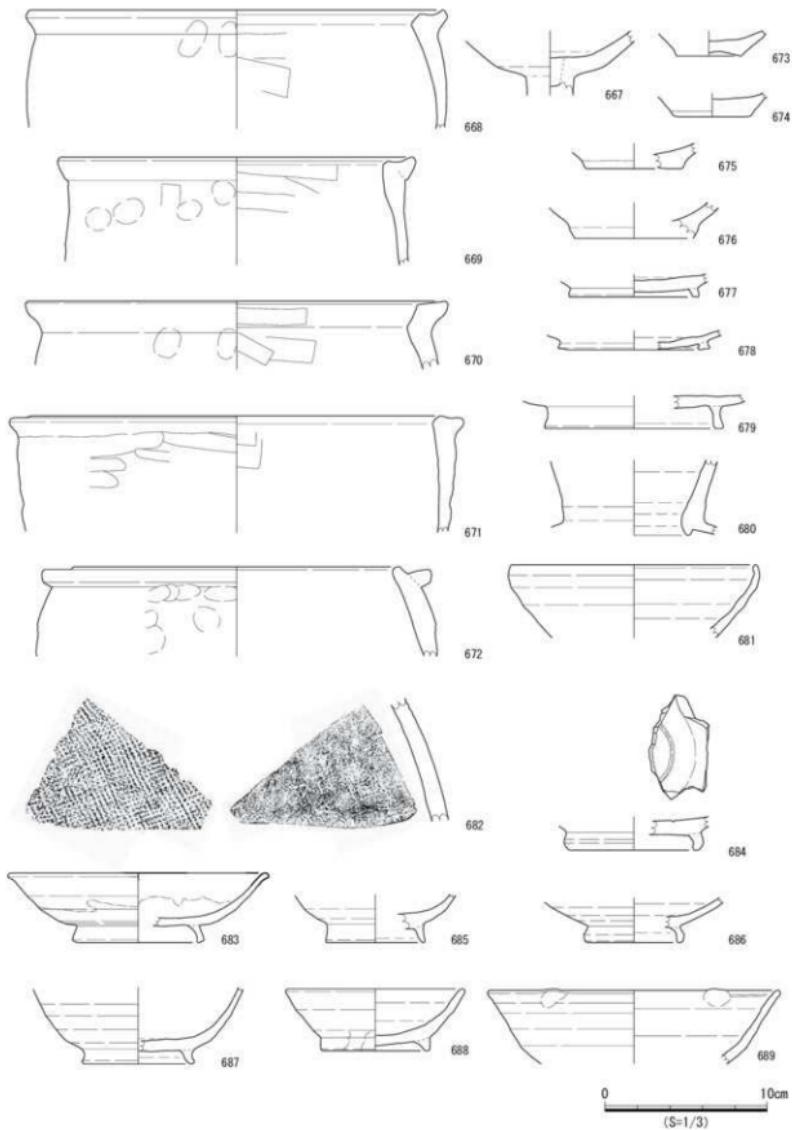


図104 その他の遺構出土遺物実測図（1）

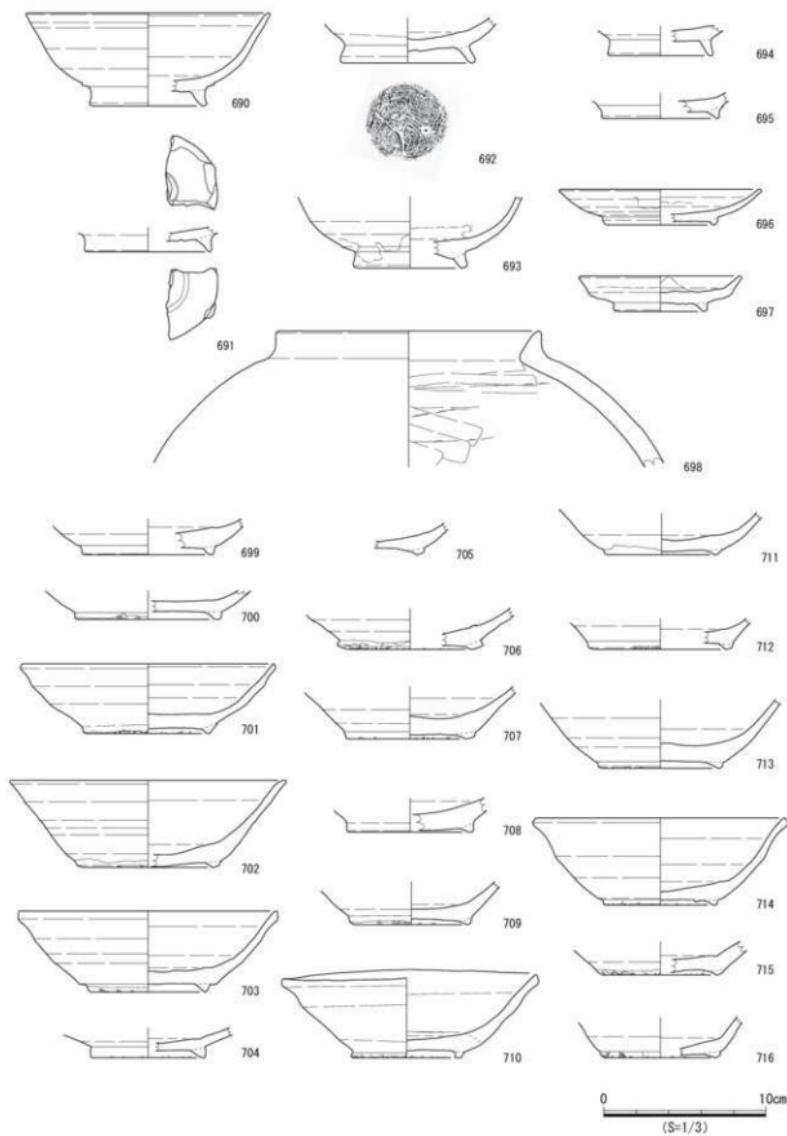


図105 その他の造構出土遺物実測図（2）

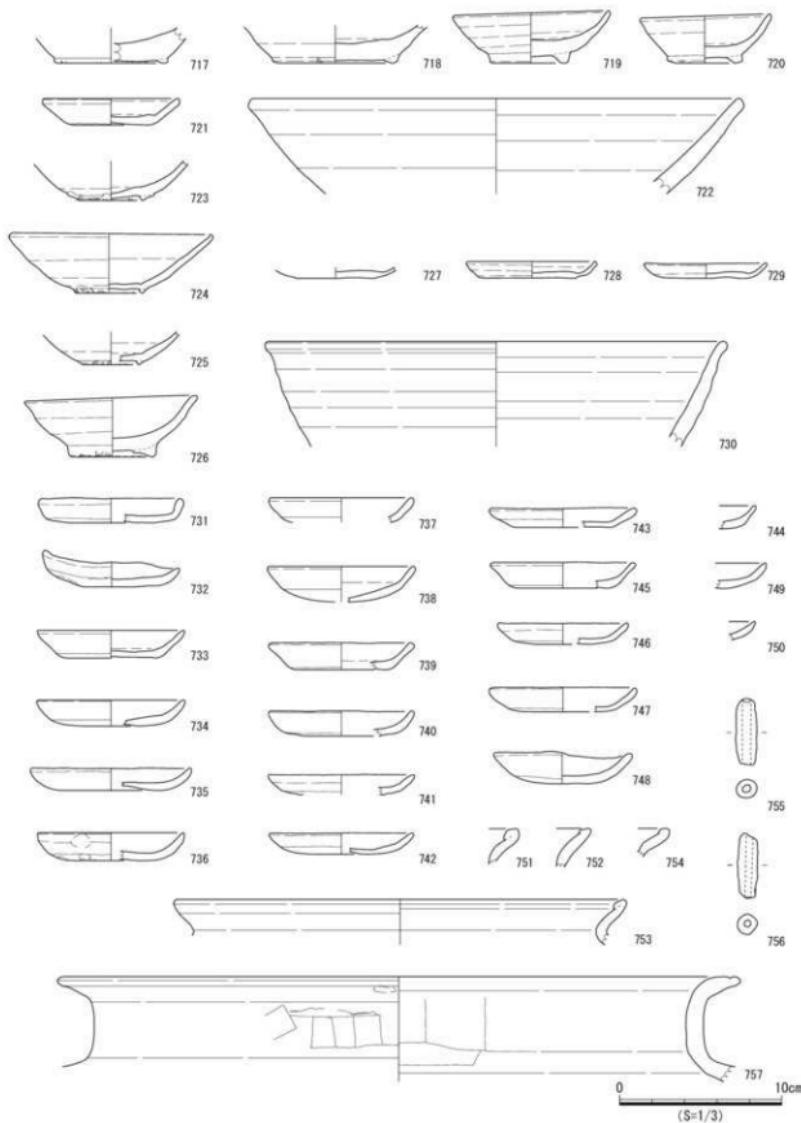


図106 その他の遺構出土遺物実測図（3）

られる。肩は全体的に丸みを帯び、器壁は0.8cm～1cmと薄い。胴部には約1cm間隔をあけ、2本の凹線が巡る。なお、押印は確認できなかった。759は叩石である。760は砥石である。761～763は釘である。

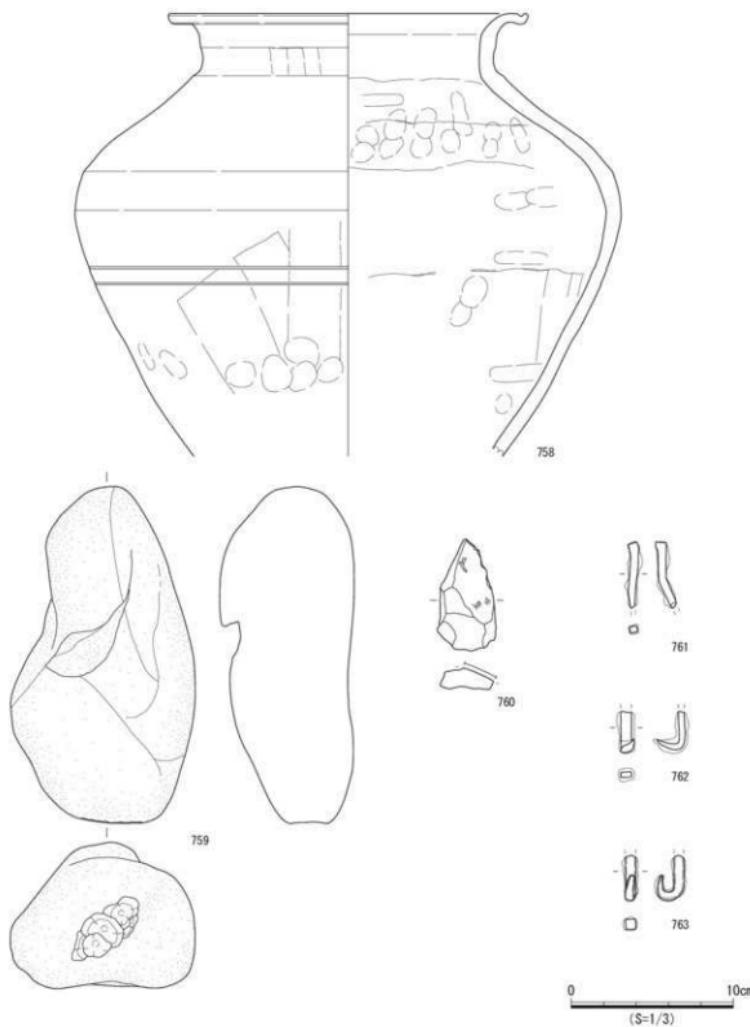
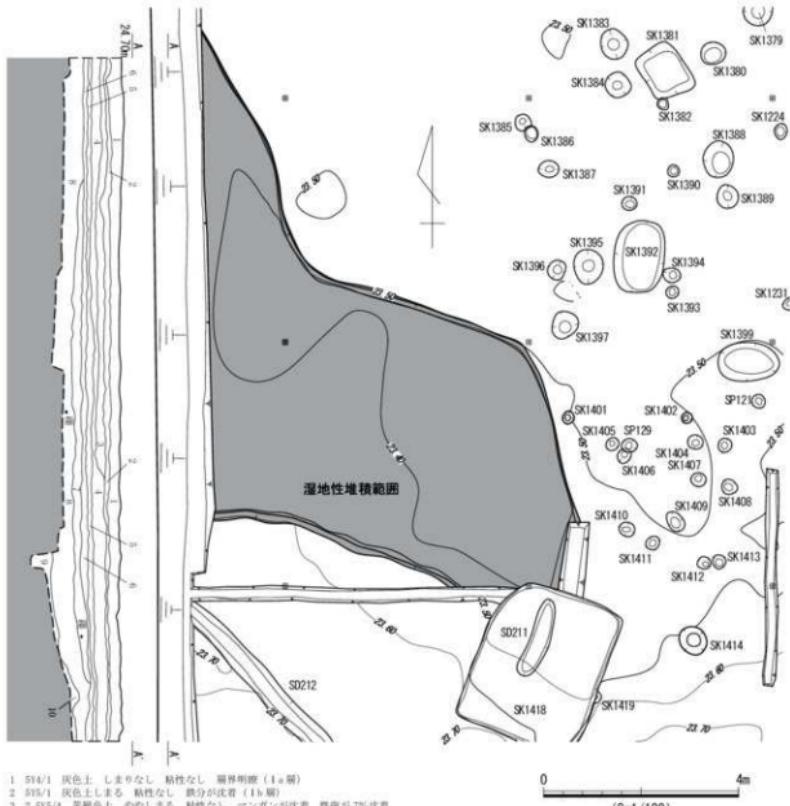


図107 その他の造構出土遺物実測図（4）

#### 4 Ⅲ層出土遺物

##### (1) 17地点南西部湿地性堆積出土遺物(図109)

17地点南西部(GG14～GH15)のIV b層上面で、湿地性堆積と思われる黒褐色土の広がる範囲を検出した。この範囲の上面では遺構は検出できず、ある時期沼地のような状況で堆積していたものと考えられる。平面形は西端が発掘区外に広がると考えられ、全容は不明である。発掘区の平面形は不定形である。埋土は単層で、粘性がややあり、全体的に均質にいぶい黄褐色土がブロック状に含まれる。なお、埋土を採取し、花粉分析及びプラント・オパール分析を実施した(第5章第2節参照)。埋土中から出土した土器類56



1. SV4/1 灰色土 しまりなし 黏性なし 番界明瞭 (Ia層)
2. SV5/1 灰色土 しまる 黏性なし 鉄分が沈着 (Ib層)
3. SV5/3 黄褐色土 ややしまる 黏性なし マンガンが沈着 鉄斑が7%沈着
4. SV5/2 暗灰褐色土 しまりなし 黏性なし マンガンが沈着 径0.5cmの亜円礫を含む
5. SV4/4 オリーブ褐色土 しまりなし 黏性なし マンガンが沈着 (II層)
6. 10H4/4 黄褐色土 しまりなし 黏性なし 硅酸鉄土 (10H4/3) をブロック状に含む マンガンが沈着 (III層)
7. 10H3/2 黄褐色土 しまりなし 黏性ややあり にふく黄褐色土 (10H4/3) をブロック状に含む (湿地性堆積)
8. 10H4/3 にふく黄褐色土 しまりなし 黏性なし 黄褐色土 (10H4/2) をブロック状に含む (IV層)
9. 2. SV4/3 オリーブ褐色砂質土 しまりなし 黏性なし (V層)
10. 2. SV3/3 増オリーブ褐色砂質土 ややしまる 黏性なし 径3cm以下の亜円礫を40%含む (V層)

図108 17地点南西部湿地性堆積除去後測量図

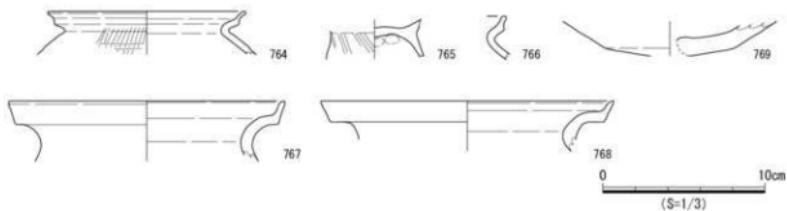


図 109 17 地点南西部湿地性堆積出土遺物実測図

点はいずれも小片であり、散在して出土した。764～769は土師器である。764～766はS字壺である。764はB類で、その他はC類である。767・768は古墳時代中期以前の受口の壺と思われる。769は高壺である。

## (2) III層出土遺物（図 110～115）

III層出土遺物は、6地点・7地点・8地点・17地点・18地点から16,454点が出土した。III層出土遺物よりも遺構出土が多いものは鉄滓等の鍛冶関連遺物を含む金属製品・ガラス玉で、遺構出土遺物よりもIII層出土の方が多いものは土師器・須恵器・古代の瓦・灰釉陶器・中近世陶磁器・中近世土師器である。

770～791は土師器である。770はバレス壺である。771は平底壺と思われる。772は小型壺で、時期は不明である。773は9世紀の壺と思われる。774～784は清郷型鍋である。774～778はB類で、その他はC類である。785～791はクロコ成形の土師器皿である。785は小皿、786は脚高高台皿、その他は柱状高台皿である。791は底部に穿孔が見られる。792・793は美濃須衛窯のV期第1小期に比定した須恵器である。792が壺蓋、793が盤である。794は瓦である。布目が見られる。795～811は灰釉陶器である。795～809は碗で、795は大原2号窯式から虎渓山1号窯式に、796は虎渓山1号窯式に、797～799は丸石2号窯式に、800は丸石2号窯式から明和27号窯式に、801～806は明和27号窯式に、807～809は百代寺第2型式に比定した。810・811は丸石2号窯式に比定した皿である。812は縁釉陶器の小片である。SD241から出土したものと類似していることから蓋と思われる。813～837は尾張型山茶碗で、813～818は碗である。817は第6型式、818は第8型式、その他は第5型式である。818は高台を持たず、底部内面に朱墨が付着する。819は第4型式の小碗である。820～827は小皿である。826・827は第6型式、その他は第5型式である。824は第5形式の小皿で内面に煤が付着する。灯明皿として使用された可能性がある。828～837は片口鉢である。828は第4型式、829～831は第5型式、832・833は第6型式、834は第7型式、835は第9型式、836・837は第10型式がある。838は渥美・湖西型2b期の山茶碗である。839～841は美濃須衛窯V期に比定した山茶碗である。839は第4型式、その他は第5型式である。842～850は東濃型山茶碗である。842～846は碗である。842・843は尾張型山茶碗の第3型式併行に、844は窯洞1号窯式に、845は大畑大洞4号窯式に、846は大洞東1号窯式に比定した。847～850は小皿である。850は大洞東1号窯式から脇之島3号窯式に、その他は大畑大洞4号窯式に比定した。851・852は青磁、853は白磁、いわゆる碗と思われる。854～870は土師器である。854～864は土師器皿である。854・855はM2類、856～862はM3類、863はM4類で、いわゆる胴部と底部の境に横ナデが見られる。864はC1類で、胴部の内外面に指頭圧痕が顕著に見られる。865～867は伊勢型鍋である。865はA類からB類で、その他はB類である。868～870は羽釜である。871・872は土鉢、873・874は土鍤である。875・876は常滑産の壺で、875は第2段階6b型式、876は第2段階7型式である。877～886は古瀬戸で、877は古瀬戸前IV期の底卸目皿である。878・879は古瀬戸後I期か

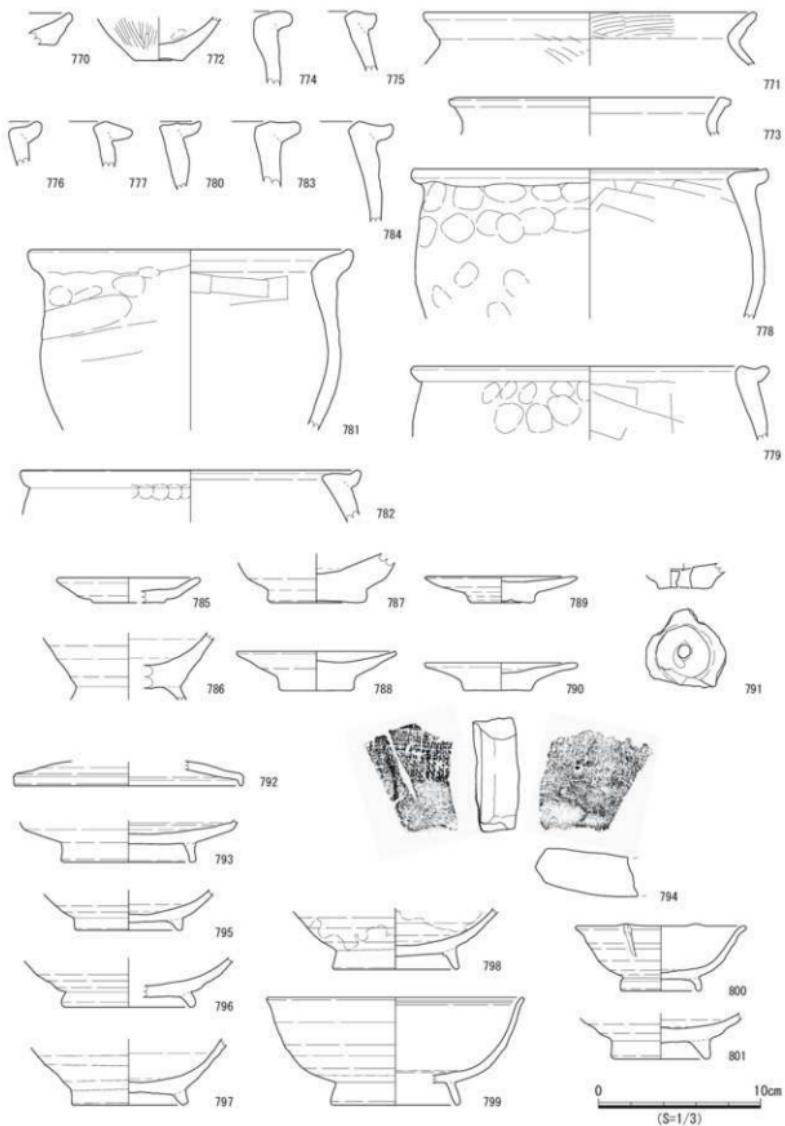


図110 6～8・17・18地点III層出土遺物実測図(1)

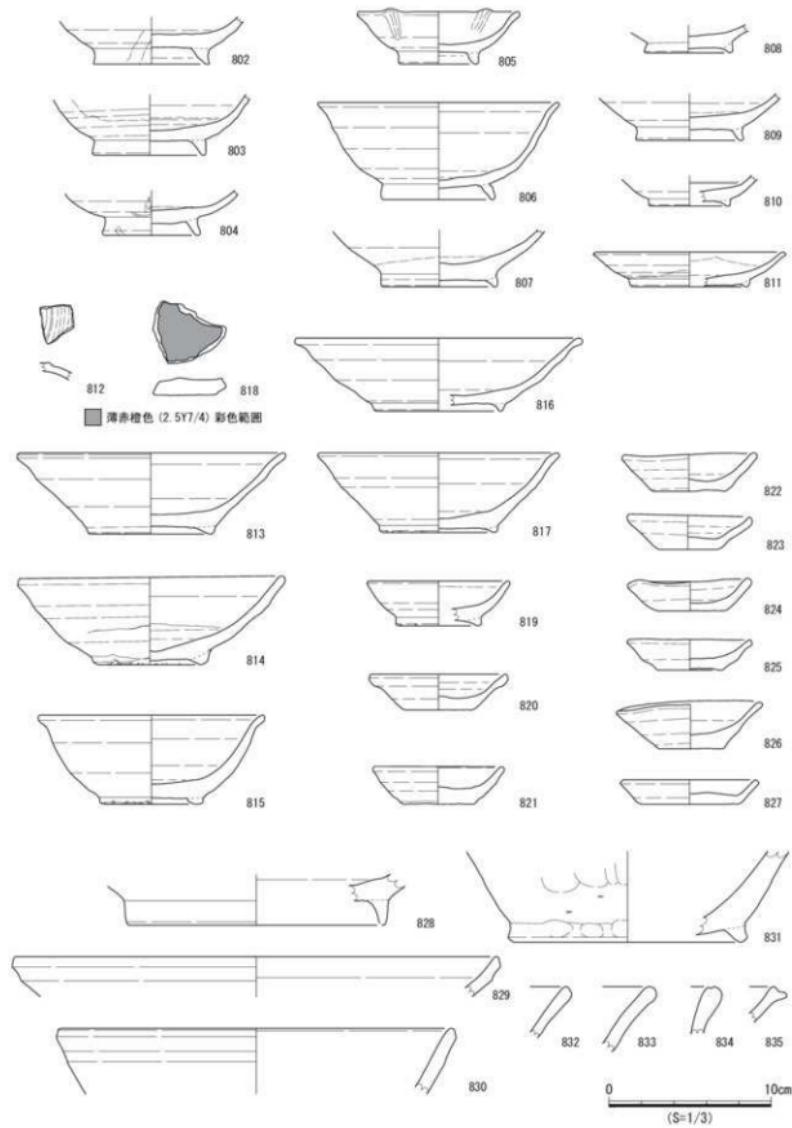


図 111 6~8・17・18 地点III層出土遺物実測図 (2)

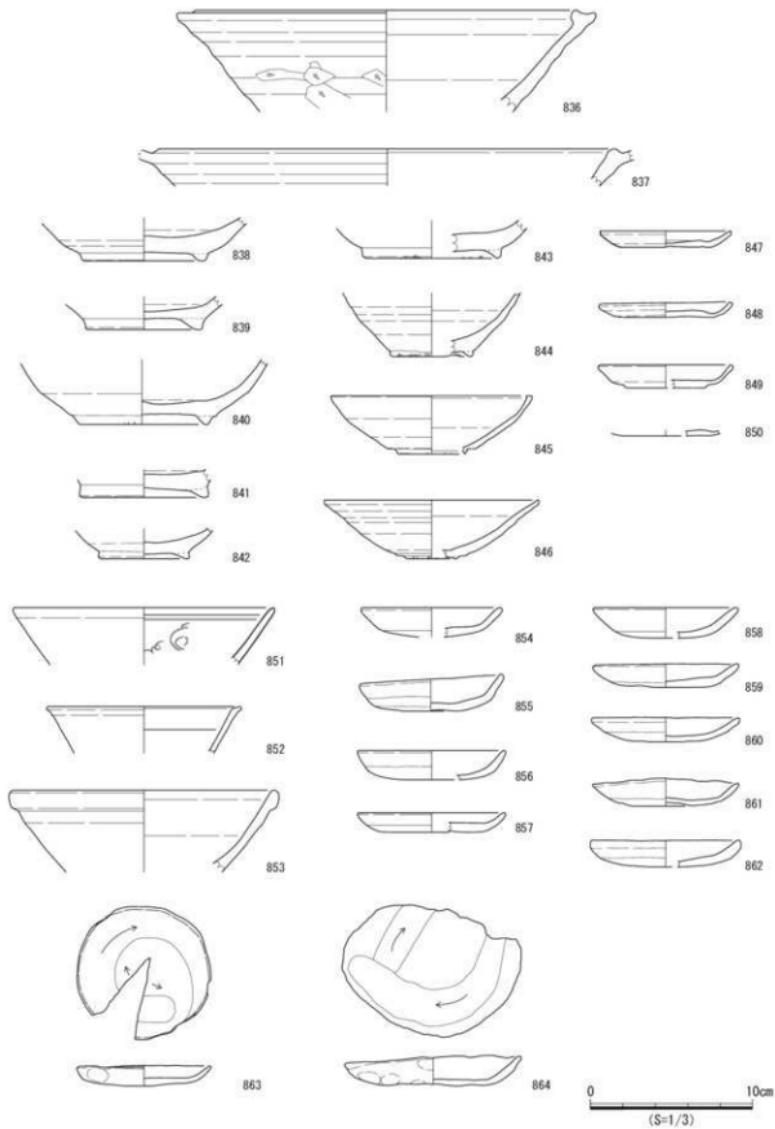


図112 6～8・17・18地点III層出土遺物実測図(3)

ら後II期の四耳壺である。どちらもGI18グリッドで出土しており同一個体と考えられる。880・881は平碗で、880は古瀬戸後I期から後II期、881は古瀬戸後II期である。882は古瀬戸後III期の縁袖小皿である。883・884は仏供で、883は古瀬戸後IV期古である。885は美濃III期からIV期の折縁皿である。886・887は播鉢である。886は古瀬戸後IV期新で、887は大窓である。888は近世陶器の鉢である。889～895は砥石で

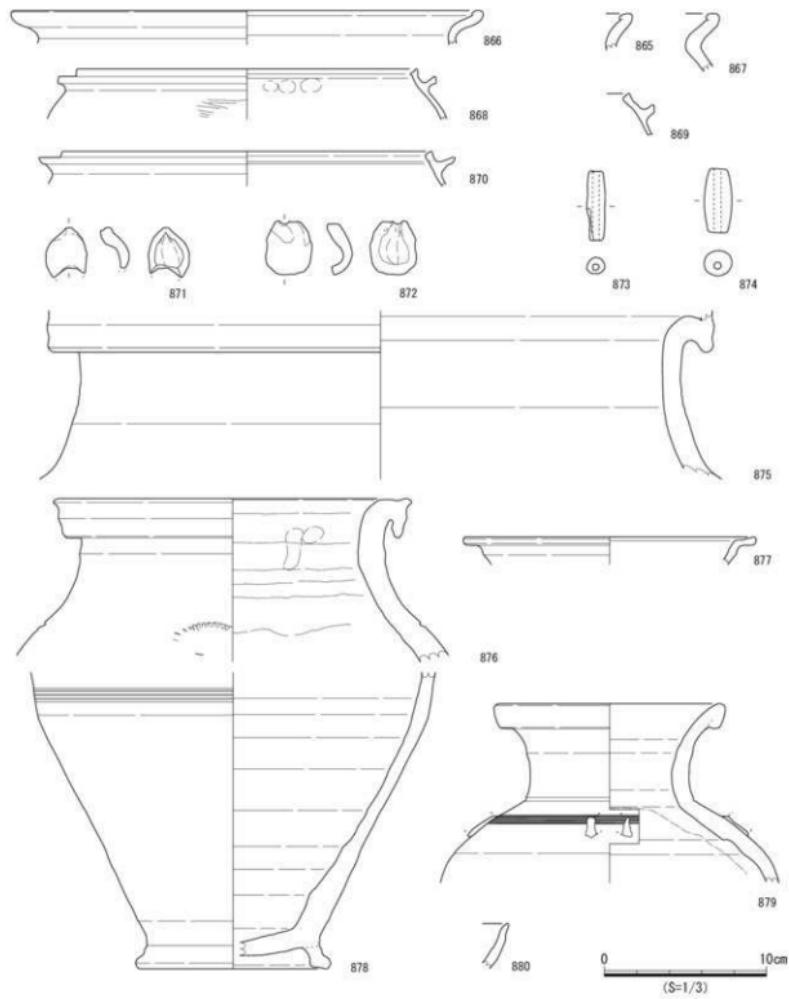


図113 6～8・17・18 地点III層出土遺物実測図（4）

ある。896～899は火打石と思われる。900は五輪塔である。901は鉄鏹である。形状はやや膨らみのある二等辺三角形状である。身部、茎部とともに扁平で、茎は逆刺である。左側の逆刺は欠損している。902は刀子で、刀部端部が欠損している。903は器種不明の金属製品である。形状は大きく湾曲する。904～906は錢貨である。904は祥符通寶で、905は熙寧元寶で、906は元祐通寶である。

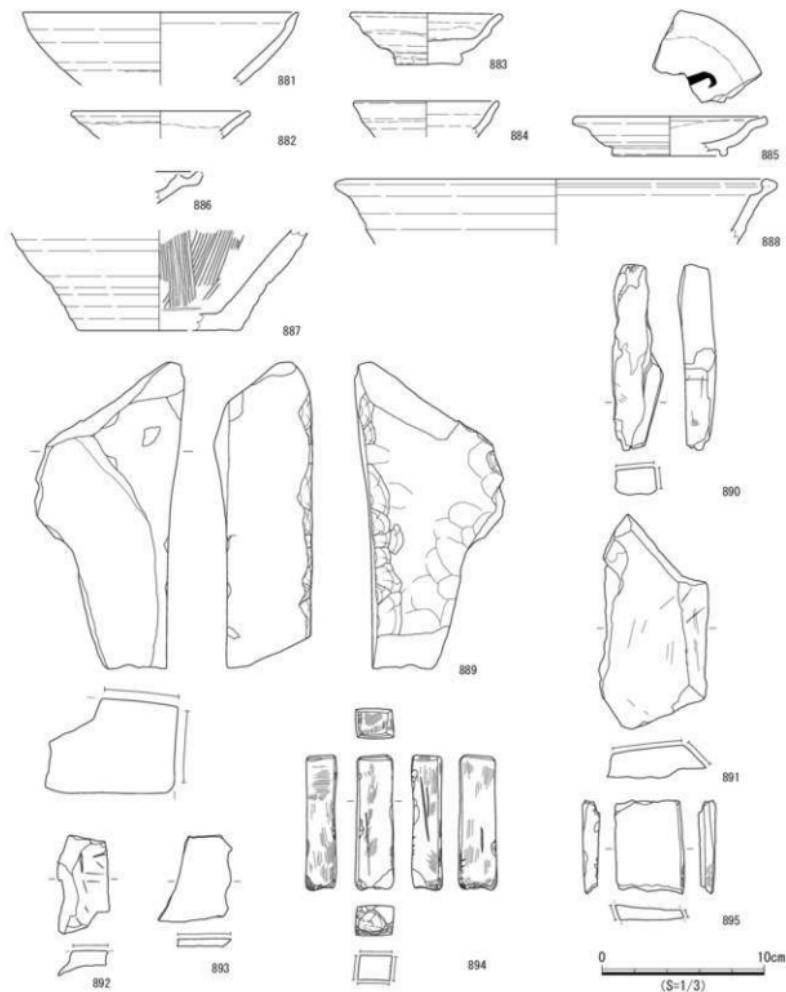


図114 6～8・17・18地点III層出土遺物実測図(5)

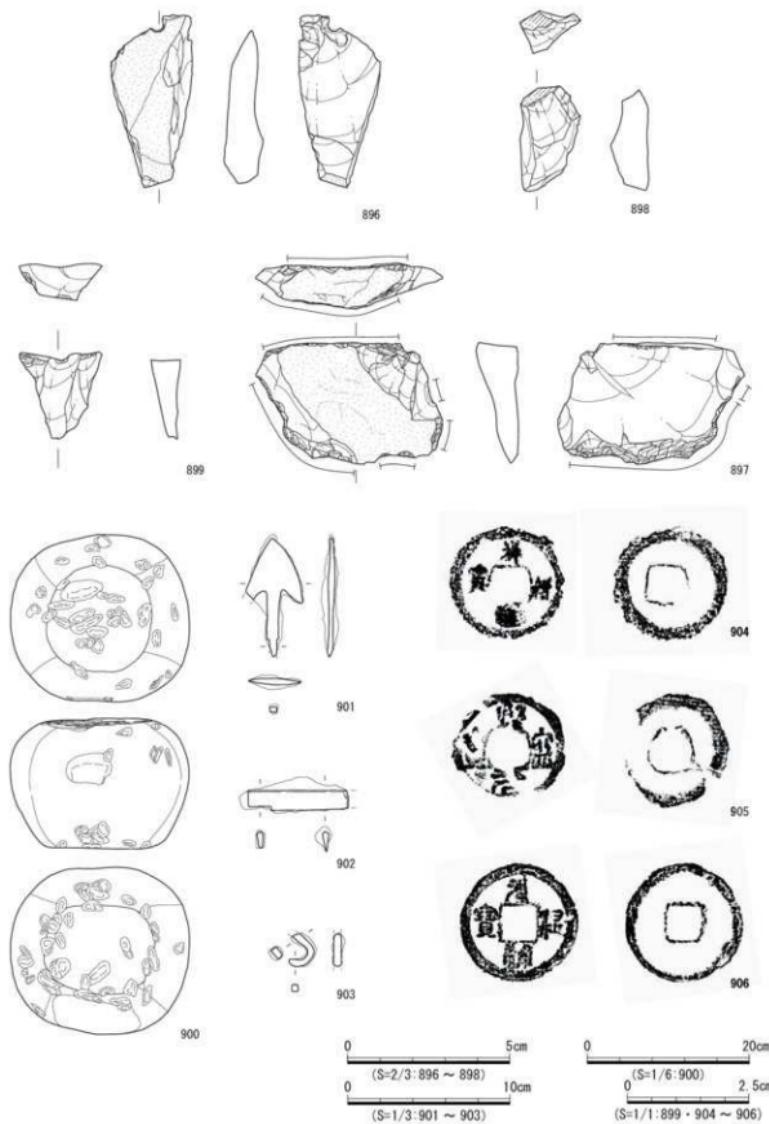


図115 6~8・17・18 地点III層出土遺物実測図(6)

## 第3節 5・14～16地点の遺構・遺物

遺跡の中央部から西部に位置する調査地点であるが、市道を挟んで17地点の西側となる。調査面積は1,021.7m<sup>2</sup>で、本線橋脚部分を調査した。南西側には市道を挟んで4地点がある。

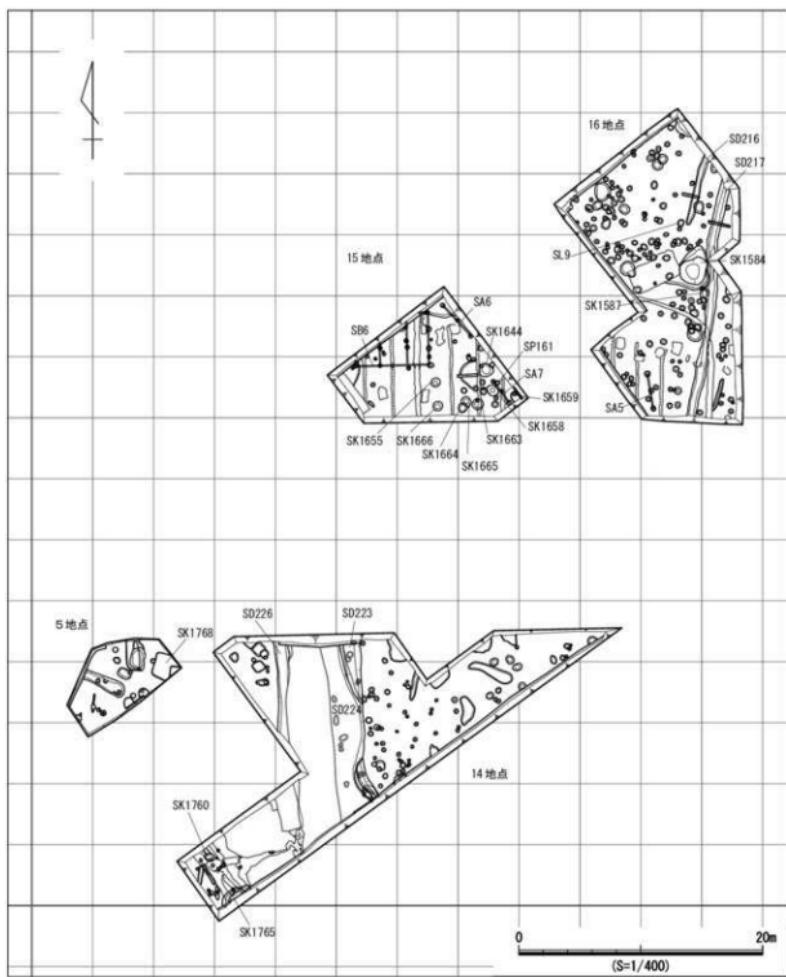


図 116 5・14～16 地点平面図

## 1 堀立柱建物

### SB6 (図 117・118)

**検出状況** 15 地点 GK6～GL7 グリッド、IV b 層上面で検出した。発掘区の北側に続く 3間×3間以上の建物と考えられる。P3・P6・P8～P10 の平面形は不明瞭であったが、その他の柱穴の平面形は明瞭であった。P1 は SK1640、P7 は SP157・SK1652 と重複する。本遺構は SK1640・SK1652 より古く、SP157 より新しい。

**規模・形状** 長軸方位は N-3°-W である。発掘区外に広がる可能性があるため全容は不明であるが、桁行 3間以上 (6.0m 以上、柱間 2.0m-2.2m-1.8m)、梁行 3間以上 (4.3m 以上、柱間 1.3m-1.5m-1.5m)、床面積 13.9 m<sup>2</sup> 以上となる総柱建物である。P9 は柱筋から南側にやや外れる。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは椭円形である。P7・P8 を除く各柱穴で柱痕跡を確認した。P5 から土師器 3点、P6 から土師器 1点、山茶碗 1点、P9 から土師器 1点、P10 から土師器 3点、須恵器 1点、灰釉陶器 4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

## 2 檇

### SA5 (図 119)

**検出状況** 16 地点 GL11 グリッド、IV b 層上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。

**規模・形状** 3基の柱穴が等間隔で直線的に並ぶことから檇としたが、さらに発掘区外に広がり堀立柱建物となる可能性がある。また、P3 は発掘区の壁面近くに位置しており、南西側に檇が延びる可能性もある。方位は N-10°-W で、柱間距離は約 1.65m である。

**柱穴** 柱穴の平面形はいずれも円形である。各柱穴では柱痕跡を確認した。P1 から土師器 1点、P3 から土師器 3点、須恵器 1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 土師器と須恵器が出土したことから、本遺構は古代から中世と考えられる。

### SA6 (図 120)

**検出状況** 15 地点 GL7～GK8 グリッド、IV b 層上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。

**規模・形状** 3基の柱穴が等間隔で直線的に並ぶことから檇としたが、さらに発掘区外に広がり、堀立柱建物となる可能性がある。また、P3 は発掘区の壁面近くに位置しており、南東方向に檇が延びる可能性もある。方位は N-42°-W で、柱間は約 1.1m である。SA7 と同一方向である。

**柱穴** 柱穴の平面形はいずれも円形である。P1 と P3 で柱痕跡を確認した。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** SA7 との位置関係から、本遺構は中世と考えられる。

### SA7 (図 120)

**検出状況** 15 地点 GL11 グリッド、IV b 層上面で検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。

**規模・形状** 3基の柱穴が等間隔で直線的に並ぶことから檇とした。P3 は発掘区の壁面近くに位置しており、南側に檇が延びる可能性がある。方位は N-42°-W で、柱間は約 1.45m である。SA6 と同

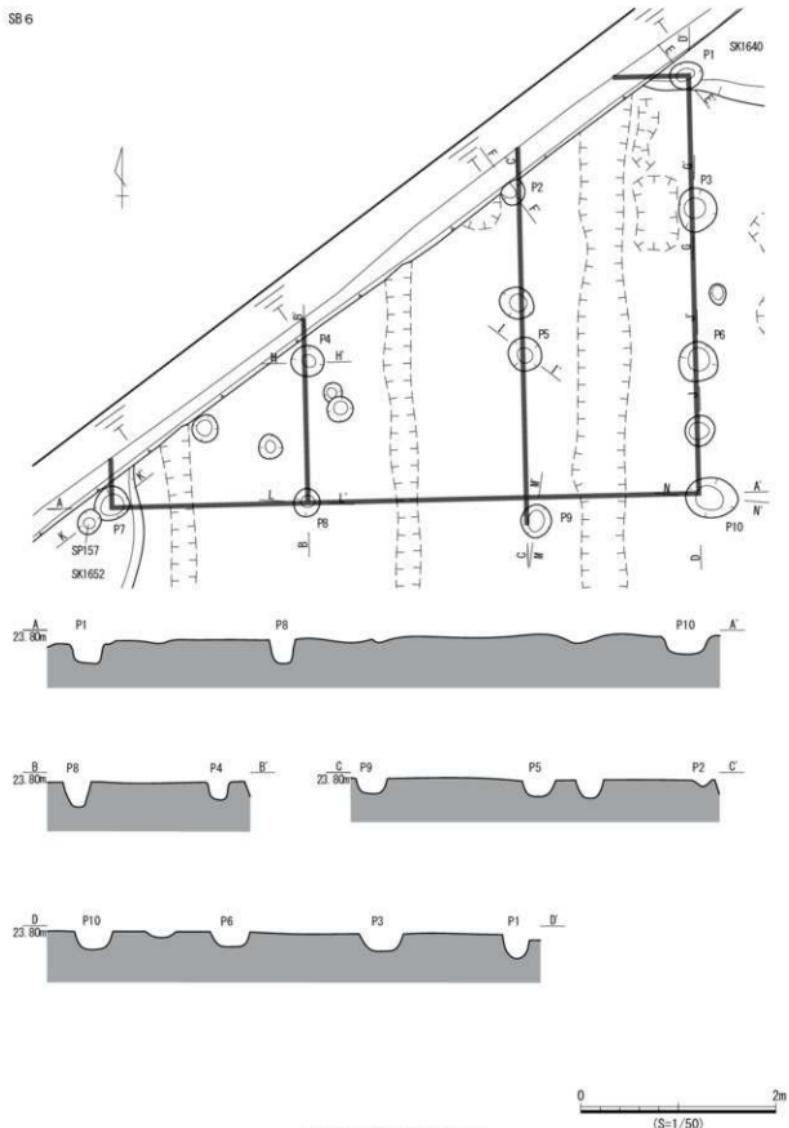


図 117 SB 6 遺構図 (1)

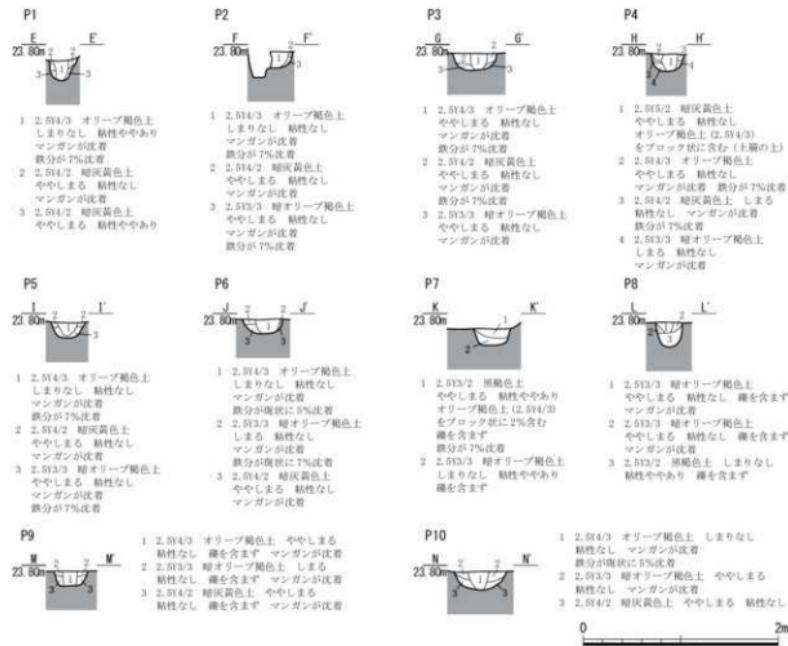


図118 SB 6 遺構図 (2)

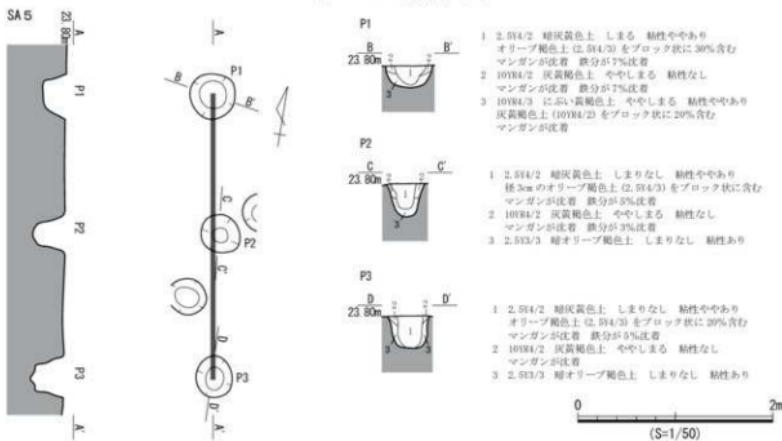
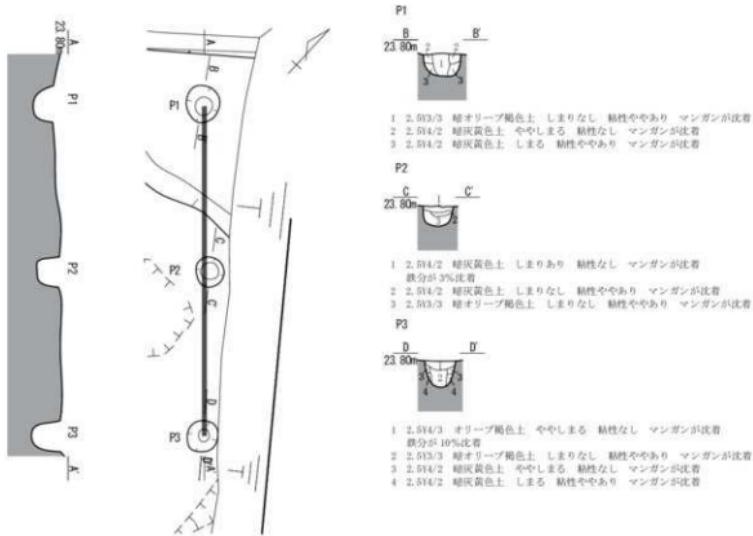


図119 SA 5 遺構図

SA 6



SA 7

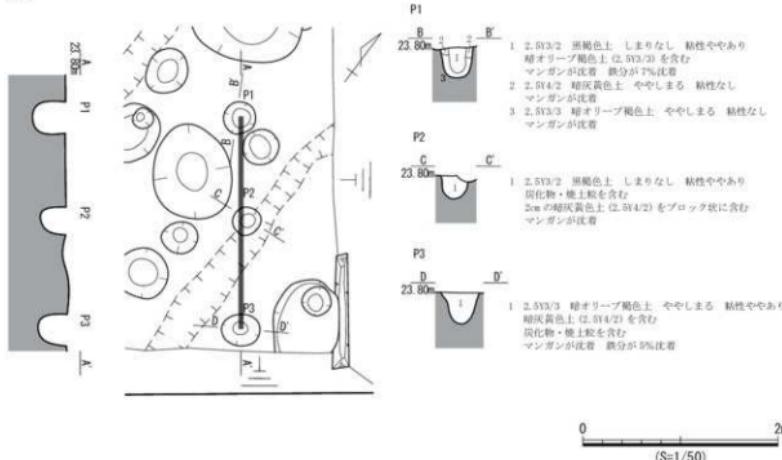


図 120 SA 6・SA 7 遺構図

一方向である。

**柱穴** 柱穴の平面形はいずれも円形である。P1で柱痕跡を確認した。P2とP3では柱痕跡は認められなかった。P1から土師器1点、山茶碗3点、P2から土師器3点、山茶碗3点、P3から山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

### 3 柱穴

#### SP161 (図121)

**検出状況** 15地点 GL8グリッド、IV b層上面で検出した。SA6-P1の南東に接する位置である。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。断面形は円筒状で、底面はやや丸みを持つ。

**埋土** 4層に分層した。2層は柱痕跡、3層と4層は掘方埋土である。1層と2層に炭化物、3層に焼土粒を含む。

**遺物出土状況** 底面付近の2層から山茶碗の底部(907)が出土した。その他に埋土中から土師器7点、灰釉陶器1点、山茶碗6点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗1点を図示した。907は第5型式の尾張型山茶碗である。

**時期** 図示した907から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

### 4 土坑

#### SK1584 (図122)

**検出状況** 16地点 GJ11～GJ12グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。西側は掲乱により消失する。東側でSD217と重複する。本遺構はSD217より新しい。

**規模・形状** 平面形は不定形である。北側と南側にテラス状の平坦面を有し、上段の平坦面より下は緩やかに掘り込まれ、底面は丸みを持つ。テラス状の平坦面を境に1層と2層が分層できることから、2基の遺構が重複した可能性がある。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。埋土中に多数の遺物が含まれる。いずれの層にもブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器243点、須恵器41点、灰釉陶器39点、山茶碗224点、陶器37点、

SP161

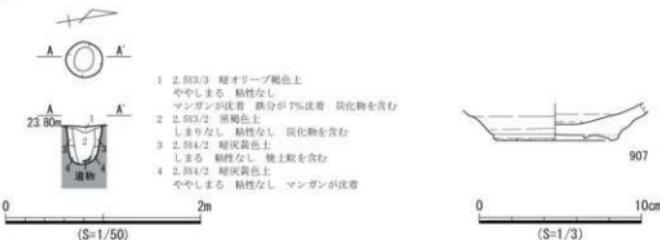


図121 SP161 遺構図・出土遺物実測図

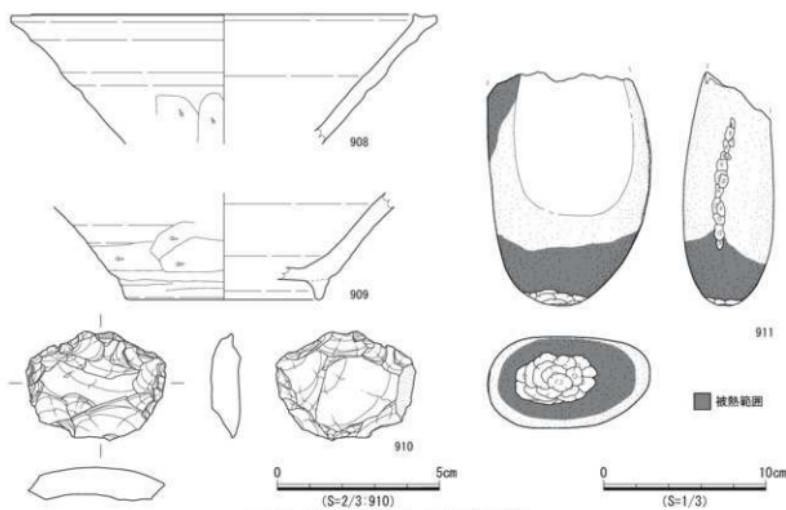
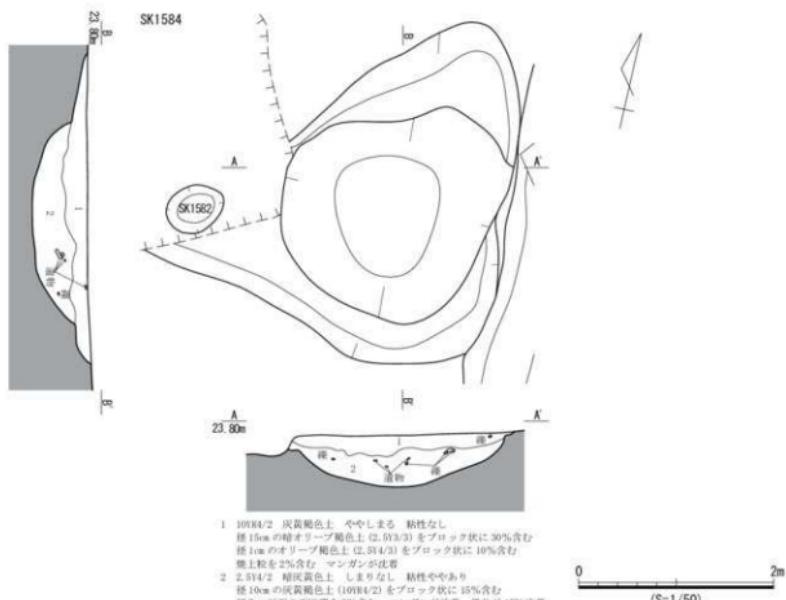


図 122 SK1584 遺構図・出土遺物実測図

鉄製品6点（釘5点、種別不明1点）、石製品6点が散在して出土した。遺物は南側で多く出土した。

**出土遺物** 山茶碗など4点を図示した。908と909は第9型式の尾張型山茶碗の片口鉢である。910は火打石、911は叩石である。

**時期** 図示した909から、本遺構は14世紀初頭から後葉と考えられる。

#### SK1587（図123）

**検出状況** 16地点GJ11～GK12グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSD217、南側でSK1588、北側でSP150と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸みを持つ。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。1層に焼土粒を含む。1層と2層に炭化物とブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器1点、灰釉陶器7点、須恵器2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 折戸53号窯式に比定した灰釉陶器の皿が出土したことから、本遺構は10世紀前葉から中葉と考えられる。

#### SK1644（図124）

**検出状況** 15地点GL8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSP160・SK1645と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。壁面の傾斜は急で、底面はほぼ平坦である。

**埋土** 3層に分層した。ほぼ水平に堆積する。1層と2層に炭化物を含む。2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 1層と2層から土師器23点、須恵器13点、灰釉陶器8点、山茶碗65点、陶磁器3点、砥石1点が散在して出土した。3層から遺物は出土しなかった。

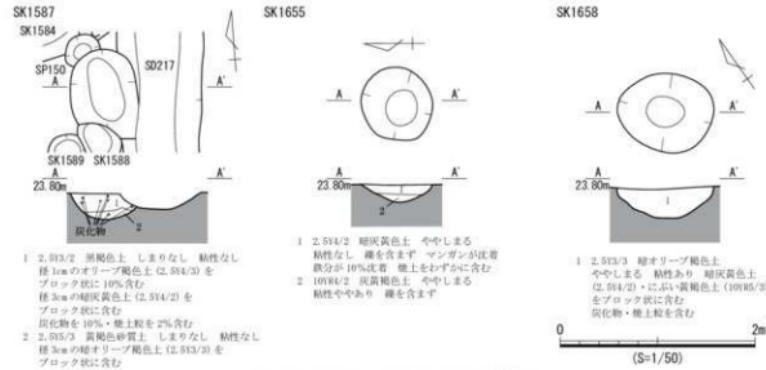


図123 SK1587・SK1655・SK1658 遺構図

**出土遺物** 山茶碗など2点を図示した。912は第5型式の尾張型山茶碗、913は砥石である。

**時期** 図示した912から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SK1655(図123)

**検出状況** 15地点GL7グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 平面形はほぼ円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸みを持つ。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器11点、須恵器5点、山茶碗15点、陶器1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

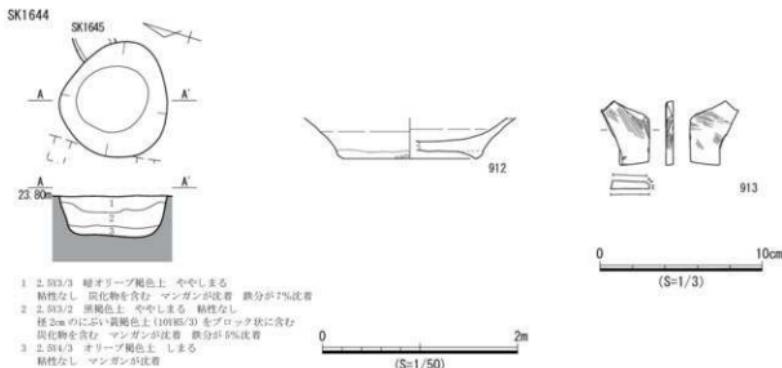


図124 SK1644 遺構図・出土遺物実測図

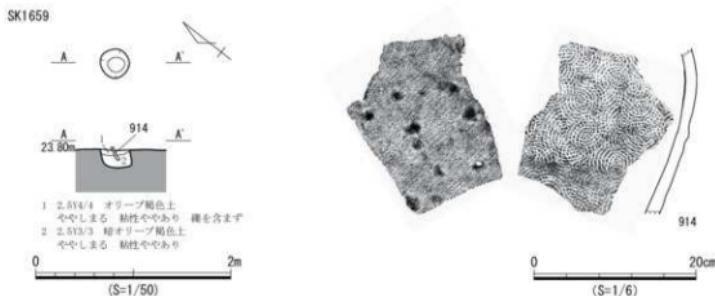


図125 SK1659 遺構図・出土遺物実測図

## SK1658（図123）

**検出状況** 15地点GL8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

**埋土** 単層の埋土である。焼土粒、炭化物、ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器が9点、灰釉陶器が1点、山茶碗5点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 大畠大洞4号窯式～大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀末から15世紀初頭と考えられる。

## SK1659（図125）

**検出状況** 15地点GL8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSK1660と重複する。本遺構はSK1660より新しい。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面はほぼ平坦である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。須恵器の甕片(914)が縦位で出土したことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 1層から須恵器の甕の破片(914)が縦位で出土した。その他に埋土中から土師器1点と須恵器1点が散在して出土した。

**出土遺物** 須恵器1点を図示した。914は美濃須衛窯III期後半に比定した須恵器甕の胴部である。

**時期** 図示した914から、本遺構は7世紀後葉から末と考えられる。

## SK1663（図126）

**検出状況** 15地点GL8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。3層は東側に偏り堆積する。いずれの土層にも焼土粒や炭化物を含む。

**遺物出土状況** 埋土上層から土師器12点、須恵器4点、灰釉陶器1点、山茶碗4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。下層から遺物は出土しなかった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

## SK1664（図127）

**検出状況** 15地点GL8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSK1665と重複する。本遺構はSK1665より新しい。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸みを持つ。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。いずれの土層にも焼土粒や炭化物を含む。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 2層との層界付近から山茶碗の底部(915)が逆位で出土した。その他に埋土中から土師器23点、山茶碗7点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗2点を図示した。915は第4型式、916は第6型式の尾張型山茶碗である。

**時期** 図示した916から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

## SK1665(図126)

**検出状況** 15地点 GL8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSK1664と重複する。本遺構はSK1664より古い。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。いずれの層にも焼土粒や炭化物を含む。

**遺物出土状況** 埋土上層から土師器3点、須恵器2点、山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

## SK1666(図126)

**検出状況** 15地点 GL7グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸みを持つ。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。

**遺物出土状況** 埋土中から須恵器1点、山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

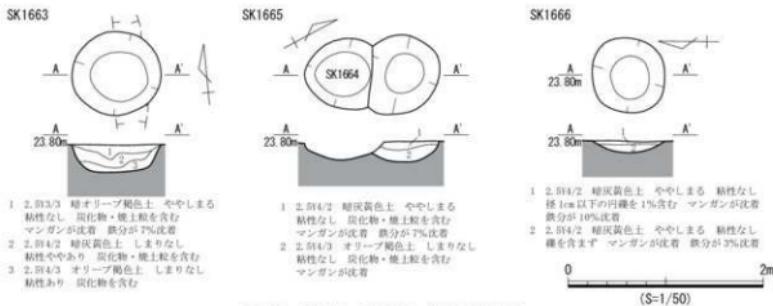


図126 SK1663・SK1665・SK1666遺構図

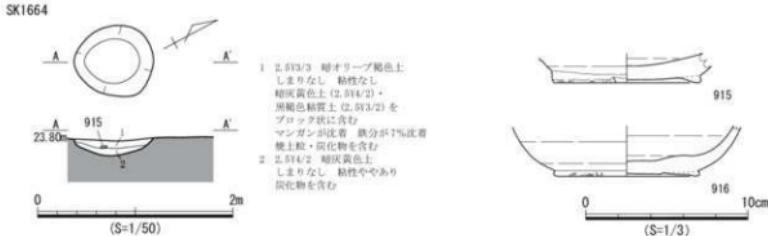


図127 SK1664遺構図・出土遺物実測図

## SK1760(図128)

**検出状況** 14地点GT3グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSK1759と重複する。本遺構はSK1759より古い。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。埋納された山茶碗が出土したことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 底面の5cmほど上から正位に重ねて置かれた山茶碗2点(917・918)、下端に沿って底面上に正位に置かれた完形の小皿4点(919・920・921・923)と底部のみ残った小皿1点(924)、逆位に置かれた完形の小皿1点(922)と半分に割れた小皿1点(925)が出土した。これらの山茶碗と小皿には使用痕が認められ、使用後に意図的に埋設されたと考えられる。その他に上層から土師器3点、山茶碗18点、下層から灰釉陶器1点、山茶碗3点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗9点を図示した。いずれも第5型式の尾張型山茶碗で、917と918は碗、919~925

SK1760

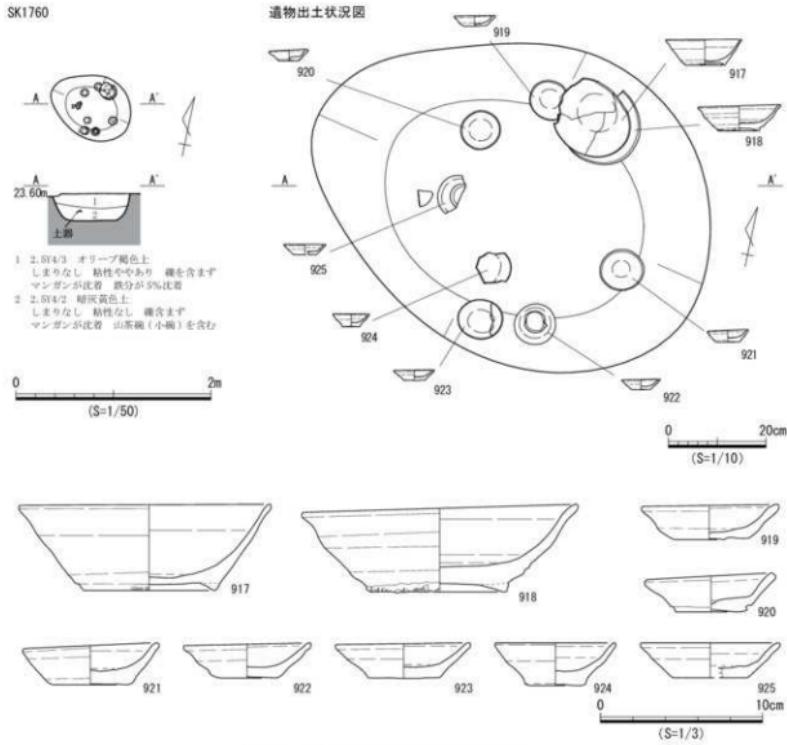


図128 SK1760 遺構図・出土遺物実測図

は小皿である。

**時期** 図示した917~925から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SK1765（図129）

**検出状況** 14地点GT4~KA4グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 大半が発掘区外となるため、平面形は不明である。壁面の傾斜は緩やかに開く。底面は平坦であるが、周囲を巡るテラス状の段をもつ。

**埋土** 5層に分層した。埋土は周囲から堆積し、中央が凹むことから自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 北側の1層から山茶碗2点(927・928)が少し離れて逆位で出土した。その他に埋土中から土師器16点、灰釉陶器1点、山茶碗123点、白磁2点、鉄製品2点（鉄滓、種別不明）が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など5点を図示した。930はB類の伊勢型鍋である。927は第5型式、928と929は第6型式の尾張型山茶碗である。926はVII類の白磁皿である。

**時期** 図示した928と929から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SK1768（図130）

**検出状況** 5地点GP2~GQ3グリッド、IV b層上面で検出した。東部は発掘区外となる。平面形は明瞭であった。南東側でSK1767、西側でSK1769と重複する。本遺構はSK1767より古く、SK1769より新しい。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は隅丸方形と考えられる。壁面の傾斜は北側と西側は急で、南側では緩やかに開く。底面は平坦である。堅穴状の土坑であるが、柱穴は確認できなかった。

#### SK1765

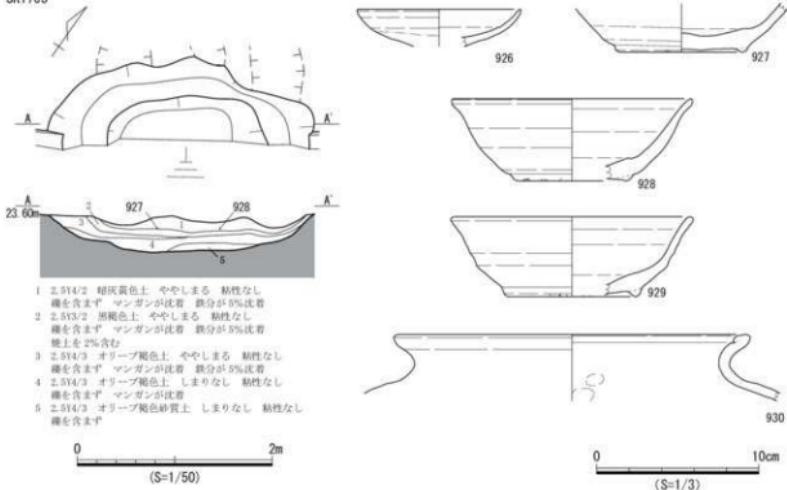


図129 SK1765 遺構図・出土遺物実測図

**埋土** 単層の埋土である。5~10cmの小礫を多数含む。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器2点、須恵器7点、灰釉陶器1点、山茶碗4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

## 5 溝状遺構

### SD216（図131）

**検出状況** 16地点 GH11~GI12グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 南北方向に延び、北側は発掘区外に続く。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。SD217とほぼ平行することから関連する可能性がある。

**埋土** 単層の埋土である。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器19点、須恵器8点、灰釉陶器8点、山茶碗20点、陶器1点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器皿1点を図示した。931はM3類の土師器皿である。

**時期** SD217との位置関係と図示した931から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

### SD217（図132・図133）

**検出状況** 16地点 GI11~GL12グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側でSK1584・SK1587と重複する。本遺構はSK1584より古く、SK1587より新しい。

**規模・形状** 南北方向に延び、北側・南側とも発掘区外に続く。底面はほぼ平坦である。SD216とほぼ平行する。

**埋土** 4層に分層した。ほぼ水平に堆積する。2層と3層は砂質土で2層ではラミナ状の堆積が認められた。B-B'断面では、A-A'断面・C-C'断面の3層に対応する土層は確認できなかった。また3層に焼土粒や炭化物を含むが、SK1587の埋土が流入した可能性がある。1層はIII層上面から掘り込まれた別の遺構埋土で、本遺構の埋没後に同じ位置に掘削された溝と考えられる。

**遺物出土状況** A-A'断面の2層に対応する層から山茶碗等が多く出土した。また、北側底面から



図130 SK1768 遺構図

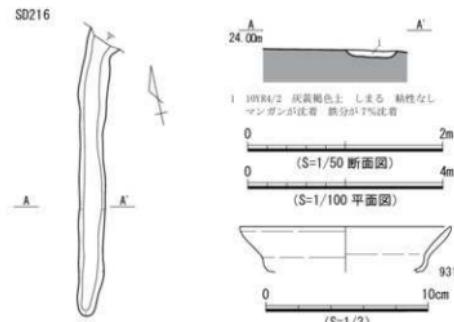


図131 SD216 遺構図・出土遺物実測図

SD217

遺物出土状況図

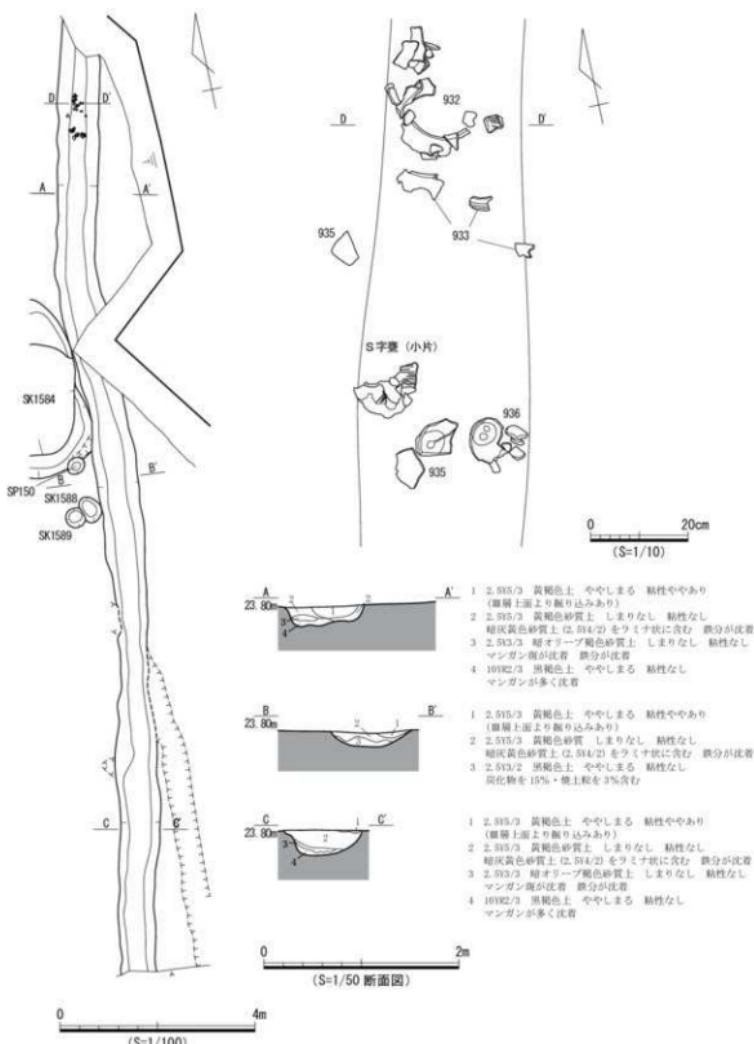


図 132 SD217 遺構図

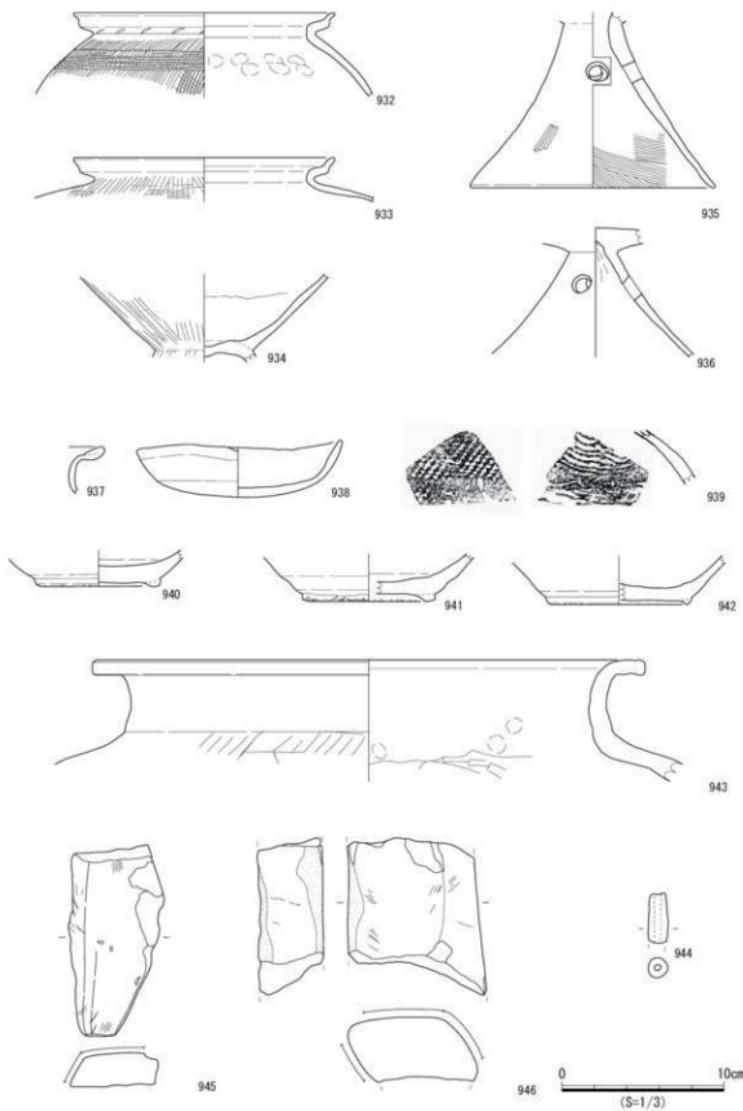


図 133 SD217 出土遺物実測図

土師器の高杯の脚部2点(935・936)が横位で、S字甕の口縁部が1点(932)逆位で出土した。これらの土師器は別遺構に伴う可能性が高い。その他に埋土中から土師器494点、須恵器31点、灰釉陶器25点、山茶碗123点、陶器24点、土鍤1点、石器2点、鉄製品1点(種別不明)が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など14点を図示した。932~938は土師器で、932~934はB類のS字甕で、932は頭部にハケ状工具の痕跡が認められる。935と936は高杯の脚部、937はB類の伊勢型鍋、938はM3類の土師器皿である。939は須恵器の甕である。940~942は第5型式の尾張型山茶碗である。943は常滑産の甕である。944は土鍤である。945と946は砥石である。

**時期** SK1587との重複関係と図示した940~942から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。なお、北側底面は図示した932~936から、3世紀後葉の別遺構と考えられる。

#### SD223(図134)

**検出状況** 14地点GP6～GS6グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSK1708、中央でSD224と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 南北方向に延び、南北端は発掘区外に続く。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。SD226と平行する。

**埋土** 単層の埋土である。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器8点、須恵器1点、灰釉陶器4点、山茶碗4点、陶器1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 第5型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SD224(図135・136)

**検出状況** 14地点GP5～GT5・GP6～GS6グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSD223、西側でSD226と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

**規模・形状** 南北方向に延び、南北端は発掘区外に続く。西側は比較的直線であるが、東側は蛇行する。壁面の傾斜は東側では緩やかで、北側ではやや急である。底面はほぼ平坦である。本遺構はSD223やSD226と方向がほぼ一致し、繰り返し掘削された可能性がある。

**埋土** 12層に分層した。中央は搅乱により消失し、その東西で堆積状況が異なる。西側では7層～12層がほぼ水平に堆積するが、東側では4層～6層が水平に堆積したのち、東辺に沿って別の溝が掘り込まれ、そこに1層～3層が堆積する。このため複数の溝が重複していることも考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器47点、須恵器45点、灰釉陶器14点、山茶碗62点、陶器22点、鉄製品1点(種別不明)が散在して出土した。

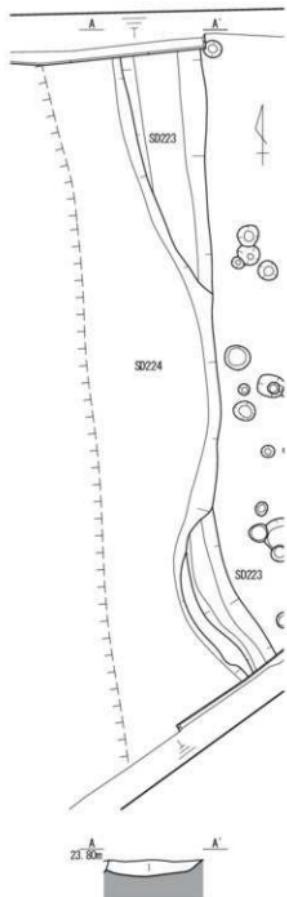
**出土遺物** 須恵器など3点を図示した。947は美濃須衛窯III期後半に比定した須恵器甕の頭部である。948は第5型式の尾張型山茶碗である。949はIV類の白磁碗である。

**時期** 第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SD226(図137)

**検出状況** 14地点GP5～GQ5グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSD224と重複する。本遺構はSD224より古い。

SD223



1 10103/4 緑褐色土 不やしまる 粘性なし  
錆を含まず マンガンが沈着

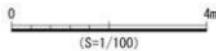


図 134 SD223 造構図

SD224

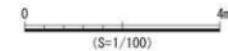
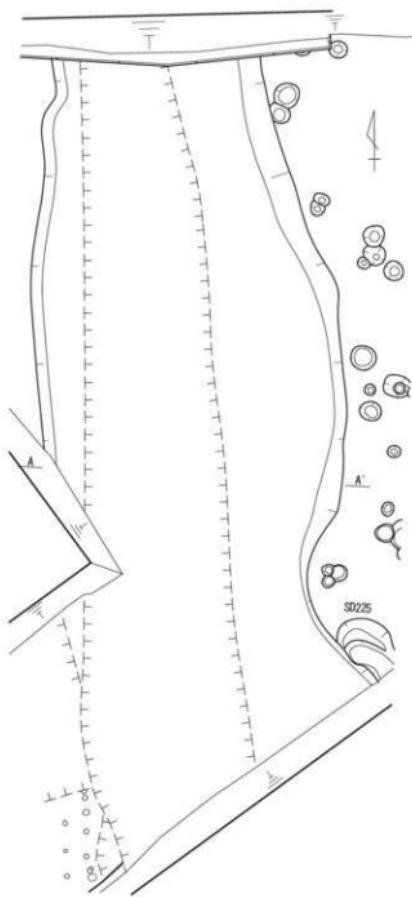


図 135 SD224 造構図 (1)

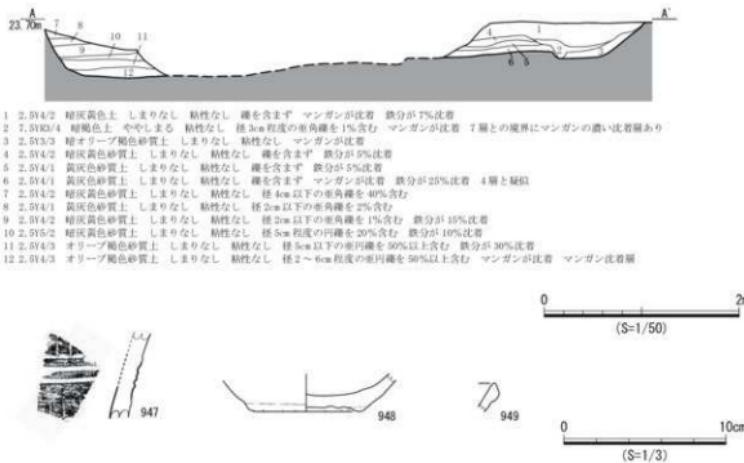


図136 SD224 遺構図(2)・出土遺物実測図

SD226

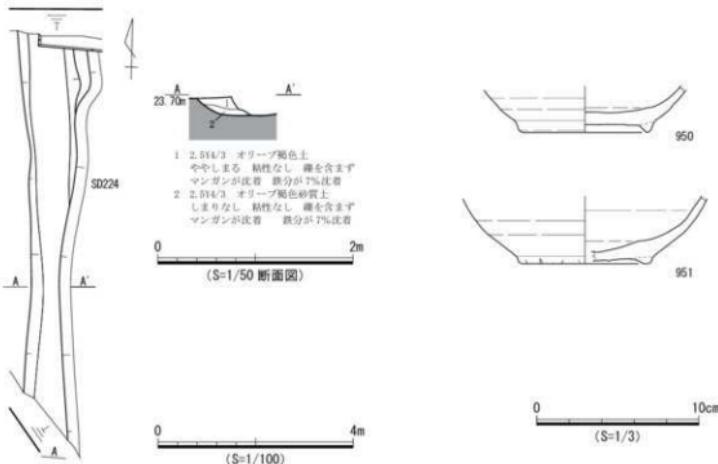


図137 SD226 遺構図・出土遺物実測図

**規模・形状** 南北方向に延び、北端は発掘区外に続く。南端は搅乱により消失する。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。SD223・SD224とほぼ平行する。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器8点、須恵器7点、山茶碗39点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗2点を図示した。951は第6型式の尾張型山茶碗、950は丸石3号窯式に比定した東濃型山茶碗である。

**時期** SD224との重複関係と図示した951から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

## 6 焼土遺構

### SL9(図138)

**検出状況** 16地点 GI11グリッド、IVb層上面で検出した。遺構検出作業の際に焼土を確認し、それを残して検出作業を継続して行った。掘方の平面形を確認した段階では、焼土部分は盛土状となった。掘方の平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 被熱範囲は不定形で、掘方の平面形は楕円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。

**埋土** 3層に分層した。1層は焼土、2層と3層に焼土塊や炭化物を含む。一旦0.05mほど掘り下げた穴に焼土塊が混入した土を入れて、その上で火を用いた行為を行ったと考えられる。

**出土遺物** 土器類は出土せず、埋土中に鍛冶に関連する板状剥片や粒状滓等は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

## 7 その他の遺構出土遺物(図139)

出土遺物のうち9点を図示した。952～956は土師器である。952はミニチュアの把手付鍋である。953はA類、955はB類、956はC類の清郷型鍋である。954はM4類の土師器皿である。957は須恵器の壺身C類である。958は虎渓山1号窯式に比定した灰釉陶器の段皿である。959と960は鉄製品で、959は鎌、960は釘である。

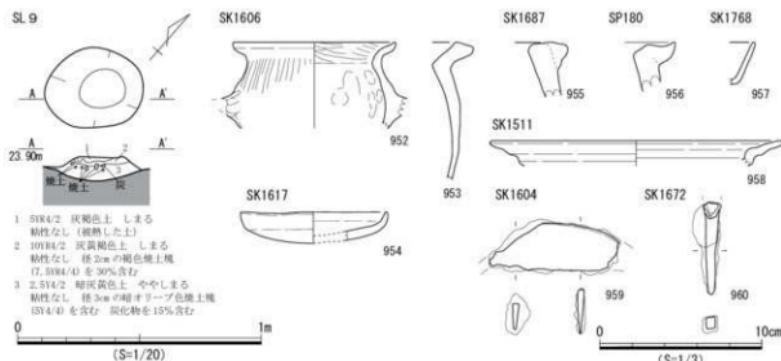


図138 SL9遺構図

図139 その他の遺構出土遺物実測図

(S=1/3)

## 8 III層等出土遺物（図140）

III層出土遺物は、5地点・14地点・15地点・16地点から6,623点が出土した。土器類はいずれの種別も、遺構出土数よりもIII層出土数が多かった。II層からも299点が出土した。また、搅乱の出土遺物についても掲載した。

出土遺物のうち12点を図示した。961～963は土師器である。961はミニチュアの甕、962は甕、963は丸底甕である。964と965は須恵器である。964は美濃須衛窯IV期第3小期～V期第1小期に比定した佐波理碗写しの鉢である。965は美濃須衛窯V期第1小期に比定した有台盤である。966は黒笹90号窯式併行に比定した東濃産の縁袖陶器の皿である。966は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗で、底部外面に「イ」のような墨書きが確認できる。967と969は尾張型山茶碗で、967は第6型式の碗、969は第7型式～第8型式の片口鉢である。970はXI類の白磁碗である。971と972は土錘である。

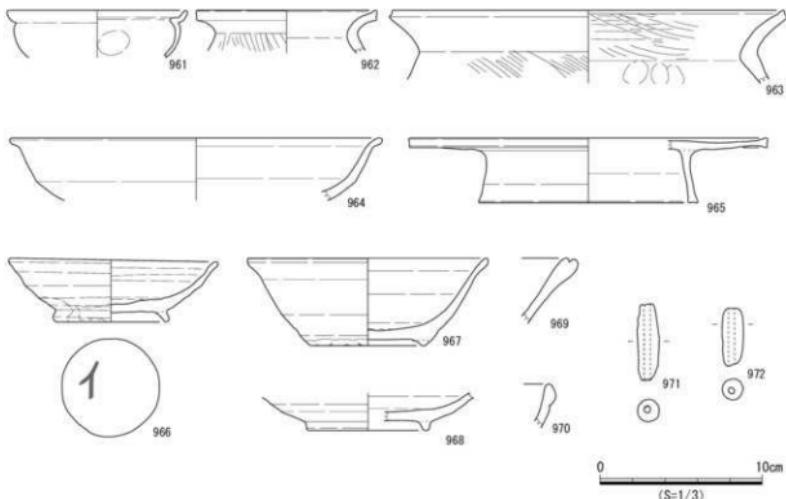


図140 III層等出土遺物実測図

## 第4節 13地点の遺構・遺物

遺跡の中央よりやや南西部に位置する調査地点であるが、市道を挟んで2地点の北東側、席田用水を挟んで3地点の北西側、4地点の西側となる。調査面積は652.4 m<sup>2</sup>で、席田用水の付替部分を調査した。

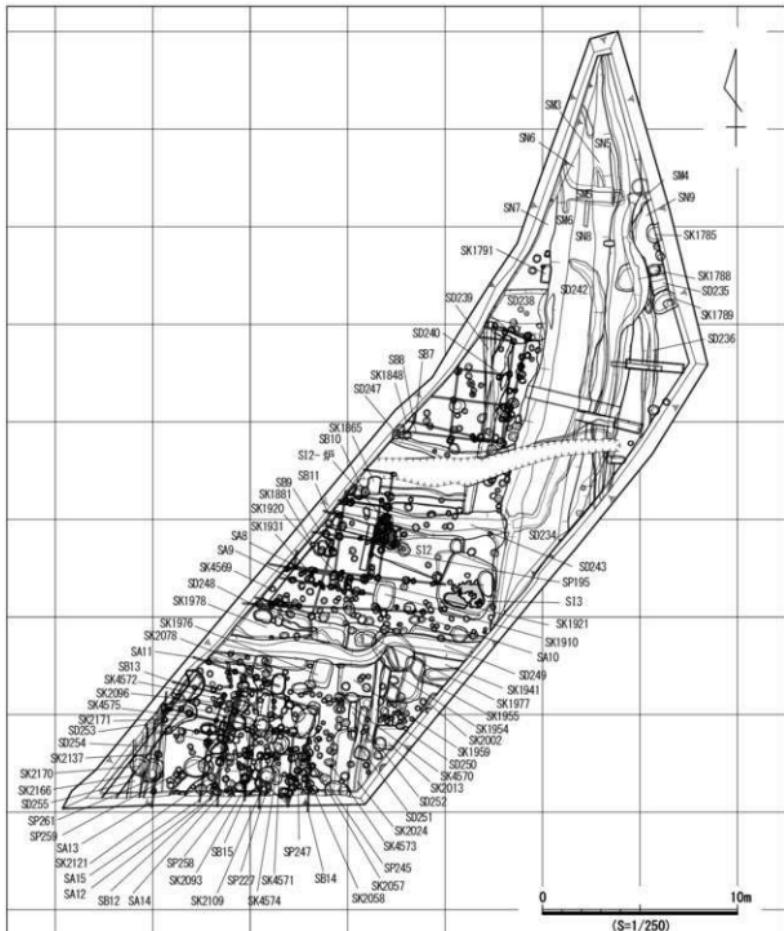


図 141 13 地点平面図

## 1 堅穴建物

### SI 2 (図 142~144)

**検出状況** IJ12～IK13 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は北側と東側では明瞭で、西側と南側では不明瞭であった。西側で SP195・SB9・SB10、東側で SD244・SI3、中央で SD243 等と重複する。本遺構は重複するいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 平面形は西辺がやや短い台形である。長軸方位は N-77° - W である。壁面の傾斜はやや急で、残存高は約 0.08m である。

**埋土** 4 層に分層した。概ね水平に堆積する。3 層は炉の上層の埋土で、焼土塊を多く含む。4 層は 1 層の下に厚く堆積し、黒褐色土ブロックを含む。2 層と 4 層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**床面** 床面は概ね平坦であるが、わずかに東に向かって下がる。床面で 13 基の土坑を検出した。検出したいずれの遺構にも柱痕跡が見られないが、P10 に柱当たりがみられ、P10 を一端として、堅穴の掘方に沿った形で概ね台形に並ぶことから、P1・P3・P10・P12 が主柱穴であったと考えられる。

**炉** 掘方の西壁近くで検出した。上層では、硬化した焼土塊を検出した (図 143 上)。被熱面が一樣ではなかったことから、焼土塊は炉の廃棄時に壊された炉壁と考えられる。焼土塊を除いた後からは、南側は細長く、北側で広がる土坑状の炉を確認した (図 143 下)。被熱範囲は全体に広がるが、硬化した焼土ブロックは特に南側に集中していた。南側の一番深い部分は、被熱面が見られないため、送風部分であると考えられる。下層では、東側に方形、西側に円形の被熱範囲が広がり、一部には硬化した部分も見られた (図 144)。東側も西側も中心の深い部分では被熱範囲が見られなかつたため、底の部分に礫などを敷いていたか、廃棄時に底さらえをしたと考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 19 点、須恵器 11 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 8 点が散在して出土した。また、P6 から土師器 1 点、P9 から土師器 1 点、P11 から土師器 1 点、須恵器 1 点、灰釉陶器 2 点が散在して出土した。

**出土遺物** 須恵器 1 点を図示した。973 は猿投窯産の可能性がある岩崎 17 号窯式併行に比定した窯である。

**時期** SI3 との重複関係と明和 27 号窯式に比定した灰釉陶器が出土したことから、本遺構は 11 世紀後葉と考えられる。

### SI 3 (図 145・146)

**検出状況** IK12～IL13 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。北側で SI2、東側で SD234 と重複する。本遺構は SD234 より古く、SI2 より新しい。

**規模・形状** 規模は東西 3.2m × 南北 3.2m、平面形は台形で、北西側と南側にテラスをもつ。床面は隅丸方形である。北東側は重複により消失する。長軸方位は N-8° - E である。壁面の傾斜は西側では急で、北側と南側ではやや聞く。壁の残存高は最大で約 0.3m である。

**埋土** 3 層に分層した。概ね水平に堆積する。いずれの層にもブロック土を含み、焼土粒や炭化物を含むことから、人為堆積と考えられる。

**床面** 床面は概ね平坦であるが、中央部は少し陥る。床面で 8 基の土坑と 2 基の炉跡を検出した。床面の焼土痕や炉跡の位置から、鍛冶工房であると考えられる。堅穴の内外にある P1・P2・P6・P7

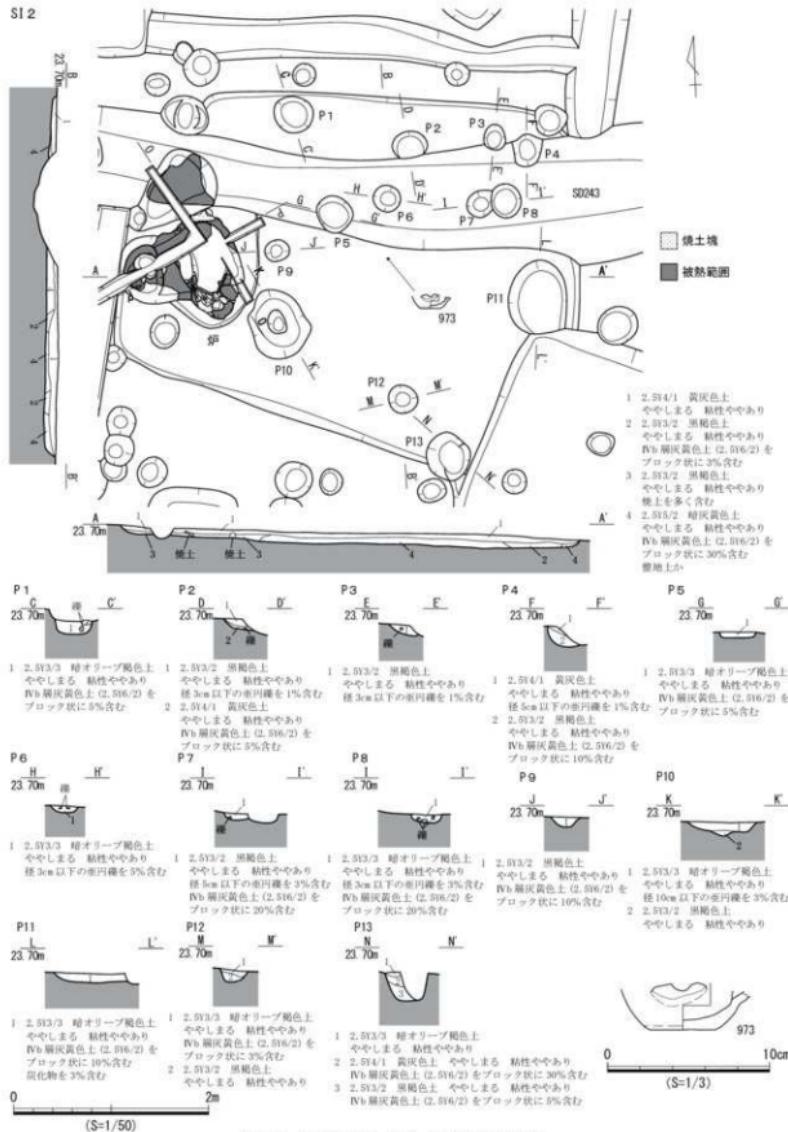
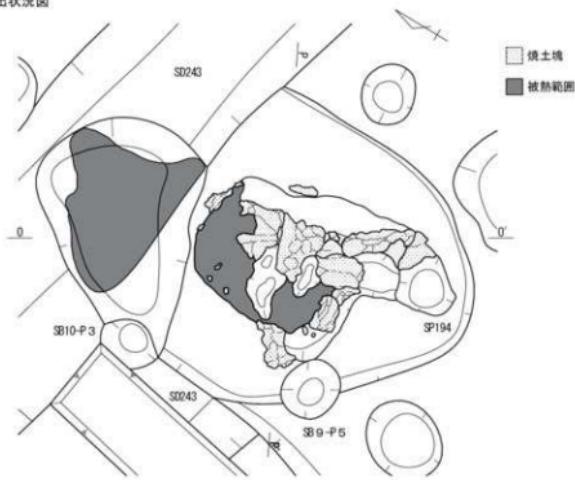


図142 SI 2造構図(1)・出土遺物実測図

炉 上層焼土ブロック検出状況図



炉 上層焼土ブロック除去状況図

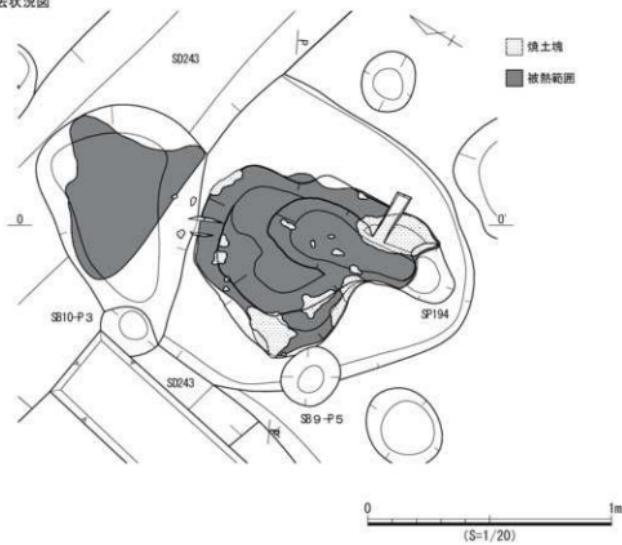


図 143 SI 2 造構図 (2)

## 炉下層完掘図

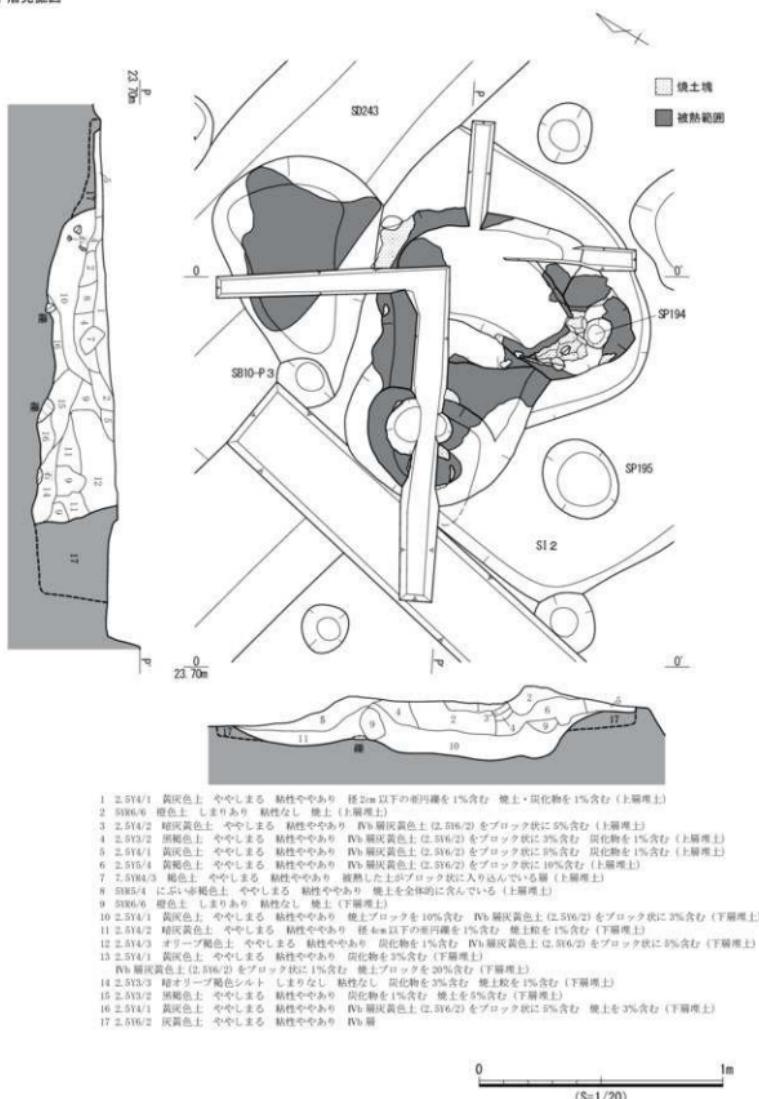


図 144 SI 2 造構図 (3)

SI 3

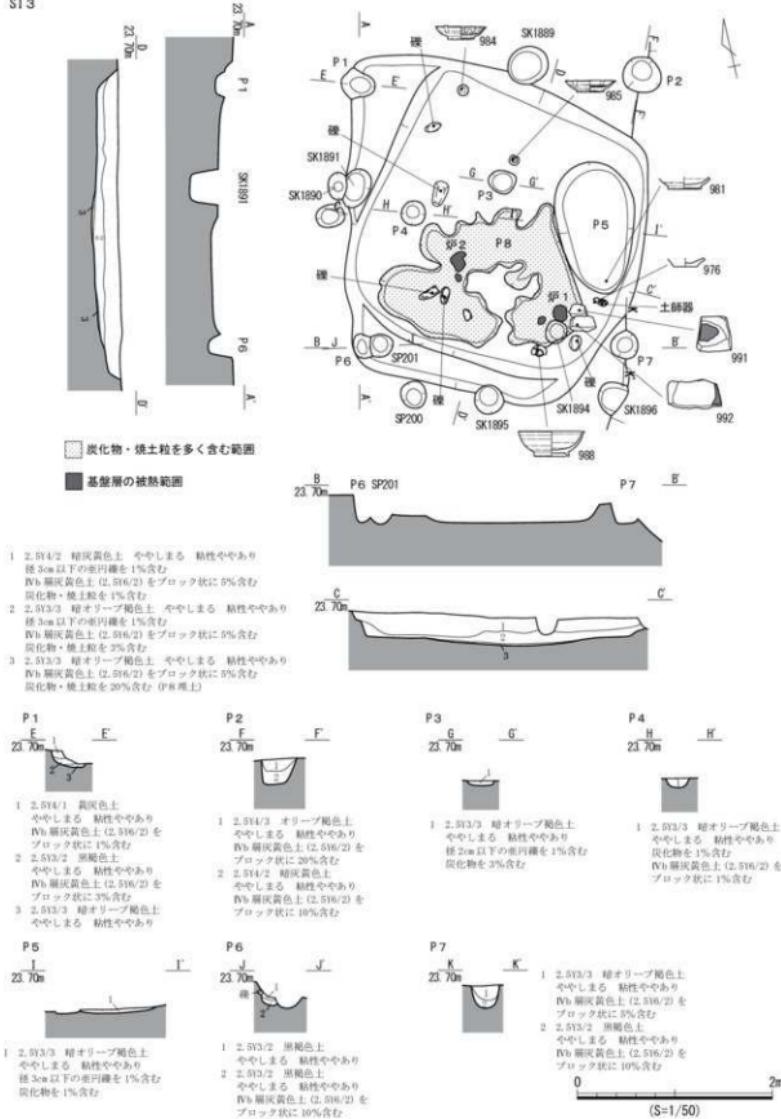


図 145 SI 3 遺構図

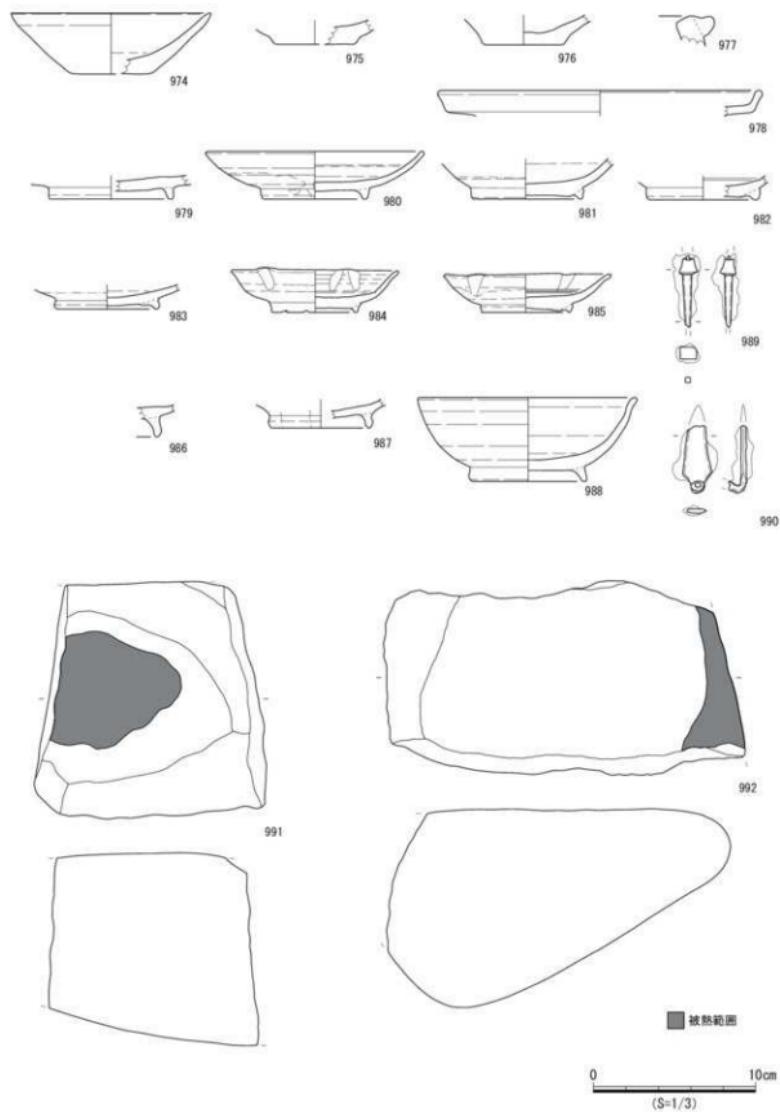


図 146 SI 3 出土遺物実測図

は埋土に基盤層のブロック土を含み、人為堆積が考えられることから、柱穴の可能性があり、方形に並ぶことから、簡易的な上屋構造が想定される。遺構東部のP5は、P8と隣接する浅くやや大きい土坑である。わずかに焼土や炭化物、土師器や灰釉陶器の小片が見られるが性格は不明である。P8は、埋土に焼土や炭化物を多く含む馬蹄状の土坑で、底面の東西にそれぞれ被熱面（炉1・炉2）を検出した。炉の周囲に掘り込まれた浅い土坑である。

**炉** P8の底面の東側と西側に被熱痕が検出されたことから、2基の炉が存在したと考えられる。炉の周囲に広く焼土や炭化物が広がっていることや炉の周辺から金床石が出土したことなどから、鍛冶関連の施設と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器130点、須恵器18点、灰釉陶器48点、山茶碗20点、土製品9点、金床石2点、金属製品2点が散在して出土した。遺構の北西側と南東側の2箇所の床面上直から灰釉陶器の輪花段皿2点（984・985）が完形で、北西側では正位、南東側では逆位でそれぞれ1点ずつ出土した。炉2の北側と南側で被熱した礫を確認し、炉1の東側で金床石（991・992）が出土した。また、P5から土師器1点、灰釉陶器1点、P8から土師器4点が出土した。

**出土遺物** 土師器など19点を図示した。974～976はクロコ成形の土師器皿、977はB類の清郷型鍋である。978は美濃須衛窯IV期第3小期に比定した須恵器の盤である。979～988は灰釉陶器である。979は虎渓山1号窯式、980・981・983は丸石2号窯式に比定した皿である。982は丸石2号窯式に比定した段皿である。985は丸石2号窯式、984は美濃須衛窯VII期（明和27号窯式併行）に比定した輪花段皿である。986と987は虎渓山1号窯式、988は明和27号窯式に比定した碗である。989と990は鉄鑄で、989は鑄根鑄、990は平根鑄である。991と992は金床石である。

**時期** SI2との重複関係と図示した984から、本遺構は11世紀後葉と考えられる。

## 2 掘立柱建物

### SB7（図147・148）

**検出状況** II12～IJ13グリッド、IVb層上面で検出した。北西側は発掘区外となるが、4間×3間の側柱建物と考えられる。各柱穴の平面形はP7・P9は不明瞭であったが、他の柱穴では明瞭であった。P1はSD238・SD240、P2はSD238、P8はSD239、P9はSB8と重複する。本遺構はSB8より古く、SD238～SD240より新しい。

**規模・形状** 桁行4間（5.65m、柱間1.6m～1.25m～1.55m～1.25m）、梁行3間（3.7m、柱間1.1m～1.4m～1.2m）、面積20.9m<sup>2</sup>である。長軸方位はN-13°-Eである。北西側が発掘区外のため平面形は不明である。SD242・SD243に囲まれることから、これらは本遺構を区画する溝と考えられる。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P1とP2は柱穴状の掘方である。P1から土師器5点、P2から土師器11点、須恵器2点、灰釉陶器2点、P4から土師器1点、P5から土師器12点、山茶碗1点、P7から須恵器2点、P8から土師器1点、須恵器1点、山茶碗1点が出土した。

**出土遺物** 土師器など2点を図示した。993はP5から出土したM2類の土師器皿である。994はP8から出土した美濃須衛窯III期後半～IV期第1小期に比定した須恵器の杯身B類である。

**時期** SD239との重複関係とP5・P7から尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は14世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

SB 7

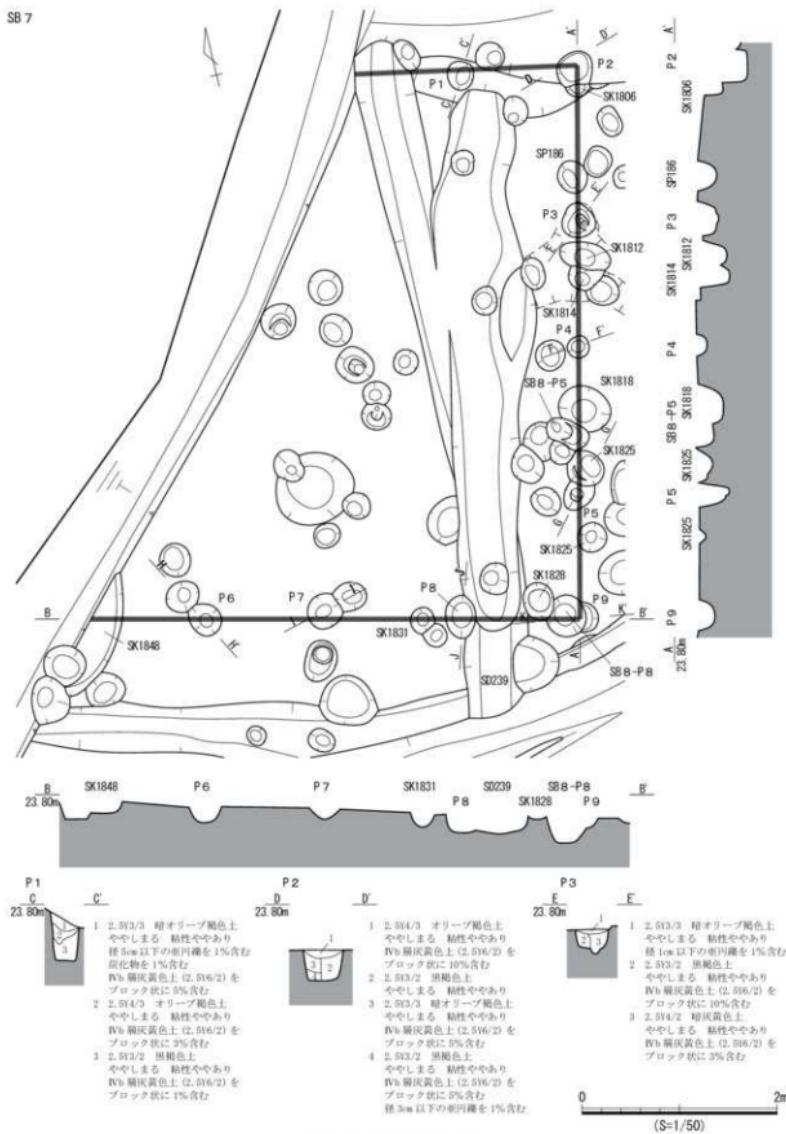


図147 SB 7 遺構図（1）

## SB 8 (図 149・150)

**検出状況** II13・IJ12・IJ13 グリッド、IV b 層上面で検出した。北西側が発掘区外となるが、3間×2間の総柱建物と考えられる。各柱穴の平面形は P 7 では不明瞭であったが、他の柱穴では明瞭である。P 1 は SD240、P 8 は SB 7 と重複する。本遺構は SB 7・SD240 より新しい。

**規模・形状** 桁行 3 間 (5.1m、柱間 1.6m-1.6m-1.9m)、梁行 2 間 (5.2m、柱間 2.6m-2.6m)、面積 26.52 m<sup>2</sup> である。長軸方位は N-5°-E である。北西側が発掘区外のため平面形は不明である。P 6 が発掘区際にあることから、さらに西に続く可能性がある。南北軸は SD234 と方位が揃う。南側の SB 9 と概ね方位が揃う。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形である。いずれも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P 2・P 3・P 7 は柱穴の掘方を有する。P 1 から土師器 3 点、山茶碗 2 点、P 3 から灰釉陶器 1 点、P 7 から土師器 1 点、須恵器 1 点、山茶碗 2 点が出土した。このうち、P 7 では 1 層から山茶碗の片口鉢の底部 (995) が出土した。1 层と 2 層にあたる部分を再掘削し、土器を埋納していることから、建物廃絶時の祭祀に伴うものと考えられる。

**出土遺物** 山茶碗 1 点を図示した。995 は美濃須衛窯Ⅷ期（尾張型第 3 型式併行）に比定した片口鉢である。

**時期** SB 7 との重複関係から、本遺構は 14 世紀後葉から 15 世紀後葉と考えられる。

## SB 9 (図 151・152)

**検出状況** IJ11～IK12 グリッド、IV b 層上面で検出した。北西側が発掘区外となるが、3間×2間の総柱建物と考えられる。各柱穴の平面形は P 1・P 4・P 6・P 7・P 8 では明瞭で、P 2・P 3・P 5 では

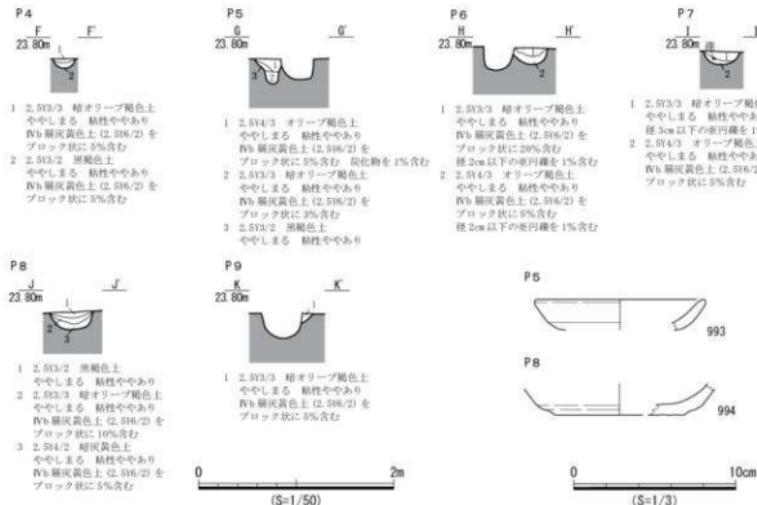


図 148 SB 7 遺構図 (2)・出土遺物実測図

SB8

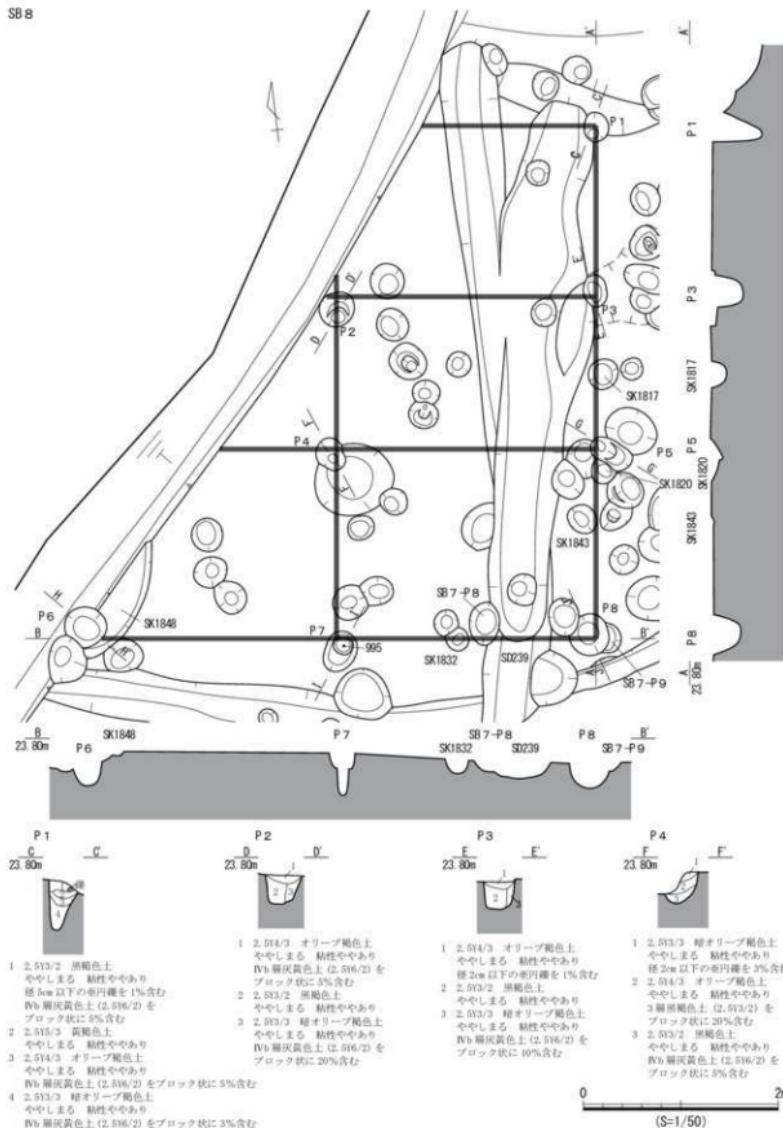


図 149 SB8 造構図 (1)

不明瞭であった。P1はSD238、P3・P5はSD243・SI2と重複する。本遺構はSD243より古く、SI2より新しい。

**規模・形状** 桁行3間(5.4m、柱間1.7m-1.8m-1.9m)、梁行2間(4.3m、柱間2.1m-2.2m)、面積23.22m<sup>2</sup>である。長軸方位はN-7°-Eである。北西側が発掘区外のため平面形は不明である。隅柱間の柱筋からP5はやや西側に、P7はやや南側にずれる。SA10は東西軸はわずかにずれるものの、1.6mほどの距離をおいて、概ね平行であることから、本遺構を区画する柵の可能性がある。北側のSB8と概ね方位が揃う。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形である。いずれも柱痕跡を確認できなかったが、埋土に基盤層のブロック土を含む。P3は柱当たりがあり、P2・P8は柱穴状の掘方である。P2から土師器31点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗4点、P4から土師器47点、山茶碗3点、P6から山茶碗1点、P7から土師器9点、山茶碗2点が散在して出土した。P4の2層からほぼ完形の山茶碗の小皿(999)が横位で出土した。建物廃絶時の儀礼の際に埋められた可能性がある。

**出土遺物** 土師器など4点を図示した。996はM3類、997と998はM4類の土師器皿である。999は第8型式の尾張型山茶碗の小皿である。

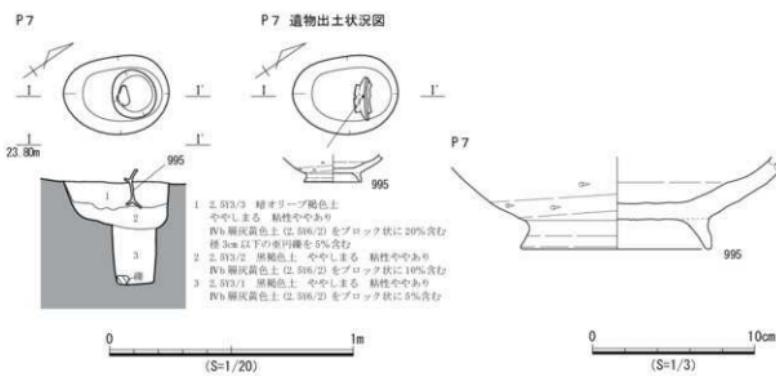
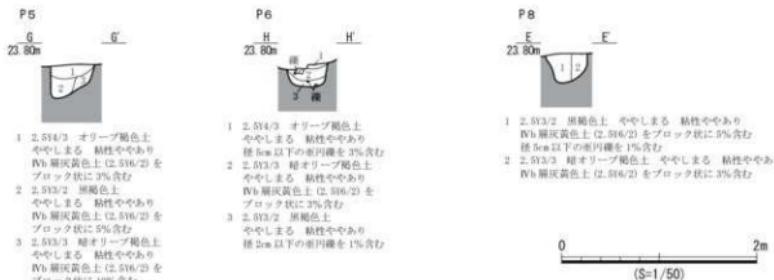


図150 SB8遺構図(2)・出土遺物実測図

SB9

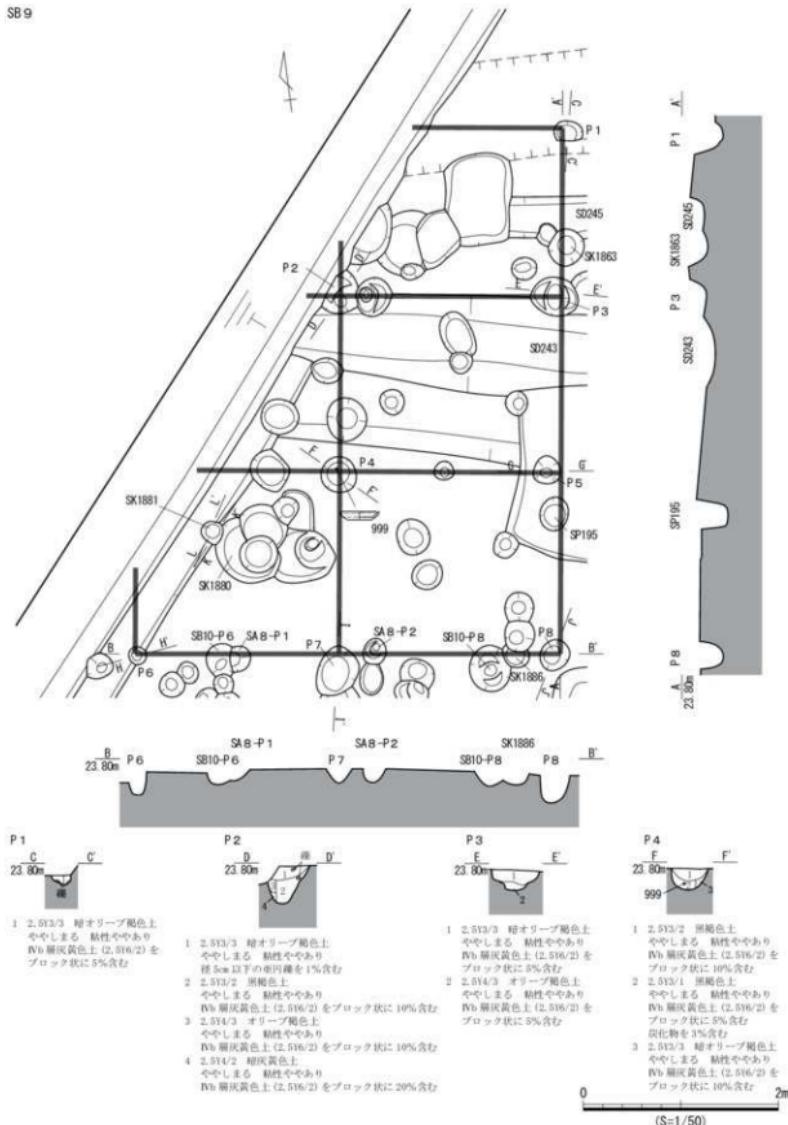


図151 SB9造構図(1)

時期 SI 2との重複関係と図示した999から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

#### SB10(図153)

**検出状況** IJ11～IK12 グリッド、IV b 層上面で検出した。北西側は発掘区外となるが、3間×3間の側柱建物と考えられる。各柱穴の平面形はP5・P6・P8は明瞭に確認でき、P1・P2・P3・P4・P7は不明瞭であった。P3はSD243、P4はSI 2、P6はSK1931・SA 8、P7はSA 8と重複する。本遺構はSK1931・SD243より古く、SI 2・SA 8より新しい。

**規模・形状** 枠行3間(4.1m、柱間1.4m-1.4-1.3m)、梁行3間(4m、柱間1.2m-1.5m-1.3m)、面積16.4 m<sup>2</sup>である。長軸方位はN-9°-Eである。西側が発掘区外のため平面形は不明である。P5が発掘区際にあることから、さらに西側に続く可能性がある。SA 9は0.6mほど南にあり、東西方向の軸が描うことから、本遺構を区画する構と考えられる。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。いずれも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P8では底面に柱当たりを確認した。P1から土師器4点、山茶碗4点、P3から山茶碗1点、P6から土師器21点、山茶碗1点、P8から土師器4点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器1点を図示した。1000はM 3類の土師器皿である。

時期 SI 2・SK1931との重複関係とP6から大烟大洞4号窯式古段階に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

#### SB11(図154)

**検出状況** IJ11～IK11 グリッド、IV b 層上面で検出した。北西側は発掘区外となるが、3間×1間の側柱建物と考えられる。各柱穴の平面形はP2・P3・P4・P5は明瞭であったが、P1は不明瞭であった。P1はSD243と重複する。本遺構はSD243より古い。

**規模・形状** 枠行3間(5.4m、柱間1.8m-1.85m-1.75m)、梁行1間(1.7m)、面積9.18 m<sup>2</sup>である。長軸方位はN-15°-Eである。P4は発掘区際にあることから、さらに西側に続く可能性がある。

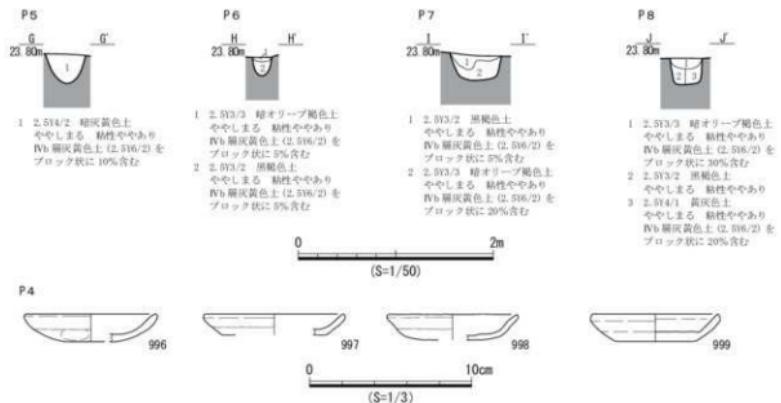


図152 SB9遺構図(2)・出土遺物実測図

SB10

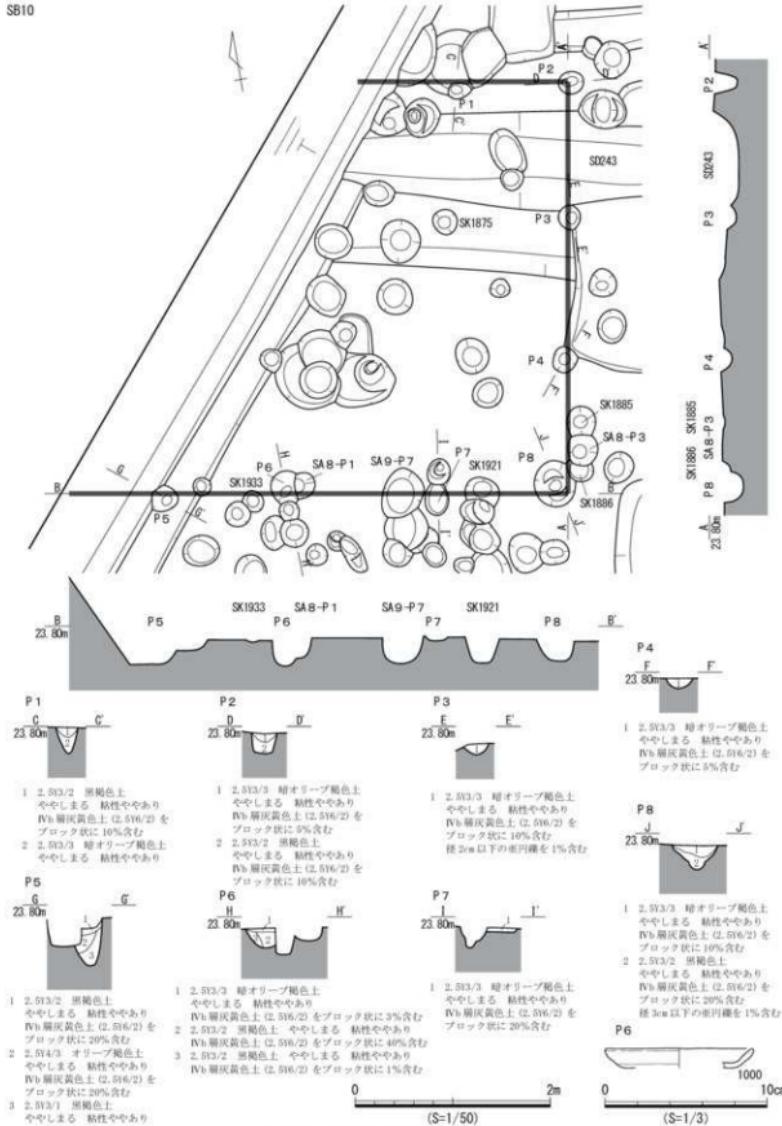


図153 SB10 造構図・出土遺物実測図

SA11は4mほど南側にあり東西方向の軸が揃う。また、SB12・SB13とは東西方向の軸が揃うことから、同一の地割によって建てられた可能性がある。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形であるが、P3は不整楕円形である。いずれも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P2・P4は柱穴状の掘方である。P1から土師器4点、山茶碗1点、P2から土師器33点、山茶碗7点、常滑産の甕2点、P3から土師器25点、山茶碗1点、P4から土師器19点、灰釉陶器1点、常滑産の甕4点、P5から山茶碗1点が散在して出土した。P4の底面には常滑産の甕片が敷かれていた。中央を起点に4片に割れていたことから、礎盤石の代用と考えられる。

**出土遺物** 土師器1点を図示した。1001はM3類の土師器皿である。

**時期** SB12・SB13・SA11との位置関係と図示した1001から、本遺構は13世紀初頭から13世紀中葉と考えられる。

#### SB12（図155）

**検出状況** IL11～IM12グリッド、IVb層上面で検出した。南東側が発掘区外となるが、2間×1間の側柱建物と考えられる。各柱穴の平面形はP1・P2・P3・P5は明瞭で、P4は不明瞭であった。P1とP3はSA12、P4はSB14・SK2058、P5はSA12・SA15と重複する。本遺構はSA15・SB14・SK2058より古く、SA12より新しい。

**規模・形状** 枠行2間（5.3m、柱間2.8m～2.5m）、梁行1間（3.8m）、面積20.14m<sup>2</sup>である。長軸方位はN-16°～Eである。P5は発掘区際にあることから、さらに南に続く可能性がある。西側のSB13、北側のSB11とは東西方向の軸が揃うことから、同一の地割によって建てられた可能性がある。

**柱穴** 柱穴の平面形は楕円形であるがP2は方形、P3・P5は不整円形である。いずれも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P1～P4は柱穴状の掘方である。P1から土師器121点、須恵器1点、山茶碗10点、陶磁器1点、P2から土師器35点、須恵器2点、灰釉陶器1点、山茶碗5点、青磁1点、P3から土師器5点、山茶碗5点、P4から土師器2点、山茶碗3点、古瀬戸3点、P5から土師器13点、山茶碗9点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など4点を図示した。1002はM3類の土師器皿である。1003は大畠大洞4号窯式古段階に比定した東濃型山茶碗の小皿である。1004はA4類の土師器羽釜である。1005は古瀬戸Ⅱ期～後Ⅲ期の卸目付大皿で、上層から出土したことから混入品と考えられる。

**時期** SB14・SA12・SA15との重複関係と図示した1003と1004から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

#### SB13（図156）

**検出状況** IL10～IM10グリッド、P1はSK2000底面、P2とP5はSK2137底面、P3とP4はSK2171底面で検出した。北西側が発掘区外となるが、2間×1間の側柱建物と考えられる。各柱穴の平面形はP2では不明瞭で、その他の柱穴では明瞭であった。P3はSA13と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 枠行2間（2.8m、柱間1.45m～1.35m）、梁行1間（1.35m）、面積3.78m<sup>2</sup>である。長軸方位はN-76°～Wである。P3は発掘区際にあることから、さらに西に続く可能性がある。東側のSA12は南北方向の軸が、SA11とは東西方向の軸が揃う。東側のSB12、北側のSB11とは東西方向の軸

SB11

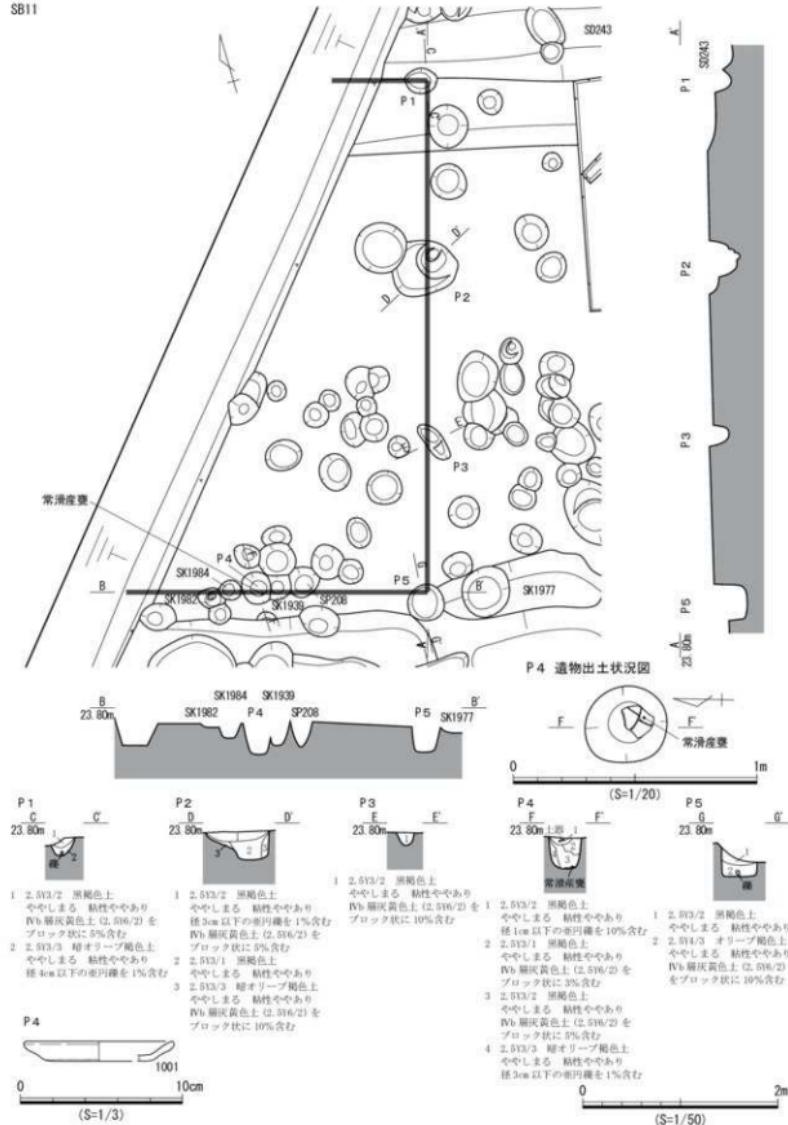


図154 SB11 造構図・出土遺物実測図

SB12

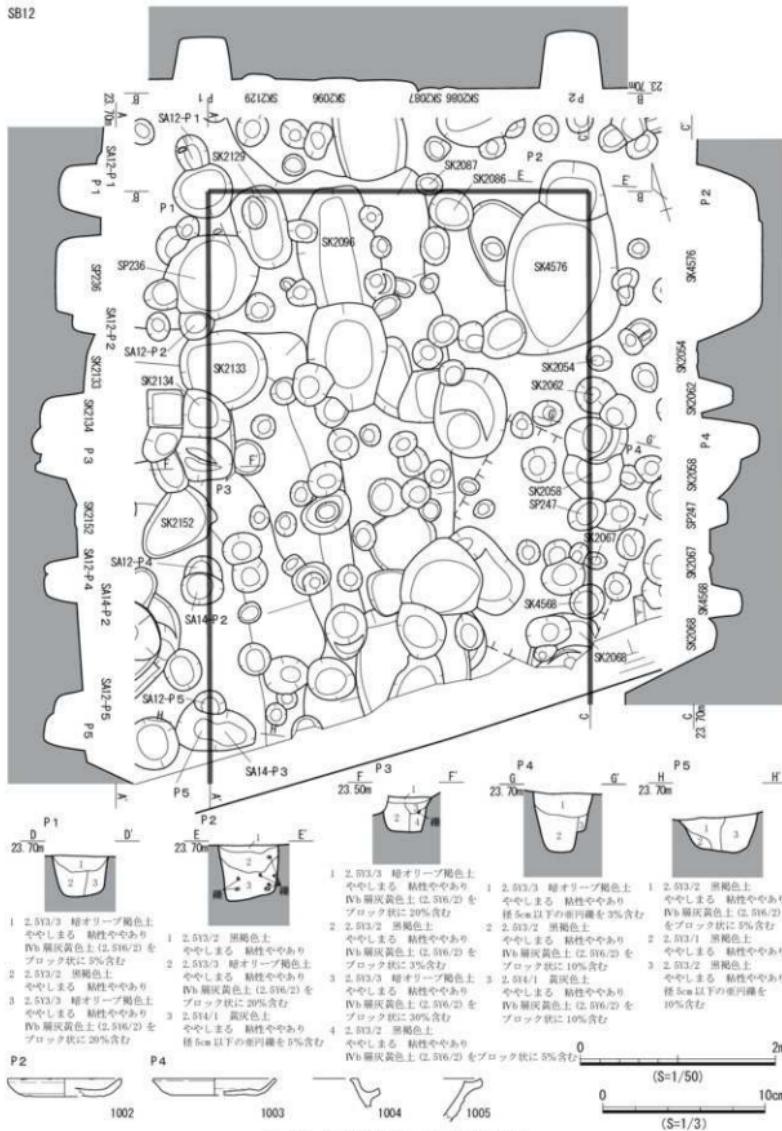


図155 SB12 遺構図・出土遺物実測図

が捕うことから、同一地割で建てられた可能性がある。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形であるが、P3は不整円形である。いずれも柱痕跡を確認できなかつたが、P4以外の柱穴は埋土にブロック土を含む。P3とP5は柱状の掘方である。P1から土師器3点、P2から土師器2点、山茶碗1点、P3から土師器7点、山茶碗1点、P4から灰釉陶器1点、P5から土師器4点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など2点を図示した。1006はM2類の土師器皿である。1007は第6型式の尾張型山茶碗である。

**時期** SK2171との重複関係と図示した1007から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SB14(図157)

**検出状況** IM11グリッド、P1とP3はSK2137底面、その他の柱穴はIV b層上面で検出した。1間×1間の側柱建物と考えられる。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P2はSB12、P3はSK2109と重複する。本遺構はSK2109・SK2137より古く、SB12より新しい。

**規模・形状** 衍行1間(2.5m)、梁行1間(1.6m)、面積4m<sup>2</sup>である。長軸方位はN-1°-Eである。南側が発掘区外のため平面形は不明である。P3とP4は南の発掘区際にあることから、さらに南北13

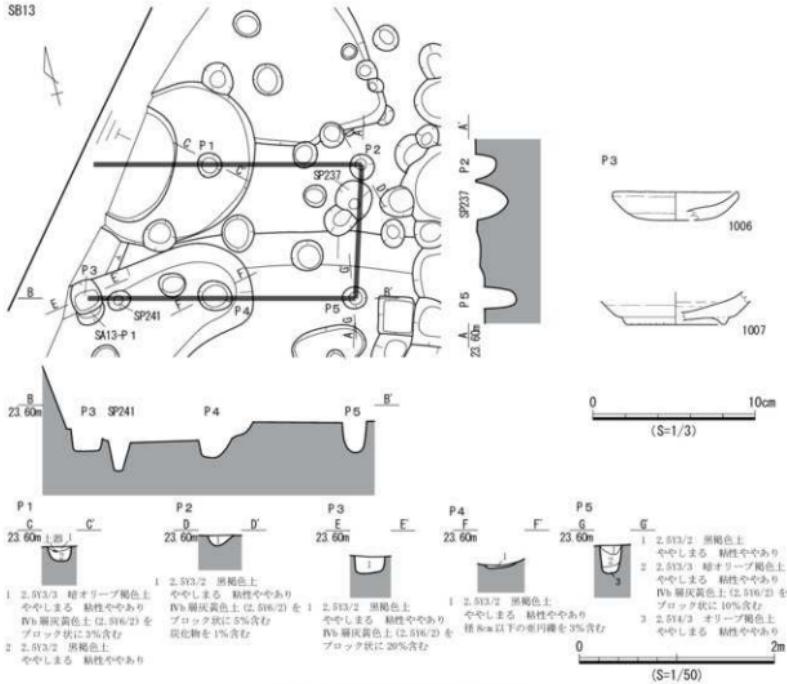


図156 SB13 遺構図・出土遺物実測図

に続く可能性がある。SA15は2m西側にあり、南北方向の軸が揃うことから、本遺構を区画する権の可能性がある。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは橢円形であるが、P1は不整円形である。いずれも柱痕跡を確認できなかつたが、埋土にブロック土を含む。P3は柱穴状の掘方である。P1から土師器6点、山茶碗1点、P2から土師器18点、山茶碗5点、P3から土師器28点、山茶碗17点、古瀬戸1点、P4から土師器20点、山茶碗2点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗など2点を図示した。1008は大畠大洞4号窯式古段階に比定した東濃型山茶碗の小

SB14

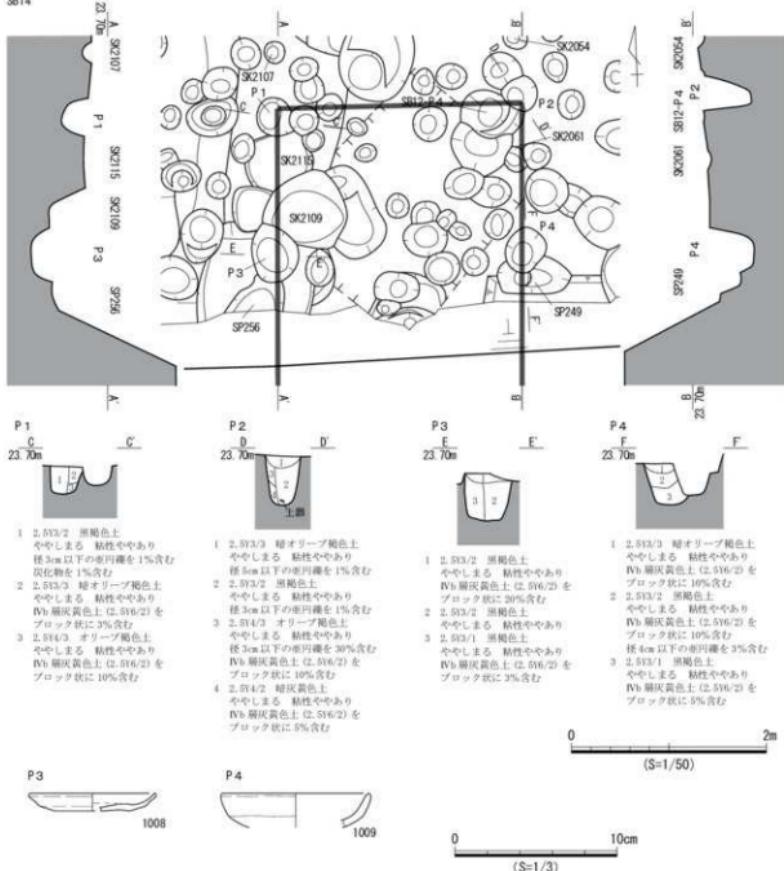


図157 SB14 遺構図・出土遺物実測図

皿である。1009はM2類の土師器皿である。

時期 SB12・SK2137との重複関係から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

#### SB15（図158）

検出状況 IM10～IM11グリッド、P1・P3・P5はSK2137底面、P2とP4はIVb層上面で検出した。2間×1間の側柱建物と考えられる。各柱穴の平面形は明瞭であったが、P4では不明瞭であった。P2はSP227、P3はSK2121と重複する。本遺構はSK2137・SK4575より古く、SP227・SK2121より新しい。

規模・形状 枢行2間（2.5m、柱間1.3m−1.2m）、梁行1間（2.1m）、面積5.25m<sup>2</sup>である。長軸方位はN−4°−Eである。P5とP6は発掘区間にあることから、南にさらに続く可能性がある。SA14は2.1m西側にあり、南北方向の軸が揃うことから、本遺構を区画する柵と考えられる。SA13は4.6m西側、SA15は2.2m西側にあり、南北方向の軸が揃う。

柱穴 柱穴の平面形は楕円形であるが、P1は不整円形である。いずれも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P1・P2・P3・P5は柱穴状の掘方である。P2から土師器17点、山茶碗1点、P3から土師器48点、灰釉陶器2点、山茶碗11点、P5から土師器18点、須恵器2点、山茶碗4点、P6から土師器33点、古瀬戸1点が散在して出土した。P1の1層で扁平な礫を確認したが、底面から0.7m上部でP1の礫盤石とは考えにくい。

出土遺物 土師器など5点を図示した。1013はB1類、1010と1012はM3類、1011はM4類の土師器皿である。1014は古瀬戸後IV期新段階の擂鉢で、上層から出土したことから混入品と考えられる。

時期 SK2137との重複関係から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

### 3 柵

#### SA8（図159）

検出状況 IK11～IK13グリッド、IVb層上面で検出した。各柱穴の平面形はP1・P2・P3・P5では明瞭であったが、P4では不明瞭であった。P1とP2はSB10と重複する。本遺構はSB10より古い。

規模・形状 5基の柱穴が直線的に並ぶ。全長6.3m、柱間距離は西から1.6m−1.5m−1.8m−1.4mである。方位は、N−84°−Wである。P1は発掘区の壁面近くに位置しており、西側に柵が延びる可能性もある。北側のSB8の南辺と軸が揃うことから、本遺構はSB8を区画する柵、若しくは土坑墓の可能性があるSK1910とSB8を区画する柵と考えられる。

柱穴 柱穴の平面形は楕円形若しくは円形である。P3は柱筋からやや北に外れる。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P2は柱当たりが見られ、P4は柱穴状の掘方である。P2から土師器11点、山茶碗1点、P3から土師器3点、山茶碗2点、P5から古瀬戸1点が出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 SB10との重複関係から、本遺構は14世紀後葉以前と考えられる。

#### SA9（図160）

検出状況 IK11～IK12グリッド、IVb層上面で検出した。各柱穴の平面形はP1とP3では明瞭であったが、P2とP4では不明瞭であった。

規模・形状 4基の柱穴が間隔で直線的に並ぶ。全長3.6m、柱間距離は西から1.15m−1.2m−1.25

SB15

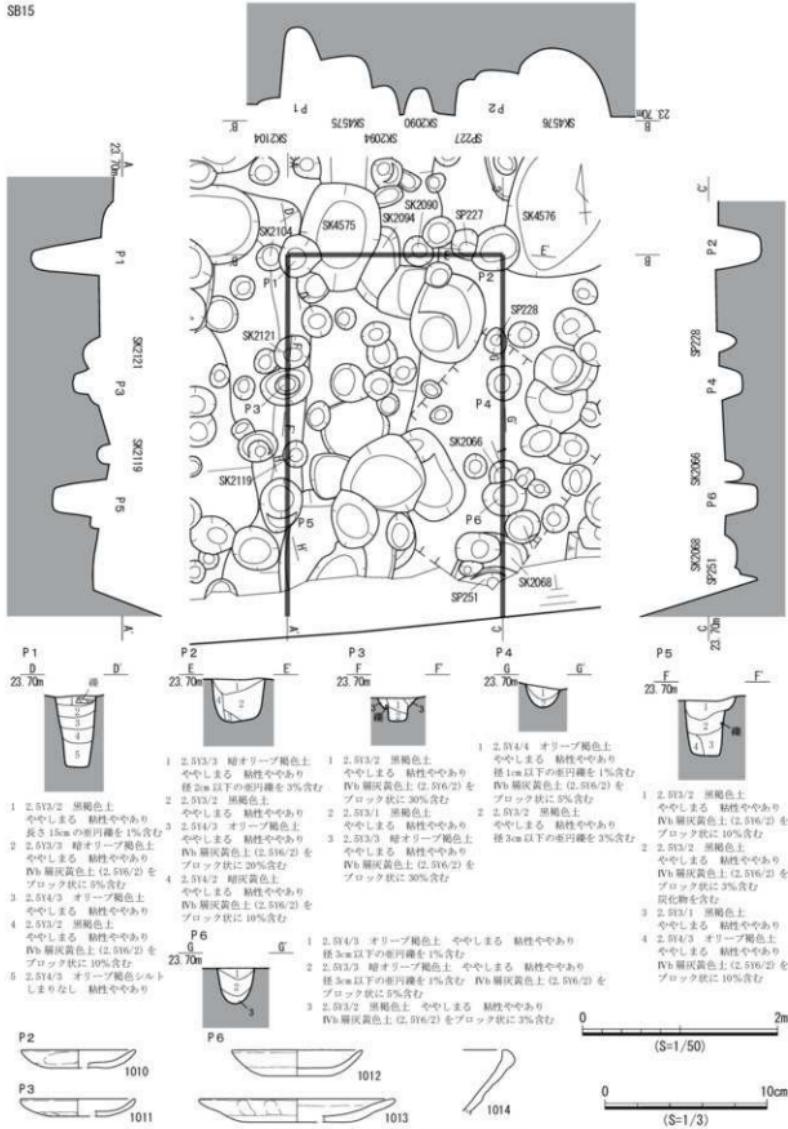


図158 SB15 遺構図・出土遺物実測図

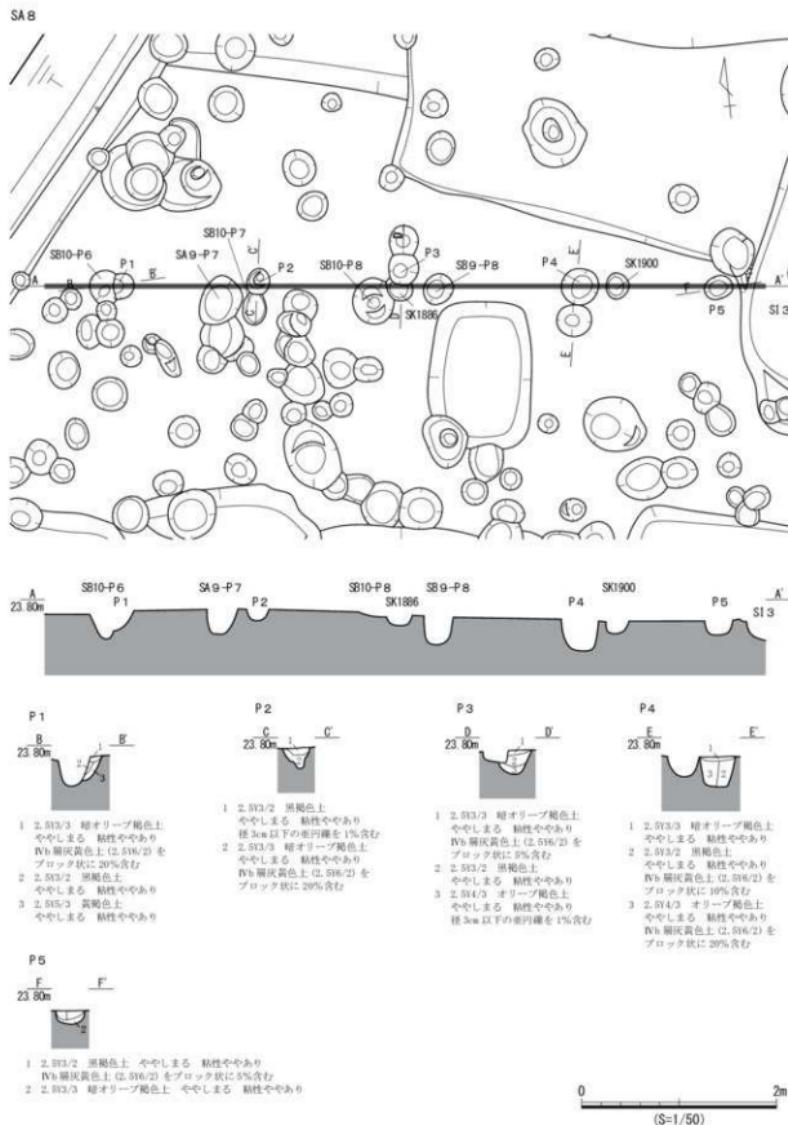


図 159 SA8 造構図

mである。方位はN-80°-Wである。P1は発掘区の壁面近くに位置し、西側に柵が延びる可能性もある。SB10は0.6m北側にあり、東西方向の軸が描うことから、本遺構はSB10を区画する柵と考えられる。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形である。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認できなかったが、P2以外は埋土にブロック土を含む。P1から土師器6点が出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SB10との位置関係から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

#### SA10(図161)

**検出状況** IK11～IK12 グリッド、IVb層上面で検出した。各柱穴の平面形は、P1・P4・P5は明瞭であったが、P2・P3は不明瞭であった。P1はSK1978、P4はSK1910と重複する。本遺構はSK1910より古く、SK1978より新しい。

**規模・形状** 5基の柱穴が直線的に並ぶ。全長8.45m、柱間距離は西から2.1m-1.8m-2.2m-2.35

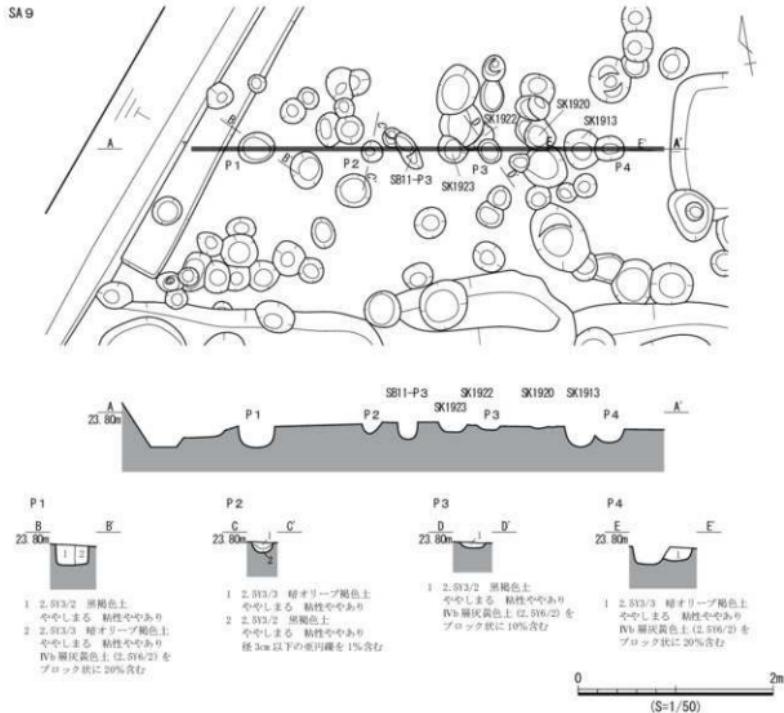


図160 SA9遺構図

mである。方位はN-88°-Wである。P1は発掘区間にあり、さらに西側に続く可能性がある。距離ほどを空けて、SB9は2m北側にあり、東西方向の軸が揃うことから、本遺構はSB9を区画する柵と考えられる。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形であるが、P4は不整円形である。いずれの柱穴も埋土にブロック土を含み、P4では柱痕跡を確認した。P1から土師器9点、山茶碗2点、鉄鏃1点、P3から土師器6点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器1点を図示した。1015はM2類の土師器皿である。

**時期** SK1910・SK1978との重複関係から、本遺構は15世紀中葉～後葉と考えられる。

#### SA11(図162)

**検出状況** IL11～IL12 グリッド、P1はSK1994底面、P2はSK2137底面、P3はIV b層上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。本遺構はいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 3基の柱穴が直線的に並ぶ。全長3.25m、柱間距離は西から1.45m-1.8mである。方位はN-71°-Wである。P1は発掘区間にあり、さらに西側に続く可能性がある。SB11は4m北側、SB13は1.3m南側にあり、SB11・SB13と東西方向の軸が揃う。

**柱穴** 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形である。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P2から土師器9点、山茶碗1点、P3から土師器4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK2137との重複関係とSB11・SB13との位置関係から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SA12(図163)

**検出状況** IL10～IM10 グリッド、SK2137底面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P1はSB12、P3はSB12・SA14、P4はSA14、P5はSB12・SA14と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 5基の柱穴が直線的に並ぶ。全長5.65m、柱間距離は北から2.75m-0.9m-1.75m-1.25mである。方位はN-15°-Eである。P5は発掘区間にあり、さらに南側に続く可能性がある。西側のSB13と南北方向の軸が揃う。

**柱穴** 柱穴の平面形は楕円形であるが、P2・P3・P5は不整円形である。各柱穴底部の標高はほぼ同じである。いずれの柱穴も埋土にブロック土を含む。P1で柱痕跡を確認し、P2とP4は柱穴状の掘方である。P1から山茶碗2点、P2から土師器8点、山茶碗6点、P3から土師器4点、山茶碗3点、銭貨1点、P4から土師器3点、山茶碗1点、P5から土師器6点、山茶碗2点が散在して出土した。なお、P3から出土した銭貨は、柵の廃絶に伴って埋納された可能性がある。

**出土遺物** 土師器1点を図示した。1016はM2類の土師器皿である。

**時期** SA14との重複関係、SB13との位置関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SA13(図164)

**検出状況** IL10～IM10 グリッド、SK2137・SK2171底面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭で

SA10

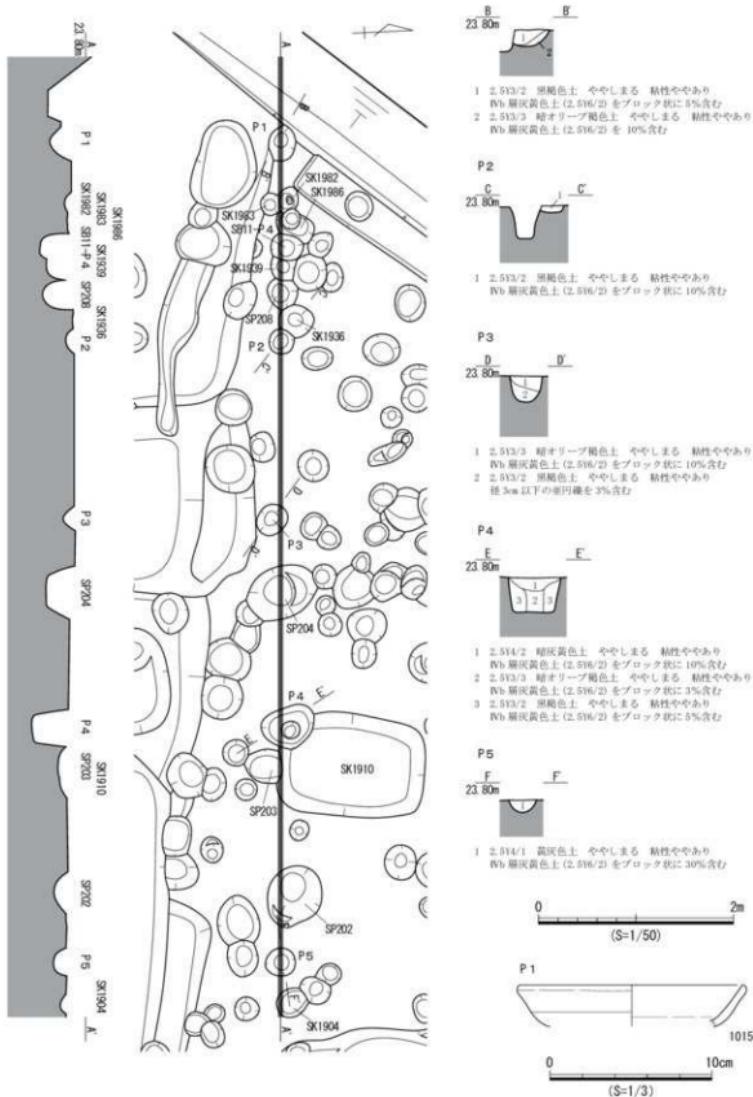


図161 SA10 遺構図・出土遺物実測図

あった。P1はSB13と重複する。本遺構はSK2137・SK2171より古く、SB13より新しい。

**規模・形状** 3基の柱穴が直線的に並ぶ。全長4.25m、柱間距離は北から2.35m-1.9mである。方位はN-7°-Eである。P1・P3は発掘区際にあり、さらに南北両側に続く可能性がある。本遺構は東側のSA14・SB15と南北方向の軸が概ね揃う。

**柱穴** 柱穴の平面形は楕円形である。各柱穴の底部の標高はほぼ同じである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P1から土師器1点、P3から土師器3点、山茶碗3点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SB13・SK2171との重複関係とSB15・SA14との位置関係から、本遺構は13世紀初頭から14世紀初頭と考えられる。

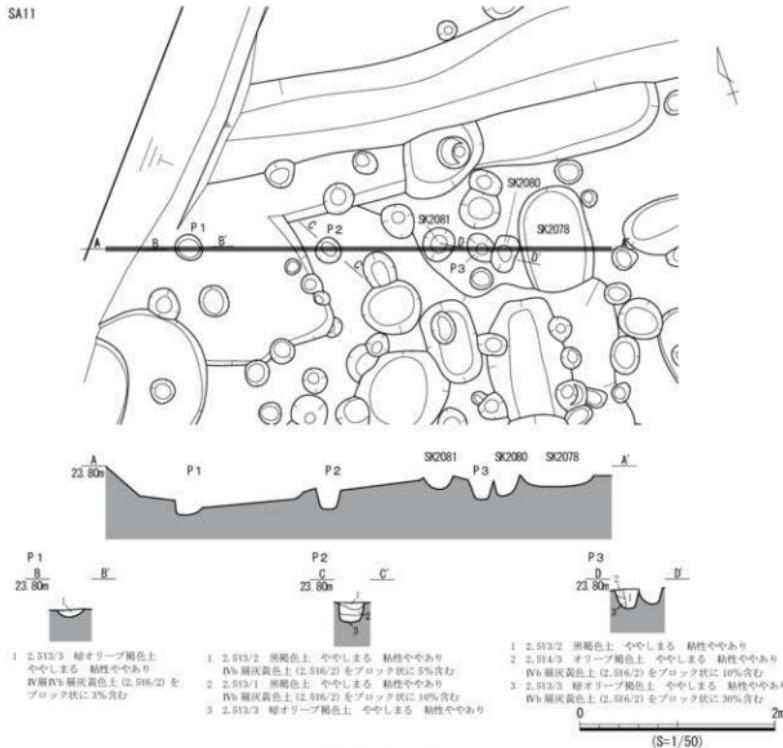


図162 SA11遺構図

## SA14（図165）

**検出状況** IM10グリッド、P1はSK2139底面、P2とP3はSK2137底面で検出した。各柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。P1とP2はSA12、P3はSA12・SA15と重複する。本遺構はSK2137・SK2139・SA15より古く、SA12より新しい。

**規模・形状** 3基の柱穴が直線的に並ぶ。全長2.4m、柱間距離は北から1.25m-1.15mである。方位は、N-7°-Eである。P3は発掘区際にあり、さらに南側に続く可能性がある。SB15は2.1m東側にあり、南北方向の軸が揃うことから、本遺構はSB15を区画する柵と考えられる。SA13は2.4m西側にあり、南北方向が概ね揃う。

**柱穴** 柱穴の平面形は、P1は方形、P2は梢円形、P3は不整円形である。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認できなかったが、埋土にブロック土を含む。P1から土師器15点、山茶碗6点、P2から土師器3

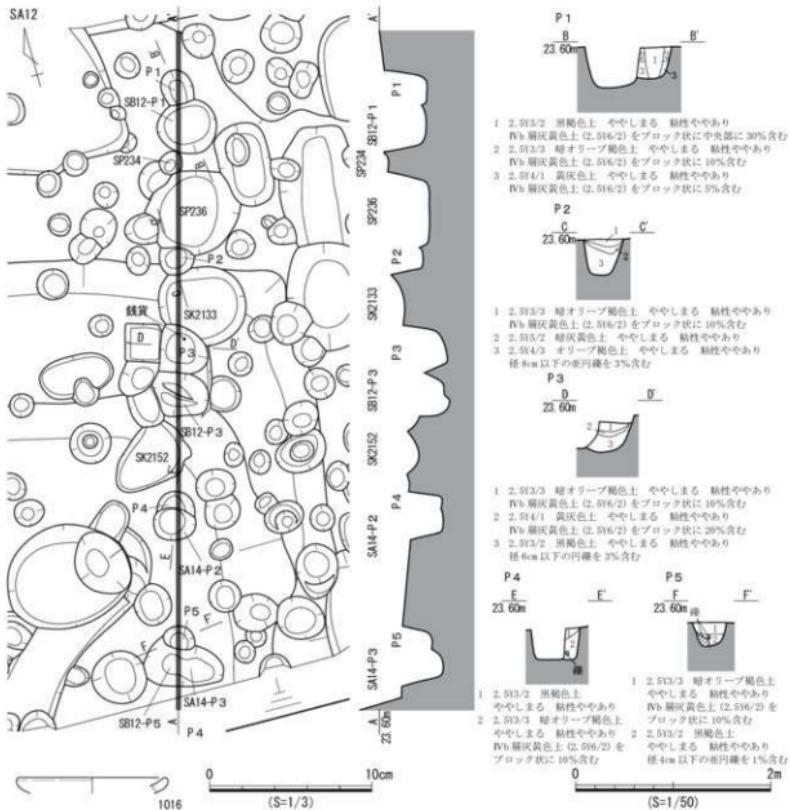


図163 SA12 遺構図・出土遺物実測図

点、P3 から土師器 13 点、山茶碗 9 点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗 1 点を図示した。1017 は第 6 型式の尾張型山茶碗の小皿である。

**時期** SA12・SA15・SK2137 との重複関係、SB15・SA13 との位置関係、図示した 1017 から、本遺構は 13 世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SA15（図 166）

**検出状況** IM10 グリッド、P2 は SK2147 底面、その他の柱穴は SK2137 底面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P3 は SB12・SA14 と重複する。本遺構は SK2137 より古く、SB12・SA14 より新しい。

**規模・形状** 3 基の柱穴が直線的に並ぶ。全長は 2.75m、柱間距離は北から 1.5m-1.25m である。方位は、N-6°-E である。P3 は発掘区際にあり、さらに南側に続く可能性がある。SB14 は 2 m 東側にあり、南北方向の軸が捕うことから、本遺構は SB14 を区画する柵と考えられる。

**柱穴** 柱穴の平面形は、P1 は方形、P2 は梢円形、P3 は不整円形である。P1 と P2 は柱穴状の掘方である。いずれの柱穴も埋土にブロック土を含む。P1 から土師器 14 点、山茶碗 7 点、P2 から土師器

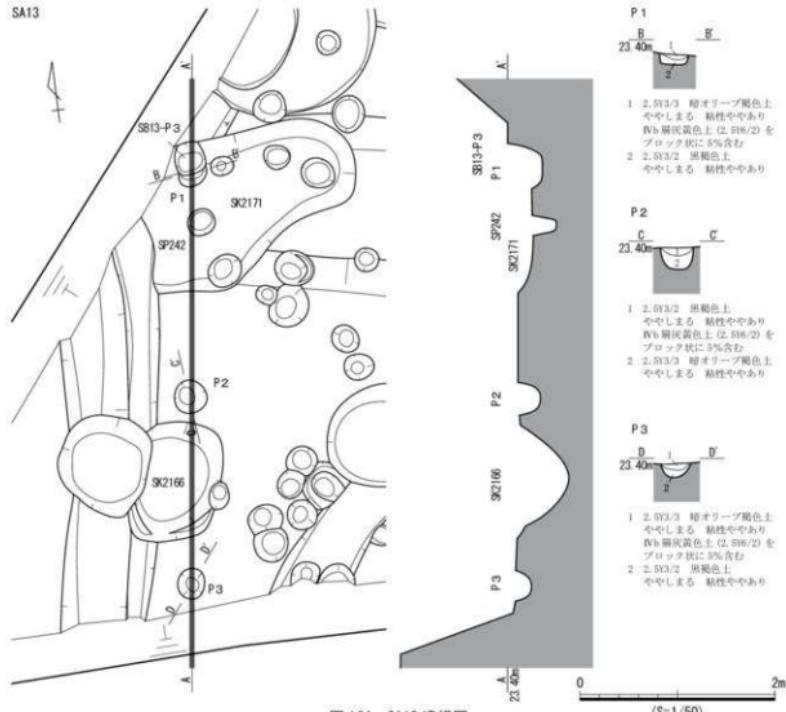


図 164 SA13 遺構図

3点、P3から土師器13点、山茶碗9点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など3点を図示した。1020はC1類、1019はM3類の土師器皿である。1018は第8型式の尾張型山茶碗である。

**時期** SA14・SK2137との重複関係、SB14との位置関係、図示した1018から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

#### 4 柱穴

##### SP195（図167）

**検出状況** IK12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSI2と重複する。本遺構はSI2より新しい。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。2層と3層は垂直方向に堆積する。3層にブロック土を含む。

SA14

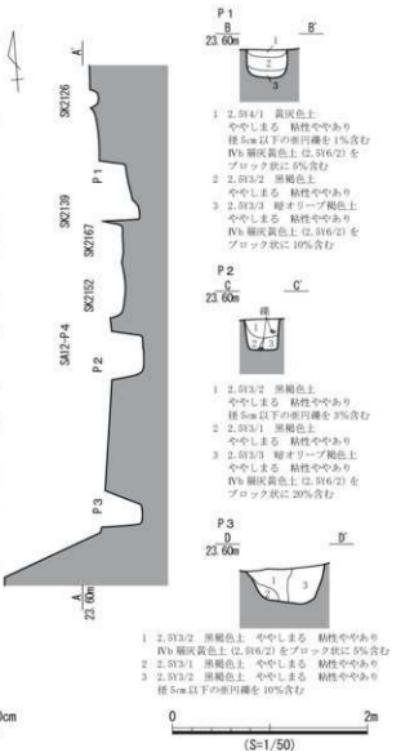
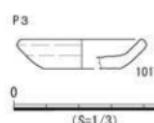
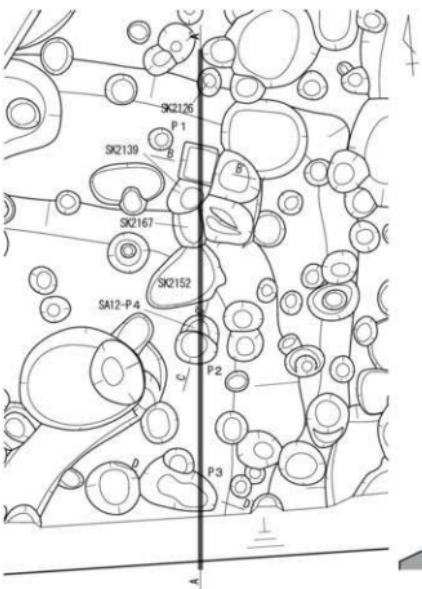


図165 SA14遺構図・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 2層の底面で扁平な亜円窓を確認した。形状や大きさから礎盤石と考えられる。その他に埋土中から土器8点、山茶碗3点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SI 2との重複関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SP227（図167）

**検出状況** IM11 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。東側で SB15 と重複する。本遺構は SB15 より古い。

SA15

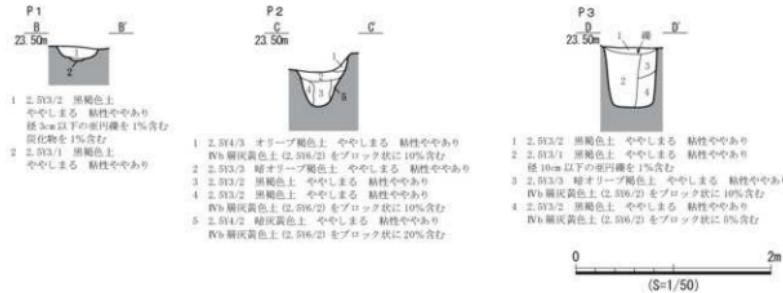
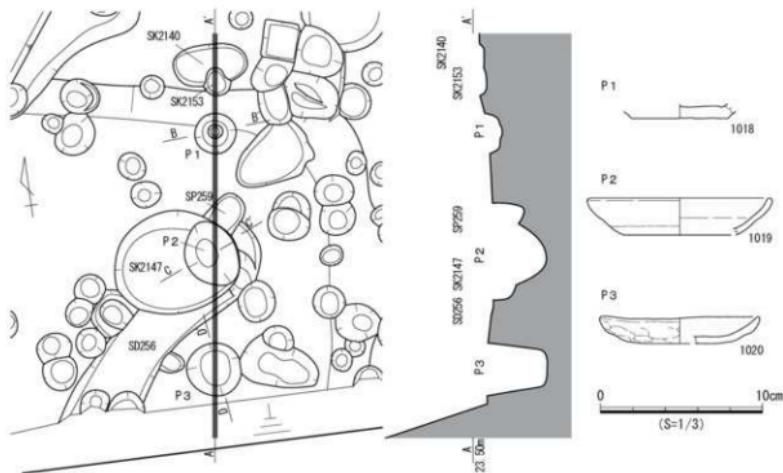


図166 SA15 遺構図・出土遺物実測図

**規模・形状** 平面形は不整円形である。壁面の傾斜は急で、底面は丸みを持つ。

**埋土** 3層に分層した。2層と3層は垂直に堆積し、3層は西壁面に薄く堆積する。1層と3層にブロック土を含む。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器30点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器1点を図示した。1021はD類の伊勢型鍋である。

**時期** SB15との重複関係と図示した1021から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

**SP245（図167）**

**検出状況** IM11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北西側でSK2057、東側でSK2024と重複する。本遺構はSK2024より古く、SK2057より新しい。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。壁面の傾斜は急で深く、断面形は逆台形である。底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。2層と3層は垂直に堆積し、上部に1層が堆積する。3層にブロック土を含む。

**遺物出土状況** 2層の底面付近から銅製の飾金具(1023)が出土した。柱を抜き取り埋め戻す際に意図的に埋納された可能性がある。その他に埋土中から土師器36点、山茶碗2点、陶器2点、金属製品2点（釘、小柄）が散在して出土した。

**出土遺物** 陶器など4点を図示した。1022は古瀬戸後II期の平碗である。1023は飾金具である。細長い帯状の銅製品で3箇所に孔が開けられる。両端部は欠損し、全体の形状は不明である。1024は釘である。1025は小柄で、鉄製の柄が刃部に巻かれる。

**時期** SK2024との重複関係と図示した1022から、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭と考えられる。

**SP247（図167）**

**検出状況** IM11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSK2058と重複する。本遺構はSK2058より新しい。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急で、断面形は逆台形である。

**埋土** 3層に分層した。2層は柱痕跡である。底面付近に礎盤石の可能性がある大きめの亜円礎を含む。3層は掘方埋土で、ブロック土を含む。

**遺物出土状況** 2層からB1類の土師器皿1点(1026)が出土した。その他に1層から土師器2点、山茶碗1点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など2点を図示した。1026はB1類の土師器皿である。1027は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。

**時期** SK2058との重複関係から、本遺構は13世紀末以降と考えられる。

**SP258（図167）**

**検出状況** IM10グリッド、SK2137底面で検出した。平面形は明瞭であった。本遺構はSK2137より古い。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で深く、底面は平坦である。

**埋土** 4層に分層した。2層は柱痕跡で、3層と4層は掘方埋土である。1層・2層・4層にブロック土を含む。

ク土を含む。

**遺物出土状況** 2層から刀子(1029)が出土した。柱を抜き取り埋め戻す際に意図的に埋納された可能性がある。その他に2層から土師器6点、山茶碗1点、3層と4層から土師器9点、埋土中から土師器38点、山茶碗3点、鉄片6点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など2点を図示した。1028はM3類の土師器皿である。1029は刀子で、切先と茎の基部が欠損する。鞘の木質が確認できる。

**時期** SK2137との重複関係と図示した1028から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

#### SP259（図168）

**検出状況** IM10グリッド、SK2137底面で検出した。平面形は明瞭であった。本遺構はSK2137より古い。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。1層は東側に垂直に堆積し、2層と3層は掘方埋土で、水平に堆積する。3層にブロック土を含む。

**遺物出土状況** 柱抜取穴の底面から、礎盤石と考えられる扁平な亜円錐が出土した。また、2層と3層から土師器6点が出土した。その他に埋土中から土師器4点、山茶碗1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK2137との重複関係から、本遺構は14世紀初頭以前と考えられる。

#### SP261（図168）

**検出状況** IM10グリッド、SK2137底面で検出した。平面形は明瞭であった。西側でSK2166と重複する。本遺構はSK2137・SK2166より古い。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は楕円形と考えられる。壁面の傾斜は急で、断面形は擂鉢状である。

**埋土** 3層に分層した。3層は南の壁面下部に薄く堆積する。1層にブロック土を含む。

**遺物出土状況** 1層から土師器皿5枚(1030～1034)が正位や逆位でまとまって出土した。これらは柱を抜き取り埋め戻す際に意図的に埋納された可能性がある。その他に埋土中から土師器21点、須恵器1点、山茶碗2点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器5点を図示した。1030はM3類、1031～1034はC1類の土師器皿である。

**時期** SK2137・SK2166との重複関係と図示した1030から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

### 5 土坑

#### SK1785（図169）

**検出状況** IG15～IH15グリッド、IVb層上面で検出した。東側は発掘区外に続く。平面形は不明瞭であった。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は円形と考えられる。壁面の傾斜は南側と北側ではやや緩やかに開き、西側では急である。底面は比較的平坦である。

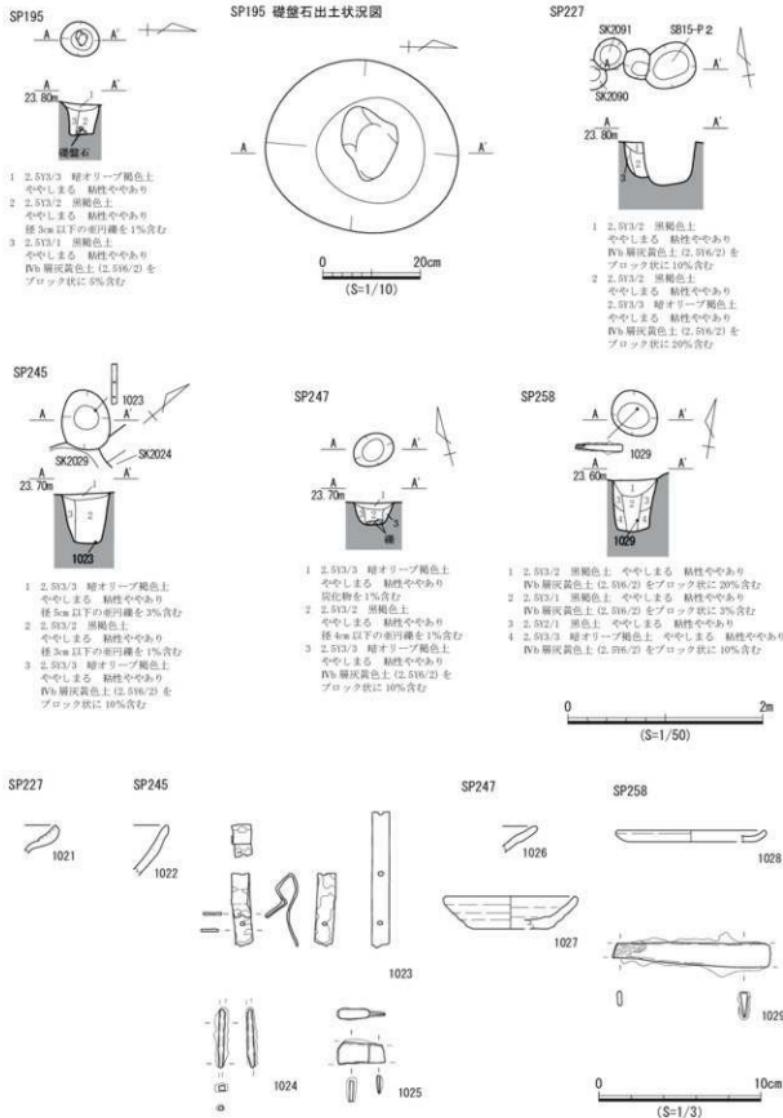
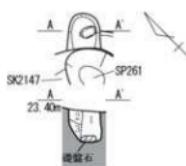


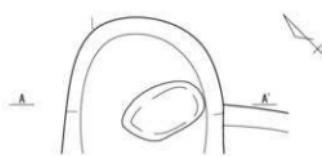
図167 SP195・SP227・SP245・SP247・SP258 遺構図・出土遺物実測図

SP259

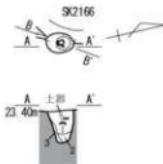


- 1 2.513/2 黒褐色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 2 2.513/3 剛オリーブ褐色土  
ややしまる 粘性ややあり  
径4cm以下の重円錐を3%含む
- 3 2.513/2 黒褐色土  
ややしまる 粘性ややあり  
径6cm以下の重円錐を2%含む

SP259 础盤石出土状況図

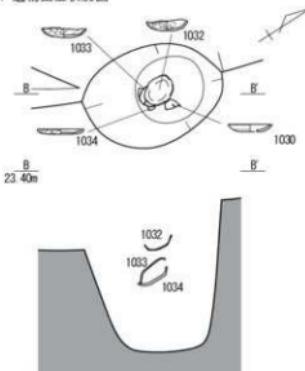


SP261



- 1 2.513/2 黒褐色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 2 2.513/3 剛オリーブ褐色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 3 2.513/2 黒褐色土  
ややしまる 粘性ややあり  
径5cm以下の重円錐を20%含む

SP261 遺物出土状況図



0 2m  
(S=1/50)

0 20cm  
(S=1/10 出土状況図)

SP261

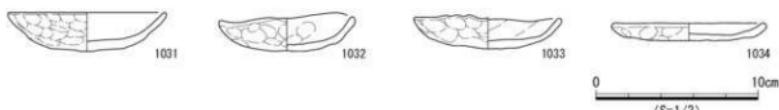
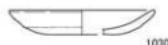


図168 SP259・SP261 遺構図・出土遺物実測図

**埋土** 2層に分層した。いずれの層にもブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 北側から山茶碗の底部2点(1035・1036)が、正面で重なった状態で出土した。南東端で20cmほどの扁平な円礎を確認した。これらは意図的に埋納された可能性も考えられる。その他に埋土中から須恵器1点、山茶碗2点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗2点を図示した。1035は第5型式、1036は第6型式の尾張型山茶碗である。

**時期** 図示した1036から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SK1788 (図169)

**検出状況** IH15 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSD235、西側でSD236と重複する。本遺構はSD235・SD236より新しい。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 5層に分層した。2層と3層の層界に亜円礎が多数含まれていた。亜円礎は北西側に偏っていたが大きさや並び方に規則性はなかった。いずれの層にもブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。炭化物が少なく出土した土器はいずれも小片であったが、上層から釘や土器などが散在して出土したことから、土坑墓の可能性も考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器1点、山茶碗6点、金属製品2点（棒状鉄製品、釘）が散在して出土した。

**出土遺物** 金属製品1点を図示した。1037は棒状鉄製品で、中央部が太く、両端が細くなる。紡錘車の軸棒の可能性がある。

**時期** SD236との重複関係と山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭以降と考えられる。

#### SK1789 (図169)

**検出状況** IH15 グリッド、IV b層上面で検出した。東側は発掘区外に続く。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形はややいびつな楕円形と考えられる。壁面の傾斜は西側では急で、北側と南側ではやや緩やかに開く。底面は南側で楕円形に一段浅く窪む。

**埋土** 3層に分層した。2層と3層にブロック土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。それぞれの層界の凹凸が顕著であるが、植生痕の可能性も考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器1点、山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

#### SK1791 (図170)

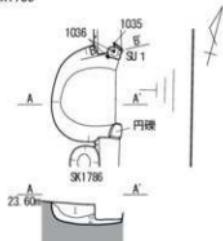
**検出状況** IH13～IH14 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSD234と重複する。本遺構はSD234より古い。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は方形と考えられる。壁面の傾斜は急で、底面はほぼ平坦である。平面形がSK1910と類似し、土坑墓の可能性がある。

**埋土** 2層に分層した。1層と2層に礎やブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。2層は壁面側で厚く、中央で薄く堆積する。

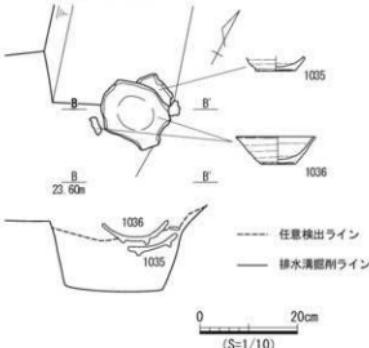
**遺物出土状況** 北西側で1層から須恵器の甕の口縁部片(1038)が、底面に対して水平な状態で出土した。その他に埋土中から土師器10点、山茶碗8点が散在して出土した。

SK1785

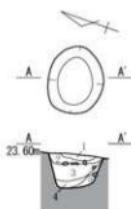


1. 2. 074/1 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 2% 含む  
2. 074/2 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 10% 含む  
径 15cm 以下の細円窓を 1% 含む

SK1785 遺物出土状況図

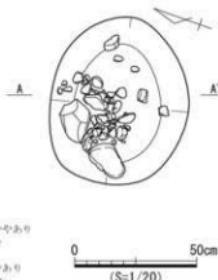


SK1788



1. 2. 073/3 帽オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 5% 含む  
同化物を 10% 含む  
2. 074/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 20% 含む  
径 5cm 以下の細円窓を 5% 含む  
3. 2. 074/4 帽灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 5% 含む  
4. 2. 073/3 帽オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 5% 含む  
5. 2. 076/4 にぶい橙色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 10% 含む

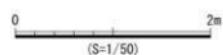
SK1788 亜円窓出土状況図



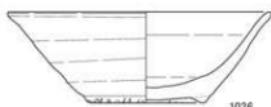
SK1789



1. 2. 073/3 帽オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
径 6cm 以下の細円窓を 1% 含む  
2. 073/2 灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 20% 含む  
3. 074/2 灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb 層灰黄色土 (2. 056/2) をブロック状に 20% 含む



SK1785



SK1788

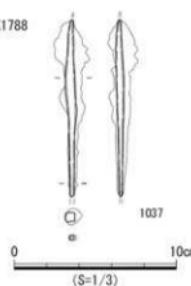


図 169 SK1785・SK1788・SK1789 造構図・出土遺物実測図

**出土遺物** 須恵器1点を図示した。1038は猿投産の岩崎41号窯式に比定した甕である。

**時期** SD234との重複関係と山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

#### SK1848(図170)

**検出状況** II12～IJ12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側でSB8と重複する。本遺構はSB8より新しい。

**規模・形状** 大半が発掘区外のため、平面形は不明である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 単層の埋土である。焼土粒を含む。ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器2点、白磁皿1点が散在して出土した。

**出土遺物** 白磁皿1点を図示した。1039はXI類の白磁皿である。

**時期** SB8との重複関係から、本遺構は14世紀後葉以降と考えられる。

#### SK1865(図171)

**検出状況** IJ12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側の上端は搅乱により消失する。

**規模・形状** 平面形は隅丸方形の土坑である。壁面の傾斜は急で、底面はほぼ平坦であるが、北に向かってわずかに下がる。

**埋土** 7層に分層した。埋土の大半が1層と2層である。1層・2層・3層・6層に基盤層のブロック土を含む。1層と2層を除く層に焼土若しくは炭化物を含む。7層は中央底面の炭化物の集積である。なお、8層と9層は基盤層を断ち割って確認した被熱部分で、遺構内の火の使用が考えられる。

**遺物出土状況** 北東側の底面から釘(1044)が出土した。2層で骨片8点を確認し、他にも埋土中で細かな骨片を多数確認した。また南側の底面で被熱した礫を複数確認したが、礫の下側は被熱していないかった。礫の下から土師器皿(1043)が出土した。その他に埋土中から土師器99点、須恵器2点、灰釉

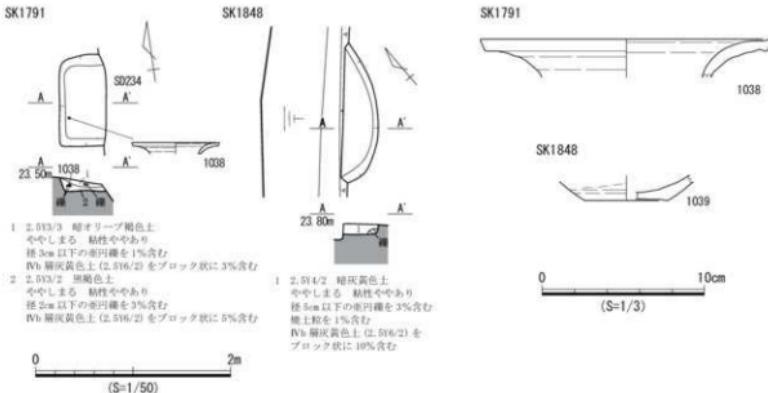
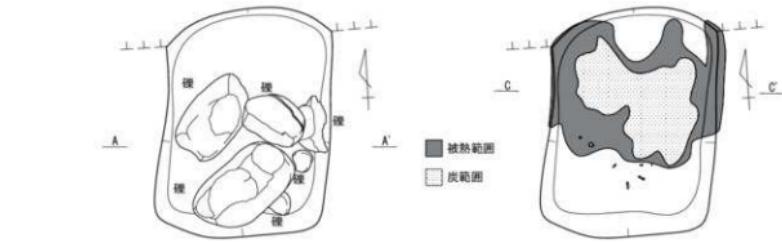


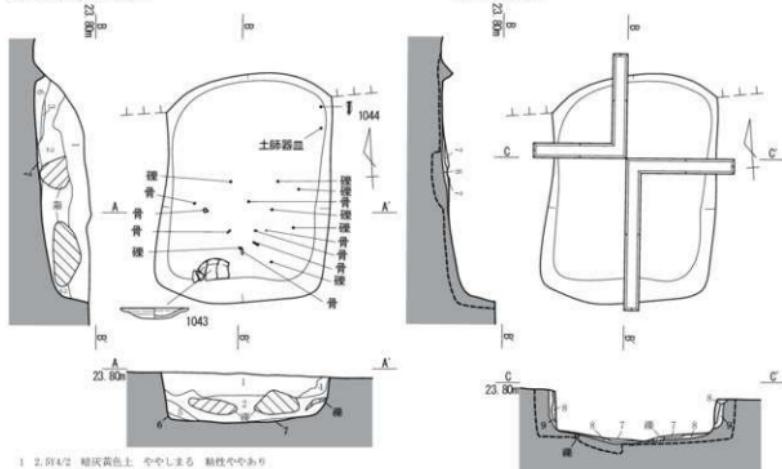
図170 SK1791・SK1848遺構図・出土遺物実測図

SK1865

SK1865 被熱範囲図



SK1865 遺物出土状況図



1. 2. 014/2 煙灰黄色土 ややしまる 粘性やあり
2. 014 黒褐色土 (2. 016/2) をブロック状に10%含む
2. 013/2 黑褐色土 ややしまる 粘性やあり
2. 013 黑褐色土 (2. 016/2) をブロック状に3%含む 炭化物・焼土粒を1%含む
3. 7. 015/3 にぶい焼土土 ややしまる 粘性なし 焼土
4. 2. 014/1 黃褐色土 ややしまる 粘性やあり
5. 013/2 黄褐色土 (2. 016/2) をブロック状に10%含む
6. 2. 014/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性やあり
6. 014 黑褐色土 (2. 016/2) をブロック状に1%含む 炭化物・焼土粒を1%含む
7. 2. 012/1 黑色土 ややしまる 粘性ややあり 炭化物集積
8. 5YR6/6 燐色に変化した被熱層 (Nb層)
9. 5YR4/3 にぶい赤褐色に変化した被熱層 (Nb層)

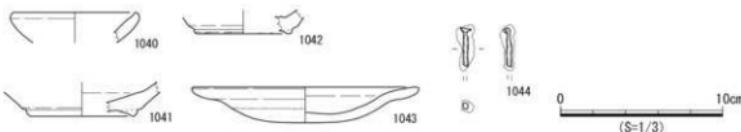


図 171 SK1865 遺構図・出土遺物実測図

陶器1点、山茶碗36点、陶器4点が散在して出土した。細かな骨片を確認しているが大きな骨片はなく、収骨された可能性が考えられ、底面付近の埋土に炭化物や焼土が含まれることから、火葬施設と思われる。

**出土遺物** 土師器など5点を図示した。1043はB1類の土師器皿である。1040～1042は尾張型山茶碗で、1040は第5型式の小皿、1041は第6型式、1042は第7型式の碗である。1044は釘である。

**時期** 図示した1042から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

#### SK1881(図172)

**検出状況** IK11グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。本遺構はSB9とSB10の内側に位置する。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面は丸みをもつ。柱穴状の土坑である。

**埋土** 2層に分層した。1層と2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 底面(2層)から土師器皿(1045)が正位で出土した。SB9若しくはSB10の土地造成時に地鎮のために埋納された可能性がある。その他に埋土中から土師器2点、須恵器1点、山茶碗1点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器2点を図示した。1045と1046はM3類の土師器皿である。

**時期** 図示した1045から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

#### SK1910(図173)

**検出状況** IK12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSA10と重複する。本遺構はSA10より新しい。

**規模・形状** 平面形は南北に長い隅丸長方形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 10層に分層した。1層・3層・4層・5層は水平に堆積する。底面付近では北側に6層、西側

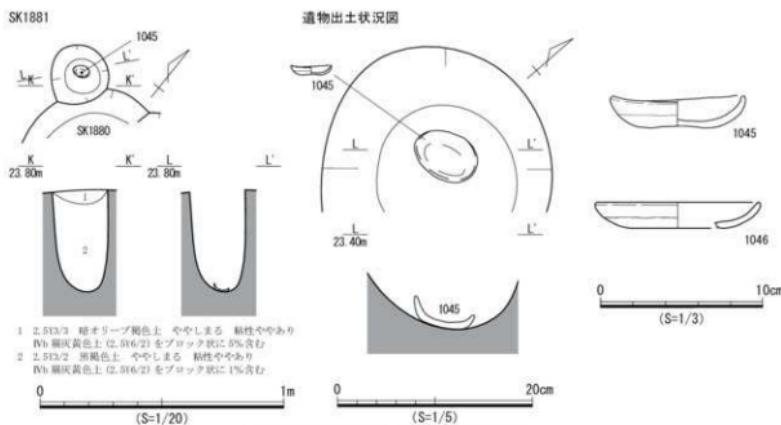


図172 SK1881遺構図・出土遺物実測図

に8層と9層、南側に7層、東側に10層が堆積する。1層～5層・8層・10層に炭化物を含む。5層と8層を除く層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 中央付近の底面から釘が出土し、西壁付近の1層から完形の土師器皿(1056)が出土した。その他に埋土中から土師器345点、須恵器4点、灰釉陶器3点、山茶碗66点、常滑産の甕3点、砥石1点が散在して出土した。出土遺物から、土坑墓の可能性がある。

**出土遺物** 土師器など15点を図示した。1047はロクロ成形の土師器皿、1048はB1類、1049はM2類、1050～1057はM3類、1058はM4類の土師器皿である。1059は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。1060は第6型式の尾張型山茶碗の片口鉢である。1061は砥石である。

**時期** SA10との重複関係から、本遺構は15世紀中葉以降と考えられる。

#### SK1920(図174)

**検出状況** IK11～IK12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急である。底面は北西側にテラス状の平坦面をもち、南東側が一段深くなる。

**埋土** 単層の埋土である。ブロック土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 北側底面から完形の土師器皿1点(1063)が出土した。土師器皿は地鎮のために埋納された可能性がある。その他に埋土中から土師器35点、山茶碗3点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器2点を図示した。1062と1063はM3類の土師器皿である。

**時期** 第8型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

#### SK1921(図174)

**検出状況** IK11～IK12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。壁面の傾斜は急で、底面は丸みを持つ。

**埋土** 2層に分層した。中央が底む堆積である。1層と2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器15点、山茶碗4点、常滑産の甕1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

#### SK1931(図174)

**検出状況** IK11グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSB10と重複する。本遺構はSB10より新しい。

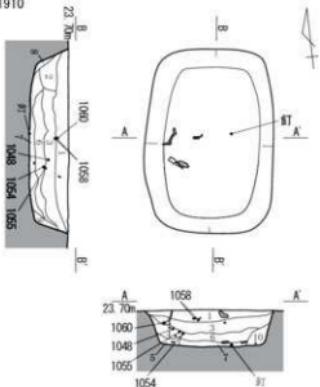
**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で深く、底面は平坦である。柱痕跡は確認できなかつたが、規模や形状から柱穴の可能性もある。

**埋土** 2層に分層した。2層は北壁面で厚く堆積する。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器19点、灰釉陶器1点、山茶碗3点が散在して出土した。

**出土遺物** 灰釉陶器1点を図示した。1064は虎渓山1号窯式に比定した皿である。

SK1910



1. 2. 5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を1%含む IVb弱灰黃色土(2.5Y6/2)をブロック状に10%含む
2. 5Y6/2 黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を1%含む IVb弱灰黃色土(2.5Y6/2)を全体的に30%程度含む
3. 2. 5Y3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を1%含む IVb弱灰黃色土(2.5Y6/2)をブロック状に20%含む ブロックの大きさは約5cm
4. 2. 5Y3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を1%含む ブロック上部に見られない
5. 2. 5Y3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb弱灰黃色土(2.5Y6/2)をブロック状に5%含む
6. 2. 5Y3/1 黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を3%含む 硅藻リーフ黑色土(2.5Y3/3)を全体的に30%程度含む
7. 2. 5Y3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を3%含む 黑褐色土(2.5Y3/1)をブロック状に2%含む ブロックの大きさは約1cm
8. 2. 5Y3/2 墓灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を3%含む 黑褐色土(2.5Y3/1)をブロック状に2%含む ブロックの大きさは約4cm
9. 2. 5Y3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を3%含む IVb弱灰黃色土(2.5Y6/2)をブロック状に10%含む
10. 2. 5Y3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
炭化物を3%含む IVb弱灰黃色土(2.5Y6/2)をブロック状に3%含む

遺物出土状況図

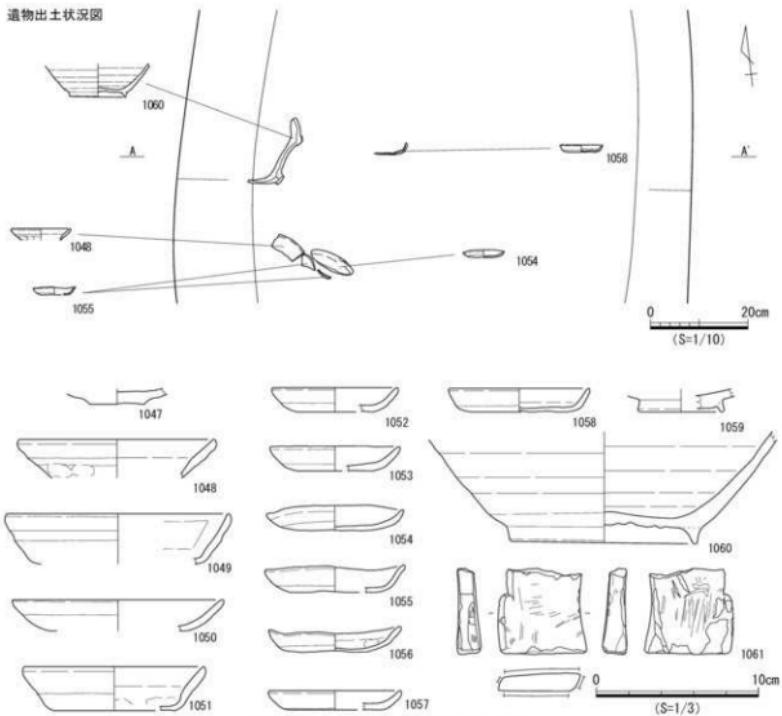


図173 SK1910 遺構図・出土遺物実測図

**時期** SB10との重複関係から、本遺構は13世紀末以降と考えられる。

#### SK1941(図175)

**検出状況** IL12～IL13グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。南西側でSK1955、中央でSD249と重複する。本遺構はSD249より古く、SK1955より新しい。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は不定形と考えられる。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 2層に分層した。2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器34点、須恵器3点、灰釉陶器1点、山茶碗6点、陶器5点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器2点を図示した。1065はM2類、1066はM4類の土師器皿である。

**時期** SD249・SK1955との重複関係と大畠大洞4号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

#### SK1954(図176)

**検出状況** IL12グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSD249、西側でSK1959、北東側でSK1941と重複する。底面でSK1955を検出した。本遺構はSK1959・SD249より古く、SK1941・SK1955より新しい。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は方形と考えられる。壁面の傾斜は緩やかに開き、底面は南西に向かい緩やかに窪む。

**埋土** 2層に分層した。水平に堆積する。2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 中央の底面付近(2層)から、釘1点(1068)が横位で出土した。その他に埋土中から土師器153点、須恵器5点、灰釉陶器2点、山茶碗42点、陶器5点が散在して出土した。出土遺物や土坑の形状から、土坑墓の可能性がある。

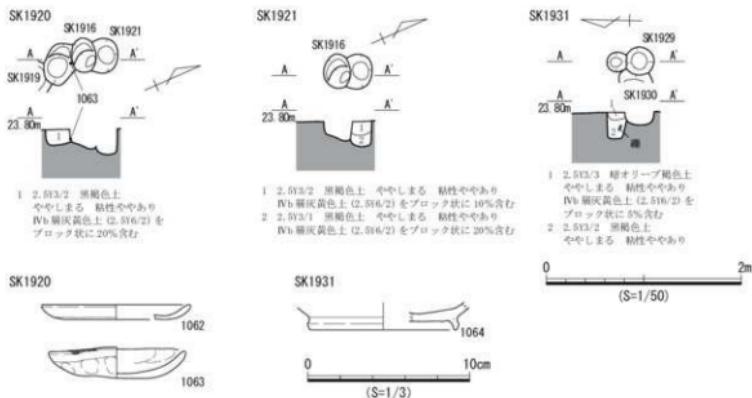


図174 SK1920・SK1921・SK1931遺構図・出土遺物実測図

**出土遺物** 土師器など2点を図示した。1067はM3類の土師器皿である。1068は止金具である。

**時期** SK1941・SK1959・SD249との重複関係と大畠大洞4号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

#### SK1955（図175）

**検出状況** IL12グリッド、SK1954底面で検出した。東側でSK1941と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 平面形は不整長方形である。壁面の傾斜は緩やかに開き、底面は丸みを持つ。

**埋土** 2層に分層した。2層は東側の壁面に沿って堆積する。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器64点、須恵器2点、山茶碗21点、陶器4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK1941・SK1954との重複関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SK1959（図176）

**検出状況** IL11～IL12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であったが、南側の遺構との重複関係が不明瞭であった。西側でSK1977、南側でSK4570・SD250、東側でSK1954、中央でSD249と重複する。本遺構はSD249・SD250より古く、SK1954・SK1977・SK4570よりも新しい。

**規模・形状** 平面形は隅丸長方形である。壁面の傾斜はやや緩やかに開き、底面は平坦である。底面で8基の遺構を検出したが、柱配置が見出せず本遺構との関係が不明であったことから、堅穴建物ではなく堅穴状の土坑とした。

**埋土** 3層に分層した。3層は北壁面下にのみ堆積し、1層と2層は水平に堆積する。いずれの層もブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器86点、須恵器2点、灰釉陶器2点、山茶碗18点、陶器6点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK1954・SK1977・SK4570・SD249・SD250との重複関係から、本遺構は14世紀末から15世紀初頭と考えられる。

#### SK1976（図175）

**検出状況** IL11グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSD249と重複する。本遺構はSD249より古い。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は隅丸長方形と考えられる。壁面の傾斜は東側と西側では急で、南側では緩やかに開く。底面は平坦である。平面形がSK1910・SK1865と類似し、土坑墓の可能性がある。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積するが、東側の層界に凹凸がある。2層にブロック土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器171点、須恵器4点、山茶碗40点、陶器5点が散在して出土した

が、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SD249 との重複関係と大畠大洞 4 号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は 13 世紀末から 14 世紀後葉と考えられる。

#### SK1977 (図 176)

**検出状況** IK11～IL11 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であったが、重複関係は不明瞭であった。西側で SK1978・SD248、南側で SD249、東側で SK1959 と重複する。底面で SB11 を検出し

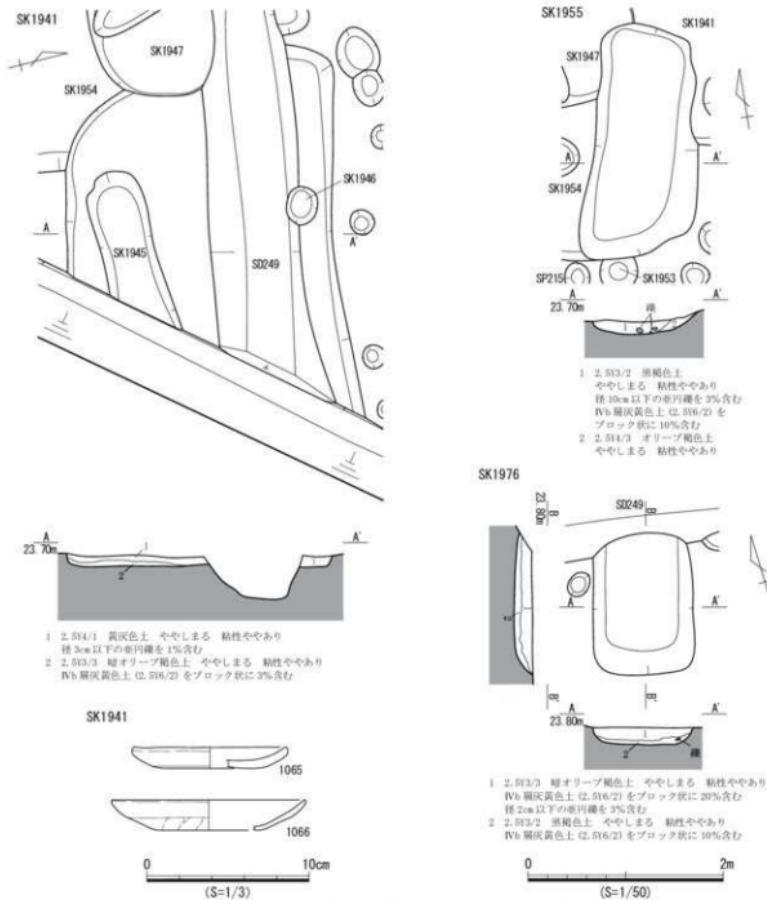


図 175 SK1941・SK1955・SK1976 遺構図・出土遺物実測図

た。本遺構はSK1959・SK1978・SD249より古く、SB11・SD248より新しい。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は不整形でと考えられる。壁面の傾斜は緩やかに開く。底面は南側で大きく窪み、南に向かって緩やかに盛り上がる。北側にテラス状の平坦面を持つ。

**埋土** 3層に分層した。1層はテラス状平坦面の延長線上に延びる。2層は3層の埋土を掘り込んでいるが、性格は不明である。3層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器72点、須恵器1点、灰釉陶器2点、山茶碗14点、陶器3点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器1点を図示した。1069はM3類の土師器皿である。

**時期** SK1959・SD248との重複関係から、本遺構は13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

#### SK1978（図176）

**検出状況** IK10～IL11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭で、西側は発掘区外に続く。東側でSK1977、北側でSA10、中央でSD249と重複する。本遺構はSA10・SD249より古く、SK1977より新しい。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は長方形と考えられる。壁面はやや緩やかに開き、底面は平坦である。底面で多くの遺構を検出したが、本遺構との関係が不明であることから、竪穴状の土坑とした。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。1層と2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器80点、須恵器2点、灰釉陶器2点、山茶碗12点、陶器5点が散在して出土した。

**出土遺物** 陶器1点を図示した。1070は古瀬戸後III期～後IV期古段階の花瓶若しくは燭台である。

**時期** SA10・SK1977・SD249との重複関係と図示した1070から、本遺構は15世紀前葉から中葉と考えられる。

#### SK2002（図177）

**検出状況** IL12 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側は発掘区外に続く。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は方形と考えられる。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 2層に分層した。2層は壁面側では厚く、中央では薄く堆積する。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器8点、山茶碗3点、釘2点が散在して出土した。出土遺物から、土坑墓の可能性がある。

**出土遺物** 釘2点(1071・1072)を図示した。

**時期** 大畠大洞4号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

#### SK2013（図177）

**検出状況** IM12 グリッド、SK2024 底面で検出した。平面形は不明瞭であった。東側は発掘区外に続く。本遺構はSK2024より古い。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は方形と考えられる。壁面の傾斜は南側では緩やかに開くが、

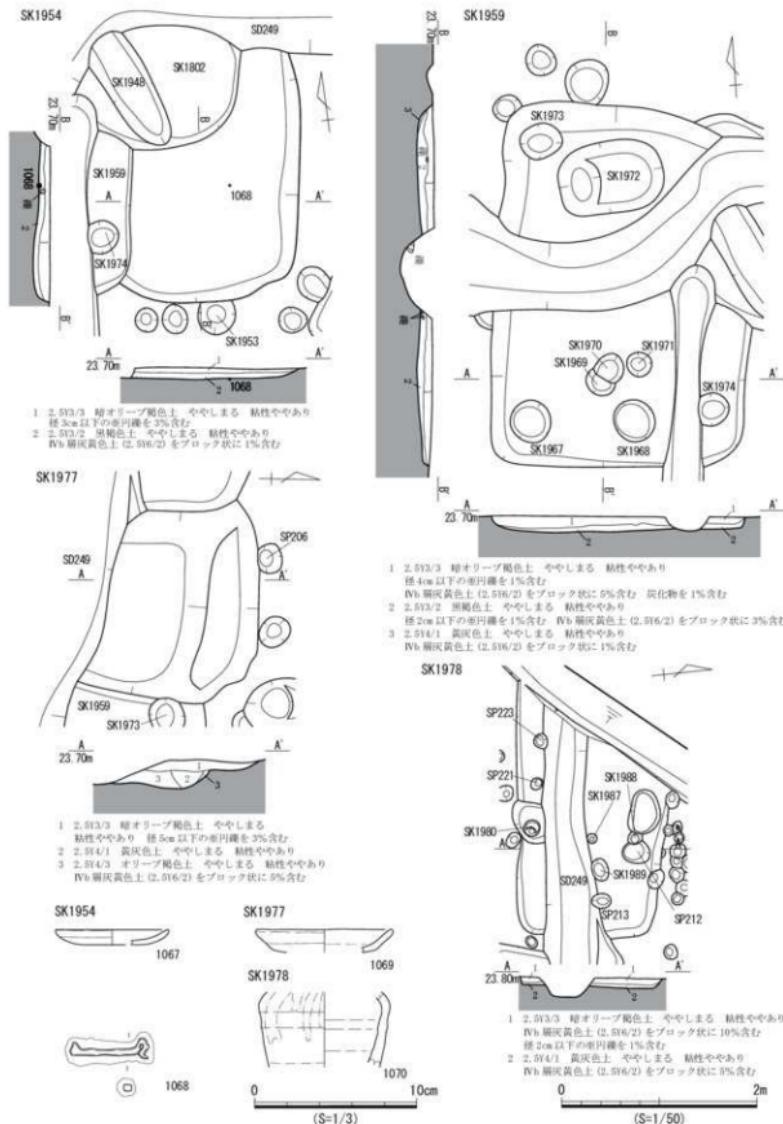


図176 SK1954・SK1959・SK1977・SK1978 遺構図・出土遺物実測図

南側以外では急である。底面はほぼ平坦である。

**埋土** 2層に分層した。2層は北壁付近で三角堆積として見られる。2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器6点、山茶碗4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK2024との重複関係と大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭と考えられる。

#### SK2024(図177)

**検出状況** IM11～IM12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側と南側は発掘区外に続く。西側でSP245・SK4573、中央でSD250と重複する。底面でSK2013を検出した。本遺構はSD250より古く、SP245・SK2013・SK4573より新しい。なお、SK2013は北辺に沿って検出したことから、本遺構と一連のものである可能性がある。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は方形と考えられる。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。底面で多くの遺構を検出したことから、堅穴建物の可能性を考えたが、柱配置を見出せず、本遺構との関係が不明であることから、堅穴状の土坑とした。

**埋土** 3層に分層した。2層と3層は底面の一部に堆積する。1層と2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 中央で釘1点(1075)が出土した。その他に埋土中から土師器122点、須恵器9点、灰釉陶器1点、山茶碗31点、陶器6点、種別不明の鉄製品4点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など3点を図示した。1073はB1類、1074はM2類の土師器皿である。1075は釘である。

**時期** SP245・SK2013・SD250との重複関係と大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭と考えられる。

#### SK2057(図178)

**検出状況** IM11グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。東側でSP245と重複する。本遺構はSP245より古い。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は梢円形と考えられる。壁面の傾斜は急で、底面は丸みを持つ。

**埋土** 2層に分層した。上2層は南西の壁面では厚く、北東に向かって少し薄く堆積する。1層と2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 2層に扁平な礎が含まれ、その下から銭貨1点(1076)が出土した。銭貨は埋納された可能性がある。

**出土遺物** 銭貨1点(1076)を図示した。銭種の訛読はできなかった。

**時期** SP245との重複関係と図示した1076から、本遺構は15世紀初頭以前と考えられる。

#### SK2058(図178)

**検出状況** IM11グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSB12、南側でSP247と重複する。本遺構はSP247より古く、SB12より新しい。

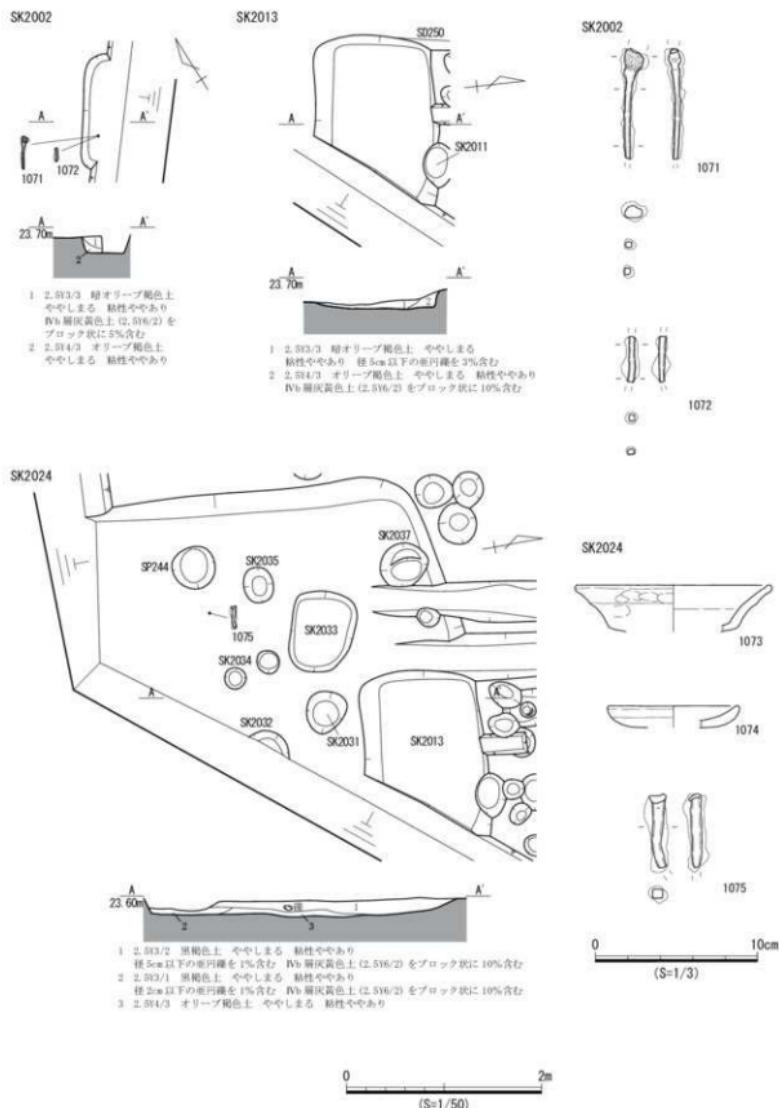


図 177 SK2002・SK2013・SK2024 造構図・出土遺物実測図

**規模・形状** 平面形は不整円形である。壁面の傾斜は急で、底面はほぼ平坦である。

**埋土** 3層に分層した。2層は西側に、3層は東側に偏って堆積する。2層と3層には少し礫が混じる。1層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 検出面で環状鉄製品(1077)が水平な状態で出土し、周辺でわずかに炭化物を確認した。その他に埋土中から土師器13点、山茶碗3点、陶器1点が散在して出土した。出土遺物から、土坑墓の可能性がある。

**出土遺物** 環状鉄製品1点(1077)を図示した。

**時期** SB12・SP247との重複関係から、本遺構は13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

**SK2078(図178)**

**検出状況** IL11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSK2137と重複する。本遺構はSK2137より古い。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は梢円形と考えられる。壁面は緩やかに開き、底面はほぼ平坦である。

**埋土** 単層の埋土である。ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 遺構検出面の北側で山茶碗の小皿1点(1078)が正位で出土した。その他に埋土中から土師器22点、山茶碗3点、常滑産の甕1点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗1点を図示した。1078は第7型式の尾張型山茶碗の小皿である。

**時期** SK2137との重複関係と図示した1078から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

**SK2093(図178)**

**検出状況** IM11グリッド、SK2137底面で検出した。平面形は不明瞭であった。本遺構はSK2137より古い。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は隅丸方形と考えられる。壁面の傾斜は緩やかに開き、底面は平坦である。

**埋土** 2層に分層した。中央が窪む堆積であるが、1層と2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器20点、須恵器1点、山茶碗14点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器1点を図示した。1079はD類の伊勢型鍋である。

**時期** SK2137との重複関係と図示した1079から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

**SK2096(図178)**

**検出状況** IL11～IM11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSK4575と重複する。本遺構はSK4575より古い。

**規模・形状** 平面形は不整梢円形である。壁面は緩やかに開き、底面はやや丸みをもつ。

**埋土** 2層に分層した。中央がやや窪むが、1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器64点、須恵器2点、山茶碗22点、陶磁器3点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK4575との重複関係と第7型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

#### SK2109（図178）

**検出状況** IM11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側で SK4574、南側で SB14 と重複する。本遺構は SB14・SK4574 より新しい。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。いずれの層にもブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。2層と3層に亜円礫を含む。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 82 点、山茶碗 11 点、常滑窯の甕 1 点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SB14・SK4574 との重複関係と尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

#### SK2121（図178）

**検出状況** IM10～IM11 グリッド、SK2137 底面で検出した。平面形は明瞭であった。南側で SB15-P3 と重複する。本遺構は SB15・SK2137 より古い。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。壁面はやや開き、底面は丸みをもつ。

**埋土** 2層に分層した。2層は南側に厚く堆積する。2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 26 点、山茶碗 1 点、古瀬戸 1 点が散在して出土した。

**出土遺物** 古瀬戸 1 点を図示した。1080 は古瀬戸中 I 期の平碗である。

**時期** SB15・SK2137 との重複関係と図示した 1080 から、本遺構は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。

#### SK2137（図179～181）

**検出状況** IL9～IM11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側と南側は発掘区外に続く。北側で SD249、東側で SK2109・SK4571、遺構内で SD254 と重複する。底面で SB12～SB15・SA11～SA15・SP258・SP261・SK2093・SK2166・SK2171・SK4572・SD253・SD255 を検出した。本遺構は SK2109・SK4571・SD249・SD254 より古く、SB12～SB15・SA11～SA15・SP258・SP259・SP261・SK2093・SK2166・SK2171・SK4572・SD253・SD255 より新しい。

**規模・形状** 検出した範囲では、平面形は不定方形と考えられる。壁面の傾斜は緩やかに開き、底面は3段に座む。底面で多くの遺構を検出したが、本遺構との関係は不明である。

**埋土** 3層に分層した。1層から3層まで水平に堆積する。2層と3層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 東側の底面直上（2層）から M 3 類の土師器皿 5 点（1097～1101）が正位で重なった状態で出土し、周囲からは尾張型山茶碗が出土した。また、南側の底面直上（3層）から C 1 類の土師器皿 7 点（1103～1108、小片 1）が正位で重なった状態で出土し、周囲からは尾張型山茶碗が出土した。

これらの土師器皿は意図的に重ねて配置したと考えられる。付近に掘立柱建物 SB13・SB14・SB15 があ

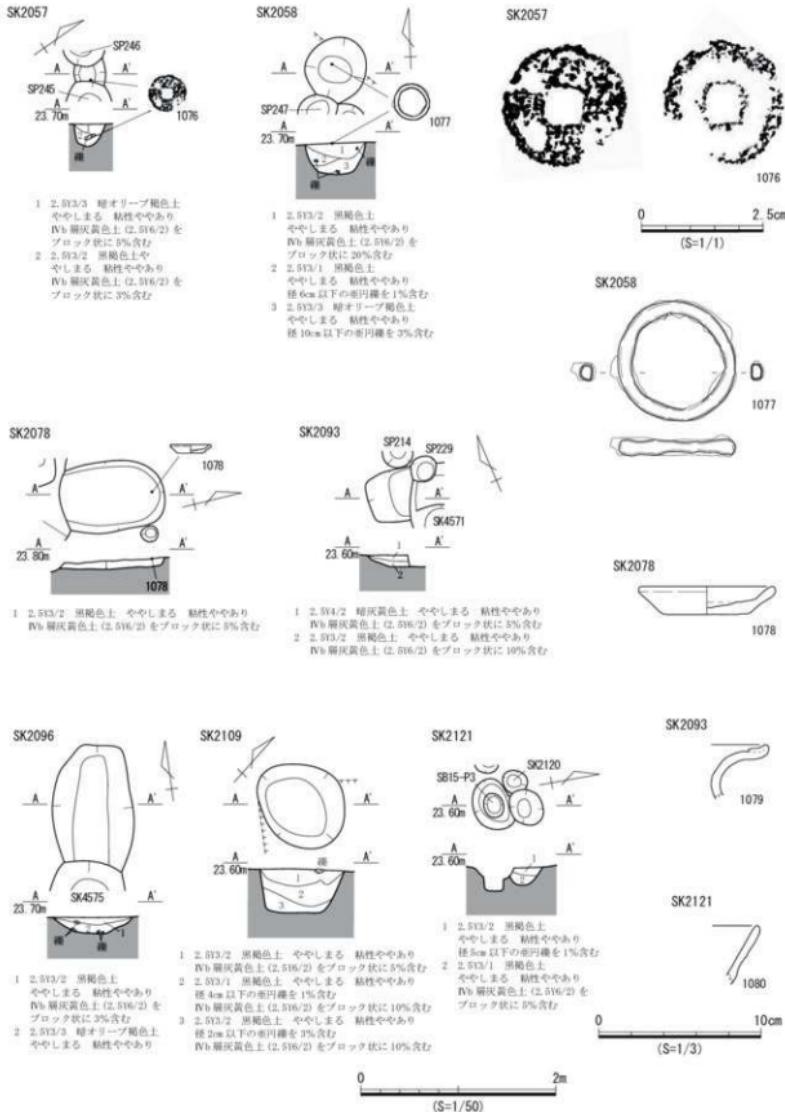


図178 SK2057・SK2058・SK2078・SK2093・SK2096・SK2109・SK2121 遺構図・出土遺物実測図

ることから、建物廃絶時の祭祀のために埋納された可能性がある。その他に埋土中から土師器 3,651 点、須恵器 71 点、灰釉陶器 43 点、山茶碗 1,225 点、陶磁器 96 点、土錐 4 点、砥石 2 点、石鍋 1 点、銭貨 1 点、釘 3 点、刀子の茎 1 点、種別不明の鉄製品 2 点、鉄滓 1 点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など 87 点を図示した。1114 は B 1 類、1103~1113 は C 1 類、1082~1084・1102 は M 2 類、1085~1101 は M 3 類、1081 は M 4 類の土師器皿である。1115 は A 3 類の羽釜である。1116 は C 類の清郷型鍋である。1117・1119・1120 は須恵器である。1117 は壊身 C 類、1119 と 1120 は甕の口縁部で、いずれも美濃須恵窯 III 期後半に比定した。1118 は折戸 53 号窯式に比定した灰釉陶器の皿である。1121~1147 は尾張型山茶碗で、1131・1132 は第 5 型式、1133~1140 は第 6 型式、1141~1146 は第 7 型式の碗、1121 と 1122 は第 5 型式、1123~1128 は第 6 型式、1129 と 1130 は第 7 型式の小皿、1147 は第 7 型式の片口鉢である。なお、1132 と 1133 は内面見込に回転糸切痕が認められる。1148~1150 は東濃型山茶碗である。1149 は窯洞 1 号窯式に比定した碗、1148 は明和 1 号窯式に比定した小皿、1150 は大畠大洞 4 号窯式古段階に比定した碗である。1151~1154 は龍泉窯系 I 類の青磁碗である。1155~1158 は土錐である。1159 は石鍋で、草戸千軒町遺跡の石鍋分類（広島県立歴史博物館 1998）の第 3 型式である。1160 と 1161 は砥石である。1162 は銭貨で、銭種は不明であるが「元」と「寶」の 2 文字は訛読できる。1163~1165 は釘である。1166 は刀子の茎である。1167 は鉄滓である。

**時期** SB12~SB15・SA11~SA15 等との重複関係と図示した 1150 から、本遺構は 13 世紀末から 14 世紀初頭と考えられる。

#### SK2166（図 182）

**検出状況** IM9~IM10 グリッド、SK2137 底面で検出した。平面形は明瞭であった。西側で SD253・SD255、東側で SP261 と重複する。本遺構は SK2137・SD253 より古く、SP261・SD255 より新しい。

**規模・形状** 平面形は不整方形であるが、底面は不整円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面はやや丸みを持つ。

**埋土** 3 層に分層した。1 層・2 層ともに中央が壅むような堆積であるが、3 層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 西側の 1 層から完形の山茶碗の小皿（1168）が、その直下の 2 層からは白磁四耳壺（1167）が出土した。その他に埋土中から土師器 8 点、須恵器 1 点、灰釉陶器 4 点、山茶碗 6 点が散在して出土した。遺物の多くは 1 層から出土している。出土遺物から、土坑墓の可能性も考えられる。

**出土遺物** 山茶碗など 2 点を図示した。1168 は第 6 型式の尾張型山茶碗の小皿である。1169 は白磁四耳壺である。佐野元による白磁四耳壺分類（佐野 1994）の A 1 系 3 類である。

**時期** SD255 との重複関係から、本遺構は 13 世紀後葉から末と考えられる。

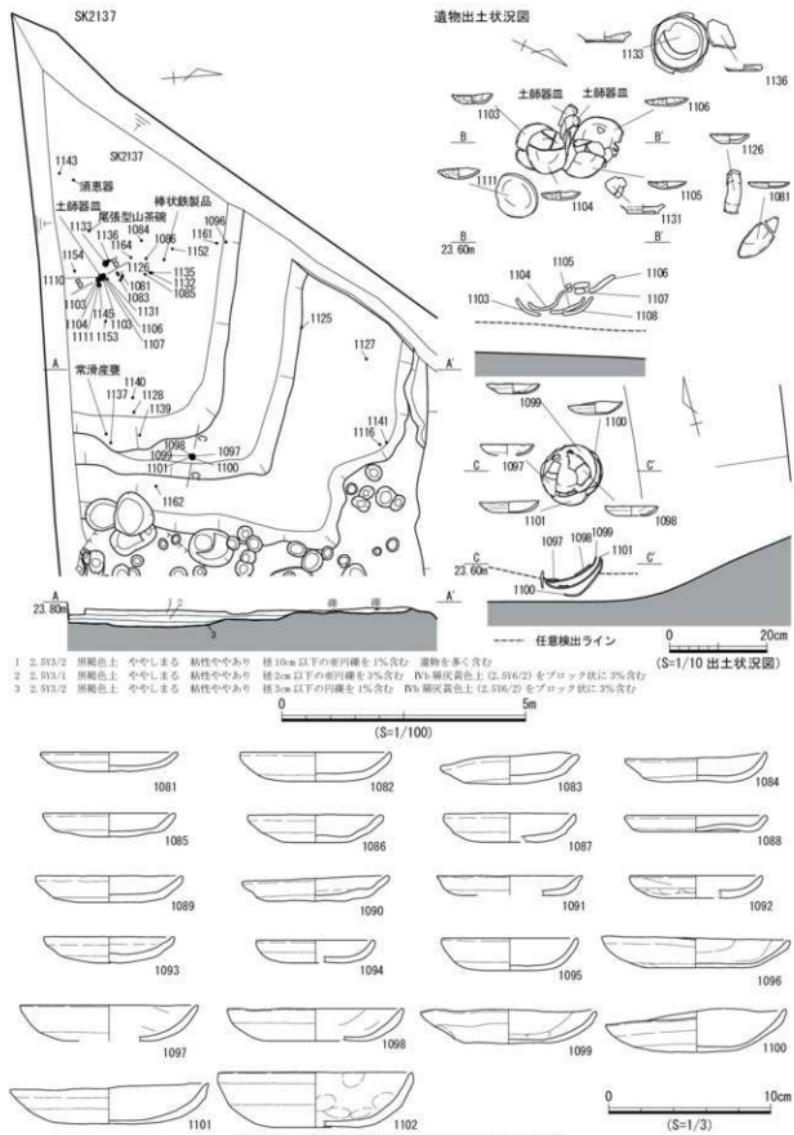
#### SK2170（図 182）

**検出状況** IM9 グリッド、SK2137 底面で検出した。平面形は明瞭であった。東側で SK2166、遺構内で SD253・SD255 と重複する。本遺構は SD253・SD255 より古く、SK2166 より新しい。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面はほぼ平坦である。

**埋土** 2 層に分層した。層界には凹凸が見られる。2 層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 1 点、須恵器 3 点、灰釉陶器 2 点、山茶碗 2 点が散在して出土した



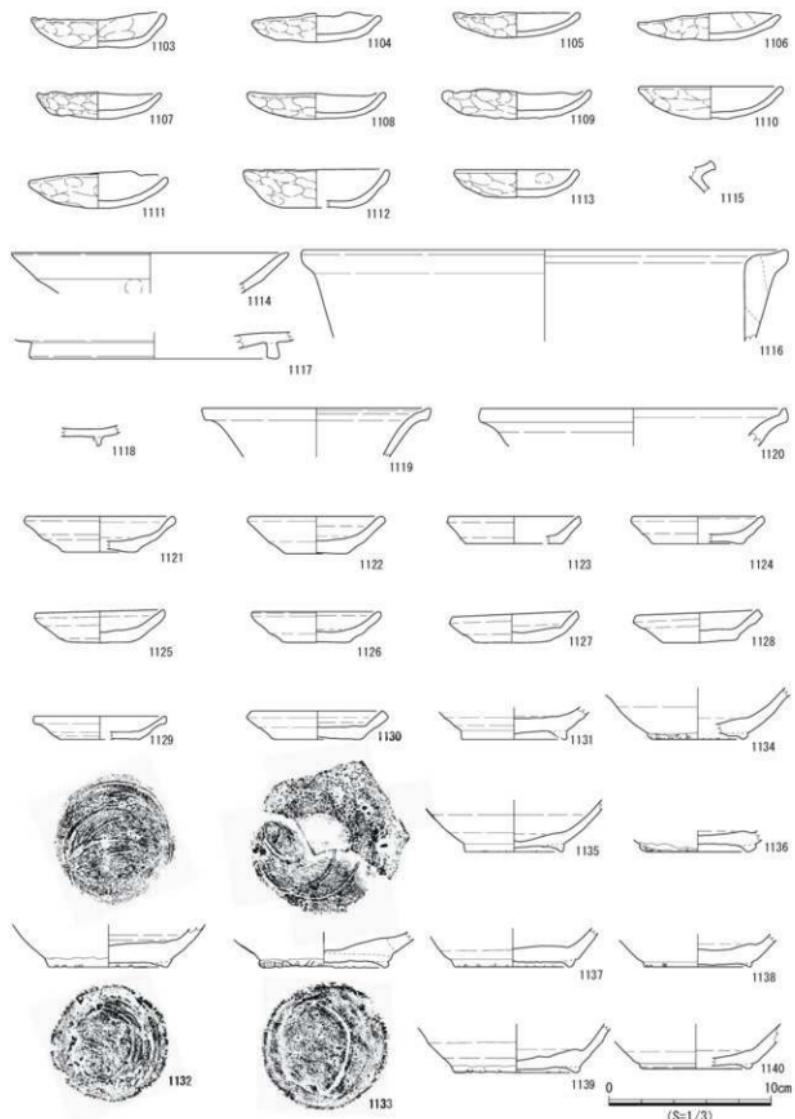


図 180 SK2137 出土遺物実測図（2）

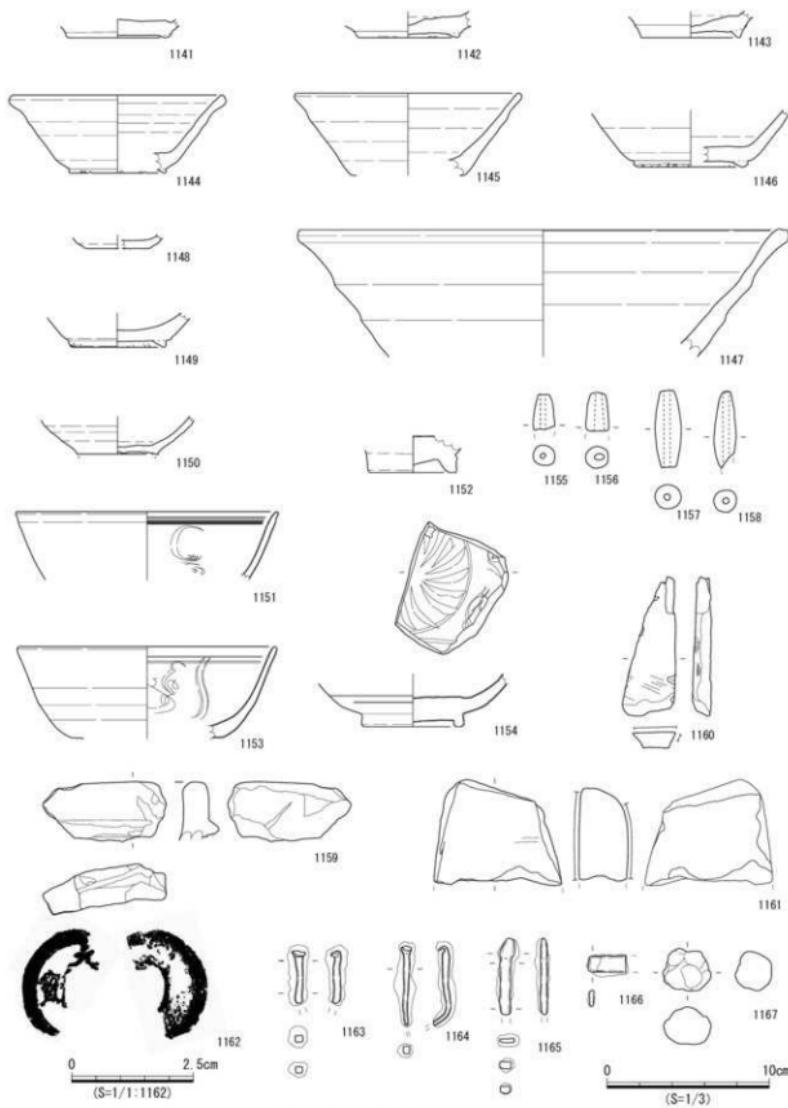


図 181 SK2137 出土遺物実測図 (3)

が、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK2166・SD255との重複関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

**SK2171（図182）**

**検出状況** IM10 グリッド、SK2137 底面で検出した。平面形は明瞭であった。西側は発掘区外に続く。北側壁面でSB13、西側でSD253と重複する。底面でSB13-P4・SA13-P1を検出した。本遺構は重複するいずれの遺構より新しい。

**規模・形状** 平面形は不定形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は丸みをもつ。

**埋土** 3層に分層した。3層は南側の底面にのみ堆積する。3層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器40点、須恵器2点、灰釉陶器1点、山茶碗10点、常滑窯の壺1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SB13・SD253との重複関係から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

**SK4569（図182）**

**検出状況** IK11 グリッド、SK1887 底面で検出した。平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。2層と3層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 1層から半分に割れた灰釉陶器の碗(1170)が横位で出土した。

**出土遺物** 灰釉陶器1点を図示した。1170は明和27号窯式に比定した碗である。

**時期** 図示した1170から、本遺構は11世紀後葉と考えられる。

**SK4570（図182）**

**検出状況** IL11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。北側でSK1959と重複する。本遺構はSK1959より古い。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。壁面の傾斜は急であるが、南東側ではテラス状に緩やかに開く。底面はやや丸みを持つ。

**埋土** 3層に分層した。2層と3層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 2層から古瀬戸の小鉢(1171)が逆位で出土した。2層を埋め戻す際に意図的に埋納された可能性がある。その他に埋土中から土師器16点、山茶碗1点が散在して出土した。

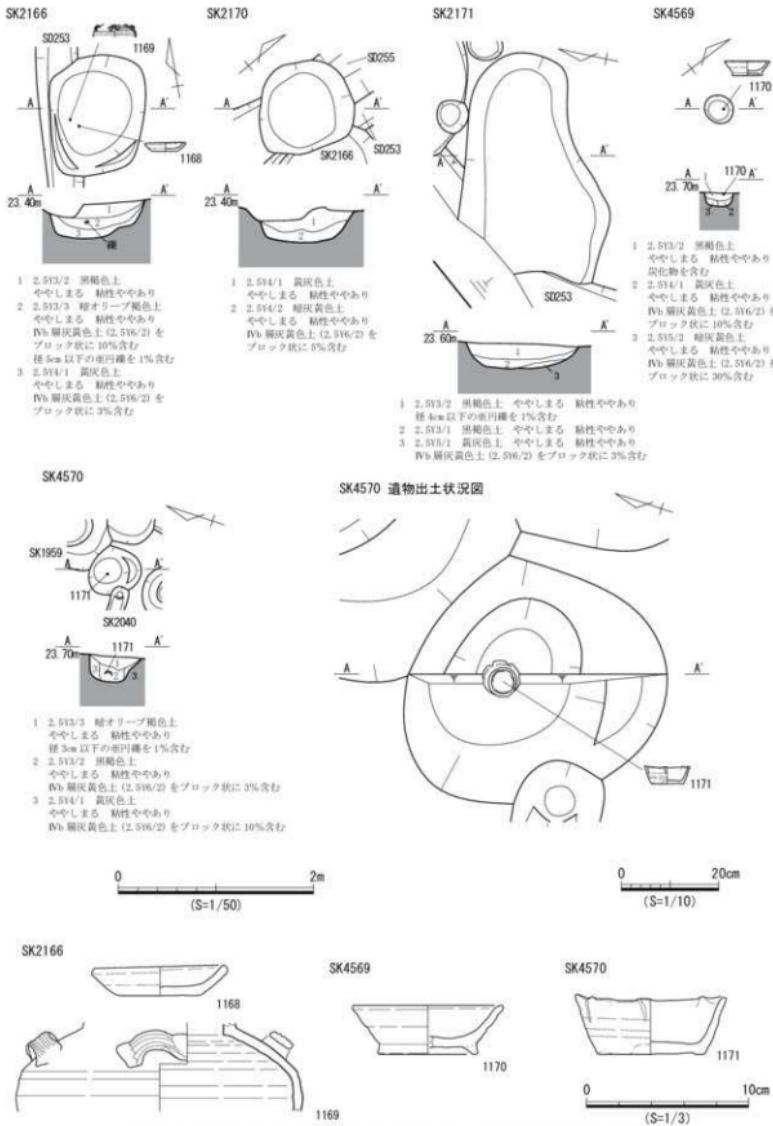
**出土遺物** 古瀬戸1点を図示した。1171は古瀬戸後II期の小鉢である。内外面に灰釉が施され、外面下部は露胎する。低い削り出し高台を持つ。入れ子型の器形である。

**時期** 図示した1171から、本遺構は14世紀末から15世紀初頭と考えられる。

**SK4571（図183）**

**検出状況** IM11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北西側でSK2093、西側でSK2137と重複する。本遺構はSK2093・SK2137より新しい。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。壁面の傾斜は急である。底面は平坦だが、南側が一段下がる。



**埋土** 4層に分層した。1層は表面に薄く堆積し、2層は北側では厚く、南に向かって薄く堆積する。4層ではブロック土が含まれることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から、土師器31点、須恵器1点、山茶碗15点、陶器3点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK2137との重複関係と大窯製品が出土したことから、本遺構は15世紀後葉から17世紀初頭と考えられる。

#### SK4572（図183）

**検出状況** II.10 グリッド、SK2137底面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSA12と重複する。本遺構はSA12より古い。

**規模・形状** 平面形は不整円形である。壁面の傾斜は急で、底面は緩やかに丸みを持つ。

**埋土** 6層に分層した。2層は凹凸を伴う層である。2層より下層では、南側では4層～6層が水平に堆積し、北側では3層のみが堆積する。いずれの層にもブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 3層から銭貨1点(1174)、刀子形鉄製品1点(1175)、土錘1点(1173)も出土した。その他の埋土中から土師器280点、須恵器1点、灰釉陶器2点、山茶碗46点、陶器5点が散在して出土した。埋土の状況や出土遺物から、土坑墓の可能性がある。

**出土遺物** 山茶碗など4点を図示した。1172は第5型式の尾張型山茶碗である。1173は土錘である。1174は銭貨で、銭種は不明である。1175は刀子形鉄製品である。中央部に開をもつ刀子の形状を呈するが、刃部が認められない。

**時期** SA12との重複関係と図示した1172から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

#### SK4573（図183）

**検出状況** IM11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSK2024と重複する。本遺構は重複するSK2024より古い。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は西側では急で、東側では緩やかに開く。底面は平坦である。

**埋土** 3層に分層した。1層は西側に堆積し、2層と3層は東側に水平に堆積する。2層と3層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器35点、山茶碗4点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器3点を図示した。1176と1177はM3類の土師器皿、1178は小型の壺である。

**時期** SK2024との重複関係と大畠大洞4号窯式新段階に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は14世紀初頭から後葉と考えられる。

#### SK4574（図183）

**検出状況** IM11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側でSK2109・SK2137と重複する。本遺構はSK2109より古く、SK2137より新しい。

**規模・形状** 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急である。底面は北に向かって傾斜があり、北壁付近で少し窪む。

**埋土** 3層に分層した。2層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器34点、山茶碗10点、古瀬戸1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK2109・SK2137との重複関係と古瀬戸が出土したことから、本遺構は13世紀末から15世紀後葉と考えられる。

#### SK4575（図183）

**検出状況** IM11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側で SK2096、西側で SB15 と重複する。本遺構は重複する SB15・SK2096 より新しい。

**規模・形状** 平面形は楕円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面はほぼ平坦である。

**埋土** 6層に分層した。1層から4層まではほぼ水平に堆積する。3層と4層以外の埋土にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 3層から古瀬戸の擂鉢(1183)が出土した。その他に埋土中から土師器119点、須恵器1点、山茶碗32点、陶器6点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など5点を図示した。1179と1180はM3類の土師器皿、1181はA2類の羽釜、1182は内耳鍋である。1183は古瀬戸後IV期新段階の擂鉢である。

**時期** SB15との重複関係と図示した1183から、本遺構は15世紀後葉と考えられる。

#### 6 溝状遺構

##### SD234（図184～202）

**検出状況** IF14～IL13 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は南側では明瞭で、北側では不明瞭であった。南北端は発掘区外に延びる。西側で SI3・SK1791・SD238・SD247、東側で SD235 と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

**規模・形状** やや東に傾くが、南北方向にはほぼ直線的に延びる。底面の幅は狭い部分で0.8m、広い部分で2.3m、北に向かうほど底面は細くなる。深さはA-A'断面で0.5m、B-B'断面で1.2mほどである。壁面の傾斜はA-A'断面、B-B'断面とともに西側ではやや急で、東側では底面付近がやや急である。底面はほぼ平坦である。上層の東側で再掘削を確認した。再掘削部分の壁面の傾斜は緩やかに開き、底面は丸みを持つ。SB8～SB10と長軸方位が揃う。

**埋土** A-A'断面は20層に分層した。20層は底部に薄く堆積し、B-B'断面の23層に対応すると考えられる。下層はシルト層や粗砂、亜円礫を含む層が多い。また、6層まで堆積した後東壁部で溝を再掘削している（2～5層）。B-B'断面は24層に分層した。A-A'断面と同様、下層はシルト層や粗砂、亜円礫を含む層が多い。11層に炭化物や焼土塊を含む。6層から12層にかけて多くの遺物が出土している。また、6層まで堆積した後、SD242が掘削されている（5層）。さらに4層まで堆積した後、東壁部で溝を再掘削しており、A-A'断面の再掘削部（2～5層）に対応する。A-A'断面、B-B'断面ともに、下層はシルト層や粗砂、亜円礫を多く含む層であることから、水流のある区画溝であった可能性がある。

**遺物出土状況** IJ13～IK14 グリッドで炭化物が集中する範囲を確認した。この炭化物分布範囲はB-B'断面11層に対応すると考えられ、炭化物堆積層から大量の土器や破損した載貨や銅塊を始めとす

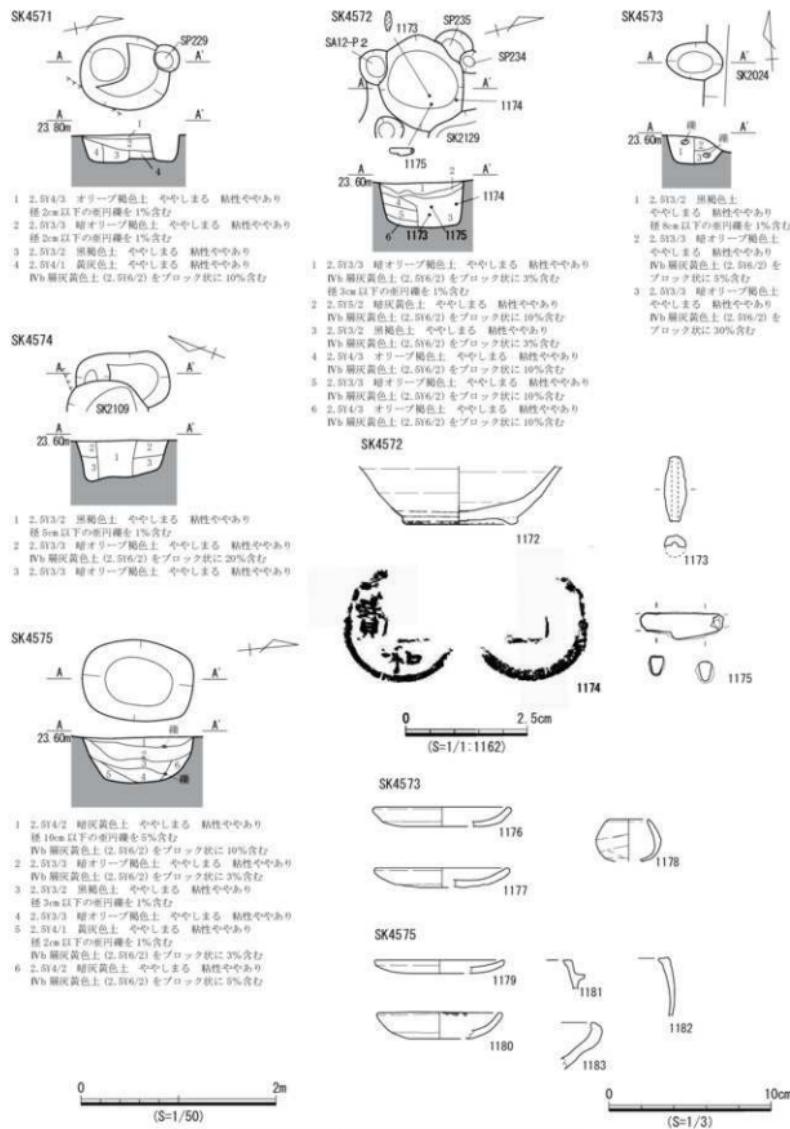


図 183 SK4571 ~ SK4575 造構図・出土遺物実測図

る金属製品がまとめて出土した。のことからB-B'断面11層が堆積する時期に周辺の建物に関連する不要物の大量投棄が行われたと考えられる。炭化物堆積層出土遺物は一度に投棄されたと考えられるが、遺物が層をなして出土したため、炭化物分布範囲の検出面、ある程度掘削した中段、完掘の3段階で出土状況を記録し取り上げた(図186~191)。また、検出面で五輪塔の火輪(1501)が逆位で出土した。これらを含め埋土中から土師器15,884点、須恵器340点、灰釉陶器152点、山茶碗6,154点、陶器1,318点、土製品15点、粘土塊7点、石製品53点、金属製品260点、炭化物5点が散在して出土した。

#### 出土遺物 土師器など350点を図示した。

1184~1254は炭化物分布範囲の出土遺物である。1207はB1類、1186~1188はC1類、1204~1206はM2類、1189~1203はM3類、1184と1185はM4類の土師器皿である。1208~1213は尾張型山茶碗である。1208は第5型式、1209は第7型式の碗、1210は第6型式、1211~1213は第8型式の片口鉢である。1214~1224は東濃型山茶碗である。1214~1219は大畑大洞4号窯式古段階、1220~1224は大畑大洞4号窯式新段階に比定した。1225と1226は龍泉窯系の青磁碗である。1225はI類で内面見込に花文を描く。1226はIIa類で外面に弁の中心に鍋がない片影蓮弁文を描く。1227~1233は古瀬戸である。1227は中Ⅰ期の合子である。1228は中Ⅰ期、1229は中Ⅲ期の仏花瓶である。1228は鉄軸が施され、4条の沈線が巡り、体部の5箇所に印花文が施される。1233は中Ⅱ期の柄付片口で、内面にトチンの痕跡が3箇所確認できる。1232は中Ⅲ期、1230と1231は中Ⅳ期の折縁深皿である。1235は7型式、1234は9型式の常滑産の甕である。1235は体部上側に押印文が施される。1236は土鍤である。1237~1254は金属製品である。1237は鉄刀の茎、1238~1247は釘である。1248~1250は銭貨で、1248は「開」の一字から「開元通寶」(初鑄621年)と考えられ、1249は「元豊通寶」(初鑄1078年)、1250は「政和通寶」(初鑄1111年)である。1251は銅塊、1252~1254は銅滴である。

1255~1533は炭化物分布範囲以外の出土遺物である。1339~1343はB1類、1344はB2類、1280~1287はC1類、1329~1338はM2類、1288~1328はM3類、1255~1279はM4類の土師器皿である。なお、1260・1261・1300・1331は口縁部に煤が付着し、1342は内面に墨が付着する。1345は長胴甕である。1346はA2類、1347はA3類の羽釜である。1348はA類、1349はD類の伊勢型鍋である。1350~1362は美濃須衛産須恵器である。1350はIII期後半に比定した高杯である。1351はII期~III期、1352はIII期後半~IV期第1小期、1353はIV期第3小期~V期第1小期に比定したB類の坏身である。1354はIV期第3小期、1355はIV期第3小期~V期第1小期に比定したC類の坏身である。1356はIII期後半~IV期第1小期に比定したC類の坏蓋である。1357はIV期第3小期~V期第1小期に比定した碗である。1359と1360はIV期第3小期、1358はV期第1小期に比定した有台盤で、1360は十字透かしが3方向に入る。1361はII期~III期、1362はIV期第3小期に比定した甕である。1363と1364は猿投産の須恵器で、1363は円面鏡、1364は瓶類である。1365は產地不明の須恵器壺である。底部内面に直径約3cmの円形の降灰が認められることから、平城宮における須恵器分類の壺Gと考えられる(奈良国立文化財研究所 1976)。壺Gは駿河国や伊豆国の須恵器窯で焼成される。壺Gの用途について、巽淳一郎は駿河国や伊豆国から都に貢納された「堅魚煎汁」(カツオの煮汁)を運搬する際の容器(巽1991)、山中章は東国からの兵士の水筒(山中1997)と主張している。1366~1374・1376~1379は灰釉陶器である。1366~1368は丸石2号窯式に比定した皿である。1369は折戸53窯式、1370は百代寺

窯式、1374・1376は虎渓山1号窯式、1371・1377・1378は丸石2号窯式、1372・1373・1379は明和27号窯式に比定した碗である。1380～1435は尾張型山茶碗である。1380～1385は第5型式、1386～1390は第6型式の小皿、1391～1405は第5型式、1406～1419は第6型式、1420～1424は第7型式、1425～1428は第8型式の碗、1429は第4型式、1431は第5型式、1432は第6型式、1433と1434は第7型式、1435は第8型式、1430は型式不明の片口鉢である。1375・1436～1448は東濃型山茶碗である。1436は大畠大洞4号窯式古段階、1437大畠大洞4号窯式新段階に比定した小皿、1375は尾張型第3型式併行、1438は谷迫間2号窯式、1439と1440は窯洞1号窯式、1441は白土原1号窯式、1442～1444は大畠大洞4号窯式古段階、1448は大洞東1号窯式に比定した碗である。1449～1458は東濃型と尾張型の区別がつかなかった尾張型第4型式併行の山茶碗である。1449～1456は小碗、1457と1458は碗である。1459は龍泉窯系IIa類の青磁碗で、外面に弁の中心に鎮がない片影蓮弁文を描く。1460はIV-1b類の白磁皿で、体部下半は露胎する。1461～1476は古瀬戸である。1470は前III期の鉢皿、1472は前III期～前IV期の瓶子I類、1476は中I期～中II期の洗、1463は中II期、1465は中IV期の折縁深皿、1474は中期の広口壺、1461と1471は後II期の袴腰形香炉と筒形容器、1473は後I期～後III期の四耳壺、1462は後III期～後IV期古段階の大型袴腰形香炉、1464・1466～1468は後IV期古段階である。1464は鉢目付大皿、1466は折縁深皿、1467は擂鉢、1468は把手付片口小瓶、1469は後IV期新段階の天目茶碗、1475は後IV期の桶である。1477～1485は常滑産陶器である。1477は6b型式の広口壺、1478と1479は8型式の片口鉢である。1480は1b型式、1481は4型式、1482は5型式、1483は6a型式、1484は9型式、1485は近世(17世紀)の甕で、1485は上層から出土したことから混入品と考えられる。1486～1492は土鍾である。1493～1502は石製品である。1493～1497は砥石で、1494は鉄分の沈着が帶状に認められる。1498と1499は石硯で、同一固体の可能性が高い。1498は上面に平滑面が認められ、1499は直線的な周縁部と海の傾斜した面が残る。1500は磨石若しくは敲石で、磨面に敲打痕、側面に連続する敲打痕が認められる。1501は五輪塔の火輪である。1502は第3型式(広島県立歴史博物館1998)の石鍋である。1503～1530は金属製品である。1503・1504は刀子、1505・1530は鉄織、1507は環状鉄製品、1508～1529は釘、1531と1532は鉄滓、1533は銅塊である。

**時期** SD247との重複関係と図示した1448から、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭に掘削され、図示した1235から、炭化物分布範囲の一括投棄は掘削後それほどの時期をおかげに行われたと考えられる。図示した1474から、完全に埋没したのは15世紀後葉と考えられる。

#### SD235(図203)

**検出状況** IH15グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側は発掘区外に延びる。西側でSD236・SD234、北側でSK1788と重複する。本遺構はいざれの遺構より古い。

**規模・形状** 東西方向に延びる。長軸は0.9mほどであるが、底面の形状から東西方向に延びることが想定できる。壁面の傾斜は南北ともに緩やかに開く。底面は北側では浅くテラス状で、南側では一段深くなる。

**埋土** 2層に分層した。2層はテラス部分から南の窪みの底面に堆積する。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器2点、須恵器7点、灰釉陶器1点、山茶碗1点が散在して出土した。なお、山茶碗は上層からの出土であるため、混入品と考えられる。

SD234 完掘図

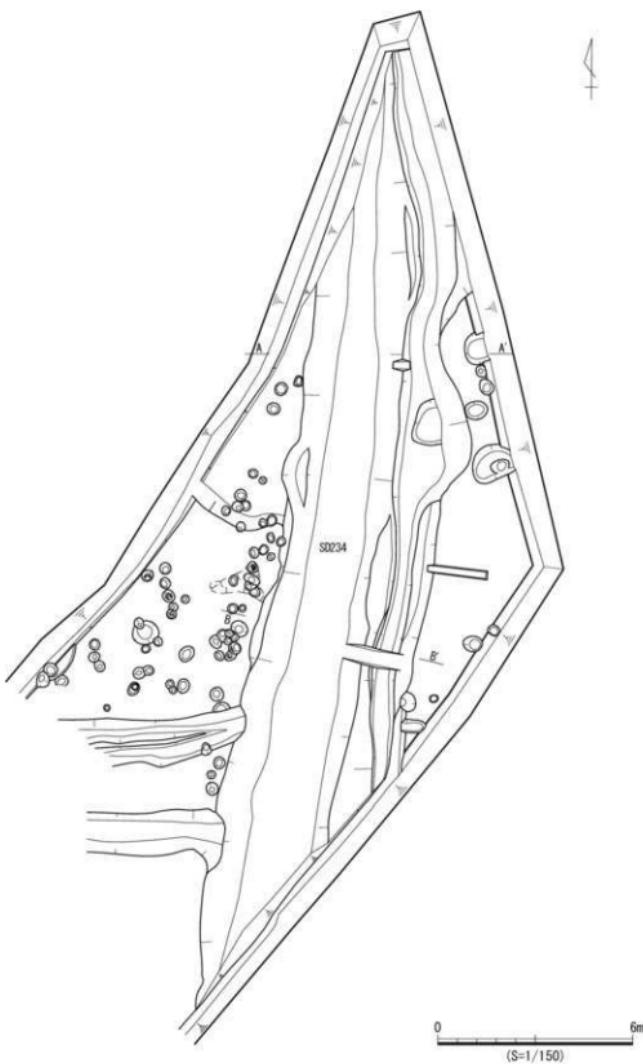
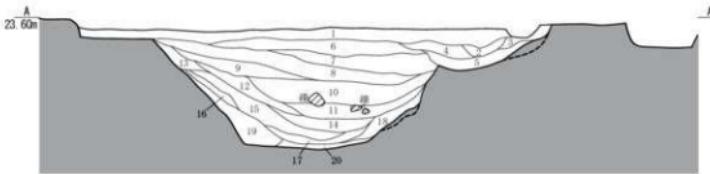
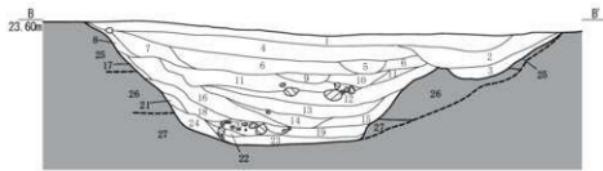


図 184 SD234 遺構図（1）



1. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 2cm 以下の砂円礫を 1%含む IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 20%含む
3. 2.5Y5/2 黃褐色土 ややしまる 粘性ややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
4. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
5. 2.5Y4/4 緩オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 5%含む IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 40%含む
6. 2.5Y4/2 緩オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 3%含む IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
7. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
8. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 2cm 以下の砂円礫を 1%含む 植生塊を 1%含む
9. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 5%含む
10. 2.5Y3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 2cm 以下の砂円礫を 5%含む 上部を多く含む
11. 2.5Y3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性やややあり 径 12cm 以下の砂円礫を 5%含む 上部を多く含む
12. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性やややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 1%含む IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 10%含む
13. 2.5Y4/4 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性やややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
14. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 ややしまる 粘性極めて高い 径 2cm 以下の砂円礫を 1%含む
15. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 シリト しまりなし 粘性なし
16. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 5%含む 植生塊をわずかに含む
17. 2.5Y3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性極めて高い 径 1cm 以下の砂円礫を 3%含む 黑褐色土 (2.5Y3/2) をブロック状に 5%含む
18. 2.5Y3/3 緩オリーブ褐色土 シリト しまりなし 粘性なし 径 4cm 以下の砂円礫と粗砂が个体
19. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 シリト しまりなし 粘性なし 粗砂と細砂が主で径 5cm 以下の砂円礫を 5%含む
20. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性極めて高い



1. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 2cm 以下の砂円礫を 1%含む IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
2. 2.5Y6/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 5cm 以下の砂円礫を 1%含む 黑褐色土 (2.5Y3/2) をブロック状に 5%含む
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性やややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 20%含む
4. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 ややしまる 粘性やややあり 径 4cm 以下の砂円礫を 1%含む
5. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 10%含む
6. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 ややしまる 粘性やややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性やややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 3%含む IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 10%含む
8. 2.5Y4/4 黄褐色土 ややしまる 粘性やややあり 径 5cm 以下の砂円礫を 1%含む
9. 2.5Y4/2 黑褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり IVb 緩灰褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
10. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 4cm 以下の砂円礫を 5%含む
11. 2.5Y3/2 黑褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 15cm 以下の砂円礫を 5%含む 植生塊・固結物をわずかに含む
12. 2.5Y4/2 黑褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 15cm 以下の砂円礫を 5%含む IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 40%含む
13. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 5cm 以下の砂円礫を 1%含む IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
14. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
15. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 5cm 以下の砂円礫を 1%含む IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む
16. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 5cm 以下の砂円礫を 10%含む IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 50%含む 粗砂を多く含む
17. 2.5Y4/2 黑褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 30%含む
18. 2.5Y3/2 黑褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 3%含む IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む 固結物をわずかに含む
19. 2.5Y4/2 黑褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 1%含む
20. 2.5Y4/2 黑褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 40%含む IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 20%含む
21. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 3%含む IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 5%含む 廉化物を含む
22. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 5cm 以下の砂円礫を 10%含む IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2) をブロック状に 50%含む 粗砂を多く含む
23. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり IVb 黃褐色土 (2.5Y6/2)
24. 2.5Y3/2 緩オリーブ褐色土 シリト しまりなし 粘性やややあり 径 3cm 以下の砂円礫を 1%含む 粗砂を含む
25. 2.5Y6/3 にじみ色土 シリト しまりなし 粘性やややあり (IVb 帯)
26. 2.5Y4/2 緩灰褐色土 シリト しまりなし 粘性なし 粗砂と粗砂以下 5cm の砂円礫を主体 (V 帯)
27. 粗砂 (V 帶)



図 185 SD234 遺構図 (2)

SD234 炭化物分布範囲図（検出面）

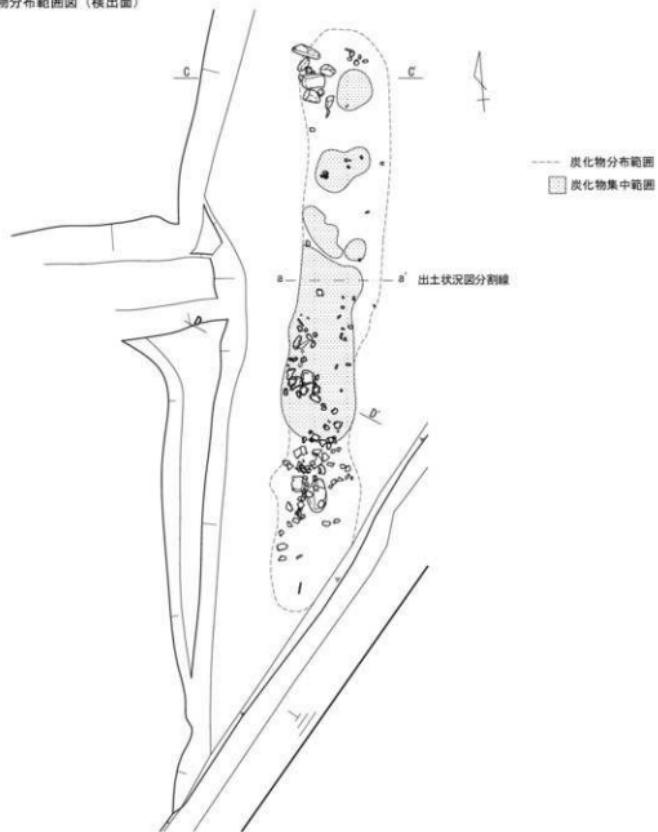


図 186 SD234 遺構図（3）

SD234 炭化物分布範囲図（検出面）遺物出土状況図

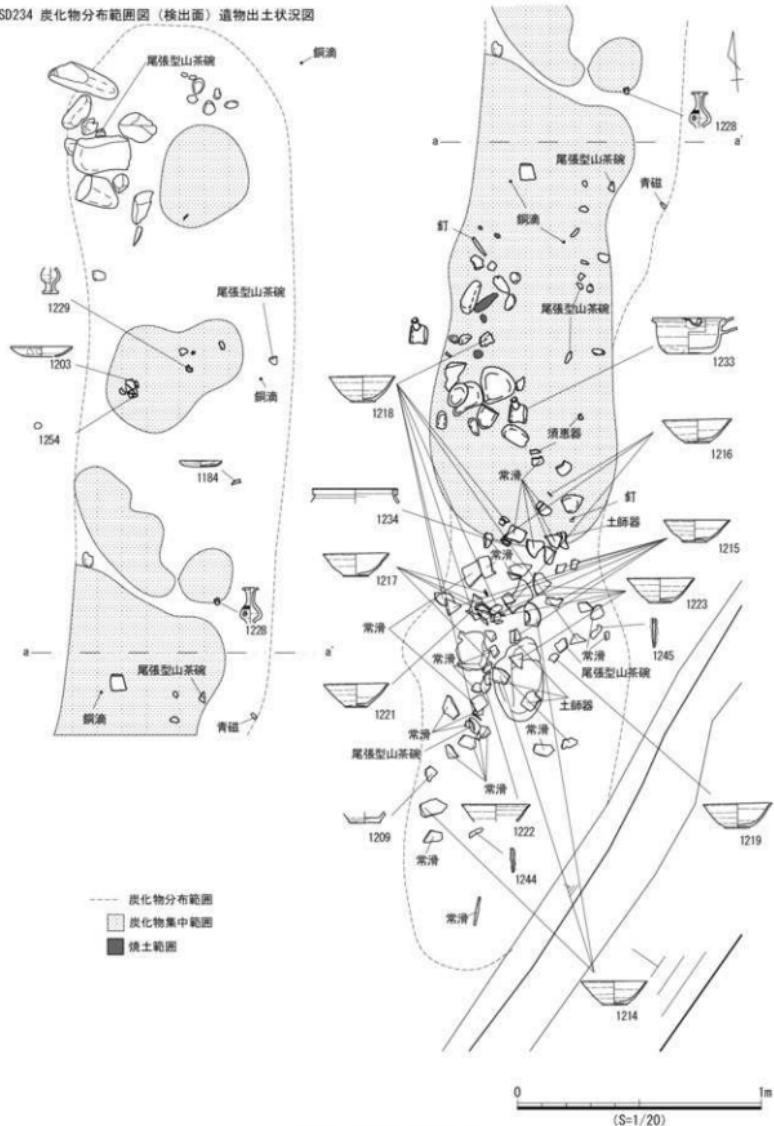
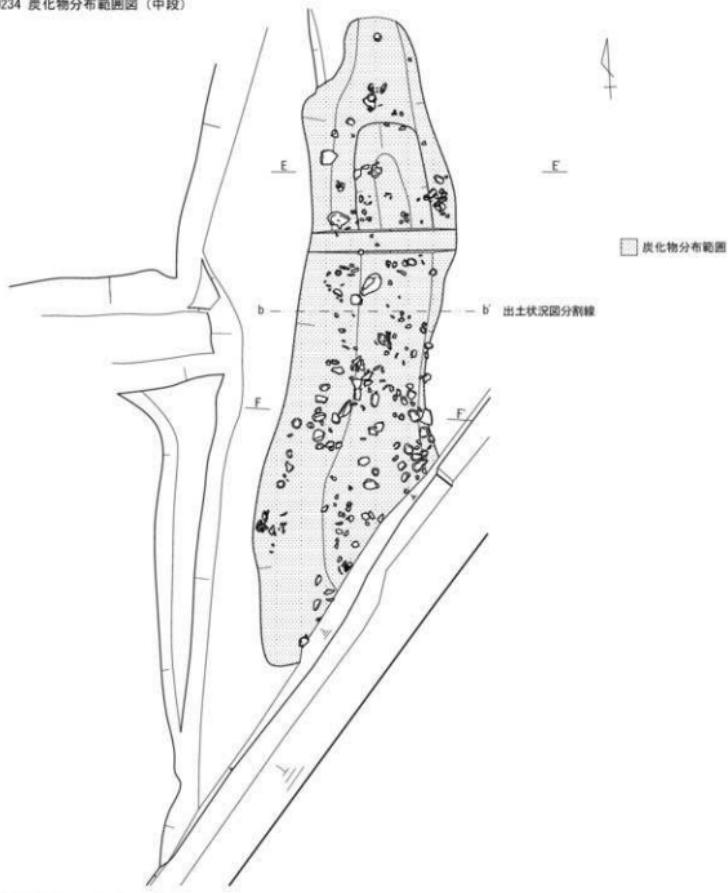


図 187 SD234 遺構図 (4)

SD234 炭化物分布範囲図（中段）



2段目遺物エレベーション図

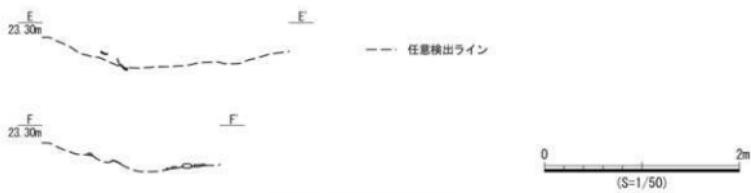


図 188 SD234 遺構図（5）

SD234 炭化物分布範囲（中段）遺物出土状況図（1）

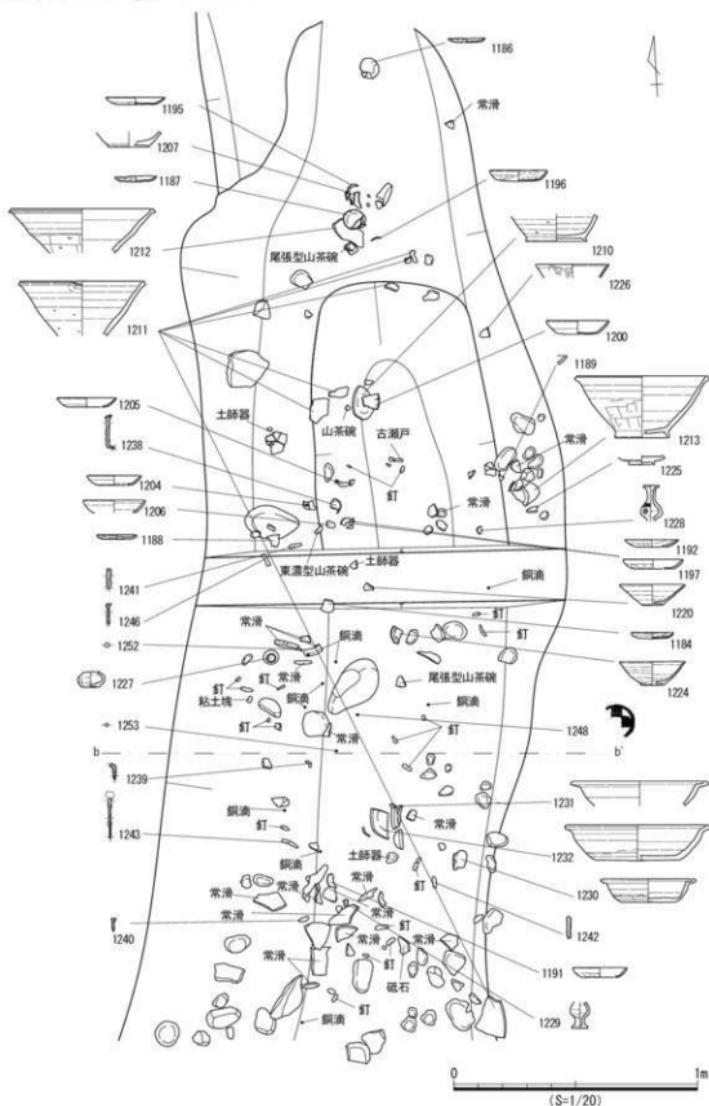
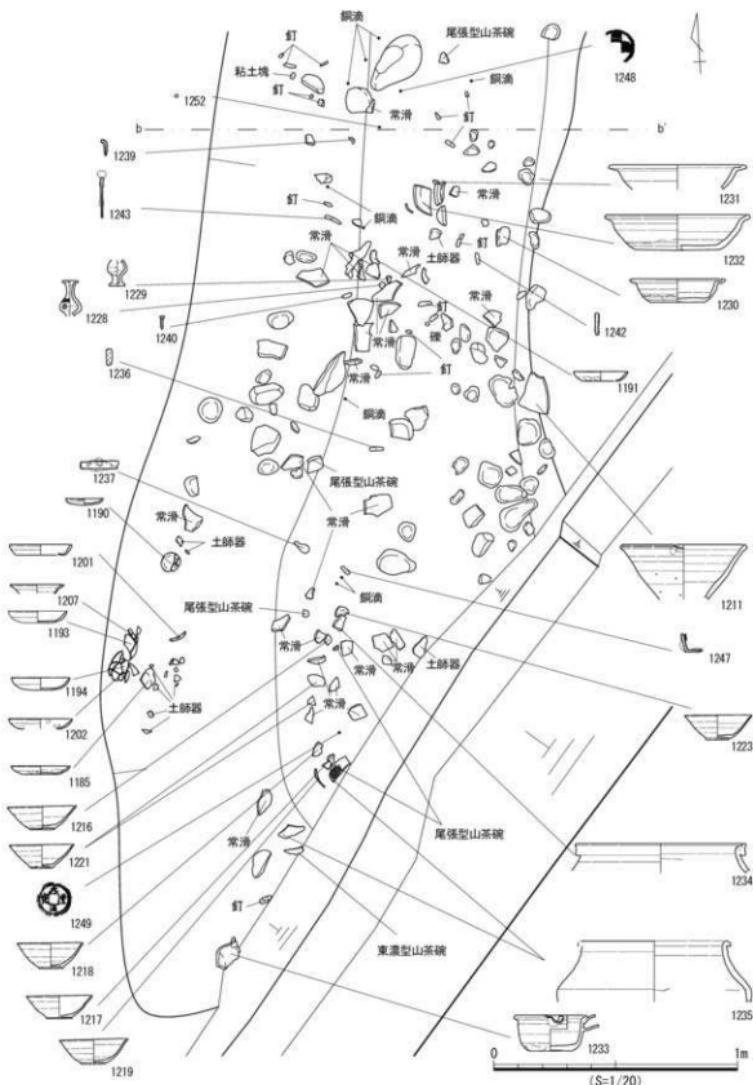


図 189 SD234 遺構図（6）

SD234 炭化物分布範囲（中段）遺物出土状況図（2）



SD234 墓化物分布範囲図（完掘）

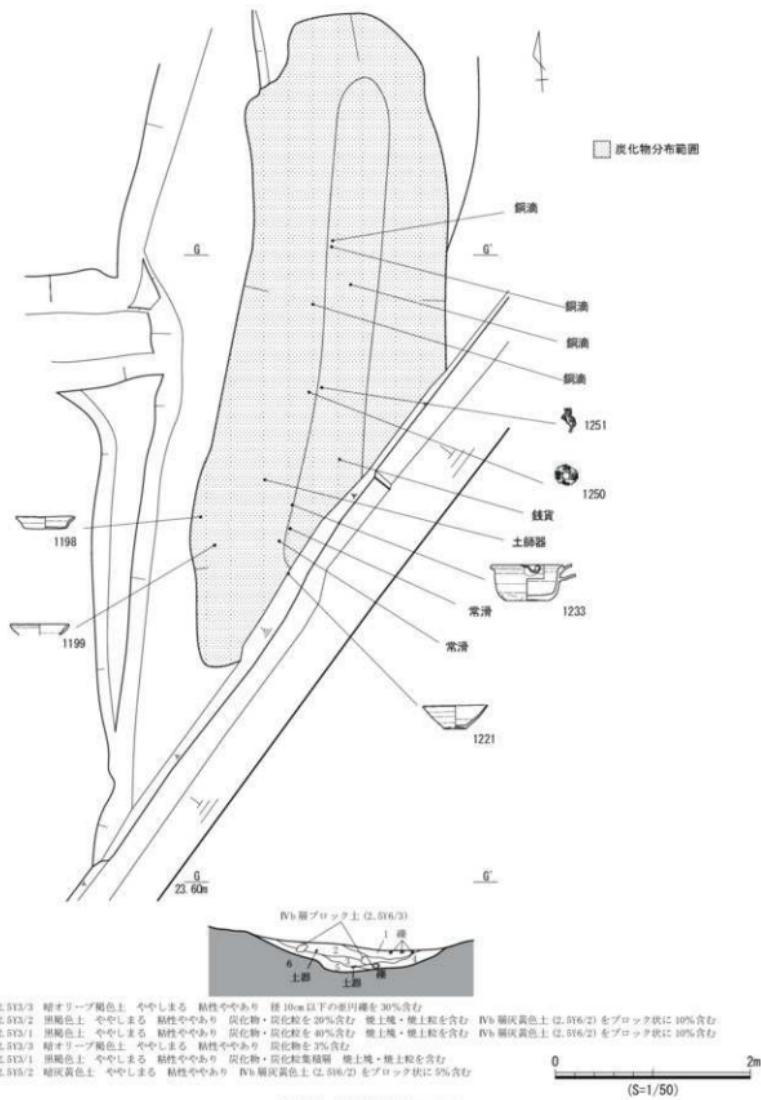


図191 SD234 遺構図 (8)

- 1 2.5Y3/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径 10cm 以下の赤円礫を 30% 含む
- 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 墓化物 墓化粧を 30% 含む 墓上塊・墓上粒を含む IVb 層灰黄色土 (2. BY6/2) をブロック状に 10% 含む
- 3 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 墓化物 墓化粧を 40% 含む 墓上塊・墓上粒を含む IVb 層灰黄色土 (2. BY6/2) をブロック状に 10% 含む
- 4 2.5Y3/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 墓化物 墓化粧を 3% 含む
- 5 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 墓化物 墓化粧を含む
- 6 2.5Y5/2 灰灰黄色土 ややしまる 粘性ややあり IVb 層灰黄色土 (2. BY6/2) をブロック状に 9% 含む

炭化物分布範囲出土遺物（1）

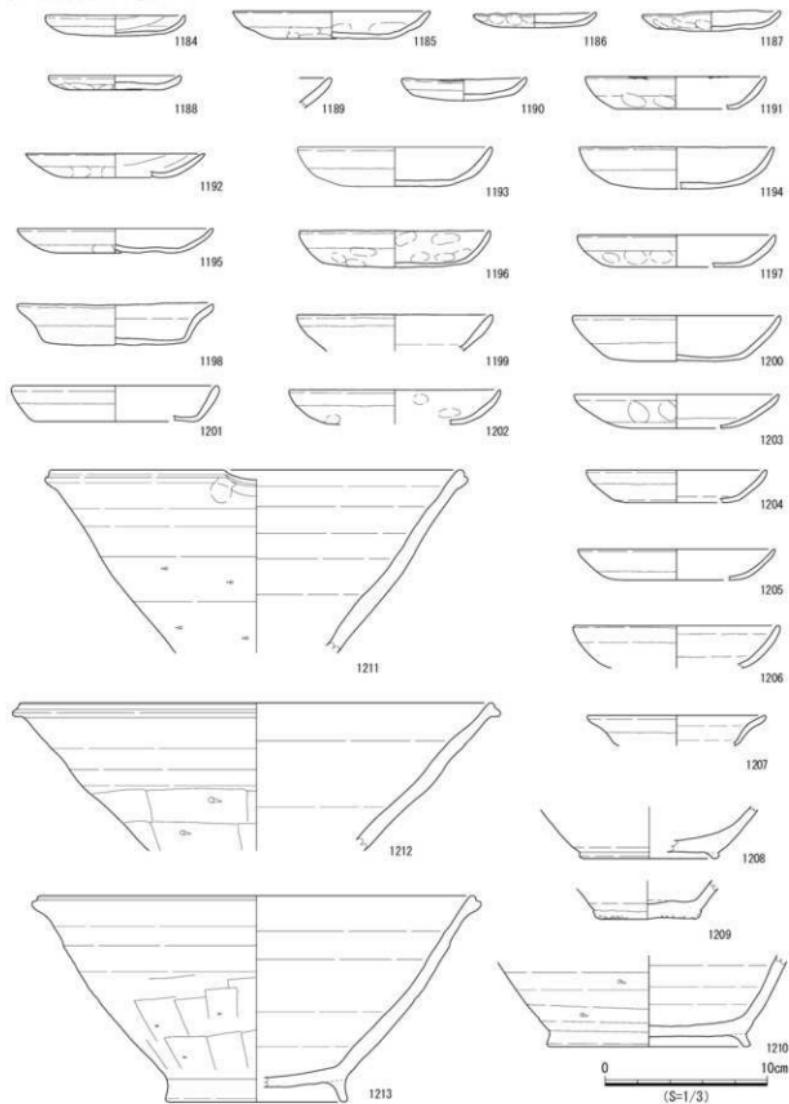


図192 SD234 出土遺物実測図（1）

## 炭化物分布範囲出土遺物（2）

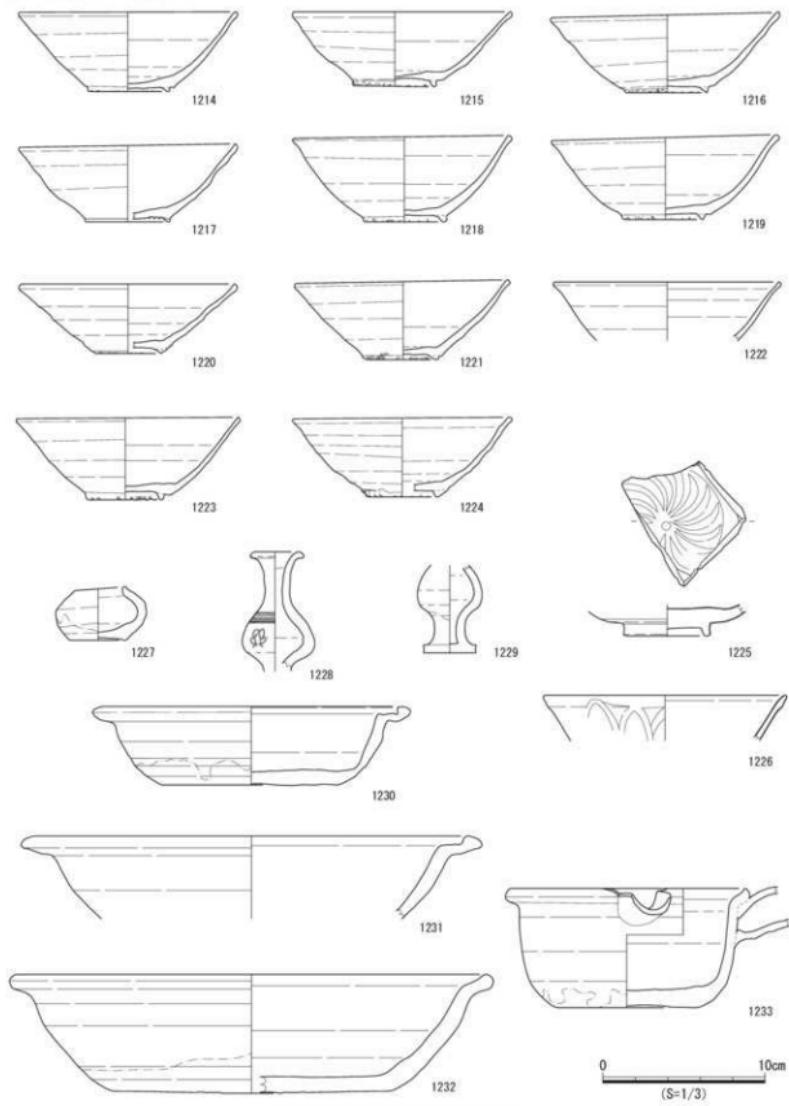


図 193 SD234 出土遺物実測図（2）

## 炭化物分布範囲出土遺物（3）

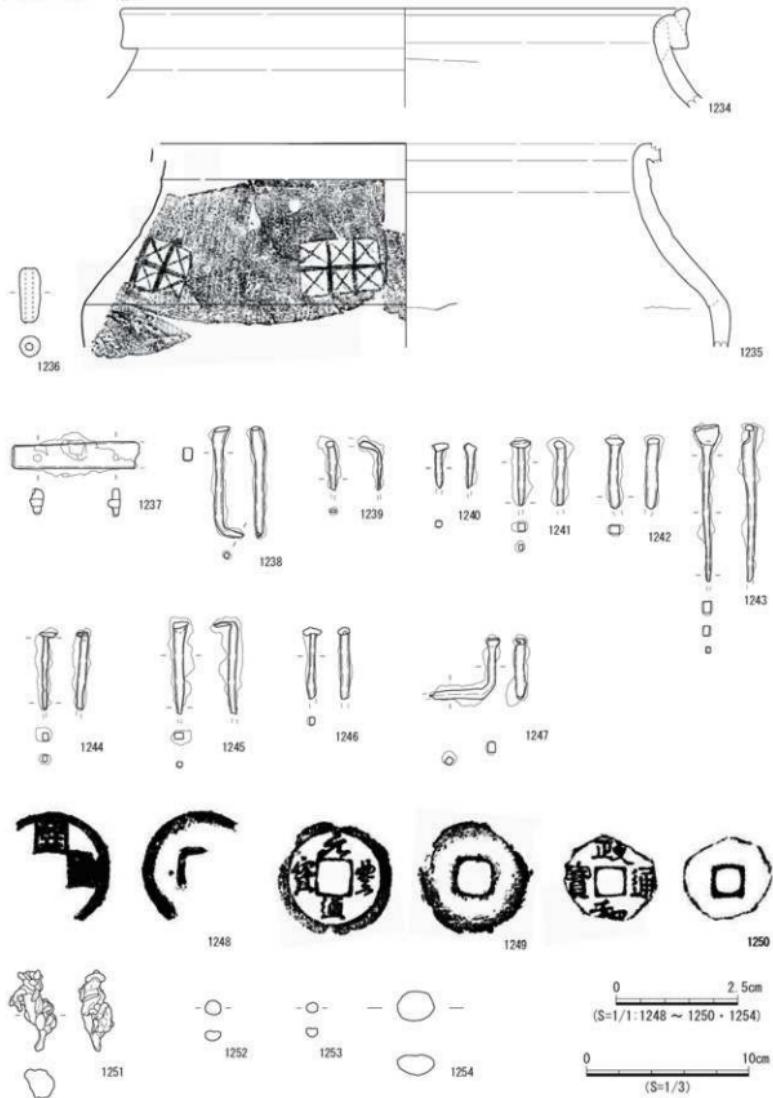


図 194 SD234 出土遺物実測図（3）

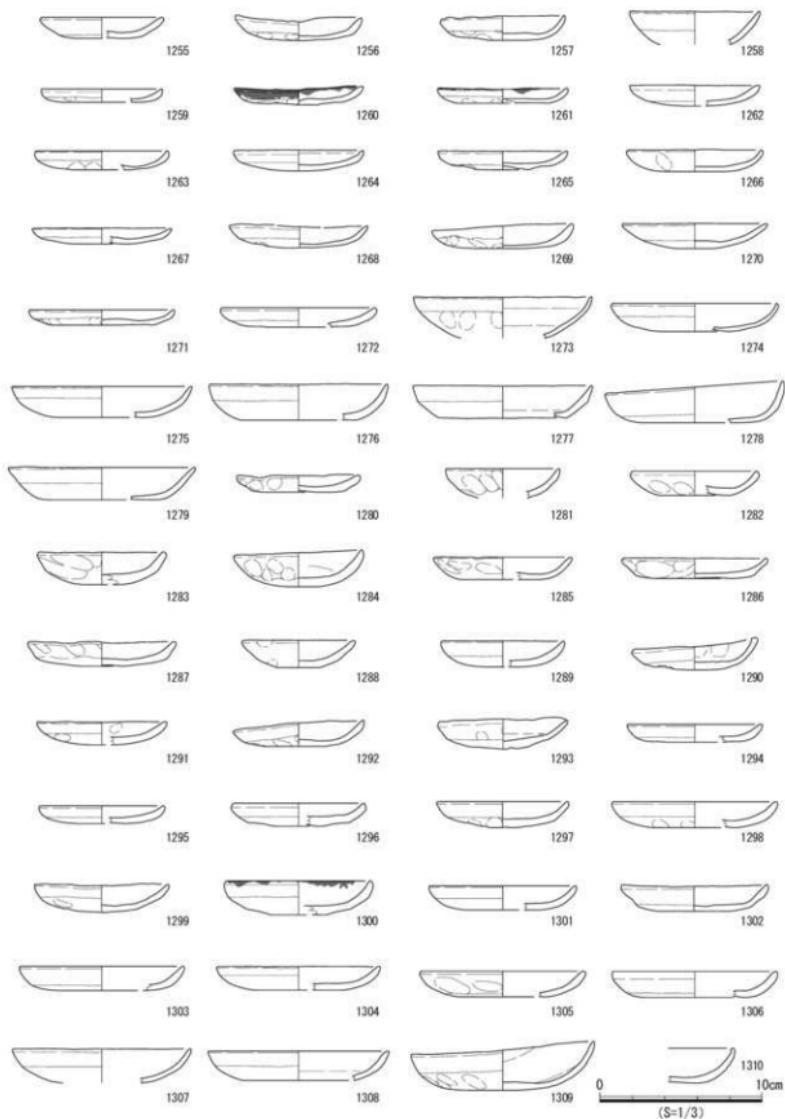


図 195 SD234 出土遺物実測図 (4)

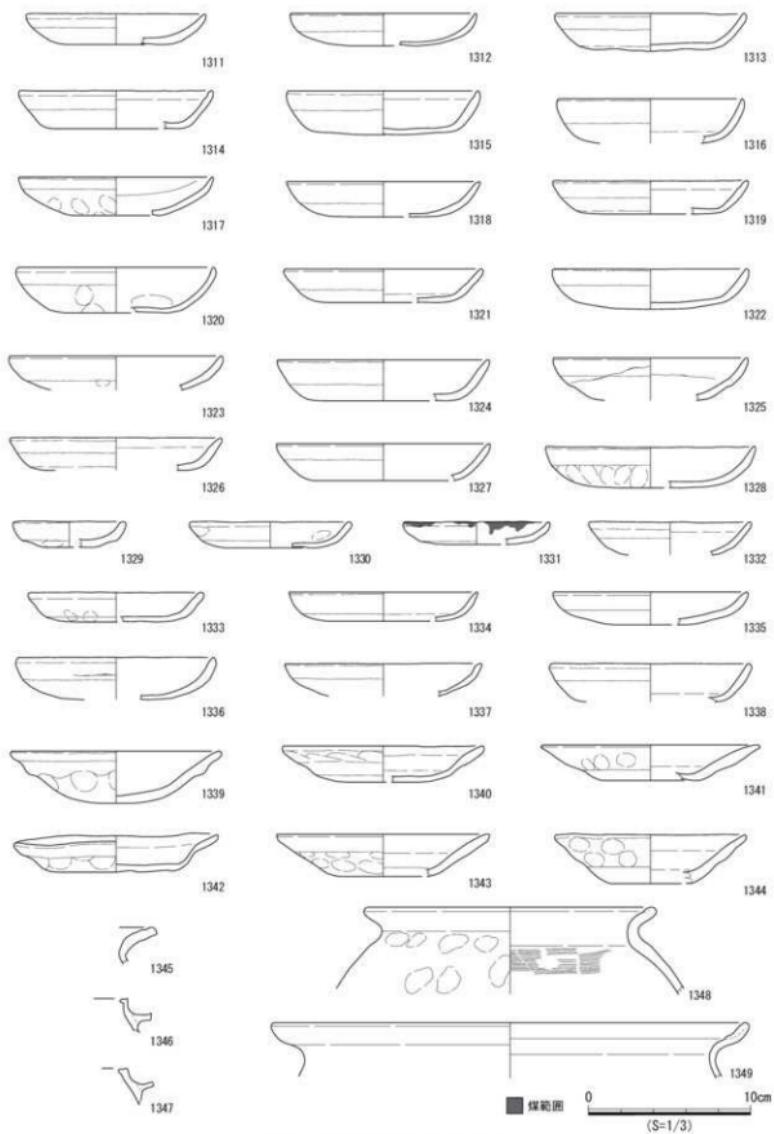


図196 SD234出土遺物実測図(5)

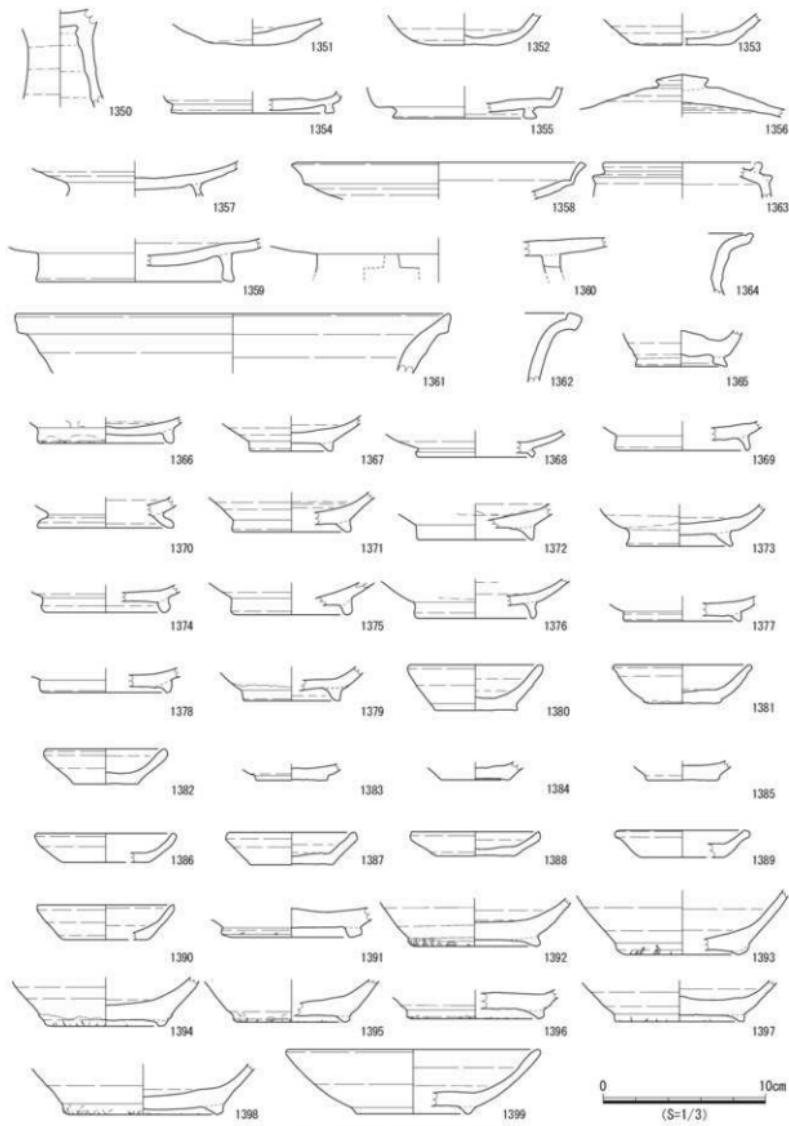


図 197 SD234 出土遺物実測図 (6)

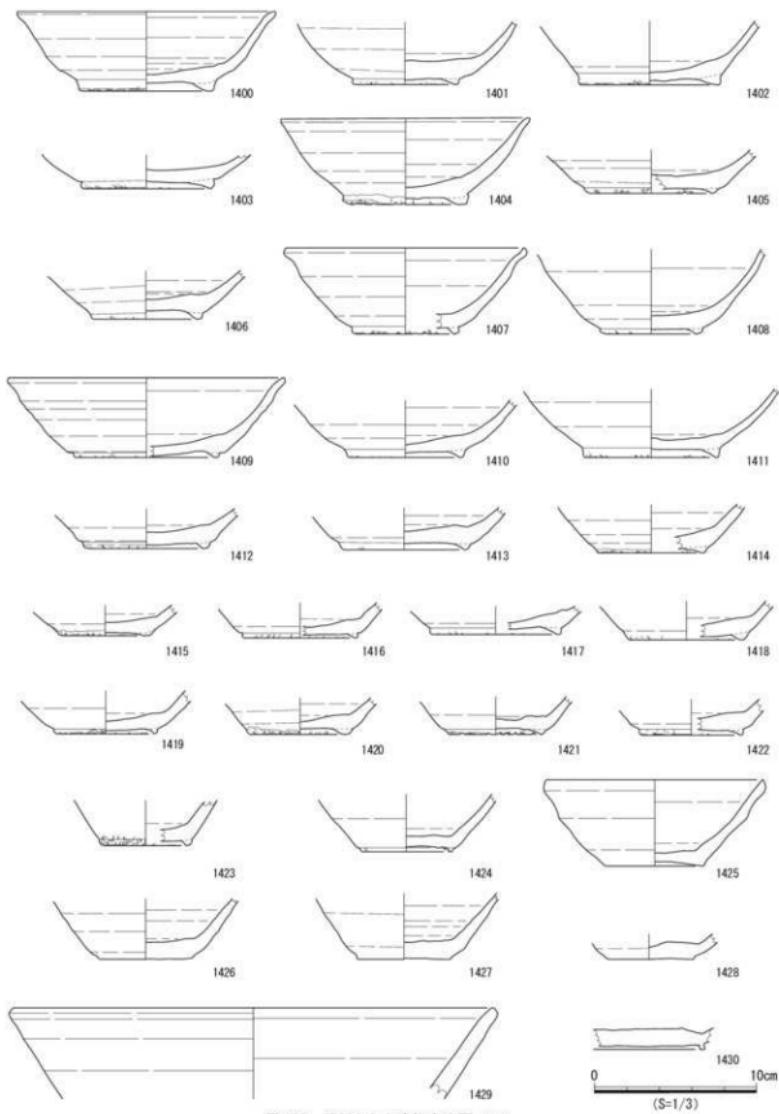


図 198 SD234 出土遺物実測図 (7)

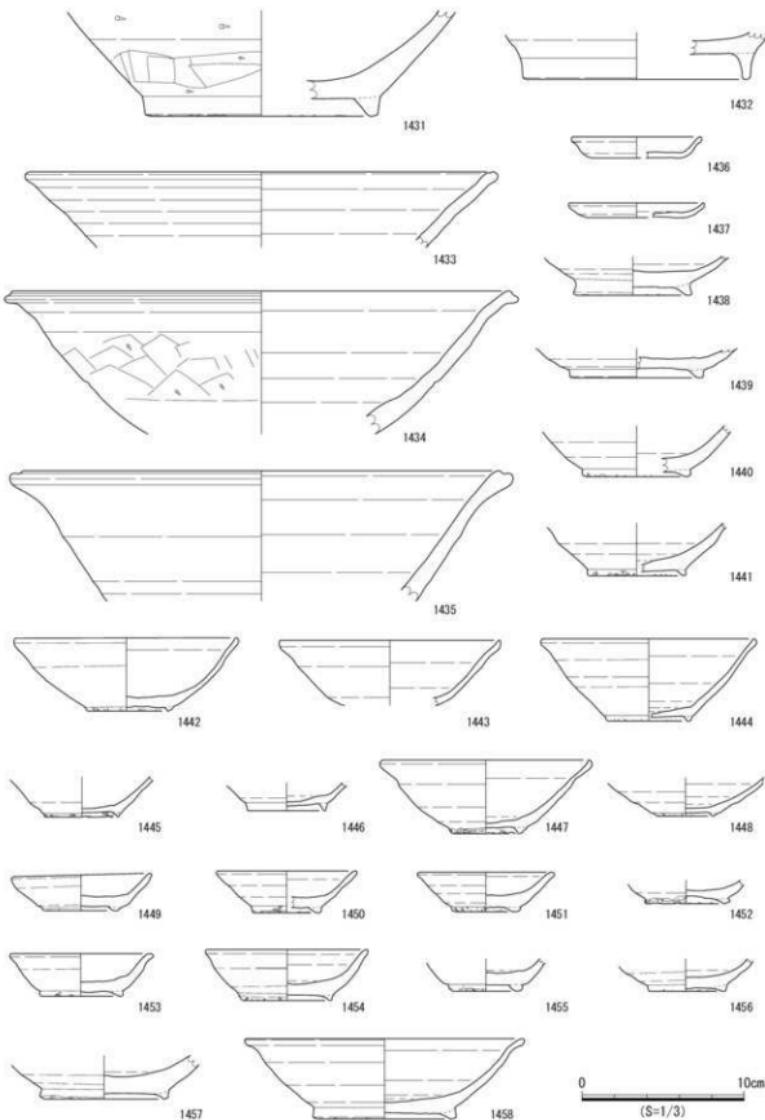


図 199 SD234 出土遺物実測図 (8)

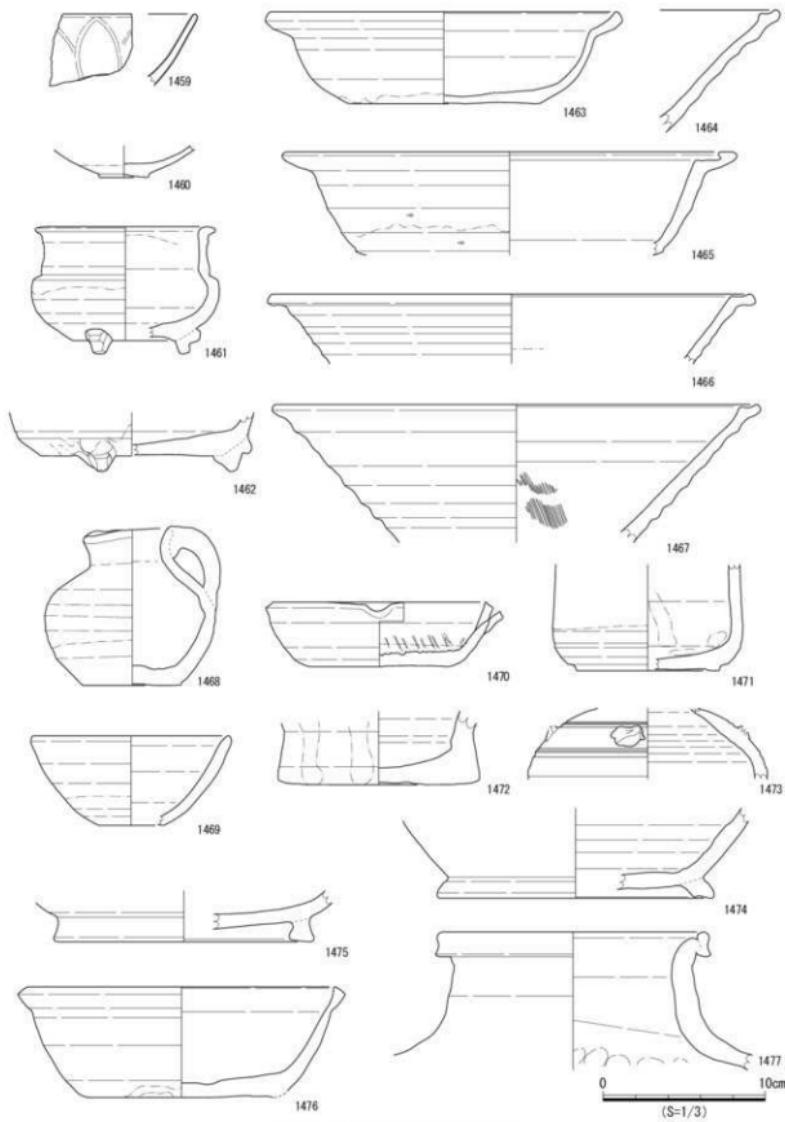


図200 SD234出土遺物実測図(9)

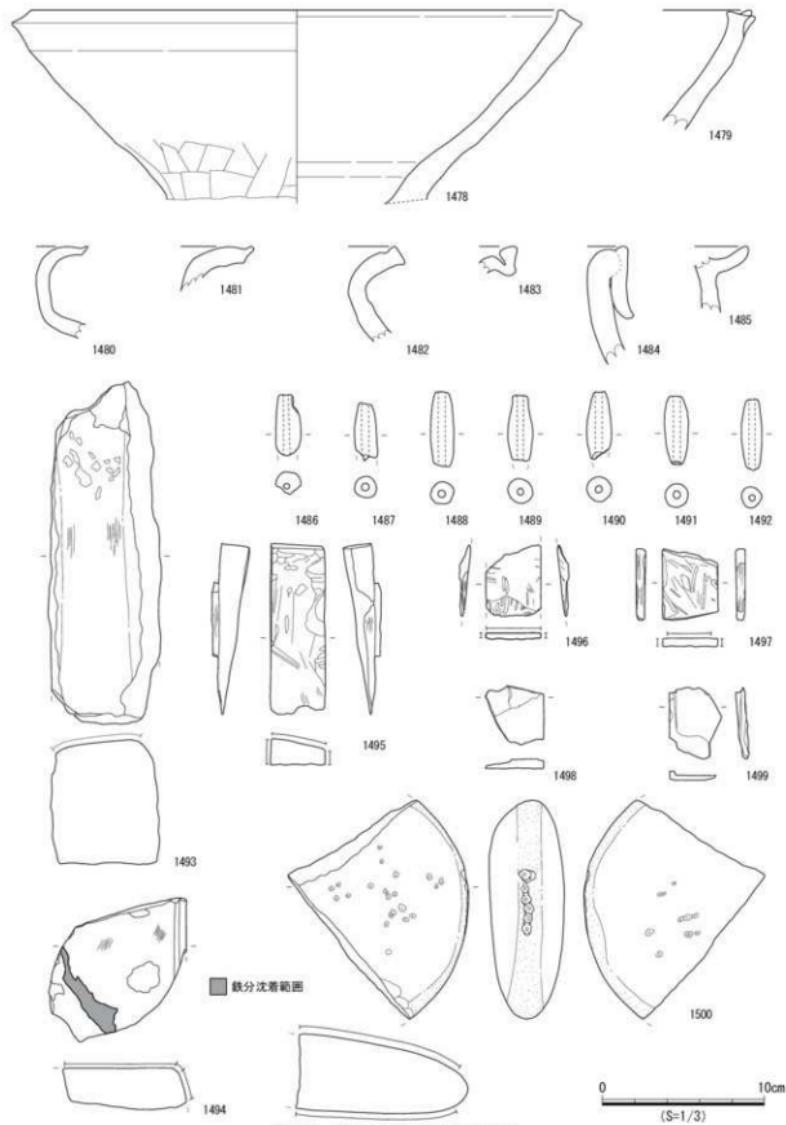


図 201 SD234 出土遺物実測図 (10)

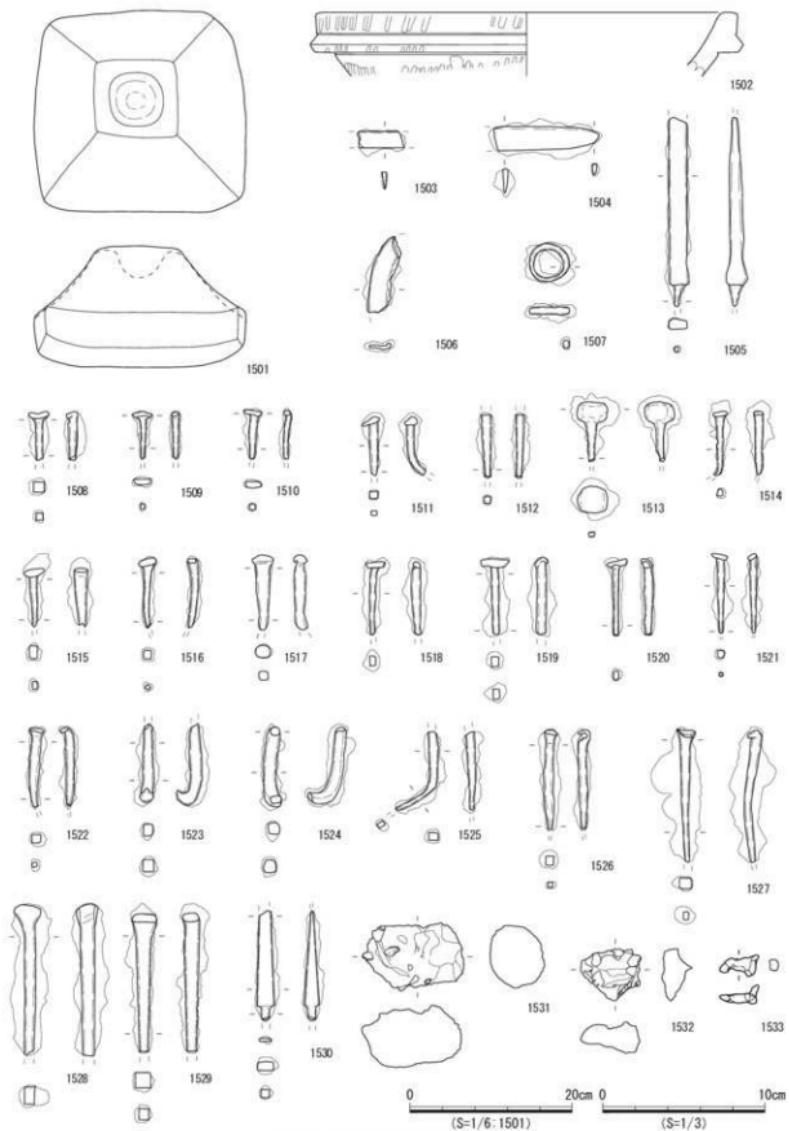


図 202 SD234 出土遺物実測図 (11)

**出土遺物** 須恵器2点を図示した。1534と1535は美濃須衛窯IV期第3小期に比定した盤である。

**時期** SD236との重複関係と図示した1534・1535から、本遺構は9世紀前葉と考えられる。

#### SD236（図203）

**検出状況** II15～IJ15 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は東側では明瞭で、西側では不明瞭であった。南側は発掘区外に延びる。東側でSD235、北側でSK1788・SD234と重複する。本遺構はSK1788、SD234より古く、SD235より新しい。

**規模・形状** 南北方向に延びる。北端はやや西に湾曲し、SD234との重複により消失する。A-A'断面、C-C'断面では壁面の傾斜は緩やかに開き、底面は平坦である。B-B'断面では壁面の傾斜は東側では急で、西側では緩やかに開く。底面は中央付近で大きく窪む。SD234と並列するが、周囲に建物などは確認できない。

**埋土** 各断面で2層ないし3層に分層した。B-B'断面では中央が窪む。1層と2層に礫を多く含むことから、人為堆積と考えられる。A-A'断面の1層と2層はB-B'断面の2層と3層に対応し、C-C'断面の1層と2層はB-B'断面の1層と2層に対応する。いずれも水平に堆積し、礫が混じる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器45点、須恵器2点、灰釉陶器1点、山茶碗25点が散在して出土した。

**出土遺物** 灰釉陶器など4点を図示した。1536は尾張型第3型式併行の東濃型山茶碗である。1537～1539は第6型式の尾張型山茶碗で、1537は小皿、1538と1539は碗である。

**時期** 図示した1537～1539から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SD238（図204）

**検出状況** IH13～IH14 グリッド、SD234 底面で検出した。平面形は明瞭であった。西端は発掘区外に延びる。東端は重複により消失する。西側でSD239、南側でSB7と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 東西方向に延び、やや幅広である。長軸約3m、短軸約2.5mほどであるが、底面の形状から東西方向に延びることが想定できる。SD234と直交する構である。周囲の遺構との関係は不明である。壁面の傾斜は北ではやや急で、南側では緩やかに開く。底面はほぼ平坦である。

**埋土** 6層に分層した。1層と2層はともに中央がやや窪み、大部分に堆積する。1層と2層にプロック土を多く含む。2層に炭化物や焼土粒を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器129点、須恵器11点、灰釉陶器7点、山茶碗86点、陶器5点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など14点を図示した。1540～1542はM3類の土師器皿である。1543は美濃須衛窯IV期第2小期～V期第1小期に比定した須恵器の短頸壺である。1544は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗で、内面見込に交差する6条の線刻が施される。何らかの文様の一部と考えられる。1545～1553は尾張型山茶碗である。1545と1546は第5型式、1547と1548は第6型式、1549は第7型式の小皿である。1550は第5型式、1551と1552は第6型式の碗である。1553は第7型式の片口鉢である。

**時期** SB7・SD234との重複関係と図示した1549と1553から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

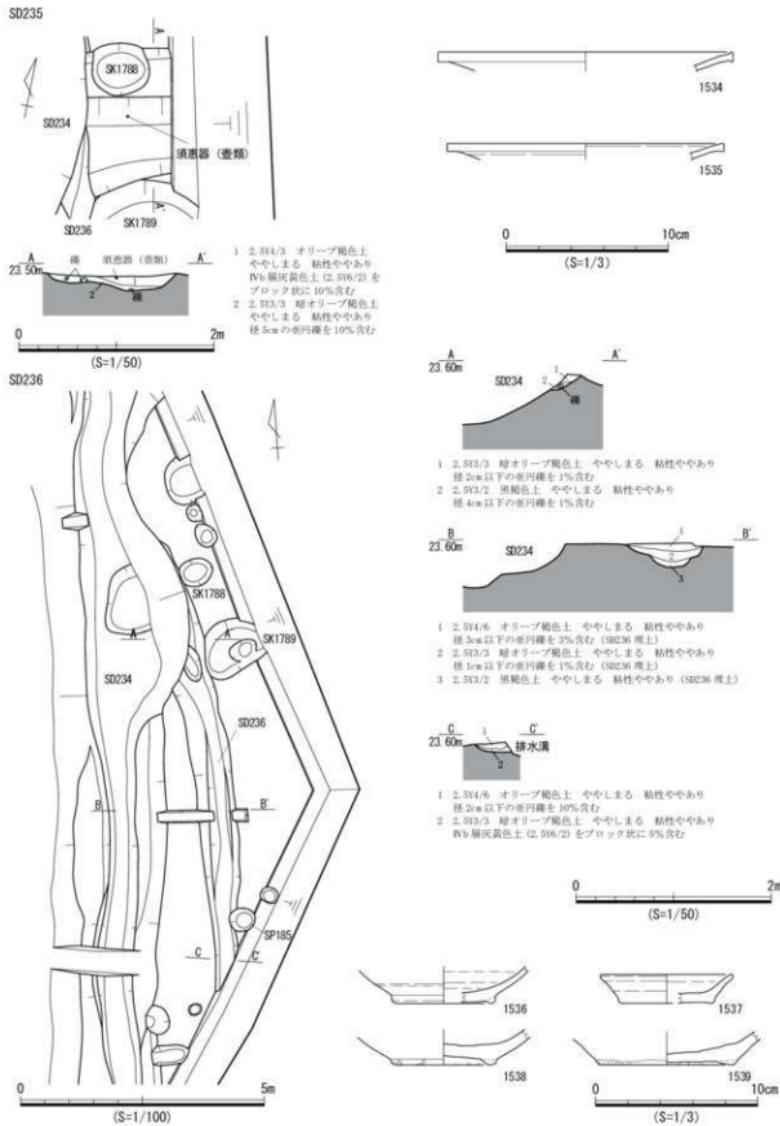


図203 SD235・SD236 遺構図・出土遺物実測図

## SD239 (図205)

**検出状況** II13～IJ13 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北端は発掘区外に延びる。南端は搅乱により消失する。北側で SD234・SD238、西側で SB7、南側で SD247、東側で SD240 と重複する。本遺構は SB7・SD234 より古く、SD238・SD240・SD247 より新しい。

**規模・形状** 南北方向に直線的に延び、南端でわずかに西に湾曲する。壁面の傾斜はやや開き、底面はやや丸い。周囲の遺構との関わりは不明である。

**埋土** 3層に分層した。いずれも中央が堆む堆積であるが、2層と3層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 56点、須恵器 1点、灰釉陶器 1点、山茶碗 37点、金属製品 2点(釘、種別不明)が散在して出土したが、いずれも小片であった。

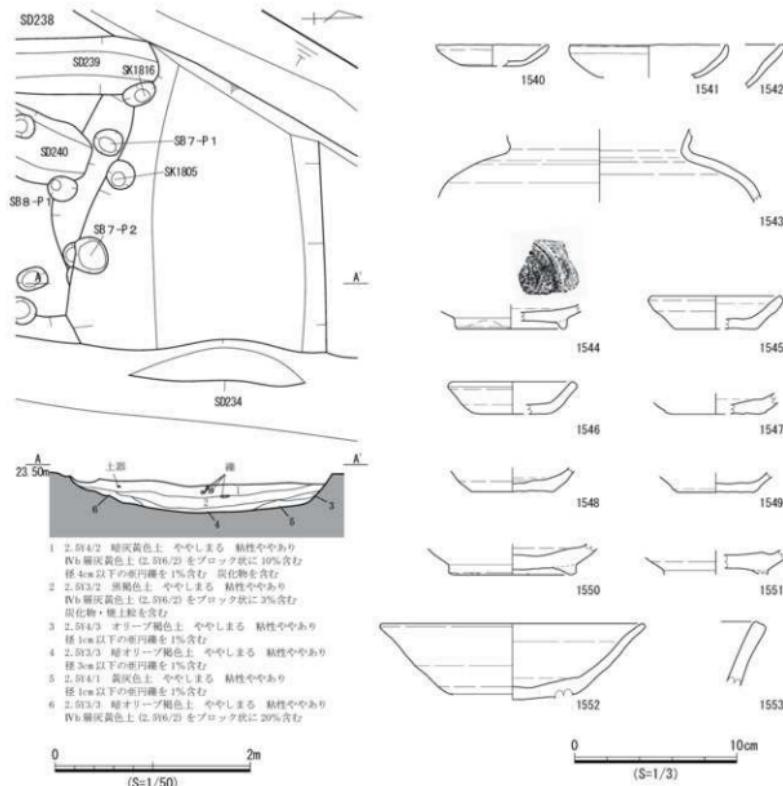


図204 SD238 遺構図・出土遺物実測図

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SB 7・SD238との重複関係と大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭と考えられる。

#### SD240（図205）

**検出状況** II13～IJ13グリッド、IV b層上面で検出した。SD239と大きく重複する遺構であるが、平面形は明瞭であった。北側でSB 7・SB 8・SD234、西側でSD239と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

**規模・形状** 南北方向に直線状に延びる。長軸はやや東側に傾く。北側は中ほどで少し東側に膨らみ、南端は収束する。壁面の傾斜はやや開き、底面は平坦である。

**埋土** 2層に分層した。1層は中央がやや窪む。1層と2層にブロック土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器27点、山茶碗4点、古瀬戸1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SD239との重複関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

#### SD242・SD243（図206）

**検出状況** SD242はIH14～IK14グリッド、SD234埋土中（図185）、SD243はIJ11～IK13グリッド、IV b層上面で検出した。SD242の平面形はIJ14～IK14グリッドでは明瞭、IH14～II14グリッドでは不明瞭、SD243の平面形は明瞭であった。SD243は北側でSB 9、南側でSI 2・SB 9・SB10、中央でSB11と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。SD243とSD242は、接続部に0.1mほどの段差があるが、上端が接続するため一連の遺構として報告する。

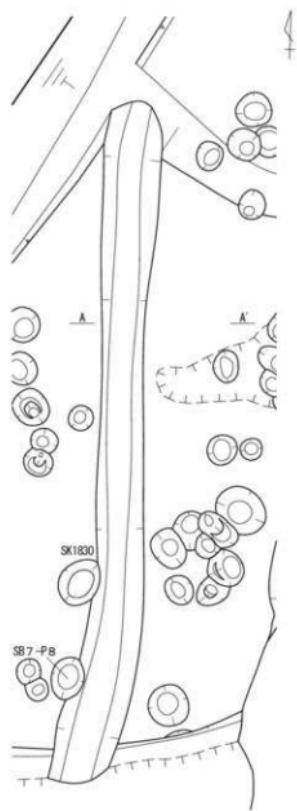
**規模・形状** SD243は東西方向に延び、SD242と接続する。SD242は接続部から0.4mほど東の部分から、ほぼ直角に北に屈曲し、やや湾曲しながら延びる。北端はほぼ直角に西に屈曲し収束する。SD243の壁面の傾斜は緩やかに開き、底面西側の南にテラス状の平坦面をもつ。SD242の壁面の傾斜は緩やかに開き。底面はやや平坦で、緩やかな丸みを帯びる。3m～4.5mの間隔をあけ、SD243はSB 7の南辺と平行し、SD242はSB 7の東辺と平行する。SD242とSD243はSB 7を囲むことから、SB 7を区画する構であると考えられる。SD242北端の収束部はSB 7の入口部分と考えられる。

**埋土** SD242は単層の埋土である。SD243はA-A'断面で3層、B-B'断面で5層に分層した。A-A'断面の1層はテラス状平坦面の延長上に堆積する。2層は中央が窪む。B-B'断面は、北側から2層・5層、南側から3層・4層が中央に向かって流れ込むように堆積する。SD242の1層、SD243の3層～5層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

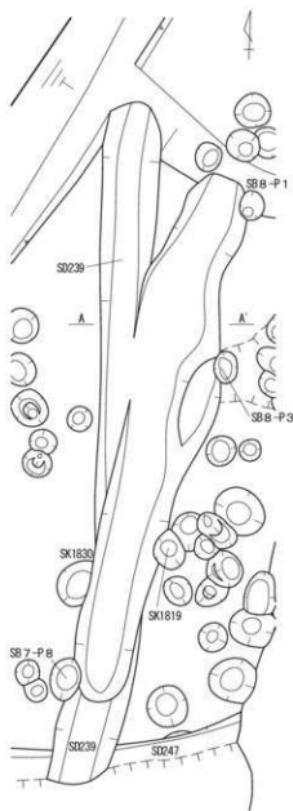
**遺物出土状況** SD242の埋土中から土師器239点、須恵器4点、灰釉陶器1点、山茶碗76点、陶器6点、金属製品5点（板状鉄製品1点・釘3点・種別不明1点）、SD243の埋土中から土師器375点、須恵器28点、灰釉陶器15点、山茶碗104点、陶磁器19点、土製品1点、釘2点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など9点を図示した。1554と1556はM3類の土師器皿である。1557と1558は須恵器で、1557は环身C類、1558は把手付甕である。いずれも美濃須衛窯IV期第3小期に比定した。

SD239



SD240



1. 2.513/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 黏性ややあり  
径2cm以下の亜円礫を1%含む
2. 2.514/1 黄褐色土 ややしまる 黏性ややあり  
IVb層底黄色土 (2.516/2) をブロック状に10%含む
3. 2.513/2 黒褐色土 ややしまる 黏性ややあり  
IVb層底黄色土 (2.516/2) をブロック状に30%含む



1. 2.513/2 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり  
径3cm以下の亜円礫を1%含む  
Pb層底黄色土 (2.516/2) をブロック状に10%含む
2. 2.513/1 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり  
径3cm以下の亜円礫を1%含む  
Pb層底黄色土 (2.516/2) をブロック状に30%含む



図 205 SD239・SD240 遺構図

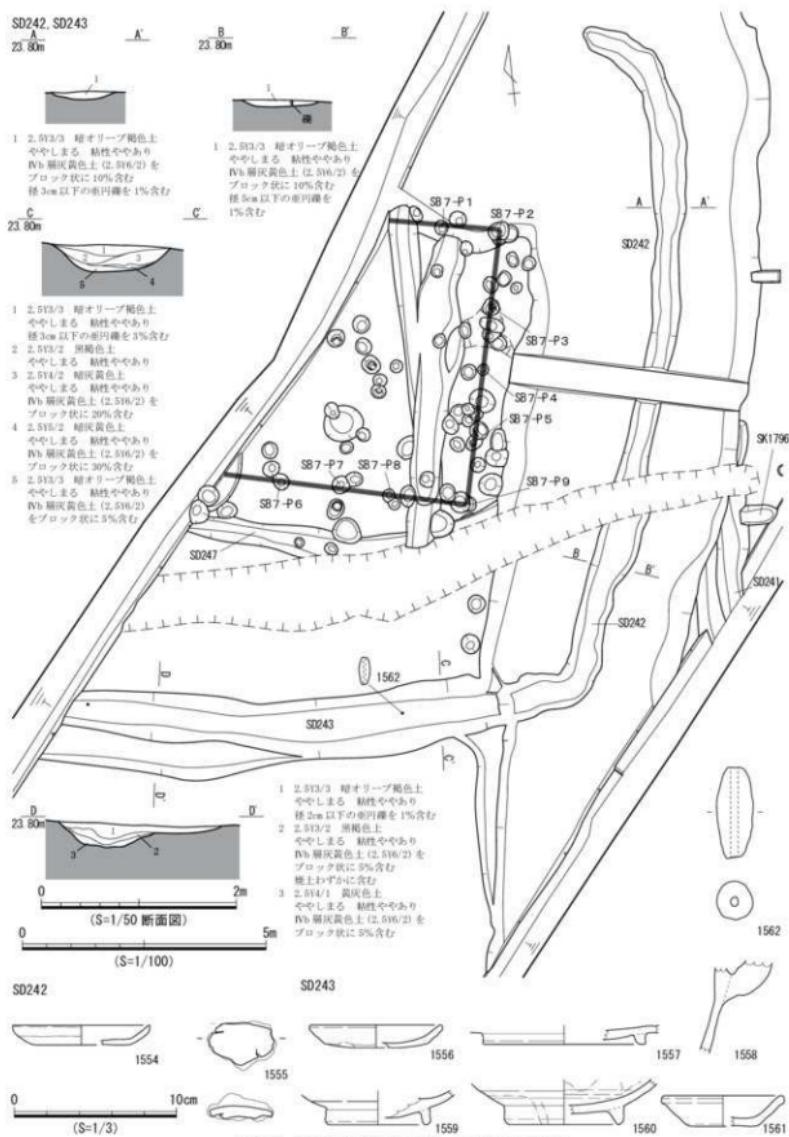


図206 SD242・SD243 遺構図・出土遺物実測図

1559と1560は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。1561は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。1562は土錘である。1555は板状鉄製品である。

**時期** SD234との重複関係とSB7との位置関係から、本遺構は14世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

#### SD247（図207・208）

**検出状況** IJ12～IJ13グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側は発掘区外に延びる。東側は重複により消失する。北側でSD239、東側でSD234と重複する。本遺構はSD234・SD239より古い。

**規模・形状** 東西方向に延びる。東に向かうにつれて、北に緩やかに湾曲する。北側のSB7・SB8のすぐ南側に延びる。北側のSB7・SB8の南辺と1mほどの間隔をあけ、ほぼ平行に並ぶ。

**埋土** 3層に分層した。1層と2層は水平に堆積する。3層は南側の壁面下から底面にかけて薄く堆積し、崩落土と考えられる。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 遺構の中央から西側の埋土中層から下層で、山茶碗など多数の土器が出土した。また、東側の埋土中層から下層でも残りの良い土師器や山茶碗が出土した。これらの土器類に意図的な配置は見られず、廃棄されたものと考えられる。これらの土器を含め埋土中から土師器231点、須恵器8点、灰釉陶器7点、山茶碗223点、陶磁器7点、金属製品11点（釘8点、種別不明3点）、砥石1点が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など28点を図示した。1563～1565はM3類の土師器皿である。1566は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の段皿である。1567～1589は尾張型山茶碗である。1567～1570は第5型式、1571～1573は第6型式、1574～1577は第7型式の小皿、1578～1581は第5型式、1582～1587は第6型式、1588と1589は第7型式の碗である。1590は砥石である。

**時期** SD234・SD239との重複関係と図示した1574～1577・1588・1589から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

#### SD248（図210）

**検出状況** IL11グリッド、SK1978底面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSK1977と重複する。本遺構はSK1977・SK1978より古い。

**規模・形状** 東西方向に延びる。東側では底面の幅は0.15mほどであるが、中央で0.35mほどになり、北に緩やかに湾曲しながら西に延びる。西端は重複により消失する。東端はSK1977の手前で収束する。

**埋土** 2層に分層した。1層と2層の層界は中央が窪む。2層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 西側の底面付近（2層）から釘（1599）が出土した。その他に埋土中から土師器51点、山茶碗7点が散在して出土した。

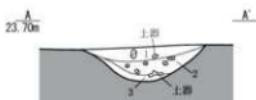
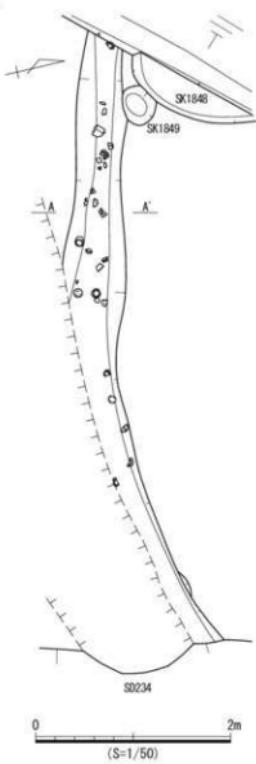
**出土遺物** 土師器など2点を図示した。1598はD類の伊勢型鍋である。1599は釘か盤である。

**時期** SK1977との重複関係と図示した1598から、本遺構は13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

#### SD249（図209）

**検出状況** IL10～IL13グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側と西側は発掘区外に延びる。北側でSK1977、南側でSK1954・SK1976・SD250・SD251、中央でSK1941・SK1959・SK1978

SD247



1. 2. 3/a/3 緩オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 粒3mm以下の微円礫を2%含む  
IVb層底黄色土 (2. 3/b/6.2) をブロック状に5cm含む  
地土を1%含む
2. 2. 3/a/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
粒3mm以下の微円礫を20%含む 粗砂を多く含む  
地土を1%含む
3. 2. 3/a/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
IVb層底黄色土 (2. 3/b/6.2) をブロック状に30%含む

遺物出土状況図

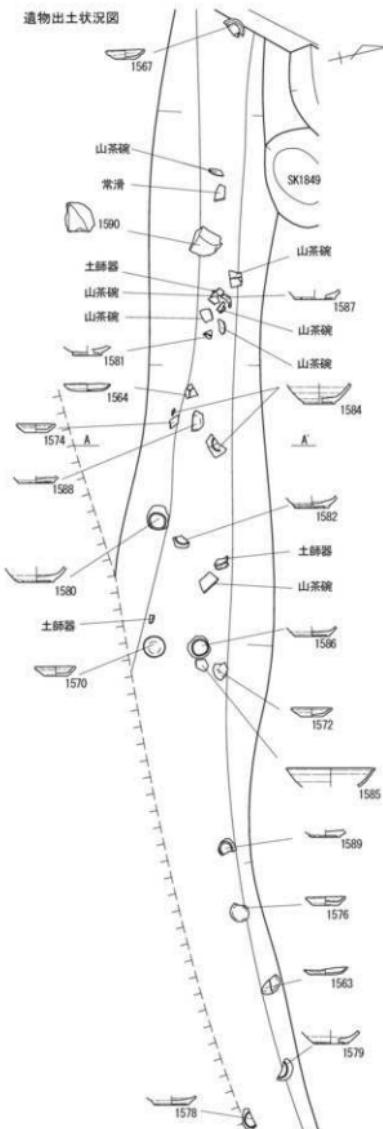


図 207 SD247 遺構図

と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

**規模・形状** 東西方向に延びるが、IL12 グリッドでクランク状に曲がる。壁面の傾斜は北側では急で、南面では緩やかに開く。底面は概ね平坦である。SB9・SB10 と SB11～SB15 の建物群との間を走り、溝状遺構（SD234・SD250）とも直交する。

**埋土** A-A' 断面は3層に分層した。3層は北側壁面から底面にかけて斜めに堆積する崩落土と考えられる。2層は黄灰色土の層で、南壁面から3層の上部にかけて堆積する。B-B' 断面は2層に分層した。各断面の1層と2層はそれぞれ対応する。

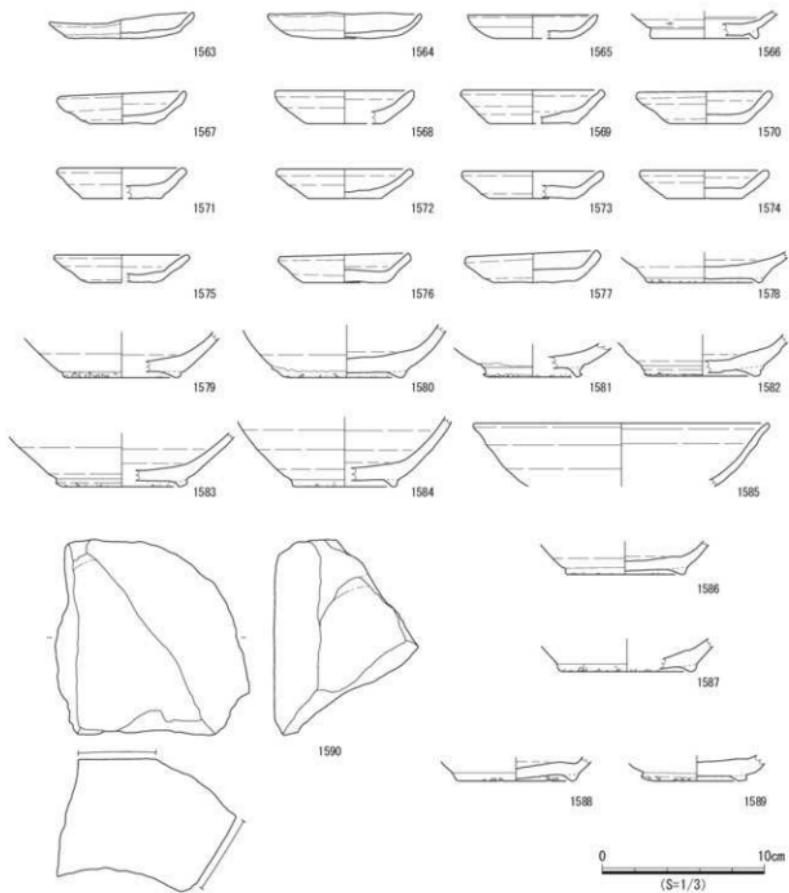


図 208 SD247 出土遺物実測図

**遺物出土状況** クランク部の底面付近から茶釜(1591)が出土した。その他に埋土中から土師器 115 点、須恵器 10 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 45 点、陶磁器 9 点、金属製品 4 点（釘 3 点・鉄鏃 1 点）が散在して出土した。

**出土遺物** 土師器など 7 点を図示した。1591 は A a 1 類の茶釜である（北村 1996c）。1592 と 1593 は内耳鍋で、1592 は A 3 類である（北村 1996c）。1594 は D 類の伊勢型鍋である。1595 は第 6 型式の尾張型山茶碗である。1596 は古瀬戸後 III 期～後 IV 期古段階の瓶子 III 類で、内外面に鉄釉が施される。1597 は釘である。

**時期** SK1978 との重複関係から、本遺構は 16 世紀と考えられる。

#### SD250（図 210）

**検出状況** IL12～IM12 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側は発掘区外に延びる。北側で SD249・SK1959、西側で SK2022 と重複する。SK2022 との重複関係から平行する SD251 との新旧関係が確認できる。本遺構は SD249 より古く、SK1959・SK2022・SD251 より新しい。

**規模・形状** 南北方向に直線的に延びる。壁面の傾斜は緩やかに開き、底面は概ね平坦である。北端は SD249 と接し収束する。SB14・SB15 を挟んで西側にある SD254 と長軸方位が同じであることから、間にある SB14・SB15 等を区画する溝と考えられる。

**埋土** 2 層に分層した。1 層と 2 層は中央が壅み、水平に堆積する。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 51 点、須恵器 1 点、山茶碗 11 点、陶磁器 2 点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗など 2 点を図示した。1600 は大洞東 1 号窯式に比定した東濃型山茶碗である。1601 は 5 型式の常滑産の甕である。

**時期** SK1959・SD249 との重複関係と図示した 1600 から、本遺構は 14 世紀後葉から 15 世紀初頭と考えられる。

#### SD251（図 210）

**検出状況** IL12～IM12 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側は発掘区外に延びる。南側で SK2024、北側で SK2022 と重複する。SK2022 との重複関係から平行する SD250 との新旧関係も確認できる。本遺構は SD250 より古く、SK2024 より新しい。

**規模・形状** 南北方向に延びる。北に向かうにつれて緩やかに東に傾く。壁面の傾斜はやや急で、底面は概ね平坦である。SD253 との位置関係は SB14・SB15 を挟んで平行になることから、SB14・SB15 等を区画する溝と考えられる。遺構の北側が敷地への進入路であった可能性がある。

**埋土** 2 層に分層した。1 层と 2 層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 19 点、須恵器 1 点、山茶碗 4 点、陶器 5 点が散在して出土した。

**出土遺物** 陶器 1 点を図示した。1602 は大窯第 3 段階の擂鉢で、上層から出土したことから混入品と考えられる。

**時期** SD250・SK2024 との重複関係、SB14・SB15 との位置関係から、本遺構は 14 世紀初頭から 15 世紀初頭と考えられる。

#### SD252（図 210）

**検出状況** IL12～IM12 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側で SK2024 と重複する。本遺構は SK2024 より古い。

SD249

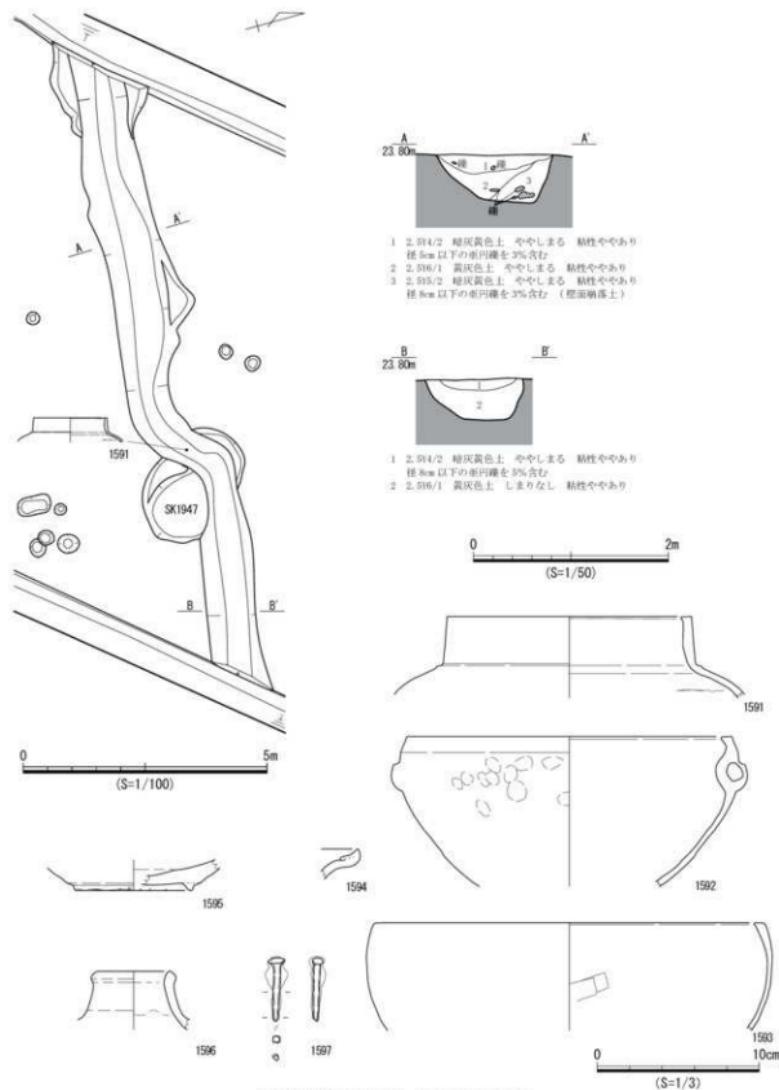


図209 SD249 造構図・出土遺物実測図

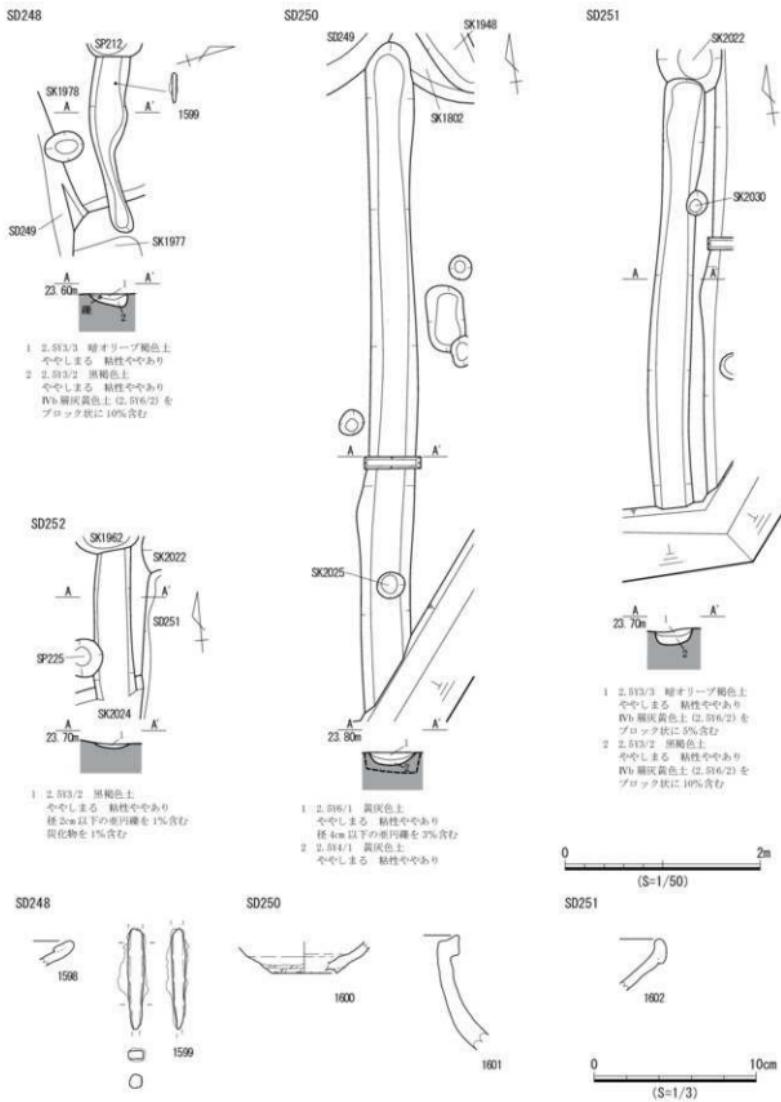


図210 SD248・SD250～SD252 遺構図・出土遺物実測図

**規模・形状** 全長3m、幅0.7mの南北方向に延びる溝状遺構である。南側がわずかに東に湾曲する。壁面は緩やかに開き、底面はやや丸みを帯びる。SD250・SD251と概ね並行し、SB14・SB15を挟んで西側にあるSD255とも並行することから、西側のSB14・SB15等を区画する溝と考えられる。

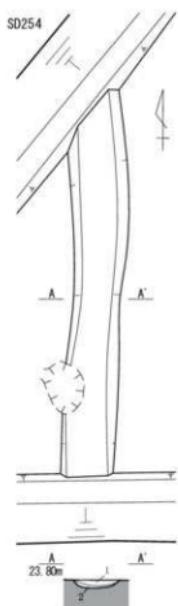
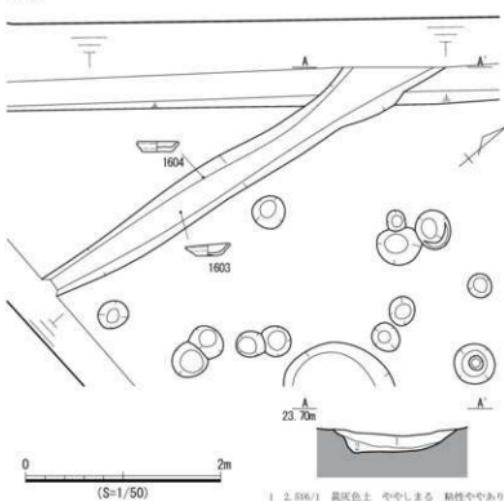
**埋土** 単層の埋土である。わずかに炭化物や礫を含むことから、人為堆積であると考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器3点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

**出土遺物** 小片のため図示できる遺物はなかった。

**時期** SK2024との重複関係とSB14・SB15との位置関係から、本遺構は13世紀末から15世紀初頭と考えられる。

SD253



SD253



SD254

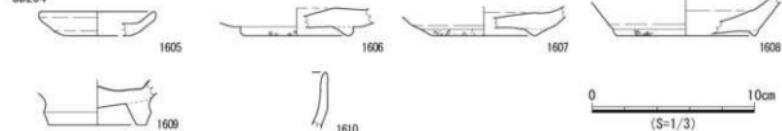


図211 SD253・SD254 遺構図・出土遺物実測図

**SD253（図211）**

**検出状況** IM9～IM10 グリッド、SK2137 底面で南北方向に延びる白い帯状の埋土を検出した。平面形は明瞭であった。南北端は発掘区外に延びる。北側で SK2171、西側で SD255・SK2170、東側で SK2166 と重複する。本遺構は SK2171 より古く、SD255・SK2166・SK2170 より新しい。

**規模・形状** 南北方向に延びる。壁面の傾斜は西側では急で、東側では緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。SB14・SB15 を挟んで東にある SD251 と並行する。

**埋土** 2層に分層した。2層は底面付近に西側で厚く、東側で薄く堆積する。1層は中央が窪む。

**遺物出土状況** 中央底面付近から完形の山茶碗の小皿2点(1603・1604)が出土した。1605 は正位で、1606 は 1605 から 0.4mほど離れて逆位で出土した。地鎮若しくは溝廃絶時の祭祀の際に埋納されたものと考えられる。

**出土遺物** 山茶碗2点を図示した。1603 は第6型式、1604 は第7型式の尾張型山茶碗の小皿である。

**時期** SK2166・SK2170・SK2171 との重複関係と図示した 1604 から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

**SD254（図211）**

**検出状況** IL10～IM10 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南北端は発掘区外に延びる。SK2137 を掘り込む。本遺構は SK2137 より新しい。

**規模・形状** ほぼ南北方向に延びる浅い溝状遺構である。壁面の傾斜はやや開き、底面は概ね平坦である。

**埋土** 2層に分層した。2層は底面付近に薄く堆積する。1層はレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器 108 点、須恵器 1 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 49 点、陶磁器 8 点が散在して出土した。

**出土遺物** 山茶碗など6点を図示した。1605～1608 は尾張型山茶碗である。1605 は第7型式の小皿、1606～1608 は第6型式の碗である。1609 は白磁の壺である。1610 は古瀬戸後IV期の天目茶碗である。

**時期** SK2137 との重複関係と図示した 1610 から、本遺構は15世紀中葉から後葉と考えられる。

**SD255（図212・213）**

**検出状況** IM9 グリッド、SK2137 底面で検出した。平面形は明瞭であった。南北端は発掘区外に延びる。東側で SK2166・SD253 と重複する。本遺構は SK2166・SD253 より古い。

**規模・形状** ほぼ南北方向に直線的に延びる。壁面の傾斜は東側ではやや緩やかに開き、西側ではやや急に立ち上がる。底面は概ね平坦である。

**埋土** 2層に分層した。1層と2層の層界は中央が窪む水平堆積で、2層は東壁面では検出面まで厚く堆積する。1層に大量の礫とブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 1層で大量の礫を確認し、礫とともに土師器皿、山茶碗、古瀬戸、砥石などがまとまって出土した。配置された様子が見られないことから廃棄されたものと考えられる。これらを含め埋土中から土師器 86 点、須恵器 2 点、山茶碗 24 点、陶器 14 点、砥石 2 点が出土した。

**出土遺物** 土師器など8点を図示した。1611 は B 1 類、1612 は M 3 類の土師器皿である。1614～1616 は尾張型山茶碗で、1614 は第6型式、1615 と 1616 は第7型式の碗である。1613 は産地不明の山茶碗

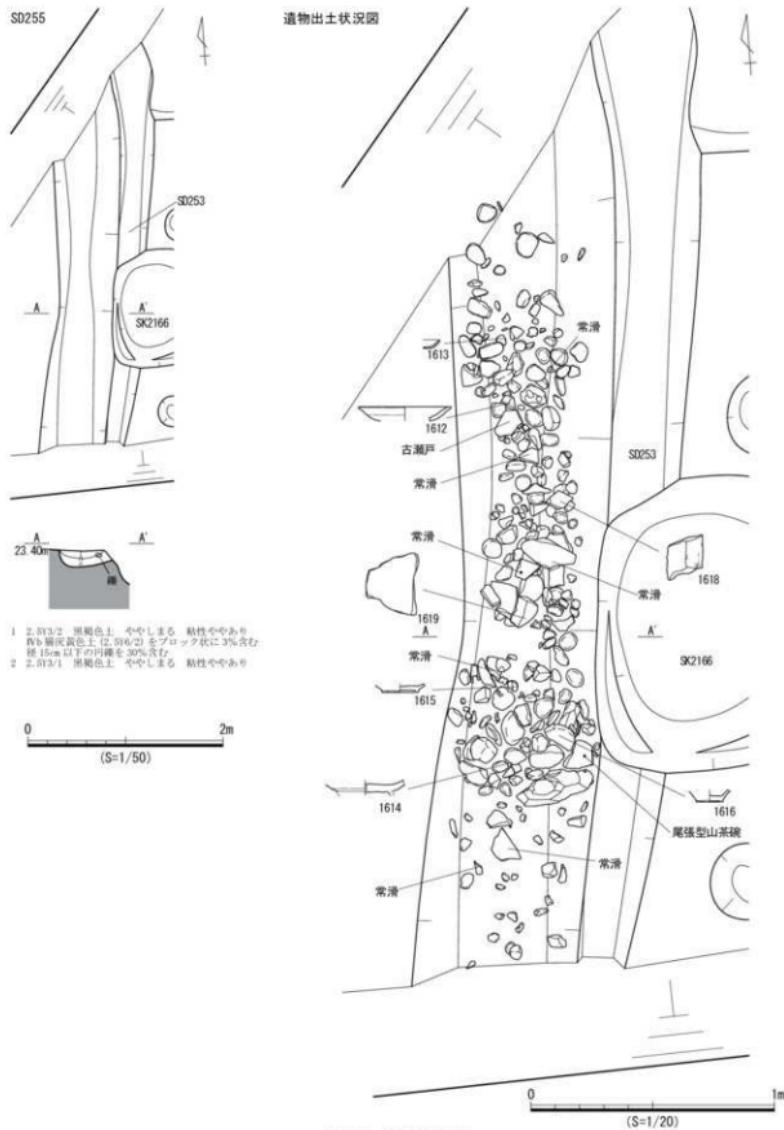


図 212 SD255 遺構図

の鉢である。1617と1618は砥石である。

**時期** SK2166・SD253との重複関係と図示した1615と1616から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

## 7 水田跡

### SN5～SN9・SM3～SM6（図214）

**検出状況** 13地点の北端で、発掘区の壁面を精査中に、SM3～SM6の4条の畦畔を検出した。これらの畦畔により区画されると考えられる範囲を水田 SN5～SN9とした。

**形状** 南北方向の畦畔に対して、東西方向の畦畔は幅がやや広い。SM3とSM5にはそれぞれ1箇所ずつ水口を確認した。また、SM4とSM6は南側で収束し、収束部分が水口と考えられる。SN5～SN9の全容は不明であるが、検出した範囲から小さな長方形の水田と考えられる。

**埋土** 水田区画には粘性のややある黒褐色土が堆積し、水田の耕作土と考えられる。畦畔は暗灰黄色土に灰黄色土ブロックが混じる盛土で構築される。

**遺物出土状況** SN5の埋土から須恵器の坏蓋(1619)と土鍤(1621)が出土し、SM6の上層から山茶碗(1620)が出土した。その他にSN5埋土中から土師器6点、須恵器6点、灰釉陶器2点、山茶碗26点、陶器5点、SN6埋土中から土師器39点、須恵器7点、灰釉陶器1点、山茶碗23点、陶器6点、土製品1点、SN5とSN6の中間付近の埋土中から土師器7点、須恵器1点、山茶碗3点、陶器2点、SM5・SM6埋土中から土師器31点、須恵器4点、山茶碗8点が散在して出土した。

**出土遺物** 須恵器など4点を図示した。1619は美濃須衛窯IV期第3小期に比定したC類の須恵器坏蓋である。1620は生田2号窯式に比定した東濃型山茶碗である。1621と1622は土鍤である。

**時期** 図示した1620から、この水田は15世紀後葉から末に作られたものと考えられる。

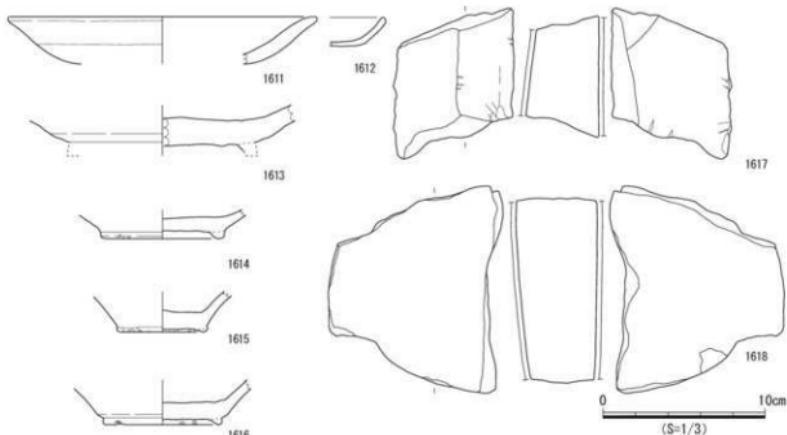


図213 SD255 出土遺物実測図

SN 5 ~ SN 9・SM 3 ~ SM 6

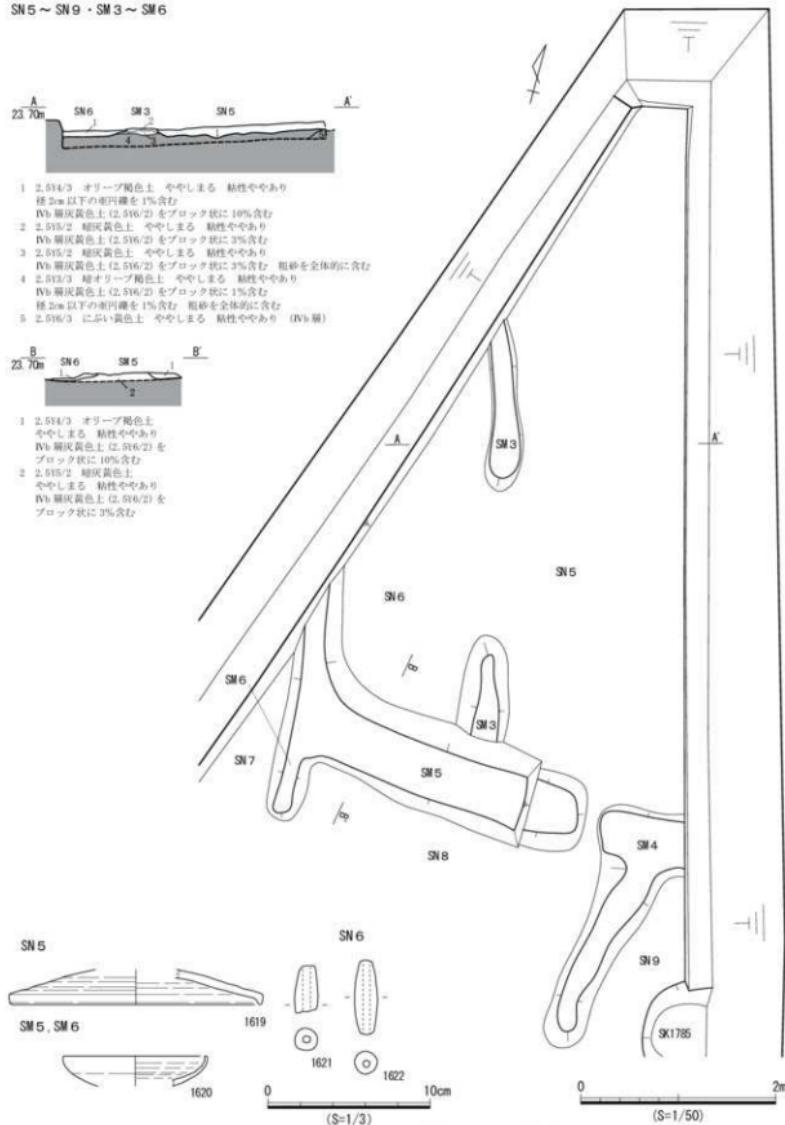


図 214 SN 5 ~ SN 9・SM 3 ~ SM 6 造構図・出土遺物実測図

## 8 その他の遺構出土遺物

出土遺物のうち 12 点を図示した。1626 は C 1 類、1623～1625 は M 3 類、1627～1629 は M 4 類の土師器皿である。1630 は大洞東 1 号窯式に比定した東濃型山茶碗である。1631～1634 は金属製品である。1631 は鎌または釘と考えられる。1632 は釘、1633 は鉄滓、1634 は鎌である。

## 9 Ⅲ層等出土遺物

出土遺物のうち 31 点を図示した。1640 は B 1 類、1637 と 1638 は C 1 類、1639 は M 2 類、1635 と 1636 は M 3 類の土師器皿である。1641 は C 類の S 字甕である。1644～1651 は尾張型山茶碗である。1644 と 1645 は第 5 型式、1646 は第 6 型式の小皿、1648 と 1649 は第 5 型式、1647 は第 6 型式の碗、1650 と 1651 は第 6 型式の片口鉢である。1643 は大烟大洞 4 号窯式に比定した東濃型山茶碗の小皿である。1652 は龍泉窯系 II a 類の青磁碗で、外面に弁の中心に鎌を持つ片彫蓮弁文を描く。1653～1657 は古瀬戸である。1653 は中Ⅰ期～中Ⅲ期の洗、1654 と 1655 は後Ⅳ期古段階である。1654 は直縁大皿、1655 は盤類である。1656 と 1657 は後Ⅳ期新段階である。1656 は鉗目付大皿、1657 は播鉢である。1658 と 1659 は常滑産の甕で、1658 は 9 型式、1659 は体部に押印文が施される。1660 は土錘、1661 と 1662 は土鉢である。1663 は石皿、1664 は火打石である。1665 は鉄滓である。

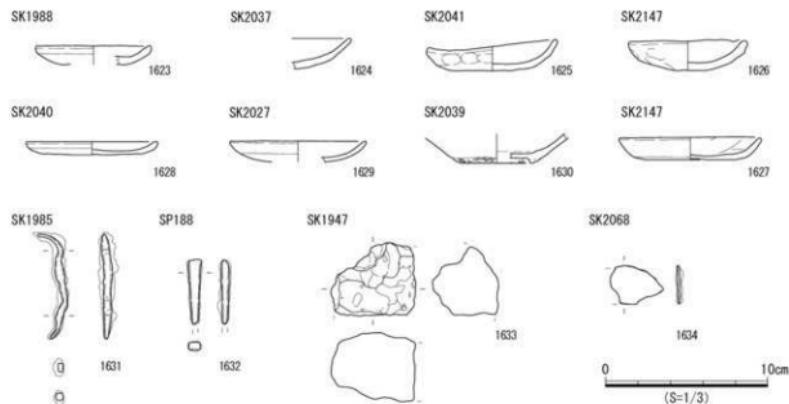


図 215 その他の造構出土遺物実測図

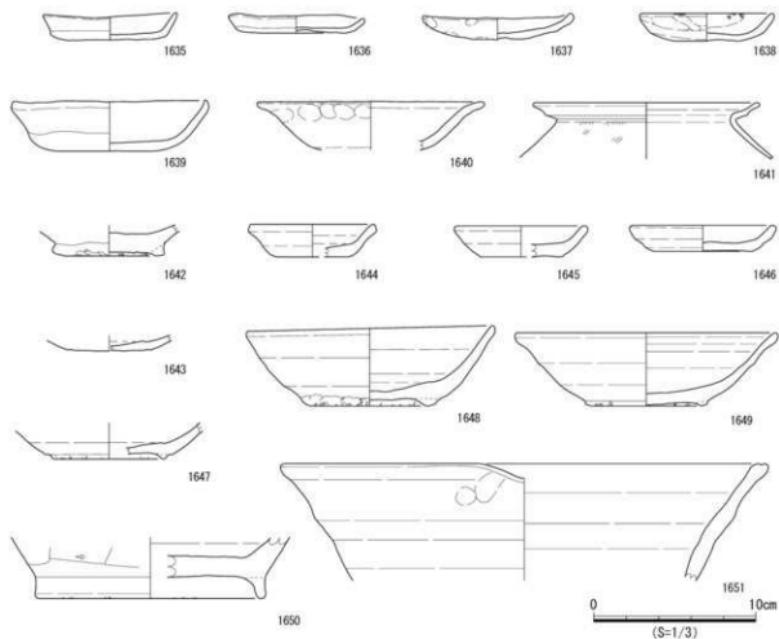


図 216 Ⅲ層等出土遺物実測図（1）

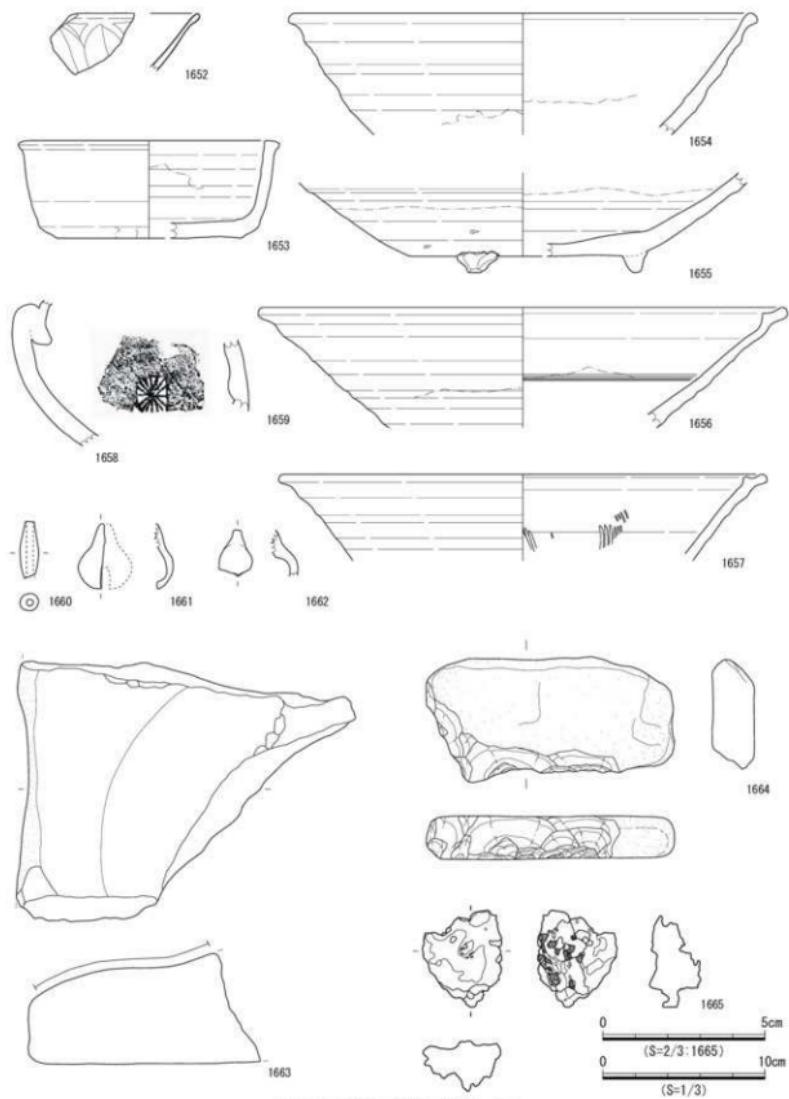


図217 Ⅲ層等出土遺物実測図(2)



# 報告書抄録

ふりがな	かみのほほんごういせき						
書名	上保本郷遺跡						
副書名							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第151集						
編著者名	井手大介、伊藤雅和、佐藤恵太、澤村雄一郎						
編集機関	岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel.058-237-8550						
発行年月日	2021年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘 面積m <sup>2</sup>	発掘原因
	市町村	遺跡番号					
かみのほほんごういせき 上保本郷遺跡	岐阜県 本郷市 上保	11245 21218	35° 46' 42"	136° 68' 45"	20150511～ 20151130 20160502～ 20161219 20170508～ 20171211	17,168.1 m <sup>2</sup>	記録保存 調査
かみのほほんごういせき 上保岩坪1号 古墳		11702	35° 46' 62"	136° 68' 44"	20150511～		記録保存 調査
かみのほほんごういせき 上保岩坪2号 古墳		11703	35° 46' 62"	136° 68' 41"	20151130		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
上保本郷遺跡	散布地 集落跡 生産 遺跡 (製鉄)	弥生 古墳 古代 中世 近世	竪穴建物 掘立柱建物 柵 柱穴 溝状遺構 炉 土坑 井戸 溝状遺構群 畦畔 道路状遺構 遺物集積	15軒 48棟 62基 604基 453条 17基 6,056基 1基 9基 8基 2基 2基	縄文土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 山茶碗 中近世陶磁器 土製品 瓦 石製品 木製品 金属製品 ガラス小玉	25点 125,193点 11,274点 8,510点 115,732点 15,555点 258点 14点 690点 106点 1,112点 1点	古墳時代から 中世にかけて の墓域、居住城 、生産域からなる複合遺跡

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上保岩坪 1 号 古墳	古墳	古墳	横穴式石室 1 基 周溝 1 条	土師器 20点 須恵器 56点 灰釉陶器 1点 山茶碗 3点 石製品 1点 金属製品 33点 ガラス小玉 18点	全長 14~16 m に復元した 7 世紀前葉の円 墳
上保岩坪 2 号 古墳	古墳	古墳	横穴式石室 1 基 周溝 1 条	土師器 10点 山茶碗 11点 中近世陶磁器 2点	全長約 5 ~ 5.6 m に復元した 7 世紀代の円 墳
要 約					上保本郷遺跡は、郡府山南西側の沖積平野上に立地する古墳時代から中世の複合遺跡である。時期によって居住域の位置や範囲は変化し、古代は発掘区北東部と発掘区南西部の一部で限定的であったが、中世前半には広範囲に土地利用が成立し、この頃に条里地割や用水路も面的に整備されたと考えられる、また、中世後半には居住域が発掘区南西部に集中するようになり、特に 21 地点や 11 地点では区画溝を伴う居住域が成立するなど、古代から中世にかけての土地利用の変遷をたどることのできる重要な発見となった。中世後半の区画溝内では、鍛冶や漆の工房が営まれていた可能性があり、また、区画溝から土師器皿の一括廃棄されていたことなどから一般的な遺跡よりも高い階層の居住者が想定され、特に発掘区南西部の 21 地点と 11 地点は、国衙領の「菊松郷」に比定されることや、周辺には「席田庄」が存在したことから、これらに関わる居住域と考えられる。
上保岩坪 1 号古墳、上保岩坪 2 号古墳は今回の調査により発見された古墳である。いずれも墳丘と横穴式石室の天井石は失われていたが、上保岩坪 1 号古墳の石室からは副葬品として須恵器長頸壺や短頸壺の他、鉄刀・刀子・鐵鏃等の鉄製武具、ガラス小玉等が出土した。郡府山丘陵上に位置する船来山古墳群と同時期に平野部でも古墳が営まれていたことが明らかとなり、関連性が想定される。					



岐阜県文化財保護センター調査報告書 第151集

上保本郷遺跡

(第1分冊)

2021年3月25日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 山興印刷株式会社